福　岡　市

有田・小田部

第12集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第264集

1991

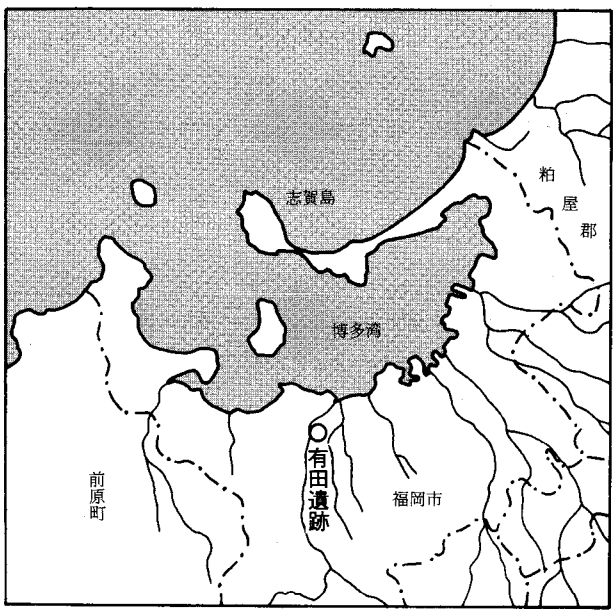
福岡市教育委員会

ARI TA KO TA BE

有田・小田部

〈福岡市早良区有田・小田部における遺跡群の発掘調査報告〉

第12集



1991

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との門戸として繁栄しており，特に本市の西南部に位置する早良平野は文化財が数多く包蔵されている地域として知られています。この平野の北部に位置する有田・小田部地区にある有田遺跡群は，旧石器時代から近世にわたる重要な遺跡です。昭和41～43年にかけて九州大学考古学研究室が区画整理に伴う発掘調査を行ない，弥生時代初頭の環濠集落や奈良時代の建物が確認されて以来，学界の注目するところとなりました。本市では昭和50年度から開発行為に先行して発掘調査を実施し，今年度迄に165ヶ所を数えています。その結果数多くの成果が得られています。

今回の報告は小田部地区８ヶ所，有田地区２ヶ所に関するもので，遺構の時期は弥生時代から近世にわたるものです。小田部地区では３ヶ所の甕棺墓の調査を行なっており，有田遺跡群ではじめてほぼ完全な弥生人骨を発見しました。

発掘調査から報告書作成にいたるまで，ご理解とご協力を頂きました。地権者を始めとする関係各位の方々に，深く感謝の意を表します。

本書が埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり，併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものです。

平成３年１月10日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　言

1．本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地区における開発に伴い，福岡市教育委員会が，平成２年度の国庫補助を得て実施した，緊急発掘調査の報告書である。

2．本書には昭和62年度の第119次・121次・126～129次調査，63年度の第144次調査，平成元年度の第156次・157次調査，平成２年度の第162次調査を収録する。

3．本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見なし，広義の有田遺跡群とする。

4．本書に収録した発掘調査は，第119次・121～129次調査を山崎龍雄・米倉秀紀（現福岡市博物館）が，第144次・156次・157次を山崎・加藤良彦が，第162次調査を山崎が担当した。

5．本書に掲載した遺構の実測は担当者の他，清原ユリ子・金子由利子・宮原邦江・黒田和生・英豪之・溝口武司・桃崎祐輔が行ない，写真は担当者が行なった。遺物の実測とトレース，遺構のトレースについては，各担当者の他，平川敬治・井上加代子・岡根なおみが行ない，遺物の写真撮影は山崎・平川が行なった。

6．遺構番号については第119次・121次・126～144次調査迄は遺構の種類毎に通し番号を付し，第156次調査以降はピットは独自の番号を付し，それ以外は連番とし，頭に遺構の性格を示す記号を付した。

7．遺構記号は福岡市の遺構記号規準によっている。

SA……柵，SB……掘立柱建物，SC……竪穴住居址，SD……溝状遺構，SE……井戸，SK……土坑，SR……土壙墓，ST……甕棺墓，SP……ピット，SX……その他

8．本書に使用した方位は磁北であり，その他については図中に記した。

9．本書報告の遺物・図面・写真類はすべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。

10．本書の執筆は以下のとおりである。

第１章　はじめに　…山崎

第２章　遺跡の立地と調査の成果　…山崎

第３章　調査の記録　…山崎・米倉・加藤（各担当のおわりに明記）

11．第126次調査出土の弥生人骨については九州大学医学部解剖学教室に調査を依頼し，その成果については中橋孝博先生に玉稿をいただき,内容を充実した。

12．本書の編集は，米倉・加藤と協議のうえ，山崎が行ない，編集にあたっては平川，井上両氏に多大な協力を受けた。

本　文　目　次

本文頁

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査の組織……2
第２章　遺跡の立地と調査の成果……3
　１．遺跡の立地と調査の成果……3
　２．平成２年度調査の成果……5
第３章　調査の記録……7
〈小田部地区の調査〉
　１．第119次調査 ……8
　　１）調査地区の地形と概要……8
　　２）遺構と遺物……8
　　３）小結……26
　２．第121次調査 ……27
　　１）調査地区の地形と概要……27
　　２）遺構と遺物……27
　　３）小結……38
　３．第126次調査 ……41
　　１）調査地区の地形と概要……41
　　２）遺構と遺物……41
　　３）小結……54
　４．第127次調査 ……56
　　１）調査地区の地形と概要……56
　　２）遺構と遺物……57
　　３）小結……57
　５．第128次調査 ……58
　　１）調査地区の地形と概要……58
　　２）遺構と遺物……58
　　３）小結……63
　６．第129次調査 ……64
　　１）調査地区の地形と概要……64
　　２）遺構と遺物……64
　　３）小結……67
　７．第157次調査 ……68

1）調査地の地形と概要……68
2）遺構と遺物……68
3）小結……73
8．第162次調査 ……74
1）調査地区の地形と概要……74
2）遺構と遺物……74
3）小結……76
〈有田地区の調査〉 ……77
9．第144次調査 ……78
1）調査地区の地形と概要……78
2）遺構と遺物……79
3）小結……81
10．第156次調査 ……82
1）調査地区の地形と概要……82
2）遺構と遺物……82
3）小結……86
〈付論〉
福岡市有田遺跡第126次調査出土の弥生時代人骨 ……87

挿　図　目　次

本文頁

Fig. 1　有田・小田部の周辺遺跡（1/25,000） …… 4
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（1/5,000） ……折込み
Fig. 3　有田・小田部台地の旧地形図（1/5,000） …… 6
Fig. 4　小田部地区各調査地点位置図（1/4,000） …… 7
Fig. 5　第119次調査遺構配置図（1/200） …… 9
Fig. 6　ST01～06（1/30） ……11
Fig. 7　ST01・02（1/10） ……12
Fig. 8　ST03・04・06（1/10） ……13
Fig. 9　ST05（1/10） ……14
Fig. 10　SK01～06（1/40） ……15
Fig. 11　SK04・07・10・17出土遺物（1/2・1/3・1/4） ……17
Fig. 12　SK07～12（1/40） ……19
Fig. 13　SK13・16・17・20～24・26～29（1/40） ……21

Fig. 14　SK14・15・18・19（1/40）……23
Fig. 15　SK14・15・18・19出土遺物（1/6）……24
Fig. 16　ピット・遺構面出土遺物（1/4・2/3）……25
Fig. 17　第121次・157次調査区位置図（1/2500）……27
Fig. 18　第121次調査区遺構配置図（1/200）……28
Fig. 19　SB01・SA01（1/100）……29
Fig. 20　ST01（1/30）……29
Fig. 21　ST01出土遺物（1/10）……30
Fig. 22　SK01～05・07（1/40）……32
Fig. 23　SK06・08・09（1/40）……33
Fig. 24　SK08出土遺物（1/4・1/3）……34
Fig. 25　SK09出土遺物（1/4）……36
Fig. 26　SD01・02土層（1/40）……37
Fig. 27　SD02出土遺物Ⅰ（1/4）……38
Fig. 28　SD02出土遺物Ⅱ（1/4）……39
Fig. 29　SB01出土遺物（1/3）……39
Fig. 30　甕棺墓配置図（1/300）……40
Fig. 31　第126次調査区遺構配置図（1/200）……42
Fig. 32　ST01（1/30）……43
Fig. 33　ST02（1/30）……44
Fig. 34　ST01・02出土遺物（1/10）……45
Fig. 35　ST03・SK03（1/30）……46
Fig. 36　ST04（1/30）……47
Fig. 37　ST03・04出土遺物（1/10）……49
Fig. 38　SK01と出土遺物（1/30・1/4）……51
Fig. 39　SK01・02・04（1/30）……52
Fig. 40　SK02・03・SX01出土遺物（1/4）……53
Fig. 41　第127次調査区遺構配置図（1/200）……56
Fig. 42　SK01出土遺物（1/4）……57
Fig. 43　第128次調査区遺構配置図（1/200）……59
Fig. 44　SC01・SA01・02（1/60・1/100）……60
Fig. 45　SK01・02とSC01南壁土層（1/40・1/60）……61
Fig. 46　第128次調査区出土遺物（1/4・1/3）……62
Fig. 47　第129次調査区遺構配置図及び北壁土層（1/200）……65
Fig. 48　SK01・02（1/40）……66
Fig. 49　SK01出土遺物（1/4）……66

Fig. 50　ピット・表土出土遺物（1/3・1/4）……67
Fig. 51　第157次調査区遺構配置図（1/200）……69
Fig. 52　SK02・04・06（1/40）……70
Fig. 53　SK07（1/20）……70
Fig. 54　SD01・03・08土層（1/40）……71
Fig. 55　SK02・05・07出土遺物（1/3・1/4）……72
Fig. 56　SD01・08出土遺物（1/4）……73
Fig. 57　第162次調査区遺構配置図（1/200）……75
Fig. 58　SK03・調査区南壁土層（1/40）……76
Fig. 59　第162次調査区出土遺物（1/4）……76
Fig. 60　第144次・156次調査区位置図（1/2,500）……77
Fig. 61　第144次調査区遺構配置図（1/200）……79
Fig. 62　SC01（1/60）……80
Fig. 63　SC01出土遺物（1/4）……80
Fig. 64　SK01（1/40）……80
Fig. 65　SA01（1/100・1/20）……81
Fig. 66　周辺調査区遺構図（1/3,000）……81
Fig. 67　第156次調査区遺構配置図（1/100）……83
Fig. 68　SC01（1/60）……84
Fig. 69　SB02（1/100）……84
Fig. 70　SB03（1/100）……84
Fig. 71　SK04土層図（1/40）……84
Fig. 72　SD05土層図（1/40）……84
Fig. 73　出土遺物……85

図　版　目　次

PL. 1　有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）
PL. 2　(1)第119次調査区南側全景（北から）　(2)同調査区北側全景（南から）
PL. 3　(1) ST01（北西から）　(2) ST02（北西から）　(3) ST03（北東から）　(4) ST06（北東から）
PL. 4　(1) ST04（南から）　(2) ST05（西から）
PL. 5　(1) SK01（東から）　(2) SK02（南から）　(3) SK03（東から）　(4) SK04（東から）
PL. 6　(1) SK06（南から）　(2) SK08（南から）　(3) SK10（西から）　(4) SK11（西から）

PL. 7　(1) SK12(南から)　(2) SK23(西から)　(3) SK24(東から)　(4) SK26(北東から)
PL. 8　(1) SK27(北から)　(2) SK28(東から)　(3) SK29(北から)　(4)防空壕(南から)
PL. 9　ST01～06
PL. 10　土坑・ピット・遺構面出土遺物
PL. 11　(1)第121次調査区北側全景(南から)　(2)同調査区南側全景(南から)
PL. 12　(1) SB01(東から)　(2) SA01(東から)　(3) ST01(北東から)　(4)同(南東から)
PL. 13　(1) SK01(南から)　(2) SK02(北西から)　(3) SK03(北西から)　(4) SK07(南から)
PL. 14　(1) SK06・09(西から)　(2) SK08(東から)　(3)同遺物出土状況(南東から)
(4) SD01(東から)
PL. 15　(1) SD02(南から)　(2)同遺物出土状況　(3) SK08・09出土遺物
PL. 16　ST01・SD02・SB01出土遺物
PL. 17　(1)第126次調査区全景(北東から)　(2)同全景(南から)
PL. 18　(1) ST01・02(北東から)　(2) ST01(南東から)　(3)同人骨出土状況(南東から)
PL. 19　(1) ST02(南東から)　(2)同人骨出土状況(北西から)　(3) ST03・SK03(北西から)
(4) ST03(北東から)
PL. 20　(1) ST04(南東から)　(2)同人骨出土状況(南東から)　(3) SR01(南東から)　(4)
SK01(北東から)
PL. 21　(1) SK02(南から)　(2) SK04(北西から)　(3) SR01・SK02・04出土遺物
PL. 22　ST01～04
PL. 23　(1)第127次調査区西側全景(南東から)　(2)同東側全景(北西から)
PL. 24　(1)第128次調査区東側全景(北西から)　(2)同西側全景(北西から)
PL. 25　(1) SC01(北から)　(2) SA01(北から)
PL. 26　(1) SK01(北西から)　(2) SK02(南西から)　(3)各遺構出土遺物　(4)第127次調査区出
土遺物
PL. 27　(1)第129次調査区南側全景(北から)　(2)同北側全景(北から)
PL. 28　(1) SK01(西から)　(2) SK02(西から)　(3) SX01(北から)　(4) SX01及びピット群
(西から)
PL. 29　(1)調査区南側ピット群(北から)　(2)北側段落部土層(南から)　(3)各遺構出土遺物
PL. 30　(1)第144次調査区南半部全景(南東から)　(2)同北半部全景(南から)　(3)同遠景(南西
から)
PL. 31　(1) SC01(南から)　(2) SK01(東から)　(3) SA01—SP43土層断面(西から)　(4) SA01
—SP48完掘状況(西から)　(5)出土遺物
PL. 32　(1)第156次調査区北半部全景(東から)　(2)同南半部全景(東から)
PL. 33　(1) SC・SB(南から)　(2)同(東から)　(3) SB03(東から)　(4) SC01(東から)
(5) SC痕跡(南から)　(6)調査区南半部全景(北から)　(7) SD05(北から)　(8)同土層
断面(東から)

PL. 34　出土遺物
PL. 35　(1)第157次調査区西側全景(東から)　(2)同東側全景(東から)
PL. 36　(1) SR02(南西から)　(2) SK04(北から)　(3) SK05・06(北西から)　(4) SK07(東から)
PL. 37　(1) SD01土層(北から)　(2) SD08土層(北から)　(3) SD03土層(北から)　(4)同土層(南から)
PL. 38　各遺構出土遺物
PL. 39　(1)第162次調査区全景(南から)　(2) SK03(北西から)　(3) SD01・02(南東から)
(4) SD04(南東から)　(4) SD01・02出土遺物

表　目　次

本文頁
Tab. 1　第12集報告調査地区一覧表……1
Tab. 2　平成1・2年度調査地点一覧表……5
Tab. 3　甕棺墓一覧表……10
Tab. 4　土坑一覧表……16
Tab. 5　土坑一覧表……31
Tab. 6　甕棺墓一覧表……43
Tab. 7　木棺墓・土坑一覧表……51

付　図　目　次

付図1　有田遺跡群遺構配置図II(1/1,000)
付図2　有田遺跡群遺構配置図III(1/1,000)
付図3　第121次・157次地点周辺遺構配置図(1/300)

第1章 はじめに

1．調査に至る経過

福岡市近郊の純農村地帯であった有田・小田部の台地上には，有田・小田部・南庄地区の３つの集落が存在している。近年国道202号線バイパスが西へ延長した事と，昭和57年の市営地下鉄１号線の開通等の影響を受け，市街地への変貌は著しく，過日の農村の面影はない。

有田遺跡群の発掘調査は昭和41年の九大による調査以降，昭和50年度から，国庫補助事業として出発したが，昭和52年度から1000m²以下の小規模開発についても対応を行って来ている。

昭和60年度迄の開発傾向は都心に近い手近な住宅地として個人専用住宅の建設が多かったが，ここ数年は好景気や，地価高騰の影響を受け，民間資本により，202号線バイパス沿に店舗，高層の共同住宅、分譲住宅などの開発が増加しつつある。平成２年度までの調査件数は計165件である。この中には学校建設，下水道事業，市営住宅建設などの公共事業も含まれている。

本書では，昭和62年度から平成２年度にかけて調査を行なった，小田部地区での第119次・121次・126次・127次・128次・129次・157次・162次調査，有田地区の第144次・156次調査の成果を報告する。各調査の要項は下表のとおりである。

Tab. 1　第12集報告調査地区一覧表

調査次数	調査番号	地点名	調査地地籍	申請面積	調査面積	申請者	調査期間	事前審査番号	備考
第119次	8701	A	早良区南庄3丁目270-1外	m² 283.38	m² 203	原野善行	1987年４月17日～５月19日	62-2-37	
〃121〃	8706	E	〃　小田部5丁目154-2	m² 212.94	m² 165	市丸一美	〃　５月20日～６月13日	62-2-92	
〃126〃	8724	D	〃　〃　1丁目34-9	m² 143	m² 111	緒方　章	〃　８月４日～８月26日	62-2-142	
〃127〃	8729	C	〃　〃　〃 418-1	m² 240.83	m² 180	井上哲夫	〃　９月17日～10月９日	62-2-162	
〃128〃	8730	A	〃　南庄3丁目16	m² 345.76	m² 213	原井常雄	〃　９月28日～10月26日	62-2-160	
〃129〃	8735	F	〃　小田部2丁目38	m² 499.20	m² 386	濱地安右衛門	〃　10月27日～11月26日	62-2-160	
〃144〃	8844	J	〃　有田1丁目25-4	m² 429	m² 405	柏谷廣子	1988年12月8日～89年1月9日	62-2-351	
〃156〃	8978	I	〃　有田1丁目12-2	m² 165	m² 131	富谷和敏	1990年３月８日～３月31日	62-2-453	
〃157〃	8980	E	〃　小田部5丁目134-1 131-1	m² 215.58	m² 127	西岡修三	1990年３月14日～３月31日	63-2-162	
〃162〃	9034	C	〃　小田部1丁目108外	m² 200	m² 132	シティー観光	1990年９月10日～９月14日	59-10-130	

２．発掘調査の組織

(1) 昭和62年度～平成２年度調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　埋蔵文化財課長 柳旧純孝

事務担当　**昭和62～平成元年度**　埋蔵文化財課第２係長、飛高憲雄（庶務）岸田隆

平成元～２年度　埋蔵文化財課第２係長　柳沢一男、（庶務）阿部徹、中山昭則

発掘担当　**昭和62年度**　山崎龍雄，米倉秀紀（現福岡市博物館），小林義彦

昭和63年度　山崎，小林，加藤良彦

平成元～２年度　山崎，加藤

調査・整理補助　**昭和62～平成２年度**　平川敬治(九州大学)，梶村嘉長，溝口武司，黒田和生，英豪之，田中克子

なお，発掘調査・資料整理にあたっては申請者の皆様，及び施工業者の皆様をはじめ，地元の多くの方々のご援助・ご協力をえ，特に寺田勝行氏には事務所用地を心よくお貸しいただいた。記して謝意を表したい。また調査にあたっては埋蔵文化財課の試掘担担当をはじめとする諸氏に，多大なご助言，ご指導を受けた。

第２章　遺跡の立地と調査の成果

１．遺跡の立地と調査の成果

有田遺跡群は福岡市の西南部に広がる早良平野の北側中央部に所在する，最高所で標高15m前後を測る独立中位段丘上に立地する。行政的には福岡市早良区有田・小田部・南庄の一帯にまたがる。この台地は北側に八手状に広がる複雑な谷部を形成し，南北約1.7km，東西0.8km，面積約70万m²の広がりを持つ。この台地の西には室見川，東には金屑川が北流している。特に室見川は過去度々洪水によって流路を変えたらしく，航空写真などで幾筋もの旧河道が読みとれる。また台地縁辺は度々の流路変更によって浸蝕を受け小段崖を形成している。

有田遺跡の所在する有田・小田部地区はもともと早良六郷の一つ田部郷の一部にあたり，明治22年の町村制実施によって原村の一部として組み込まれ，昭和４年に福岡市に編入された。昭和40年代初めの区画整理以前は純農村的風景を残していたが，国道202号線バイパスや地下鉄１号線開通以降は，都心に近い住宅地として開発が急激に進み，景観の変化には著しいものがある。

有田遺跡群は台地上に分布する旧石器時代から近世迄の複合遺跡である。現在迄の調査次数は昭和41年の区画整理事業に伴う調査以来，160ヶ所を越える。旧石器時代については遺物は有田地区の最高所部の第６次・77次・107次・小田部地区の第131次・152次など10ヶ所で発見されている。第６地点ではナイフ・ポイント・第131次地点では台形様石器などが検出されている。縄文時代の遺構は中期から後期にかけての貯蔵穴群が有田地区西側の第５次・第116次調査地点で発見され馬蹄形状にめぐる状況を示している。弥生時代では前期初頭のＶ字溝が第２次調査を初めとして第45次・54次・77次・95次・133次調査区で確認されている。これらの地点の溝をつなぎあわせると，有田地区台地高所部を楕円形に巡る環濠となり，その規模は長径300m，短径200mを測る。またその出入口の陸橋部は第133次調査区南側の下水道調査で確認されている。この時期の水田遺構についてはまだ見つかっていないが，本来存在した可能性があり，今後谷部，低地部の調査が進めば，発見される可能性がある。前期後半には集落が有田地区中央上，小田部地区では５丁目地内の第16次・121次・125次調査区で確認されている。この時期の甕棺墓は有田・小田部地区で５ヶ所知られているが，その内西福岡高校地内の金海式甕棺墓より細形銅戈が発見され，また小田部地区から細形銅矛の出土も伝わる。中期は前期より更に集落が拡大し，分布の濃淡はあるにせよ，台地全域に拡がるようである。当遺跡地内では青銅利器が製造されたらしく，溶范が第３次・82次・108次調査区で出土しており，早良平野において，吉武遺跡群などと共に拠点集落の一つとして考えられる。しかし後期になると一変して，集落

Fig.1　有田・小田部の周辺遺跡(1/25,000)

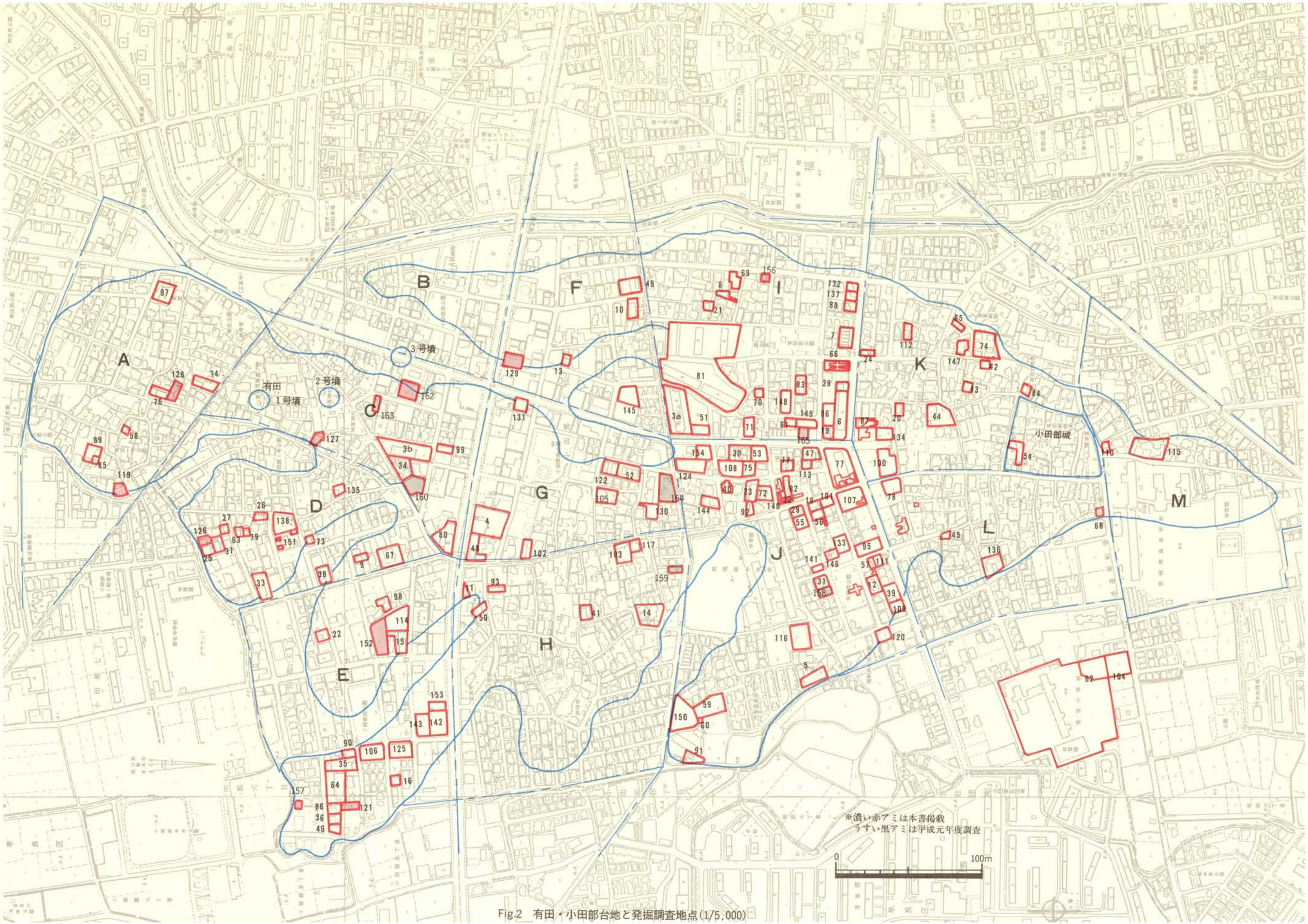


Fig.2　有田・小田部台地と発掘調査地点(1/5,000)

は縮小する傾向を示す。古墳時代の集落は全時期を通して台地上に広く確認されており，長期間に亘った集落が各所に存在しているこの時期には小田部地区に筑紫殿塚・松浦殿塚などの大円墳が存在し，有力な首長層の存在が予想出来る。遺跡北側にある原北小学校内には南庄地区より出土した石棺墓が移築保存されている。

律令時代はこの地区は早良郡の田部郷に比定されている。有田地区の第56次・57次・77次・78次・82次・101次・107次調査区では大型の掘立柱建物群が検出されている。これらの建物群は古代西海道に付設された額田駅が西方約２km離れた野方あたりに比定されていることから，それに関連する官衙的規模の建物群と考えてよく，円面硯や帯金具・越州窯・長沙窯系磁器や縁釉陶器などの出土からもそれを裏付けている。また３本柱の柵で囲まれた倉庫群が有田・小田部地区に６ヶ所確認されており，それらは那ノ津官家の一部ではないかという意見も出されている。中世には在地領主の成長とともに名田や名主屋敷が開発され，遺跡内にも中園屋敷，淀姫屋敷などの名屋敷が形成される。中世後半には大内氏の早良郡代大村興景の知行地や，大友氏の被官であった小田部氏の里域である小田部城が存在する。有田地区には幅５～10m を測る空濠が200m 四方の範囲に曲輪を形成するように掘開されている。築造時期は出土した大内氏関連の遺物や中国明代・李朝の陶磁器類から16世紀前半～中頃である。小田部城は台地の南端部に推定されているが，この曲輪状遺構はその北側にあり，小田部城との関連が注目される。

２．平成２年度調査の概要

平成２年度は公共･民間合わせて計８ヶ所調査を行なっている。調査概要は下表に記したが，公共事業は下水道の調査が１ヶ所，補助対象事業は第159次調査･第164次調査の２ヶ所のみで，他は民間受託事業である。地区の内訳は小田部地区が５ヶ所・有田地区が３ヶ所である。

Tab. 2　平成１・２年度調査地点一覧表

調査次数	調査番号	地点名	調査地地番	調査面積	調査期間	遺構	文献
第155次	8965	(下水道)	早良区有田2丁目地内		～90年３月31日		①
〃156〃	8978	I	〃 有田1丁目12-2	131m²	1990年３月８日～３月31日	古墳時代前期住居址1～2棟，掘立柱建物2棟，近世土坑1基	本書
〃157〃	8980	E	〃 小田部5丁目134-1 133-1	127m²	1990年３月８日～３月31日	中世末～近世初溝3条，土坑5基	本書
〃158〃	9020	J	〃 有田1丁目34-3	214m²	1990年７月９日～７月23日	古墳時代柵列2列，土坑1基 掘立柱建物7棟	
〃159〃	9027	H	〃 小田部3丁目251	185m²	〃 ８月７日～９月11日	竪穴住居址3＋2，掘立柱建物3棟	
〃160〃	9029	C	〃 小田部1丁目157外	508m²	〃 ８月17日～９月27日	奈良時代～中世，土坑6基，柱穴群	
〃161〃	9033	(下水道)	〃 有田2丁目地内				①
〃162〃	9034	C	〃 小田部1丁目108外	132m²	〃 ９月10日～９月14日	中世溝2条，土坑1基	
〃163〃	9036	C	〃 小田部1丁目123	150m²	〃 ９月17日～10月11日	古墳時代住居址1棟，溝2条 掘立柱建物1棟	
〃164〃	9041	G	〃 小田部2丁目106	416m²	〃 10月11日～11月30日	奈良時代溝1条，掘立柱建物2棟 土坑1基	
〃165〃	9047	I	〃 有田1丁目21-11	158m²	〃 12月７日～91年１月11日	中世末期溝2条，井戸2基，土坑5基	

①『有田・小田部第14集』1991

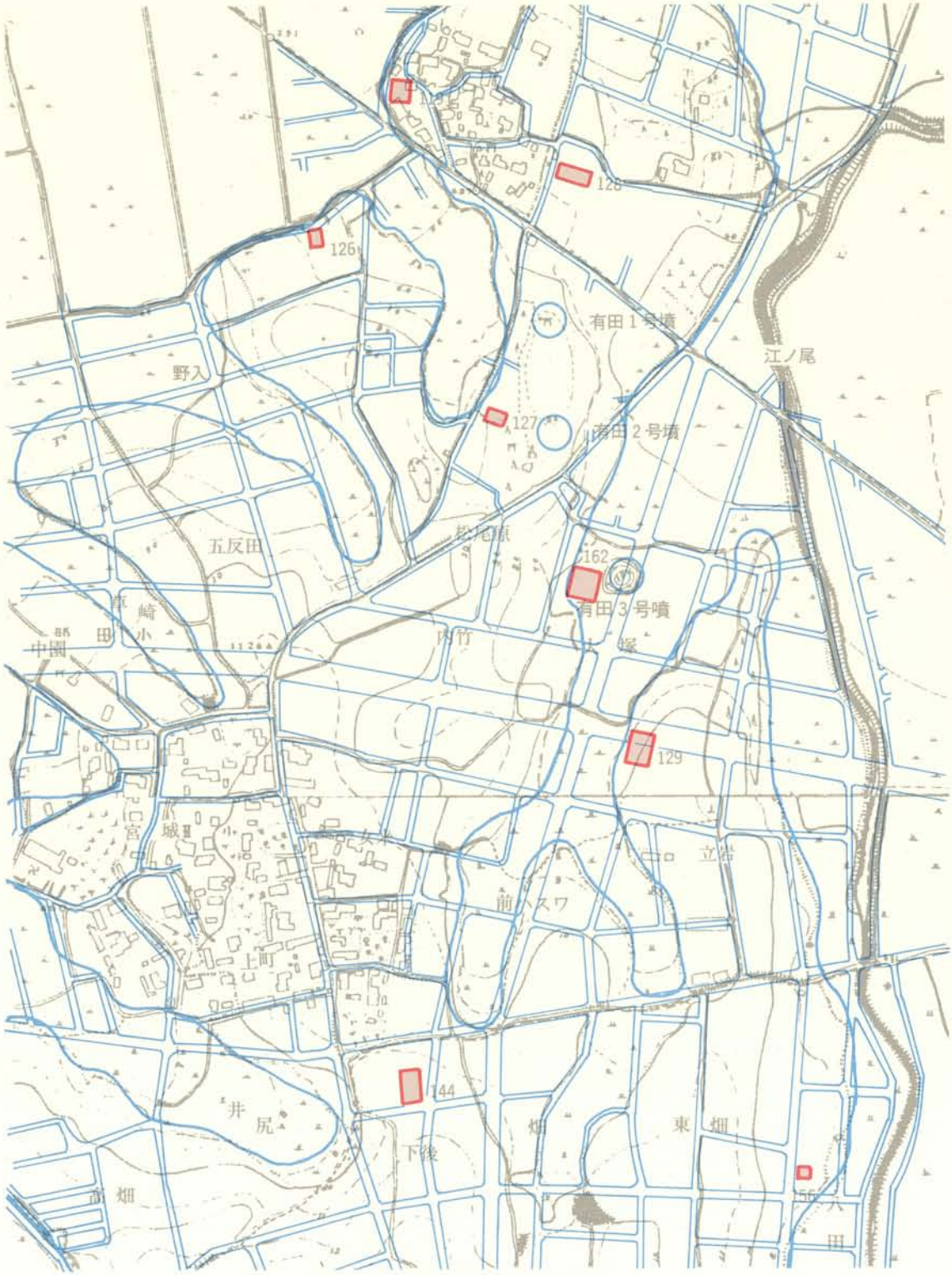


Fig.3　有田・小田部台地の旧地形図(1/5,000) 数字は調査次数

第３章　調 査 の 記 録

―小田部地区の調査―

Fig.4　小田部地区各調査区位置図(1/4,000)

１．第119次調査（調査番号8701）

１）調査地区の地形と概要

調査区は早良区南庄３丁目270－１外に所在する。北へ八手状に分岐して広がる有田・小田部台地の一番北に伸びる台地の西側斜面上に立地する。西側境界地は崖面となっている。現況は畑地で，標高は遺構面で4.2～5.0m を測り，西側が低くなる。昭和60年度調査区に個人住宅建設の開発申請が提出された。これを受けて事前調査を実施し，甕棺墓を検出したため，要調査という事で協議を行ない，その結果，工事着工前に調査を行なう事になった。昭和62年４月17日～５月19日迄実施し，調査面積は203m²である。

調査区周辺は余り調査が行なわれておらず，第58次・85次・89次など３ヶ所位しかない。成果としては，弥生時代中期の円形住居址や，古墳時代の古墳址と思われる周溝状遺構が検出されている。今回の調査では，遺構は40～96cmの表土下の橙色ローム土上面で検出した。主な検出遺構は弥生時代中期中頃の甕棺墓６基，土坑24基，近世以降の埋甕４基，防空壕１基である。遺物は弥生時代から近代迄の各種の遺物がコンテナ13箱出土したが，段落部からの出土が多く，種類としては近世以降の陶磁器類が多い。

２）遺構と遺物

甕棺墓

全部で６基検出した。他に土坑の頃で取上げるが，甕棺の抜跡の痕跡が残る土坑 SK11があり，最低７基はあったと考えられる。

ST01（Fig. 6，PL. 3）

調査区中央で検出した主軸方位を N－27°－W に取る接口式の小児甕棺であるが，上半を削平され残りは悪い。甕と甕の組合せである。長さ0.96m，幅0.54m の楕円形状の墓壙に，やや角度を持って壙底ぎりぎりに埋置される。接口部には灰褐色粘土を目張りする。

出土遺物（Fig. 7，PL. 9）　１は上甕，底部を欠失する。復元口径40.2cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状を呈し，頸部と胴部の境には幅１cmの２条の三角突帯を貼付け巡らす。器壁は内外面磨滅が著しいが，外面にはタテ方向の刷毛目を施す。口縁部周辺はヨコナデ。色調は桃色を呈し，胎土に１～２mmの石英粒を多く含む。２は下甕で，口径45.0cm，器高58.3cmを測る。かなり扁平している。口縁部は内傾気味の逆Ｌ字形を呈し，頸部と胴部の境に幅１cm程の三角突帯を２条貼付け巡らす。胴部外面は６本/cm単位のタテ刷毛，内面はナデ。口縁部周辺もナデである。底部はやや上げ底。色調は桃色を呈し，胎土は石英の微粒を多く含む。

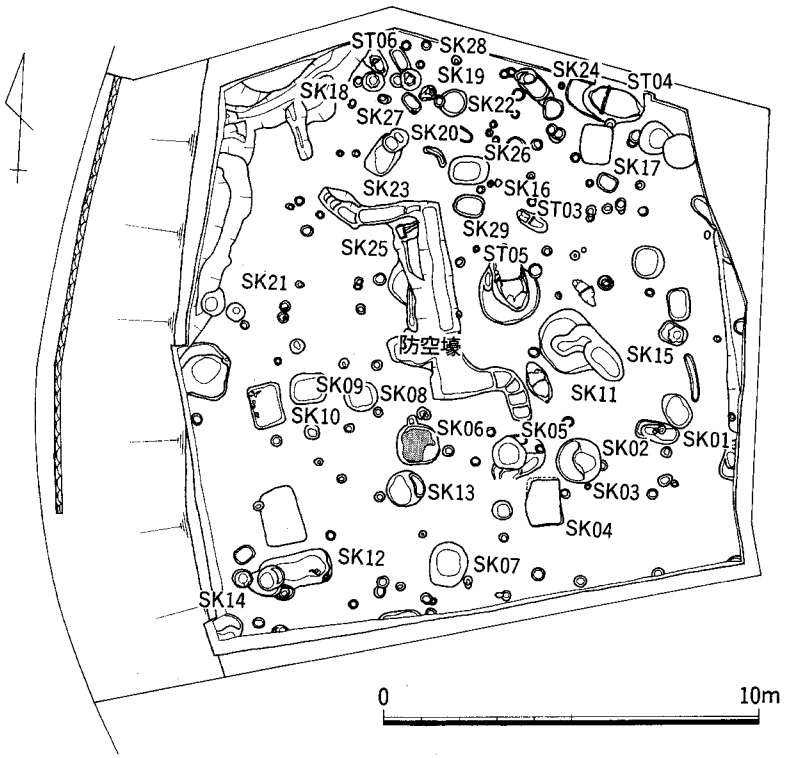


Fig.5　第119次調査区遺構配置図(1/200)

ST02（Fig. 6，PL. 3）

調査区中央で検出した主軸方位をN—44°—Wに取る接口の小児用甕棺である。非常に残りは悪い。甕と甕の組み合せで，残存長は0.89mを測る。甕は壙底ぎりぎりにほぼ水平近い角度で埋置する。接口部には目張り粘土がある。

出土遺物（Fig. 7，PL. 9）　3は上甕。復元口径44.0cmを測る。口縁部は水平な逆L字形状を呈し，頸部と胴部の境に一条の三角突帯を巡らす。器壁は荒れ調整不明。口縁部内面には指おさえ痕がかすかに残る。4は下甕。復元口径43.4cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し，口はややすぼまる。器壁は内外面荒れが著しく，調整は不明。内面には指おさえ痕が部分的に残る。口縁部はナデ。色調は3が淡褐黄色，4が暗橙色を呈し，胎土は3・4いずれも石英の微粒を多く含む。

ST03（Fig. 6，PL. 3）

調査区北側で検出した主軸方位をN—55°30′—Wに取る。本来は接口であったろう小児甕棺である。削平がひどく，下甕の胴部の底部しか残っていない。下甕は甕形土器を用いる。上甕

は本体はなかったが，口縁部などの痕跡が残っていた。甕棺は水平より少し角度を持って，壙底ぎりぎりに埋置されている。

出土遺物（Fig. 8，PL. 9）　5は下甕と考えられる。復元口径40.4cm，器高54.6cmを測る。口縁部は少し内傾する逆L字形を呈し，口縁部直下に幅1.2cm程の三角突帯が巡る。胴部外面は磨滅が著しいが，ナナメ刷毛が残る。口縁部周辺はヨコナデ。色調は灰褐色。胎土は石英や雲母粒を含む。

ST04（Fig. 6，PL. 4）

調査区北側で検出した主軸をN—79°30′—Wに取る接口の成人用甕棺で，上甕が鉢形土器，下甕が甕形土器の組合せである。上半部は削平されている。墓壙掘方は楕円形状を呈し，規模は長さ2.16m，幅1.05m以上を測り，その内側に甕棺を埋納するための長さ1.70m，幅1.05mの墓壙を北壁を少し掘り込んで掘っている。甕棺全長は1.52mを測り，壙底ぎりぎりに水平に近い角度で埋置する。接口部の目貼り粘土は認められない。

出土遺物（Fig. 8，PL. 9）　6は上甕で鉢形土器である。口径は72.0cm，器高44.4cmを測る。口縁部は鋤先状を呈し，口唇部は浅い凹線が巡る。口縁直下には幅2cm，高さ1cmのM形突帯が1条巡る。器壁は荒れ調整不明。内面はナデで指おさえ痕が残る。7は下甕で甕形土器。口径69.6cm，器高109.2cm，最大胴径74.5cmを測る。最大胴径は胴部上半にあり，甕自体はかなりひしゃげている。胴部下半に2条の三角突帯が巡り，底部は心なしか上げ底。胴部外面は荒れ調整不明だが，内面上半は指おさえ痕が残る。口縁部はヨコナデ。色調は淡灰黄色を呈し，胎土に石英微粒を多く含む。

ST05（Fig. 6，PL. 4）

調査区中央で検出した主軸方位をN—15°—Wに取る接口式の成人用甕棺である。上・下甕とも甕形土器を用いる。墓壙掘方は長さ1.57m，幅1.64mの不整方形の土壙で，その中央北側に

Tab. 3　甕棺墓一覧表

遺構	甕棺形態		墓壙（cm）		方位	埋置角度	時期	備考	切り合い
番号		器形	規模	形状					
ST01	接口	甕＋甕	96×54	楕円形	N-27°-W	19°	中・後	小児棺	
02	接口	甕＋甕			N-44°-W	20°	中・後	小児棺	
03	接口	甕＋甕			N-55°30′-W		中・後	小児棺	
04	接口	鉢＋甕	216×105	楕円形	N-79°30′-W	1°	中・後	成人棺	北側境界地にかかる
05	接口	甕＋甕	192×92	不整方形	N-15°-W	8°	中・中	成人棺	
06	覆口	甕＋甕	80×48	不整楕円形	N-40°-W	4°	中・後	小児棺	攪乱とSK18に切られる

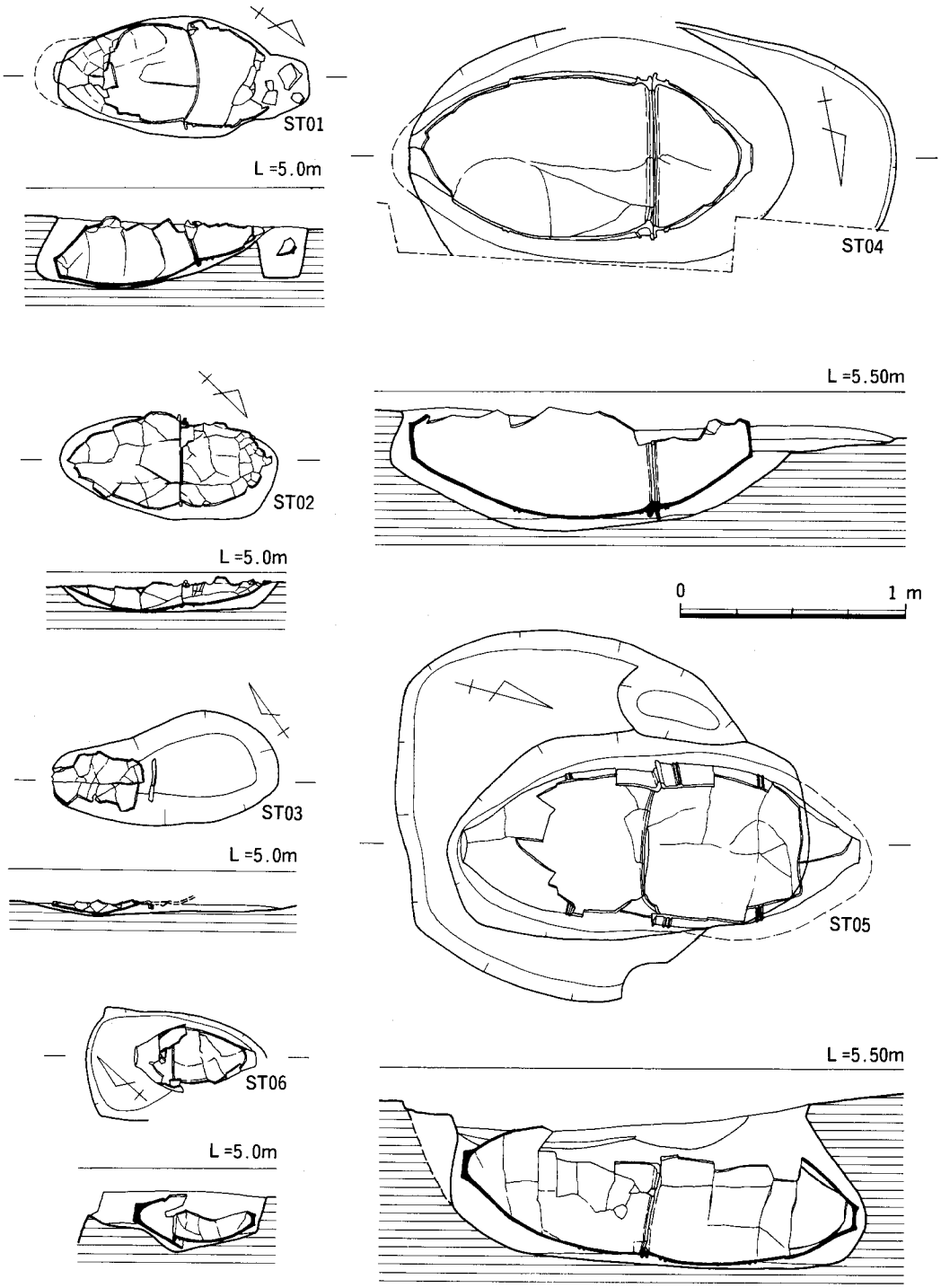


Fig.6　ST01～06(1/30)

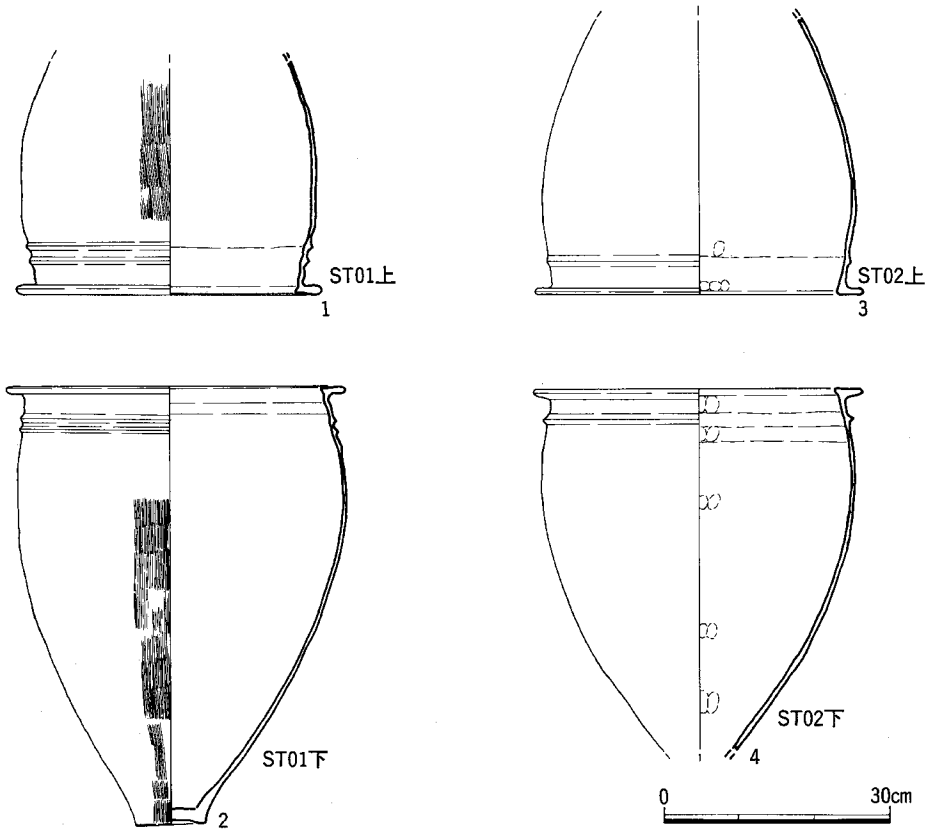


Fig.7 ST01・02(1/10)

長さ1.92m,幅0.92m の甕棺本体を埋納する墓壙を北壁を一部掘り込んで作っている。甕棺は全長1.77m を測り，壙底ぎりぎりにやや角度を持って埋置している。接口部には目貼粘土があった。

出土遺物（Fig. 9, PL. 9） 10は上甕で口径61.0cm，器高85.4cmを測る。口縁部は外傾気味の鋤先状口縁で，胴部中央には2条の三角突帯が付く。胴部は余り張らず，胴部最大径は61.2cmで，上半にある。外面は荒れ調整は不明。内面は指おさえ後ナデ。外面には黒斑がある。11は下甕で，口径69.5cm，器高94.0cmを測る。口縁部は鋤先状を呈すが外傾する。口縁直下に2条，胴部中央に2条の三角突帯が付く。胴部最大径は上半にあり，径は67.5cmを測る。内外面ナデ仕上。色調は10が淡黄橙色，11が橙色を呈し，胎土は10が石英粒，11が石英・金雲母の微粒を多く含む。

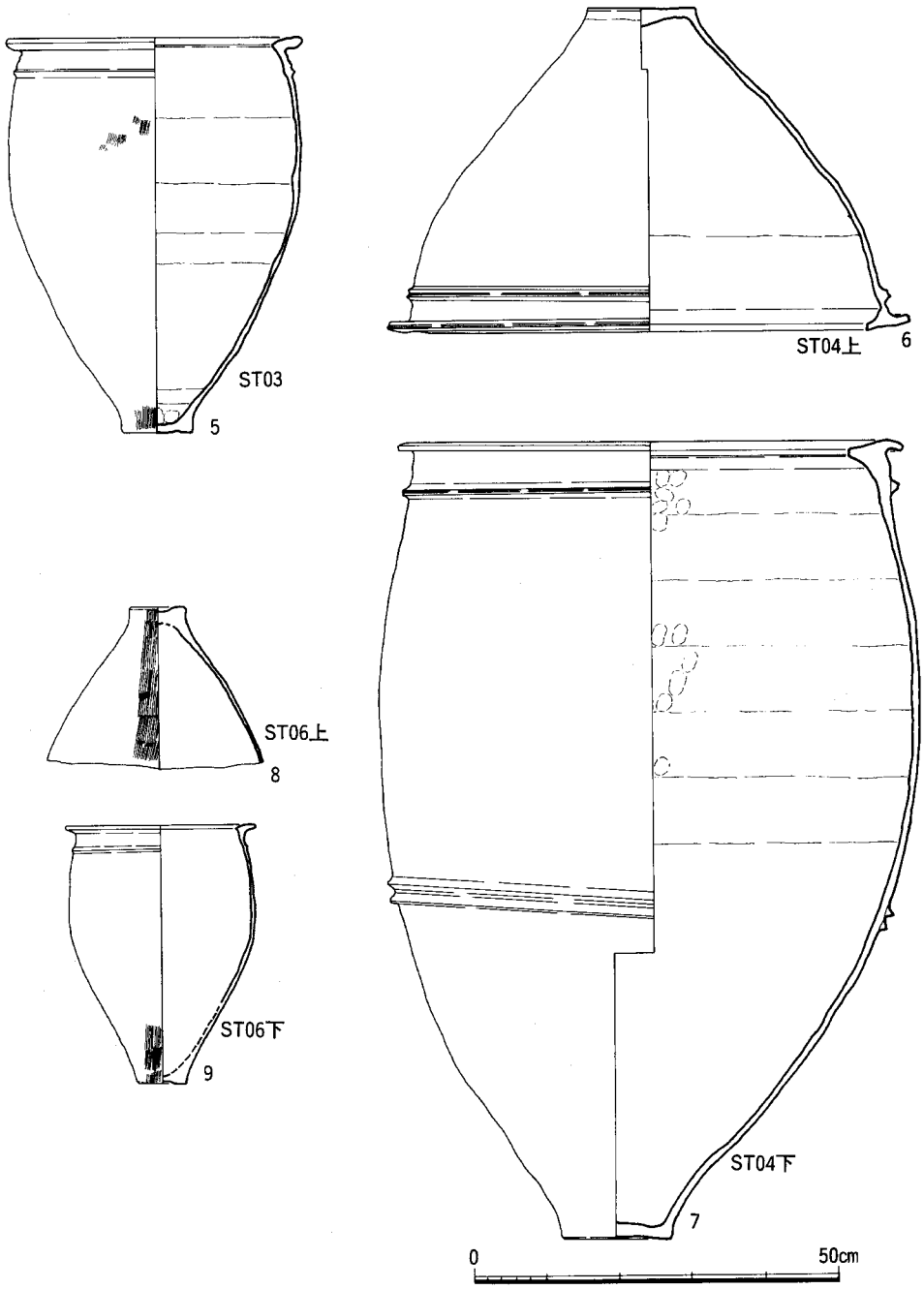


Fig.8　ST03・04・06(1/10)

ST06（Fig. 6, PL. 3）

北西境界地で検出した主軸方位をN—40°—Wに取る覆口の小児甕棺。上・下共甕形土器を用いるが，上甕は口縁部を打欠いている。墓壙は他遺構に切られ不明だが，長さ0.8m，幅0.48mを測り，その南側に少し角度を持って甕を埋置している。甕の全長は0.54mを測る。

出土遺物（Fig. 8, PL. 9）　8は上甕で，口縁部を欠失する。底径は8.0cmを測り，上底である。胴部の開きは大きい。胴部外面はタテ刷毛，内面は指おさえである。9は下甕で，口径26.0cm，器高は36.3cmを測る。口縁部は逆L字形を呈すが，やや内傾する。最大胴径は25.8cmを測り，胴部やや上方にある。口縁直下に簡略化した三角突帯が巡る。器壁は荒れるが，下半にはタテ刷毛が残り，内面は指おさえのちナデ仕上。色調は8，9とも橙色，胎土はいずれも石英粒を外く含む。

土坑

全部で24基検出した。他に近代以降の土坑もあるが割愛する。

SK01（Fig. 10, PL. 5）

平面形状が楕円形を呈す土壙で，規模は長さ0.98m，幅0.70m，深さ14cmを測る。断面は浅い皿状を呈す。埋土は褐色土に明褐色ロームブロックを含んでいる。

出土遺物　弥生土器や近世の陶器椀などが少量出土した。

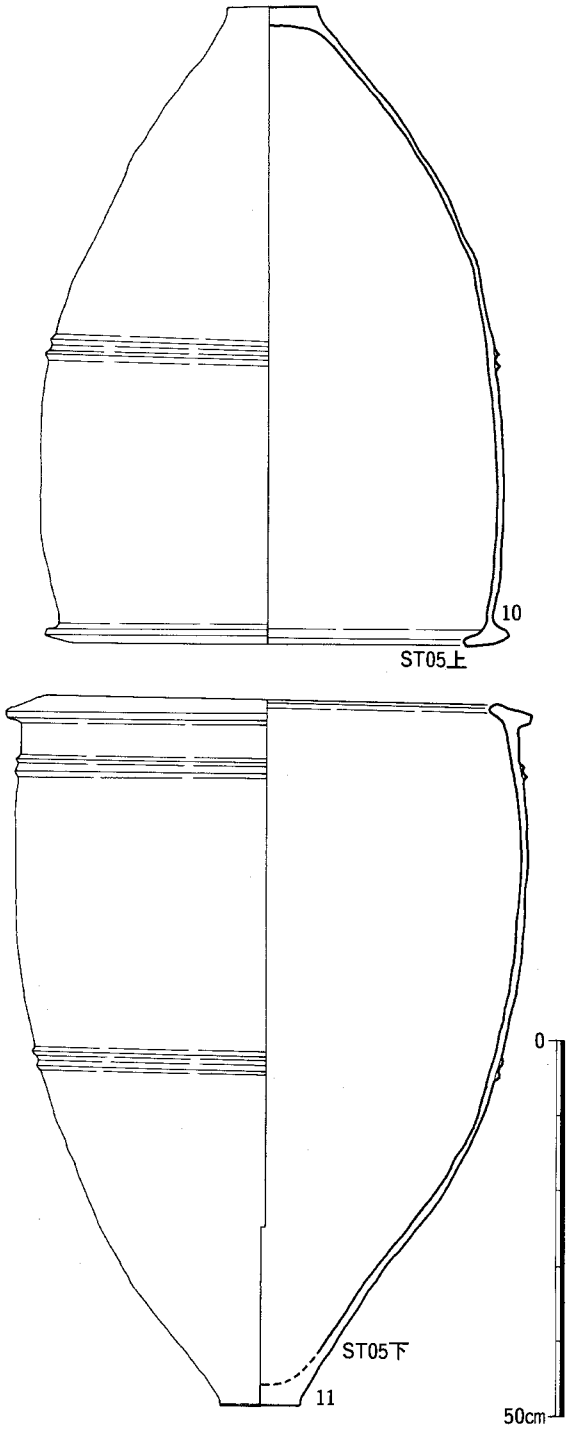
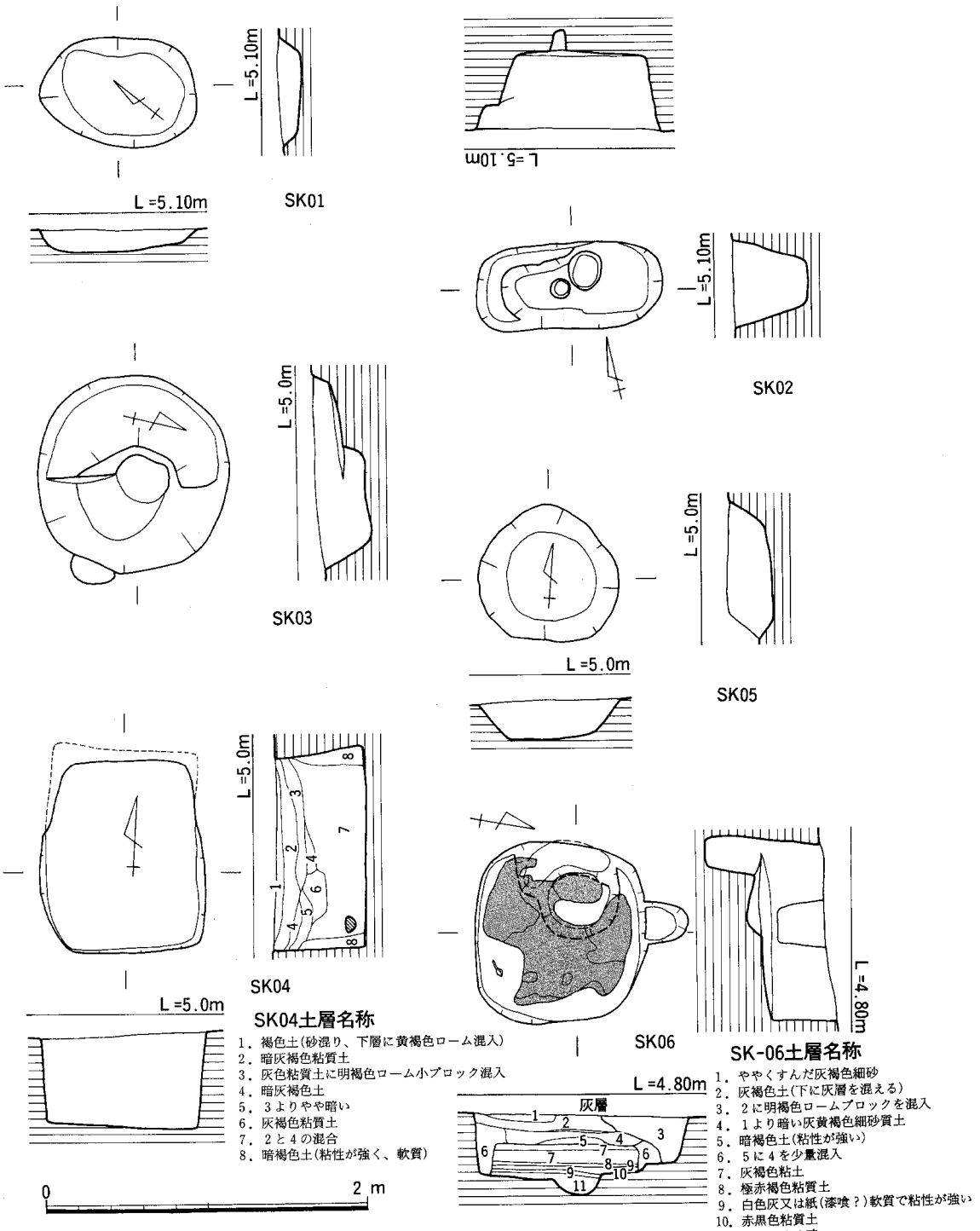


Fig.9　ST05（1/10）



SK04土層名称

1．褐色土(砂混り、下層に黄褐色ローム混入)
2．暗灰褐色粘質土
3．灰色粘質土に明褐色ローム小ブロック混入
4．暗灰褐色土
5．3よりやや暗い
6．灰褐色粘質土
7．2と4の混合
8．暗褐色土(粘性が強く、軟質)

SK-06土層名称

1．ややくすんだ灰褐色細砂
2．灰褐色土(下に灰層を混える)
3．2に明褐色ロームブロックを混入
4．1より暗い灰黄褐色細砂質土
5．暗褐色土(粘性が強い)
6．5に4を少量混入
7．灰褐色粘土
8．極赤褐色粘質土
9．白色灰又は紙(漆喰？)軟質で粘性が強い
10．赤黒色粘質土
11．8よりやや暗い

Fig.10　SK01～06(1/40)

Tab. 4　土坑一覧表

遺構番号	形態 平面	形態 断面	規模（計測値） 長さ(cm)	規模（計測値） 幅(cm)	規模（計測値） 深さ(cm)	切り合い関係	時期	備考
SK01	楕円形	皿状	98	70	14		近世	
〃02	隅丸長方形	逆台形	117	54	48			主軸 N-75°30′-W
〃03	円形	2段掘り	123	116	18～30		近代	
〃04	長方形	箱形	120	102	61		近世	主軸 N-3°30′-W
〃05	おむすび形	逆台形	88	85	28	攪乱を受ける		
〃06	隅丸方形		112	110	50		近世	
〃07	不整円形	逆台形	110	102	62		〃	
〃08	楕円形	〃	89	77	18		〃	
〃09	隅丸方形	〃	98	81	23			
〃10	長方形	〃	114	88	16		近世	主軸 N-15°-W
〃11	楕円形		129	76	56		弥生	主軸 N-45°30′-W 甕棺の抜跡
〃12	隅丸長方形	逆台形	190	92	35～42		弥生～古墳	主軸 N-72°-E
〃13	不整円形		102	92	16			
〃14								埋甕
〃15								〃
〃16	隅丸長方形	逆台形	108	78	53		近世	主軸 N-83°-W
〃17	不整円形	〃	85	84	75		〃	
〃18						ST06を切る		埋甕
〃19						SK28を切る		埋甕
〃20	だるま形	皿状	66	52	14	SK23を切る		
〃21	円形	逆円錐形	50	50	26			
〃22	略円形	皿状	72	70	15			
〃23	隅丸長方形	箱状	114	70	27	SK20に切られる		
〃24	略長方形	逆台形	110	53	20		弥生	主軸 N-47°-E
〃25						防空壕と切り合う		埋甕
〃26	羽子板状	逆台形	58	18～36	16			主軸 N-60°-W
〃27	隅丸方形	〃	62	32	36			主軸 N-42°30′-W
〃28	隅丸長方形	浅い〃	68	34	15	SK19に切られる		主軸 N-29°30′-W
〃29	不整楕円形	船底形	83	57	28			主軸 N-84°-W

SK02（Fig. 10, PL. 5）

平面形状が隅丸長方形を呈する土坑で，主軸方位をN—75°30′—Wに取る。規模は長さ1.17m，幅0.54m，深さ48cmを測り，断面は逆台形を呈す。西側には狭いテラスがあり底面には小ピットが2ヶ所あった。埋土は黒褐色土で，弥生～古墳時代の古い時期と考えられる。出土遺物はなかった。

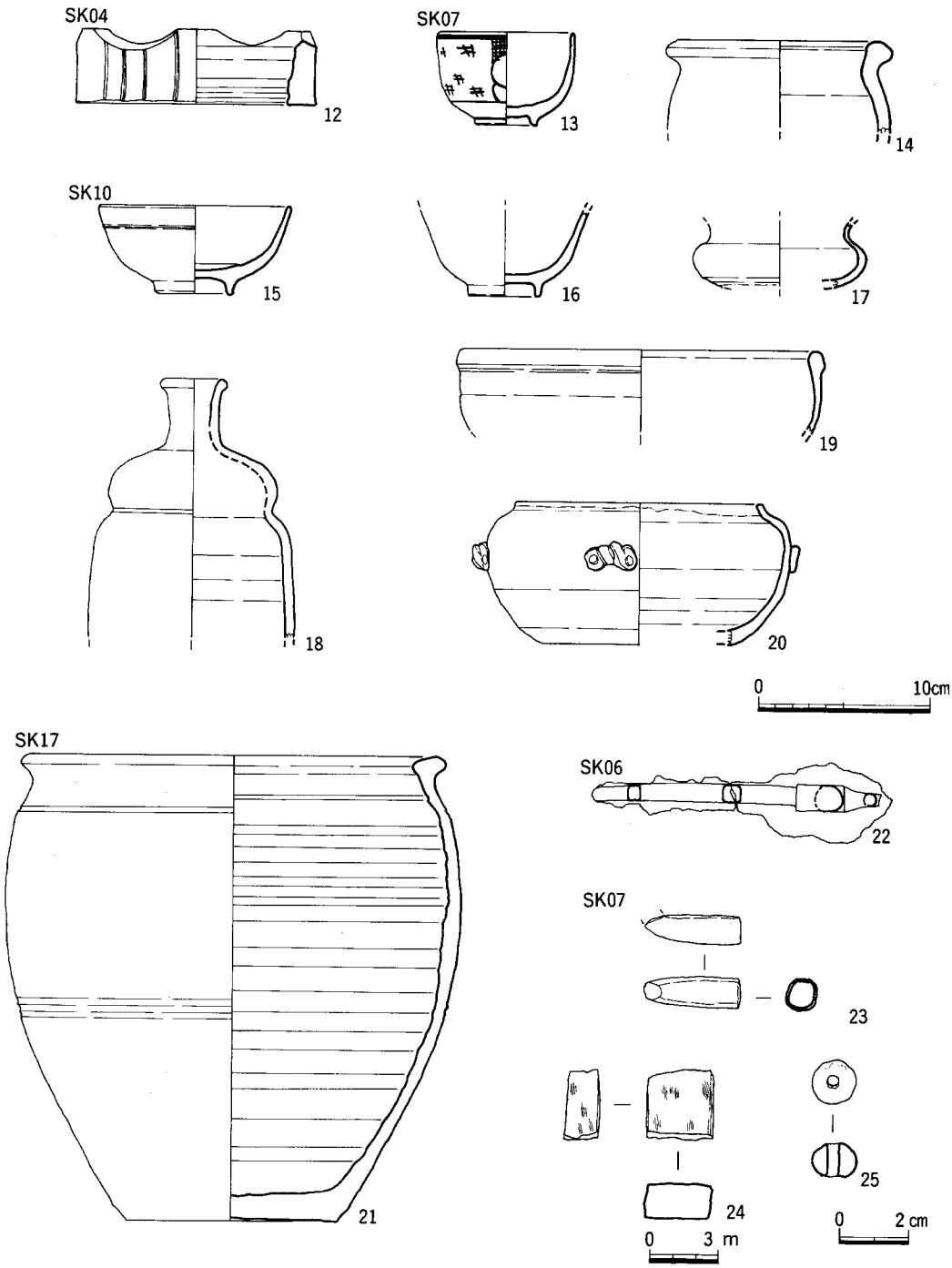


Fig.11　SK04・07・10・17出土遺物(1/2・1/3・1/4)

SK03（Fig. 10，PL. 5）

平面形状が円形を呈す土坑で，主軸方位をN—13°—Wに取る。規模は長径1.23m，短径1.16mを測る。深さは西側が18cm，東側が30cmと深くなり，西半分がテラス状となる。中央はピット状に落込む。埋土は明褐色ロームブロックとやや灰褐色土の混入。埋土としては新しい。

出土遺物　染付磁器や近世の瓦，コークス，石灰らしきものが少量出土しており，時期は近代である。

SK04（Fig. 10，PL. 5）

平面形状は長方形を呈し，主軸方位をN—3°30′—Wに取る土坑。周壁は直立及びオーバハングし，規模は上面で長さ1.20m，幅1.02m，深さ61cm，底面で長さ1.26m，幅0.93mを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は大きく上・下両層に分かれる。上層は1～5層で褐色土又は暗灰褐色土，下層は暗灰褐色粘質土主体である。

出土遺物（Fig. 11，PL. 10）　近世の染付・白磁・陶器の瓶や擂鉢，土師質土器・土師器・瓦器・寛永通寶1枚，焼土ブロックなどが少量ずつ出土している。外にガラス小玉1点，窯道具，コークス1点などがある。

12は窯道具の焼台で底径14.0cmを測る。素焼きで焼成は良い。体部にはかき目状の沈線が入る。上端は4ヶ所半円形状のヘラによる切込みがあり，その先端はこげ，欠失している。25はガラスの丸玉で直径13mm，厚さ9mm，孔径3mmを測る。色調はコバルトブルーである。流れ込みか。

SK05（Fig. 10）

平面形状はおむすび形を呈す土坑。規模は長さ0.88m，幅0.85m，深さ28cmを測る。断面は逆台形で，底面は南西側が深くなる。埋土は暗褐色土に灰色粘土ブロックを混える。

出土遺物　弥生土器が4点出土した。

SK06（Fig. 10，PL. 6）

平面形状が隅丸方形を呈す土坑。規模は長さ1.12m，幅1.10m，最大深50cmを測り，西側が一段深くなる。埋土は上層が灰黄褐色ロームブロックを主体とするが，その下は上から黄白色粘土，暗赤褐色粘質土，白色灰又は紙？層，赤黒色粘質土，白色灰又は紙？層，赤黒色粘質土が重層している。それをとりのぞくと，西側が地山の汚れを掘ったのかもしれないが，不規則に深くなる。

出土遺物（Fig. 11，PL. 10）　土師器・土師質土器・染付・青磁・陶器，石灰混り土，鉄滓1点など。近世以降の遺物を含む。

22は不明鉄製品で，現存長12.6cm，直径0.7～0.8cmを測る。一見煙管に似る。鉄製の断面方

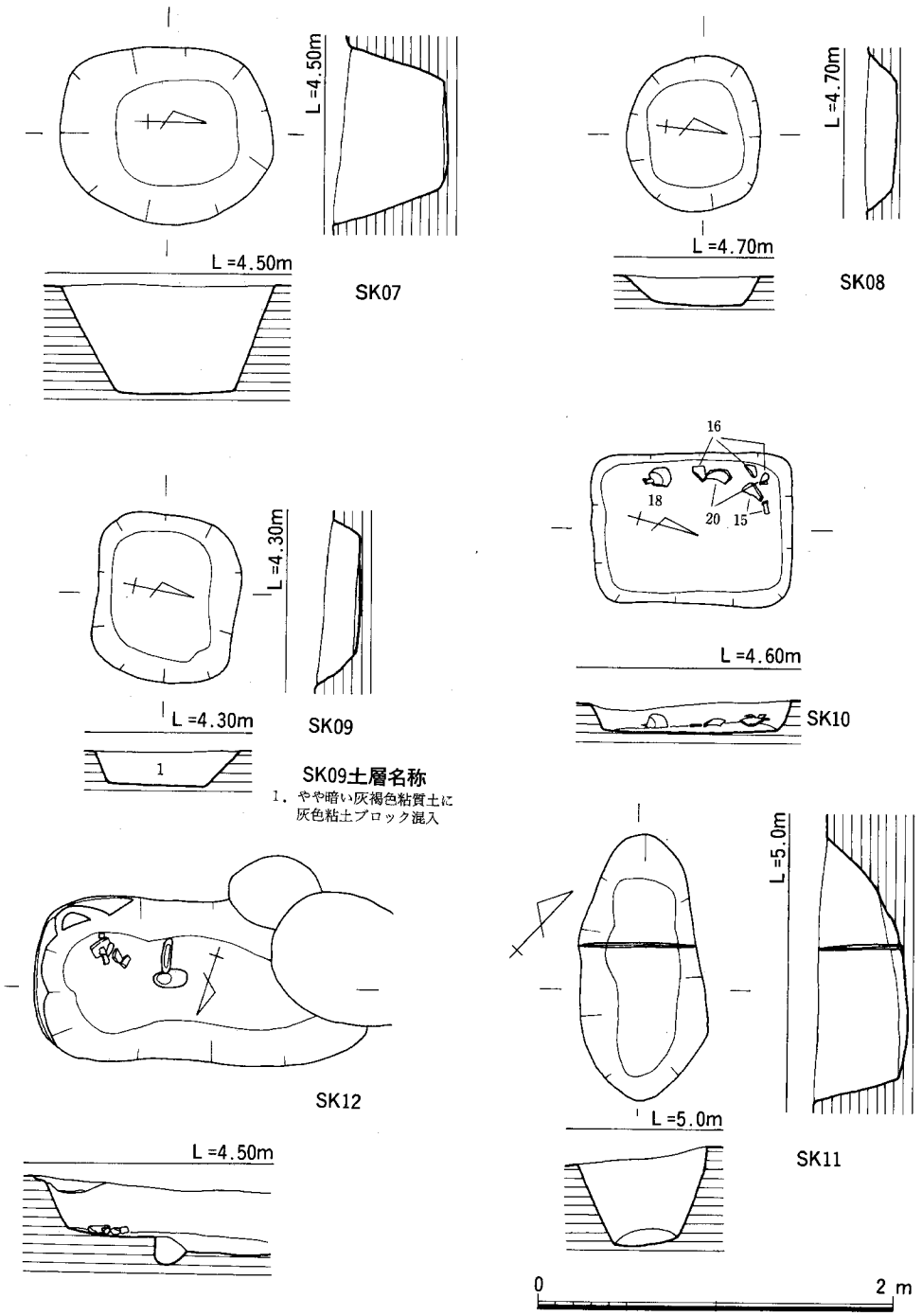


Fig.12　SK07～12(1/40)

形で中点の棒状のものに断面円形の銅製のキャップがつく。鉄身の部分はやや反っている。鉄と一緒にもみ殻がついている。

SK07（Fig. 12）

平面形状が不整円形を呈す土坑。規模は長さ1.10m，幅1.02m，深さ62cmを測る。断面は逆台形で，底面は隅丸長方形を呈す。埋土は上下両層に分かれ，上層は柔らかい暗灰褐色土を主体とし，下層には焼土・炭化物が混ざる。下層は暗灰褐色土又は黒褐色土で明褐色ロームブロック・焼土・炭化物を含む。

出土遺物（Fig. 11，PL. 10） 近世の染付・青磁・白磁・陶器・土師質土器・砥石・煙管などが少量出土した。

13は染付碗で，復元口径8.0cm，器高5.4cmを測る。外面には呉須で文様が描かれる。高台畳付は釉のかき取り。14は陶器の無頸壺か。1/4片で，復元口径13.2cmを測る。内外面飴釉がかかる。胎土には石英粒を若干含む。23は銅製の煙管雁首。現存長4.2cm，最大径1.2cmを測る。木質は腐っている。24は砥石片。現存長3.1cm，最大幅3.0cm，最大厚2.5cmを測る。色調は淡灰黄色で，石質はアプライトか。

SK08（Fig. 12，PL. 6）

平面形状が楕円形を呈す土坑で，規模は長さ0.89m，幅0.77m，深さ18cmを測る。断面は逆台形状を呈す。埋土は2層に分かれ上層は暗灰黄褐色土で灰黄色粘土ブロック混入し，下層は粘性の強い灰褐色土である。

出土遺物 土師器や近世の陶器・コークスが1～5点ずつ出土した。

SK09（Fig. 12）

平面形状が隅丸長方形を呈し，主軸方位をN—79°30′—Eに取る土坑。規模は長さ0.98m，幅0.81m，深さ23cmを測る。断面は逆台形を呈し，埋土はやや暗い灰褐色粘質土に灰色粘土の混入土である。

出土遺物 瓦器の細片が2点出土した。

SK10（Fig. 12，PL. 6）

平面形状が長方形を呈し，主軸をN—15°—Wに取る土坑。規模は長さ1.14m，幅0.88m，深さ16cmを測る。断面は浅い逆台形で，底面はほぼ平坦。埋土は褐色粘質土で，砂粒・マンガンを含み，下層は砂粒を含む灰褐色粘質土である。北西側床面に密着するように近世の陶磁器が出土した。

出土遺物（Fig. 11，PL. 10） 近世の染付皿，青磁椀，香炉，陶器の椀・瓶・盤・片口・家畜の剣歯と臼歯がそれぞれ2本などが出土している。

15・16は陶器の椀。15は1/2片で，復元口径11.0cm，器高5.2cmを測る。1条の小さい突帯が巡る。内外面濃緑褐色釉がかかり，見込みは蛇目状に釉を掻き取る。16は口縁部を欠失するが，

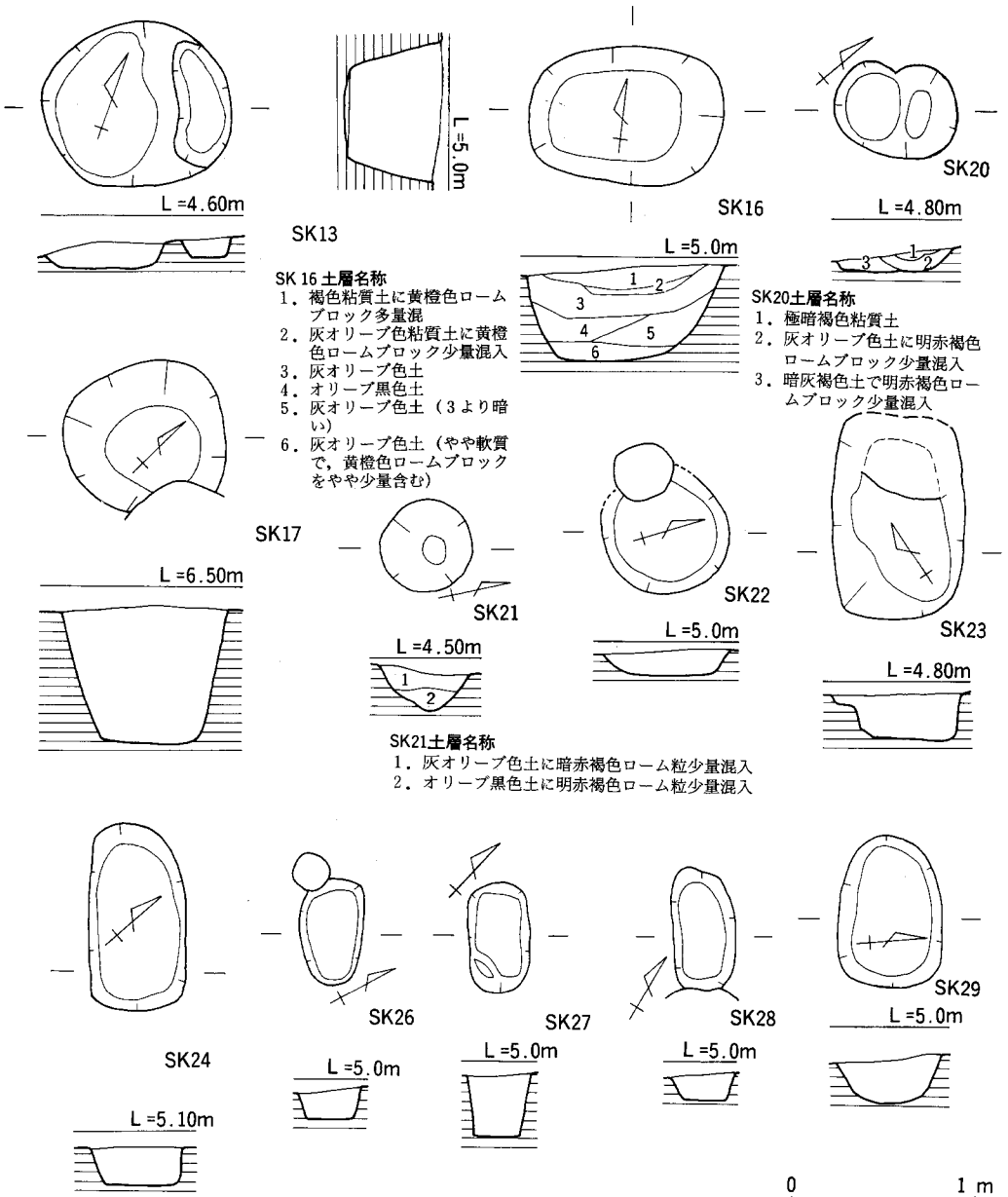


Fig.13　SK13・16・17・20～24・26～29（1/40）

高台径4.4cmを測る。高台畳付以外黄褐色の淡い飴釉がかかる。見込には三足のハマの痕跡が残る。焼成は若干あまい。17は青磁香炉1/3片で，復元体部径10.0cmを測る。外面には淡緑灰色釉がかかる。18は瓢形の瓶である。口径は3.8cmを測る。やや濃い黄緑色釉が内外面にかかり，口

縁から肩部にかけては青白色の釉が筋状にかかる。19は陶器の片口で，復元口径は21.4cmを測る。口縁部は玉縁状を呈し，内外面淡オリーブ釉がかかる。20は陶器の盤であろう。口径14.4cm，器高8.2cmを測る。口縁部は内すぼみ，短く直立する。体部中央には4ヶ所ねじり状の装飾を兼ねた把手がつく。体外面は淡緑灰色釉がかかり，口縁部は鉄漿をぬる。

SK11（Fig. 12，PL. 6）

平面形状が楕円形を呈し，主軸方位をN—43°30′—Wに取る土坑。規模は長さ1.29m，幅0.76m，深さ56cmを測る。底面には甕棺の抜跡痕がかろうじて残り，本来は甕棺墓であった。規模から考えて，合口の成人棺であろう。

出土遺物　中世の土師質土器や近世の染付・陶器の小片が出土した。

SK12（Fig. 12，PL. 7）

平面形状が隅丸長方形を呈し，主軸方位をN—72°—Eに取る土坑。両側はピットで切られる。規模は長さ1.90m，幅0.92m，深さ35～42cmを測る。東側にテラスを持ち，西側は9cm程低くなる。断面は逆台形を呈し，埋土は黒色土である。

出土遺物　弥生土器，土師器の細片が15点出土した。

SK13（Fig. 13）

平面形状が不整円形を呈す土坑で，規模は長さ1.02m，幅0.92m，深さ16cmを測る。底面は西側に深くなる。埋土は暗褐色土に灰色粘土ブロックを含む。出土遺物はなかった。

SK16（Fig. 13）

平面形状が隅丸長方形を呈し，主軸方位をN—83°—Eに取る土坑。規模は長さ1.08m，幅0.78m，深さ53cmを測る。断面は逆台形を呈す。底面は中央がやや深くなる。埋土は灰オリーブ粘質土に黄褐色ローム土，オリーブ黒色土，灰オリーブ土，暗オリーブ土などが，上からレンズ状に堆積する。

出土遺物　古墳時代から近世にかけての各種遺物（須恵器・土師器・陶器・瓦など）を少しずつ含む。

SK17（Fig. 13）

北東境界地で検出した攪乱に一部を切られる土坑。平面形状が不整円形を呈し，規模は長径0.85m，短径0.84m，深さ75cmを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は暗灰褐色土である。

出土遺物（Fig. 11，PL. 10）　近世の染付・白磁・青白磁の椀・皿など，陶器の瓶・壺・甕・瓦質土器・瓦・陶器などが出土している。陶器は高取系と思われる。

21は陶器の甕の破片で，北側より出土。復元口径24.6cm，器高27.2cmを測る。体部外面中央に2条の浅い凹線が巡り，暗褐色の釉がかかり，口縁から体部上半は更に藁灰釉がかかる。内面は露胎。上野高取系か。

SK20（Fig. 13，PL. 7）

SK23を切る土坑で，平面形状はだるま形を呈す。規模は長さ0.66m，最大幅0.52m，深さ14cmを測る。埋土は上層が灰オリーブ土に明赤褐色ロームブロック少量混入し，下層が暗灰黄色土に明赤褐色ロームブロックを少量混入する。出土遺物はなかった。

SK21（Fig. 13）

平面形状が円形を呈す小土坑。直径0.5m を測る。断面は逆円錐形である。埋土は暗褐色土である。出土遺物はなかった。

SK22（Fig. 13,）

平面形状が略円形を呈す土坑。西側はピットで切られる。規模は直径0.72×0.70m，深さ15cmを測る。断面は浅い皿状である。埋土はややくらい灰黄褐色砂質土に赤褐色地山ロームブロックの混合土。出土遺物はなかった。

SK23（Fig. 13，PL. 7）

平面形状は隅丸長方形を呈し，主軸方位を N—34°—E に取る土坑。SK20に北側は切られる。断面は箱状であるが，西側は一段テラスがある。埋土は黒味を帯びた明黄褐色ロームブロックである。出土遺物はなかった。

SK24（Fig. 13，PL. 7）

平面形状は略長方形を呈し，主軸方位を N—47°—E に取る土坑。西側をピットに切られるが，規模は長さ推定1.10m，幅0.53m，深さ20cmを測る。断面は逆台形で，壁の立上りは西側がやや緩やかである。埋土は汚れた赤褐色ロームブロックである。

出土遺物　弥生土器の甕の細片 3 点が出土した。

SK26（Fig. 13，PL. 7）

平面形状が羽子板状を呈す。主軸方位を N—60°—W に取る小土坑。規模は長さ0.58m，幅は18～36cm，深さ16cmを測り，西側小口が幅広い。断面は逆台形である。埋土は暗褐色土。出土遺物はなかった。ST01・03などと主軸方位を同じくし，土壙墓の可能性がある。

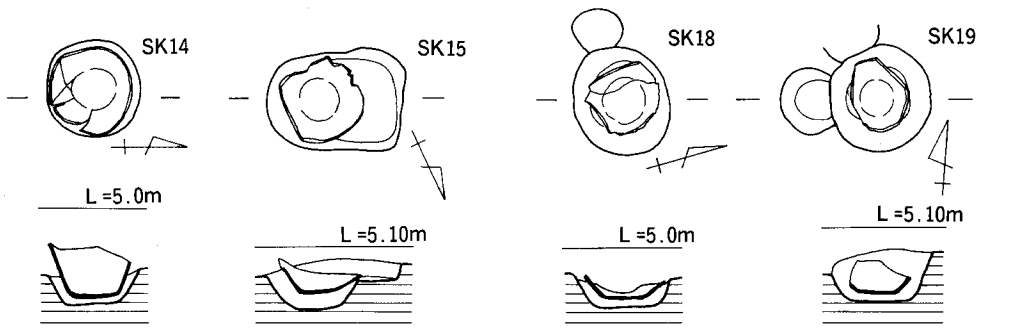


Fig.14　SK14・15・18・19(1/40)

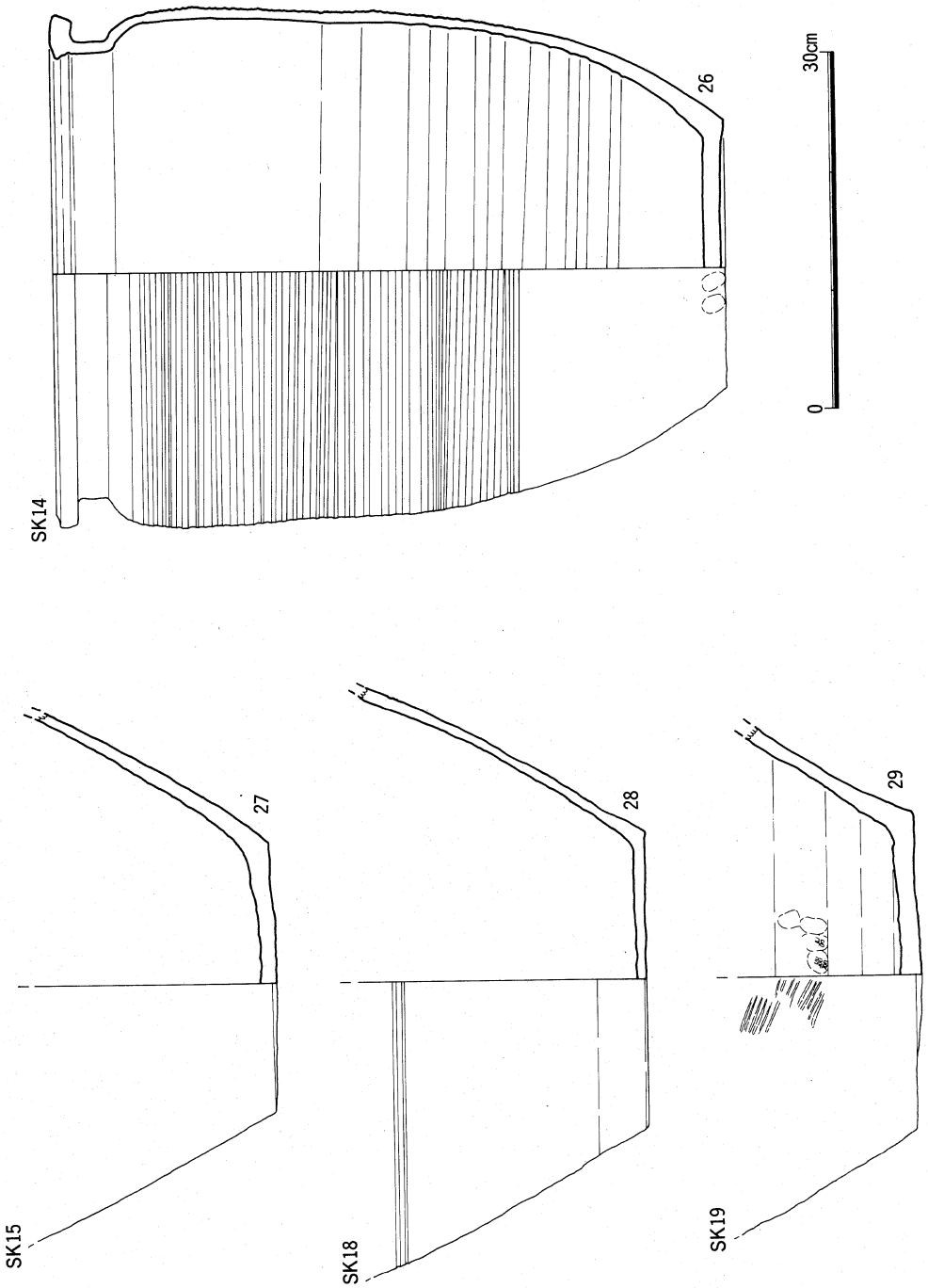


Fig.15 SK14・15・18・19出土遺物(1/6)

SK27（Fig. 13，PL. 8）

平面形状が隅丸方形を呈し，主軸方位をN—42°30′—Wに取る土坑。規模は長さ0.62m，幅0.32m，深さ36cmを測る。断面は逆台形で，南西隅に小さなテラスがある。底面はほぼ平坦。埋土は暗灰褐色土。出土遺物はなかった。

SK28（Fig. 13，PL. 8）

平面形状が隅丸長方形を呈し，主軸方位をN—29°30′—Wに取る土坑。規模は長さ0.68m，幅0.34m，深さ15cmを測る。断面は浅い逆台形で，底面はほぼ水平。埋土は暗褐色土である。出土遺物はなかった。

SK29（Fig. 13，PL. 8）

平面形状が不整楕円形を呈し，主軸方位をN—84°—Wに取る土坑。長さ0.83m，幅0.57m，深さ28cmを測る。断面は船底形で，中央が深くなる。埋土は暗褐色土である。出土遺物はなかった。

その他の遺構及び出土遺物

埋甕遺構（Fig. 15，PL. 10）　5基検出した。いずれも近世以降のもの。

26はSK14の素焼の甕。口径43.5cm，器高56.2cm，底径22.5cmを測る。口縁部は粘土紐を接合した後，更に粘土をまいて補強し，逆L字形状に接合している。内外面にヨコナデであるが，体部外面上半は凹線が連続して巡る。ろくろ回転は右回転である。口縁部に欠き取があり，畑の肥料甕として用いられたのかもしれない。色調はにぶい桃色で，胎土・焼成共良好。

27はSK15の陶器甕で，底部片。底径23.7cmを測る。全体にかなり歪む。内外面褐色釉がかかり，胎土は石英微粒を若干含む。内面にはカルキ質のようなものが付着する。

28はSK18の陶器甕底部片。底径24.6cmを測る。内外面叩きを加えた後，ヨコナデで，暗褐色の釉がかかる。内底部には漆喰状の固形物が付着する。胎土は少し砂粒を含む。

29はSK19の陶器甕底部片で，底径は26.8cmを測る。体部内面は格子目，外面は平行叩きを加

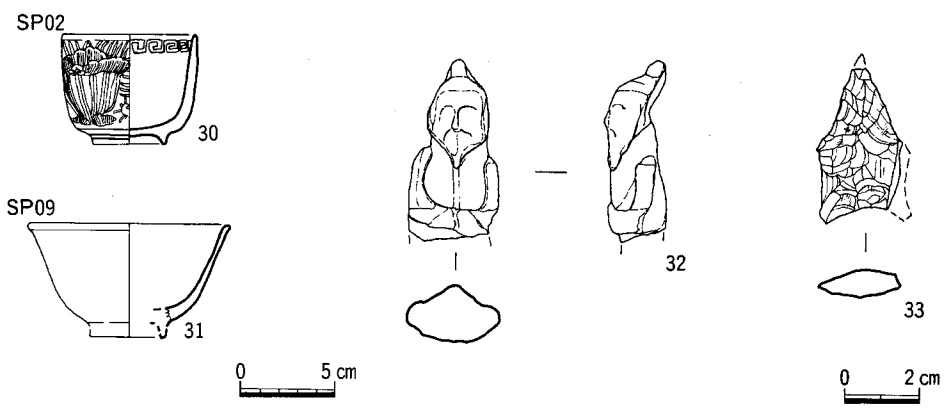


Fig.16　ピット・遺構面出土遺物(1/4・2/3)

えた後ナデ，その後暗赤褐色釉を施す。釉は縞状に流れる。底部は指おさえ痕が残り，かなり凸状に歪む。色調は内外共暗赤褐色，胎土は精良で，縞状を呈す。

他に防空壕上のSK25も甕であるが，今回は図示していない。

防空壕

調査区中央で検出した。平面形状がZ形を呈する細長い土坑で，全長6.8m，幅0.5～1.44m，最大で深さ1.46mを測る。北西・南東両端に階段を作り出した出入口がある。埋土より近代の遺物や家畜の骨が若干出土している。

ピット出土遺物（Fig. 16，PL. 10） 30はSP 2，31はSP 9出土。30は染付の湯呑椀1/2片。復元口径7.0cm，器高5.8cmを測る。内外面淡藍色の呉須で文様が描かれる。31は青磁椀1/2片。復元口径10.6cmを測る。オリーブ色釉の上に一部青緑色の釉（コバルト釉か）がかかる。

表土・遺構面出土遺物（Fig. 16，PL. 10） 32は白磁の中国官人の人形で，下半身を欠失する。型作りであるが，かなり粗略な作りである。現存長4.8cmを測る。

33は黒耀石の石鏃で，最大長2.8cm，最大幅1.5cm，最大厚0.4cm，重さ1.0gを測る。五角形状を呈すが，基部は浅く坎りが入る。先端は欠失する。

3） 小 結

当地点で検出された遺構は弥生時代から近代迄の時代に亘る。これをまとめるとI期弥生時代，II期近世の江戸時代，III期近代の3時期に整理出来る。

I期の遺構は甕棺墓ST01～06と抜き跡のSK11である。早良平野の藤崎遺跡で行なわれた甕棺墓の編年に合わせればST01がVII～VIII期，ST02がVII～VIII期，[註1] ST03がVIII期，ST04がVIII期，ST05がV期，ST06がVIII期に当てる事が出来る。時期的には弥生時代中期中葉から中期後半頃迄の範囲である。古い時期のST04は主軸をN-15°-Wと北に近い方位を取るが，中期後半の段階になると西の方へ振る傾向がある。SK11は抜き跡であるが，主軸の方向からして中期後半代の時期と予想出来る。またSK24・26～28は長方形の小土坑であるが主軸方向はST02・03などと近い関係にあり，時期を決めうる遺物はないものの同時期の可能性がある。

II期はSK06・10・12などで，江戸時代である。SK04・10など方形のきちっとした形態であるので，墳墓を考えた。しかし，明確な副葬品(六道銭)や墓石がなく，別の性格の遺構と考えるが，SK10から動物の歯が出土しており，家蓄を葬った土坑かもしれない。

III期は埋甕SK14・15・18・19，防空壕などである。埋甕の一部にはカルシウムなど付着したものもあり，畑地に伴う肥料甕の可能性が強い。

今回の調査での最大の成果は新たに弥生期の甕棺墓群を発見した事である。当地点は墓域の南西境界地であり，墓域の中心は北側から東側に拡がると思われる。 (山崎)

註1 福岡市教育委員会「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981

2．第121次調査（調査番号8706）

1）調査地区の地形と概要

調査区は早良区小田部５丁目154―2に所在する。北へ八手状に分岐して広がる有田・小田部台地の一番西側台地の北側，一番広い平坦面を持つ部分の中央に立地し，標高は6.5m 前後を測る。現況は宅地である。昭和62年度，調査区に個人住宅が建て替えられる事になり，申請が出された。これを受けて埋蔵文化材課は，周辺はすべて調査が行なわれており，遺跡の存在は明確であるとして，調査は必要という事で申請者と協議を行ない，工事着工前に緊急的に調査を実施した。調査は昭和62年５月20日から６月13日迄行ない，調査面積は165㎡である。

Fig.17　第121・157次調査位置図(1/2,500)

調査区周辺は比較的調査が行なわれており，特に北側隣接地は西から第46・36・86・64・35次調査区があり，弥生時代前期末から後期初頭頃の甕棺墓群，奈良時代の大型建物群，中世末頃の居館址が検出されている。今回の調査では表土下50cmの鳥栖ローム上面で遺構を検出した。検出遺構は弥生時代前期の貯蔵穴２基，弥生時代後期初頭頃の甕棺墓１基，掘立柱建物１棟，柵１列，土坑７基，溝状遺構２条などである。区画整理時の削平や旧建物建設時の基礎掘，車庫・出入口建設などによる削平，攪乱などによって，遺構の残りは悪い。遺物はコンテナ７箱出土した。弥生時代前期の土器や，後期の甕棺２個，中世末頃の土器類が出土している。

2）遺構と遺物

掘立柱建物

SB01（Fig. 19，PL. 12）

調査区南側で検出した主軸方位をN―12°30′―W に取る１＋α×２間の南北棟。西側はSD02に切られ不明。攪乱削平により残りは悪い。梁間全長1.65m＋α，桁行全長5.55m を測る。柱穴掘方平面形は円形で，直径は30～40cm，深さは25cm前後を測る。柱径は痕跡から15cm前後を測る。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

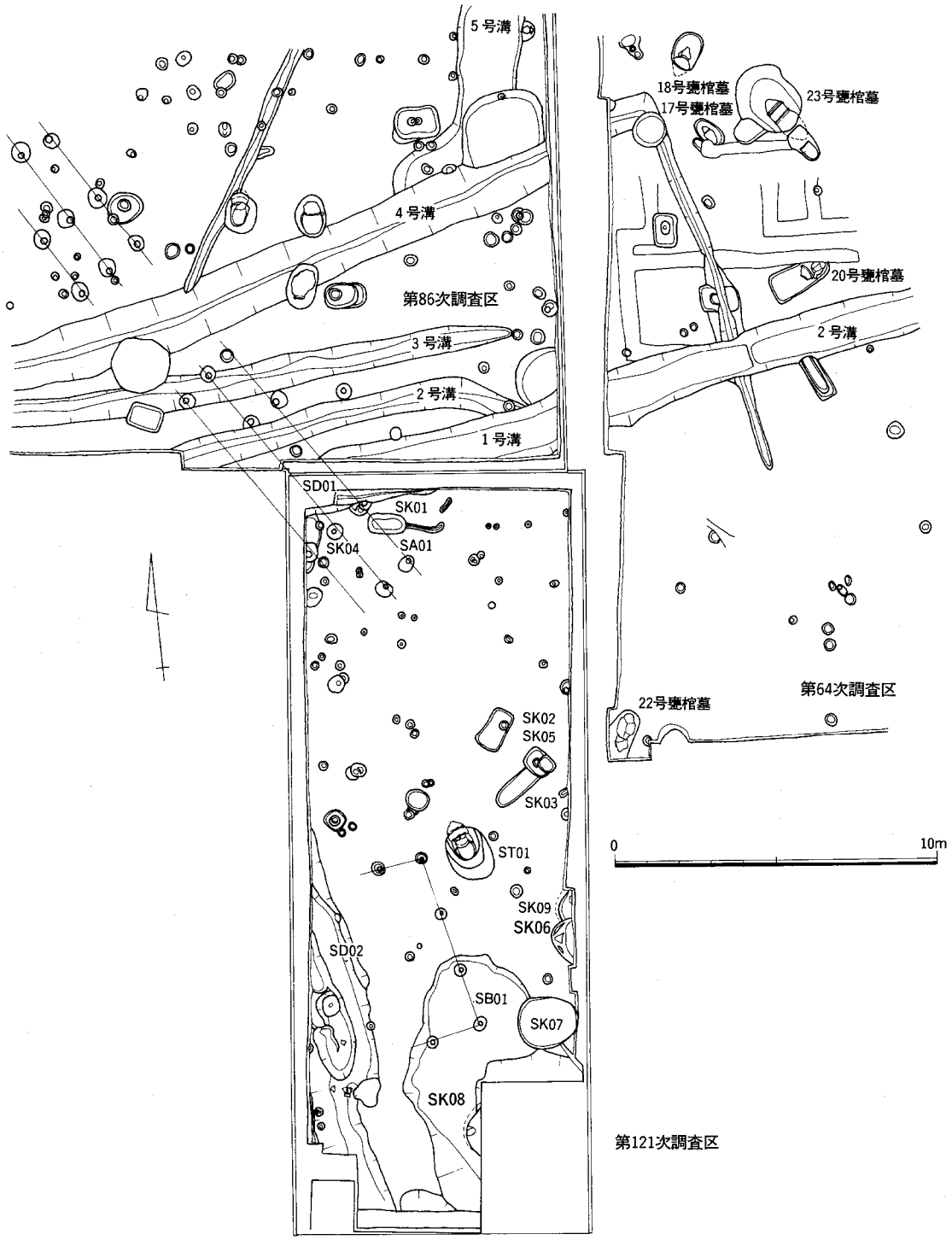


Fig.18 第121次調査区遺構配置図(1/200)

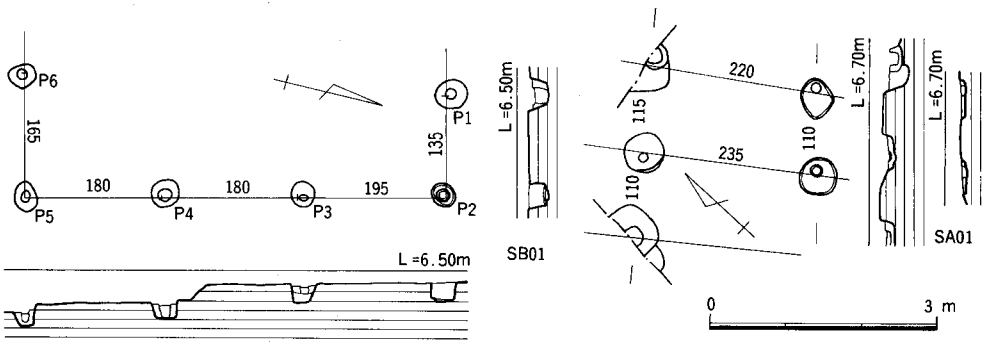


Fig.19　SB01・SA01(1/100)

出土遺物（Fig. 29. PL16）時期不明の土師器の細片が2点出土した。

21は叩石で一部を欠失する。形状は円筒形を呈し，現存長9.6cm，最大高5.2cm，重量374g を測る。上下両端は丸く，使用痕が残る。各側面は磨っているが，敲打調整痕が残る。石質は蛇紋岩質と思われる。

柵

SA01（Fig. 19，PL. 12）

第36・86次調査区から続く3本柱の柵で，有田・小田部第9集の報告によれば，調査区東側の第64・35次調査区に繋ながる方形に囲繞する柵で，その規模は長辺51.1～52.8m，短辺44.3～49.2mと推定されている。当調査区では削平により残りが悪く，1間分を確認しただけである。柱穴は円形で，直径は50cm前後，深さは5～35cmを測り，東側柱列の残りは悪い。

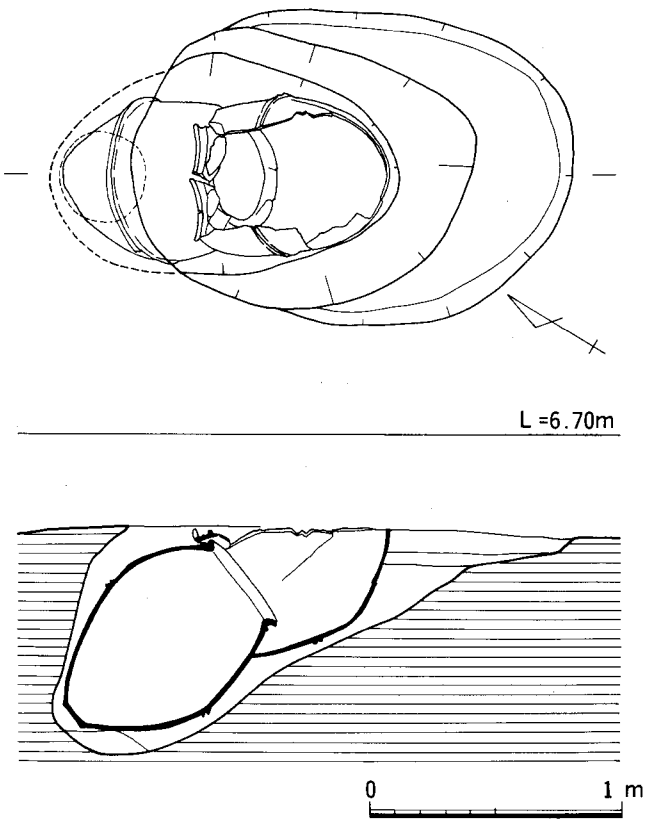


Fig.20　ST01(1/30)

柱径は痕跡から12cm前後と推定出来る。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物　土師器の細片が１点と黒曜石の剝片が１点出土した。

甕棺墓

ST01（Fig. 20，PL. 12）

調査区中央で検出した。主軸方位をN―32°―Wに取る。上面の平面規模が1.76×1.24mを測る楕円形の墓壙で，南側に深さ90cm，奥行32cm迄斜に掘り込み，埋置角度37°30′で甕本体を入れている。北側には最大幅35cmの三ヶ月状のテラスがある。甕棺本体は覆口式で，上甕口縁部を欠きとった状態で，下甕にかぶせている。上甕は上半を削平で失なうが，上下合せて全長1.50m程と推定出来る。接合部には黒青灰色粘土がつまっていた。人骨は残っていなかった。

出土遺物（Fig. 21, PL. 16）　１は上甕で口径50.6cm，器高78cm以上，最大胴径は64.9cmを測る。胴部最大径は胴部中央にある。口縁部はくの字状に外反し，端部は少し肥厚する。頸部に１条，胴部中央に２条の貼付の三角突帯を巡らす。胴部外面はタテの刷毛目を施すが，磨滅がひどく残りは悪い。内面は指おさえのちナデ。色調は淡灰色を呈し，胎土は石英粒を若干含む。２は下甕で口径45.0cm，底径10.4cm，器高87cm，最大胴径66.5cmを測る。胴部最大径はほぼ胴部中央にある。頸部のしまりは強く，口縁部はくの字状に外反し少し肥厚する。頸部に１条，胴部に２条の貼付けの三角突帯が巡る。胴部外面は９～10本/cmのナナメ刷毛，胴部突帯周辺はヨコ刷毛。口縁部から内面はナデである。器表はやや荒れる。

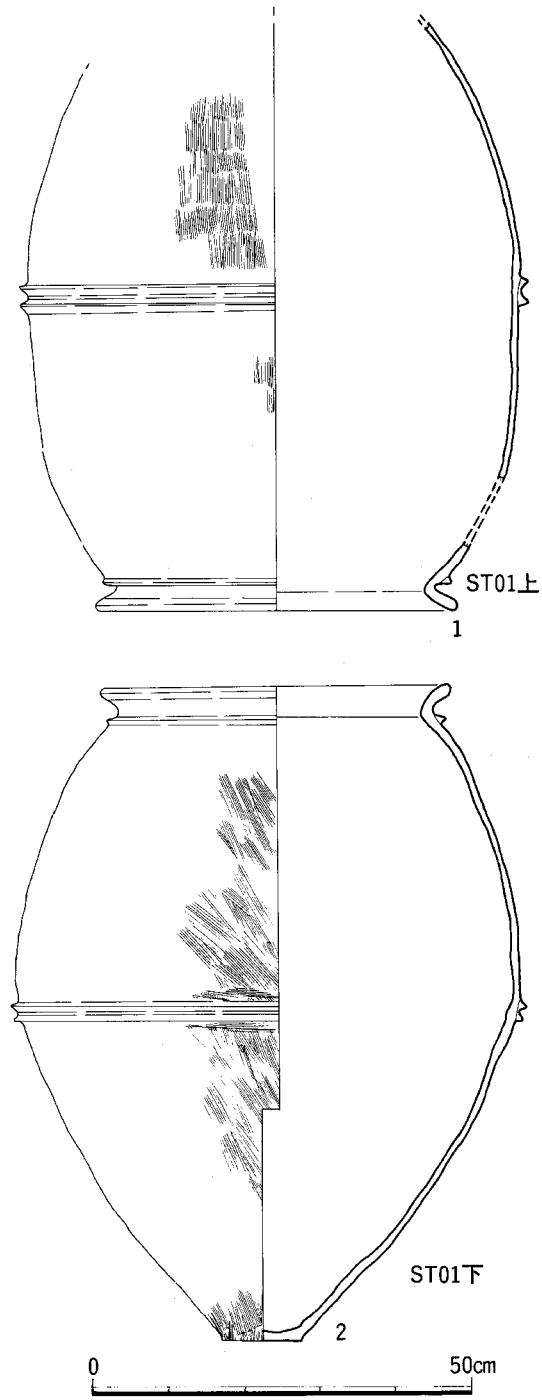


Fig.21　ST01出土遺物(1/10)

胴部外面には黒斑がある。色調は橙色を呈し，2～4㎜の大粒の石英粒を含む。

土坑

全部で9基検出した。内3基は貯蔵穴と思われる。

SK01（Fig. 22，PL. 13）

北側で検出した主軸方位をN―86°30′―Wに取る土坑。平面形状は隅丸長方形で，規模は長さ1.10m，幅0.65m，深さ15cmを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。出土遺物はなかった。

SK02（Fig. 22，PL. 13）

平面形状が隅丸長方形を呈す土坑。主軸方位をN―36°―Eに取る。規模は長さ1.32m，幅0.78m，深さ5cmを測る。残りは非常に悪い。底面はほぼ水平で，北側に直径20cm，深さ4cmのピットがあった。埋土は黒褐色粘質土である。出土遺物はなかった。

SK03（Fig. 22，PL. 13）

SK05を切る土坑で，主軸方位をN―44°30′―Eに取る。平面形状は長方形であるが，南側は丸くなる。規模は1.60m，幅0.62m，深さ12cmを測るが，底面は北側に向って少し低くなる。断面は浅い逆台形を呈す。埋土は上面が明褐色ロームと褐色粘質土ブロック，下層は明灰褐色粘質土ブロックを主体とする。土壙墓であろうか。出土遺物はなかった。

SK04（Fig. 22）

調査区西北隅境界地で検出した。一部しか調査していないので全容は不明。平面形状は円形を呈すと思われる。規模は確認長1.78m，深さ34cmを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は暗褐色粘質土に褐色ロームブロックを混入する。

Tab. 5　土坑一覧表

遺構番号	形態 平面	形態 断面	規模（計測値） 長さ(cm)	規模（計測値） 幅(cm)	規模（計測値） 深さ(cm)	主軸方向	時期	備考
SK01	隅丸長方形	逆台形	110	65	15	N-86°30′-W		
〃02	〃	皿状	132	78	5	N-36°-E		
〃03	長方形	逆台形	160	62	12	N-44°30′-E		土壙墓か
〃04	円形？	〃	(178)		(34)		弥生？	
〃05	隅丸長方形	箱形	96	60	26	N-36°30′-W		SK03を切る
〃06	不整円形？	浅いU字形	(155)		(25)		弥生	SK09を切る
〃07	楕円形	箱形	181	148	48		弥生	
〃08	不整円形	フラスコ状	上(124) 下(159)		64		〃 前期	貯蔵穴
〃09	〃	〃	上(104) 下(140)		92		〃 〃	〃

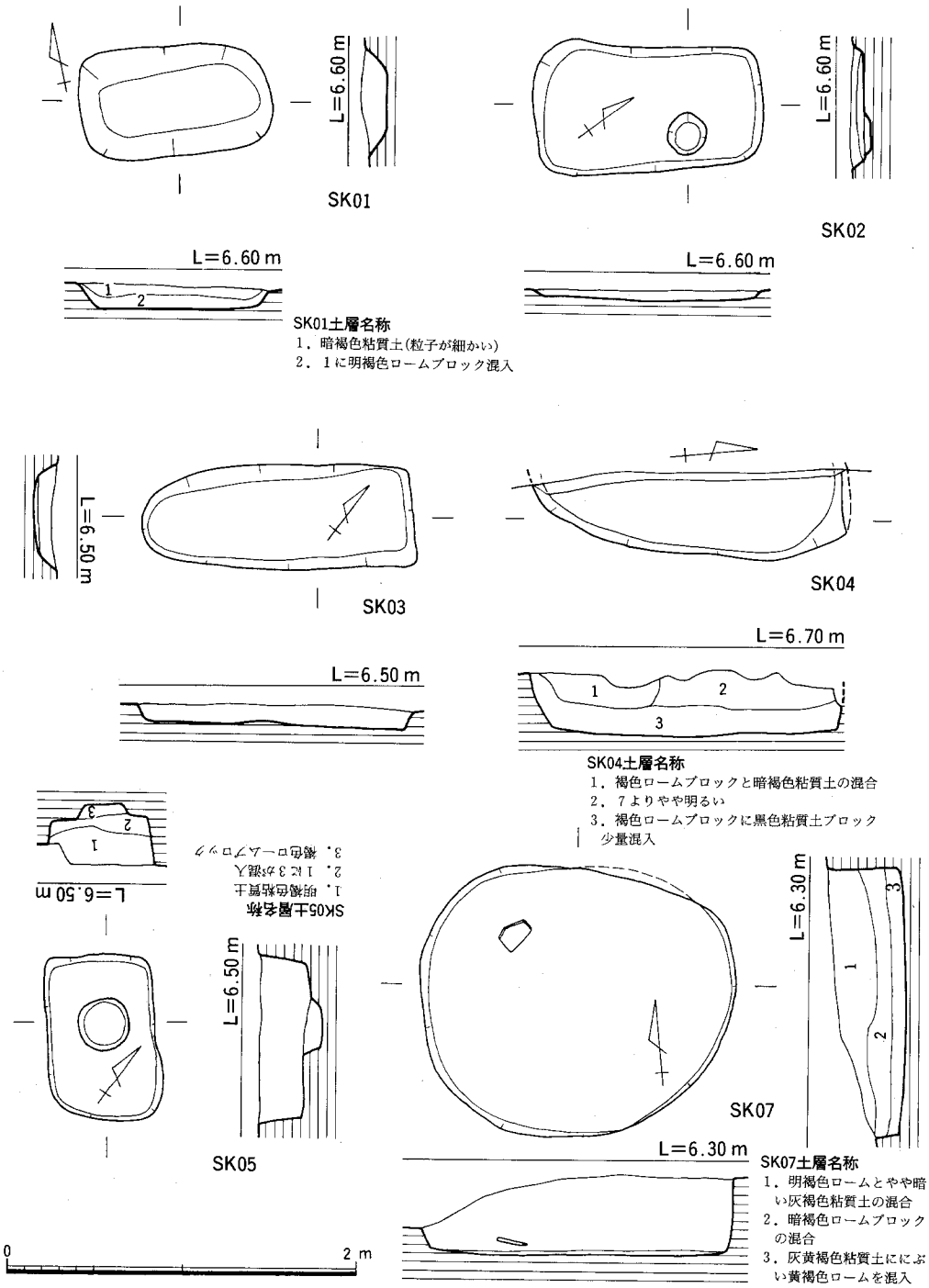


Fig.22　SK01～05・07(1/40)

出土遺物　弥生土器の甕胴部片が4点，黒曜石の剝片が1点出土した。

SK05（Fig. 22）

SK03とピットに切られる土坑。主軸方位をN—36°30′—Wに取る。平面形状は隅丸長方形を呈し，規模は長さ0.96m，幅0.6m，深さ26cmを測る。底面やや中央北寄りには直径30cm，深さ10cmを測る円形のピット状落込みがあった。埋土は暗褐色粘質土を主体とし，ピット状落込みの埋土は褐色ロームブロックであった。出土遺物はなかった。

SK06（Fig. 23，PL. 14）

調査区東壁にかかる土坑で，貯蔵穴SK08を切る。確認規模は長さ1.55m，深さ25cmを測る。底面は浅い鉢状に窪む。埋土は暗褐色粘質土を主体とし，下層は褐色砂質土に黄褐色ロームブロックを少量混入する。

出土遺物　弥生土器細片2点，黒曜石の石核1点出土。石核はパティナが古い様相を示す。

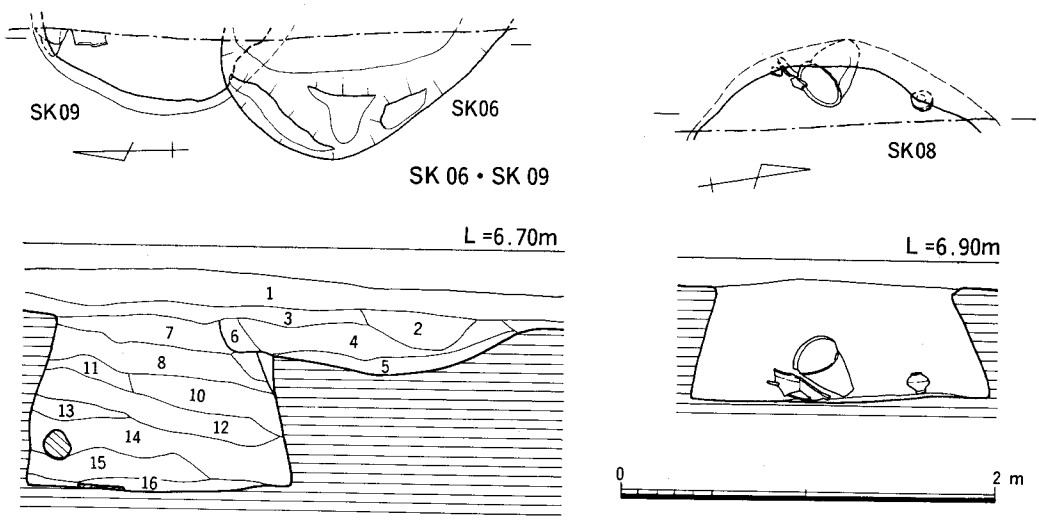
SK07（Fig. 22，PL. 13）

南側で検出した平面形状が楕円形を呈す土坑。規模は長さ1.81m，幅1.48m，深さ48cmを測る。断面は箱形で，壁の立上りはほぼ直。北側は一部オーバハングする。底面はほぼ水平。埋土は明褐色ロームブロックを主体とし，ほぼ水平堆積である。貯蔵穴と思われる。

出土遺物　弥生土器の甕細片が7点出土した。

SK08（Fig. 23，PL. 14）

車庫部分にかかり，一部を調査したのみ。上面の平面形状は円形を呈すと思われる。確認規



SK06・09土層名称

1．褐色土(表土)
2．1に明褐色砂質ローム混入
3．1に暗褐色粘質土混入
4．明褐色ロームブロックに暗褐色粘質土混入
5．灰褐色砂質土で明褐色ロームブロック混入
6．暗褐色粘質土と褐色ロームブロック混入
7．明褐色ロームブロックに暗褐色粘土ブロックを混入
8．7より暗褐色粘土ブロック混入多い
9．黄灰色粘土と明褐色砂質ロームの混合
10．黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合(地山ロームと炭化物混入)
11．暗褐色粘質土に明褐色ロームブロック混入
12．10より炭化物の混入多い
13．11でロームブロックの混入多い
14．暗灰褐色粘質土に明褐色ロームを少量混入(炭化物を少し含む)
15．暗灰褐色粘質土で明褐色ロームをわずかに含み、炭化物も含む
16．暗灰褐色粘質土と黄褐色砂質ローム混入

Fig.23　SK06・08・09(1/40)

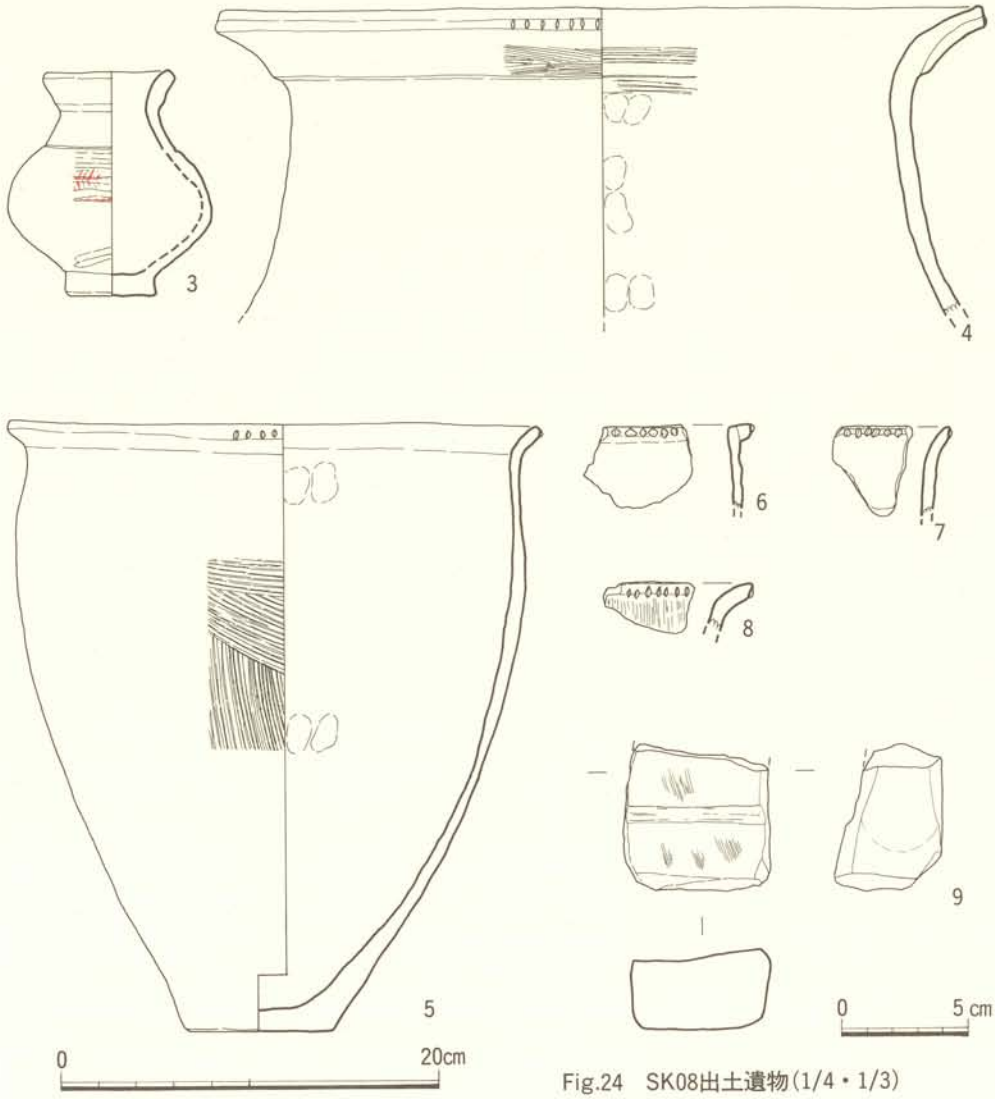


Fig.24 SK08出土遺物(1/4・1/3)

模は上面で，長さ1.24m，底面で長さ1.59m，深さ64cmを測る。断面形はフラスコ状を呈す。埋土は黒褐色粘質土である。壙底の西壁沿に横倒しの甕と小形壺があった。また埋土中から炭化物・骨片が少量出土した。

出土遺物（Fig. 24，PL. 15） 弥生土器の甕・壺や砥石・サヌカイト製の剝片が1点出土した。

3～8は弥生時代前期の土器。3は完形の小形の壺形土器。口径7.0cm，器高12.9cmを測る。口縁部は軽く外反し，肥厚する。頸部との境に軽い段が付き，頸部と胴部との境には浅い一条の沈線が巡る。器壁はやや荒れるが，体部外面にはかすかに赤色顔料による有軸羽状文状の文様が認められる。外面は磨き，内面はナデ。底部は高台状に高く造り出している。色調は淡橙

黄色を呈し，胎土に石英・金雲母微粒を若干含む。4は大形の口縁部1/4片。復元口径40.6cmを測る。口縁部の外反は強く，粘土を貼付け肥厚させ，口唇部下半に刻目を施す。口縁部内外にはヨコ刷毛，頸部外面は刷毛のナデ消後磨きか。内面には指おさえ痕がかすかに残る。色調は橙色で，胎土に石英・金雲母微粒を多く含む。5は中形の甕形土器。ほぼ完形で口径28.1cm，器高32.5cmを測る。口縁部は軽くく字状に外反し，口唇部下端に刻目が入る。器壁の荒れは著しいが，上面にはタテ又はナナメの粗い刷毛を施し，内面には指おさえ痕が残る。色調は淡橙灰黄色を呈し，胎土に石英粒を多く混入する。6～8は甕の口縁部に小片。6は夜臼式土器の口縁部片で，口縁部の突帯に刻目を施す。色調は淡灰黄色を呈し，胎土に石英粒を多く含む。7・8は如意形の口縁部で，いずれも口唇部に刻目を施す。また8の外面にはタテ刷毛を施す。色調は7が淡灰黄色，8が淡褐黄色を呈す。胎土は7が石英粒，8は石英粒と金雲母を多く含む。9は砥石。現存長5.9cm，最大幅5.8cm，厚さ3.2cmを測る。形状は方形を呈す。各面擦っている。上面には使用による幅6mm前後の浅い溝が入る。色調は淡灰黄色を呈し，石質は砂岩である。

SK09（Fig. 23，PL. 14）

調査区東側境界地で検出し，SK06に切られる。確認長は上面で1.04m，底面で1.40m，深さ92cmを測る。平面形状は上面，底面とも略円形で，断面は壁がオーバハングするフラスコ状を呈する。埋土は明褐色ロームブロックと黒褐色粘質土・暗灰褐色粘質土などが互層状に堆積し，下層の方は炭化物・骨片・炭化米を含む種子を少量含む。

出土遺物（Fig. 25，PL. 15）　10は甕形土器1/4片。復元口径27.6cmを測る。口縁部と胴部上半に各1条ずつ刻目がついた突帯が付く。外面は荒れがひどく調整不明。内面はナデ仕上。色調は淡褐黄色を呈し，胎土に石英粒を多く含む。11は鉢形土器で，復元口径20.0cmを測る。口縁部は丸味を持って軽く外湾する。内外面磨き調整で，口縁内外面には指おさえ痕が残る。色調は淡灰橙色を呈し，胎土は石英粒を多く含む。12は底部1/2片で，復元底径6.8cmを測る。底部は少し上げ底。器壁は荒れるが，外面指おさえ痕が残る。色調は淡橙色，胎土は石英粒を多く含む。13は作業台石と思われる。3個に割れているが，接合すると最大長19.5cm，最大厚11.8cm，重量3850gを測る。上面には擦り痕跡が残る。色調は暗青色を呈す。石質は安山岩であろうか。他に図示していないが，使用痕の残る黒曜石製の剝片も2点ある。

溝状遺構

SD01（Fig. 26，PL. 14）

北側境界地で一部を検出した東西溝で，第64次調査区の2号溝と一連のものである。確認長4m，深さ60cm以上を測る。調査区外にかかり，底は検出していない。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物　弥生土器や土師器・須恵器・瓦質土器足鍋・白磁などの小片が6点，黒曜石の剝片が1点出土した。

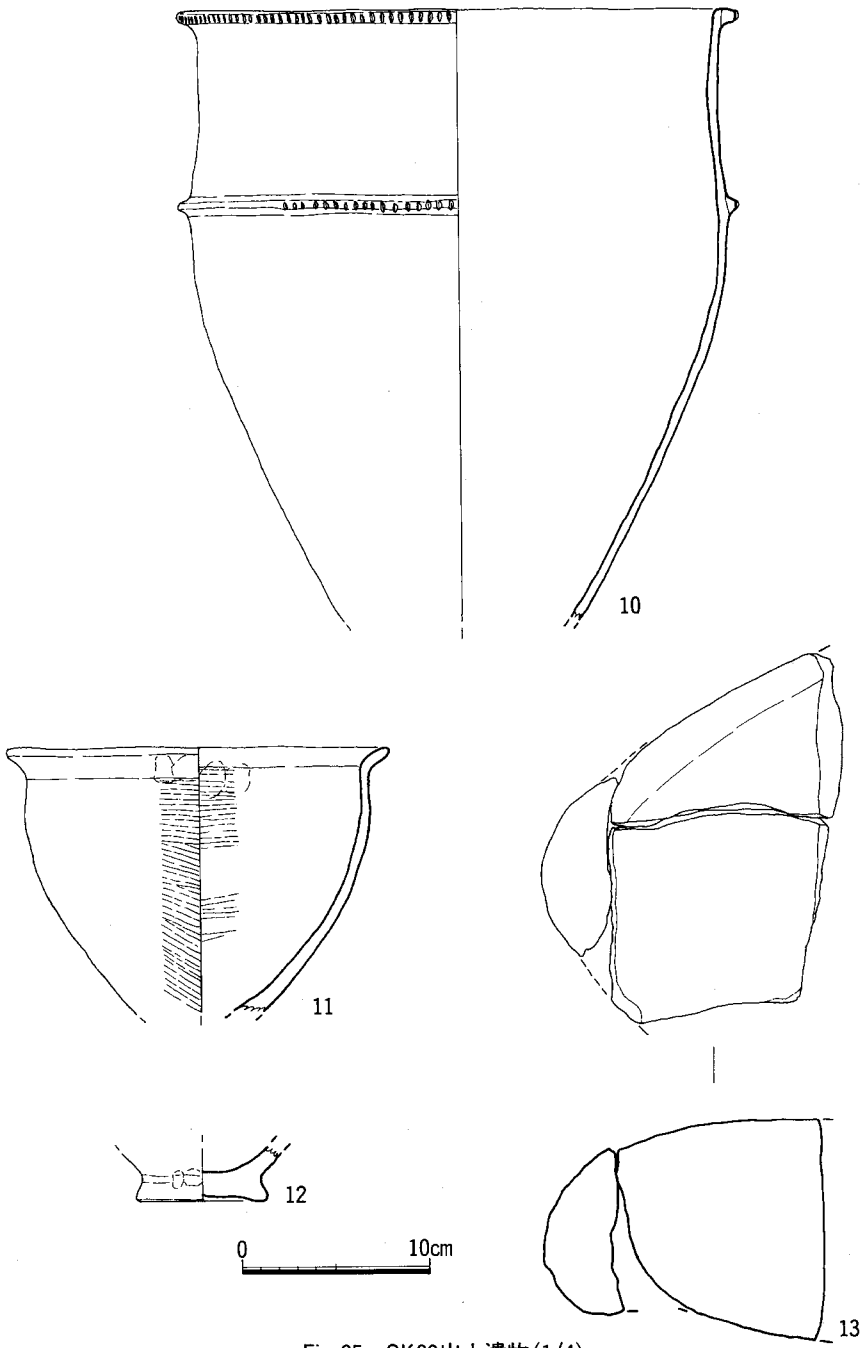


Fig.25　SK09出土遺物(1/4)

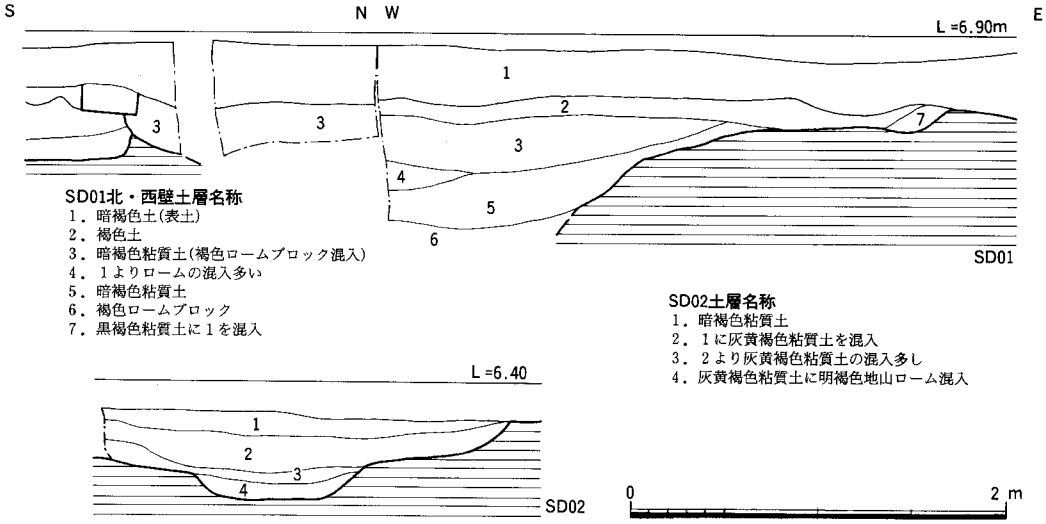


Fig.26　SD01・02土層(1/40)

SD02（Fig. 26，PL. 15）

調査区南西側境界地で検出した西側にやや主軸が振れる南北溝である。確認長は12.2m，幅1.5～2.15m，深さ20～40cmを測る。中央は一段溝状に深くなり，断面は2段掘状を呈す。南側は北側に比べ，コーナーを持って狭くなる。埋土は暗褐色粘質土を主体とし，下層は更にローム土を混入する。底の溝状の落込みは黄灰色の地山ロームの混入が更に多い。埋土中には割石や自然石などを多く含む。焼石もあった。

出土遺物（Fig. 27，28，PL. 16）　弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器，中世の土師器・土師質土器・青磁・白磁，黒曜石の剝片，石核など各時代の遺物が出土した。

14・15は青磁椀の口縁部1/8片で，復元口径15.4cmを測る。青緑色の釉が厚めにかかる。胎土に黒色微粒を少し含む。15世紀明代のものである。15は底部1/2片で，復元底径5.0cmを測る。高台は削り出しで，高台内面以外は淡緑灰色釉がかかる。生地の色は明灰色である。16は土師質土器の擂鉢がこね鉢の口縁部小片，内外面ヨコナデ，色調は淡橙色を呈し，胎土に石英，褐色粒子を少し含む。17は須恵質の擂鉢口縁部片であるが，器形としては備前のⅣ類に近い。18・19は瓦質土器，18は三足の足鍋1/3片。口径12.4cmを測る。キャリパー状の口縁形態を示す。底部は丸底で，1cm目の格子目叩きを加える。体部は指おさえで煤が付着する。内面はナデ及びヨコ刷毛を加える。体部と底部の境には，基部で直径3cmの支脚が3ヶ所付く。色調は灰色で，胎土に石英微粒を多く含む。19はほぼ完形の擂鉢で，口径33.2cm，底径14.8cm，器高10.8cmを測る。口縁内面には三角状に粘土を貼付ける。又1ヶ所幅2.5cmの片口を作る。内面には11本単位のおろし目の条線を加え，内底面にも条線を加える。体外面は器壁が荒れ調整不明。色調は淡灰黄色を呈し，胎土に石英粒を多く含む。20は小型板碑の碑面及び基部片である。現存長27.8

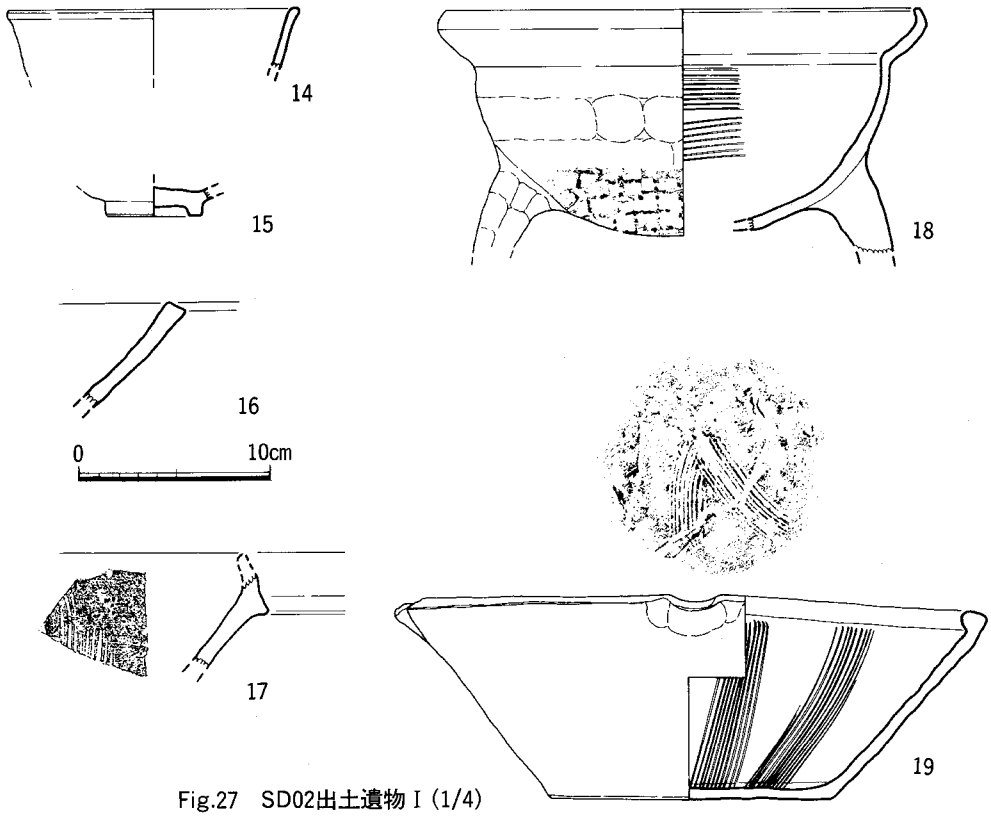


Fig.27　SD02出土遺物Ⅰ(1/4)

cm，最大幅16.3cm，最大厚11.2cmを測る。断面は長方形を呈す。碑面及び左右両側面は細かいノミによる削り後研磨仕上であるが，基部と裏面はノミによる雑な仕上で，刃部幅3.5cm位のノミ痕が残る。碑面には寶珎という銘文が残る。色調は暗褐色を呈し，焼けている。砂岩製である。

ピット・遺構面出土遺物

古墳時代から中世迄の土器片，炭化物，黒曜石の剝片などが少量ずつ出土しているが，いずれも細片で，図示出来るものはない。

3）小　結

当地点での遺構の時期は大きく４期に分ける事が出来る。

Ⅰ期は貯蔵穴SK08･09の時期で弥生時代前期である。SK09は板付Ⅰ式期で前期前半，SK08はそれより新しく板付Ⅱ式期の前期後半代である。この時期の貯蔵穴は周辺の第16次・35次・125次地区などで検出されている。[註1]

Ⅱ期[註2]はST01甕棺墓で，弥生時代後期初頭の段階。当地区で甕棺墓は周辺調査区も合せて，現

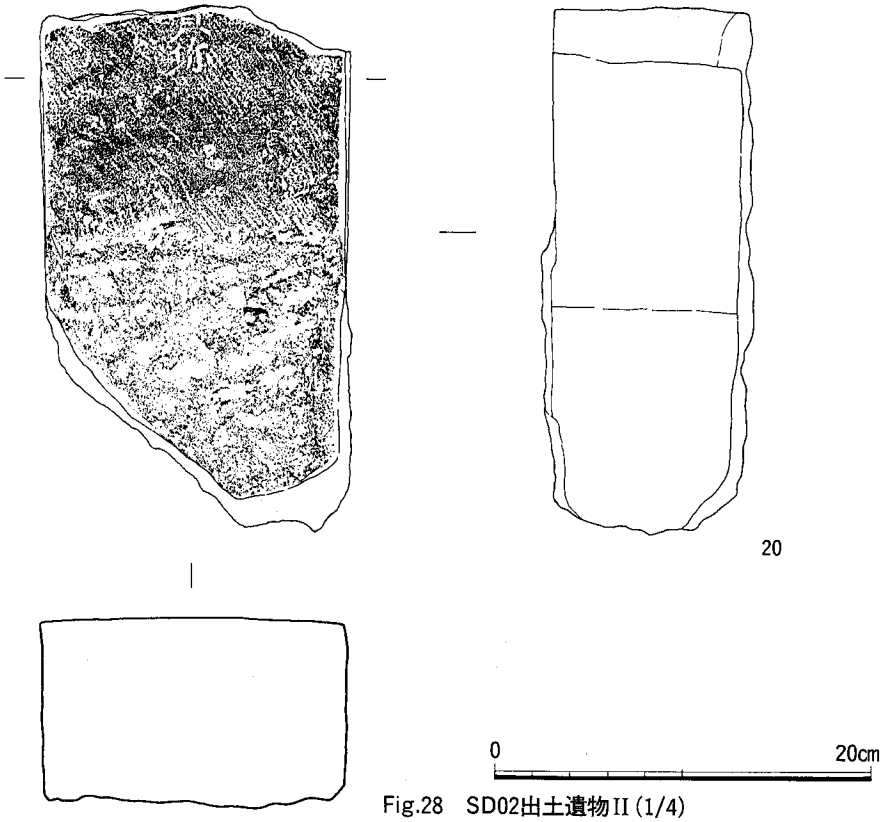


Fig.28　SD02出土遺物II (1/4)

在迄40墓確認し，その範囲は東西約60m，南北約40m と推定している。時期は弥生時代前期から後期初頭頃迄営まれている。

III期は柵 SA01で，第36・86・64・35次調査区にかけて方形に巡る推定規模50×44m の 3 本柱の柵である。当地区で遺物は出土しなかったが，他[註3]地区の調査成果から律令期とされている。

IV期は溝 SD01・02で，中世後半代の時期である。SD01は第86・64・157次調査区につながる東西方向から南北方向へ矩形に延びる屋敷地の区割溝と考えられる。時期は16世紀前半から中頃と比定されている。SD02は他調査区ではつながる遺構はないが強いて掲げれば第64次地点の 1 号溝と走行方向が近い。時期は明代の青磁片や備前系のIV類の擂鉢，大内系の足鍋，瓦質の擂鉢などから15～16世紀前半代が考えられる。

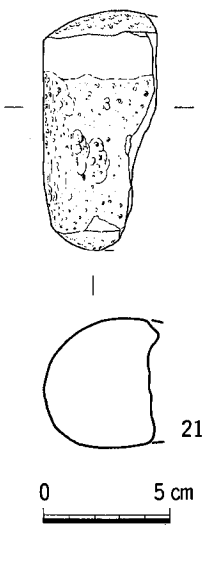


Fig.29　SB01出土遺物(1/3)

註 1　昭和53年度調査　（山崎）

註 2　昭和62年度調査現在整理中

註 3　福岡市教育委員会『有田・小田部第 8 集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集　1987

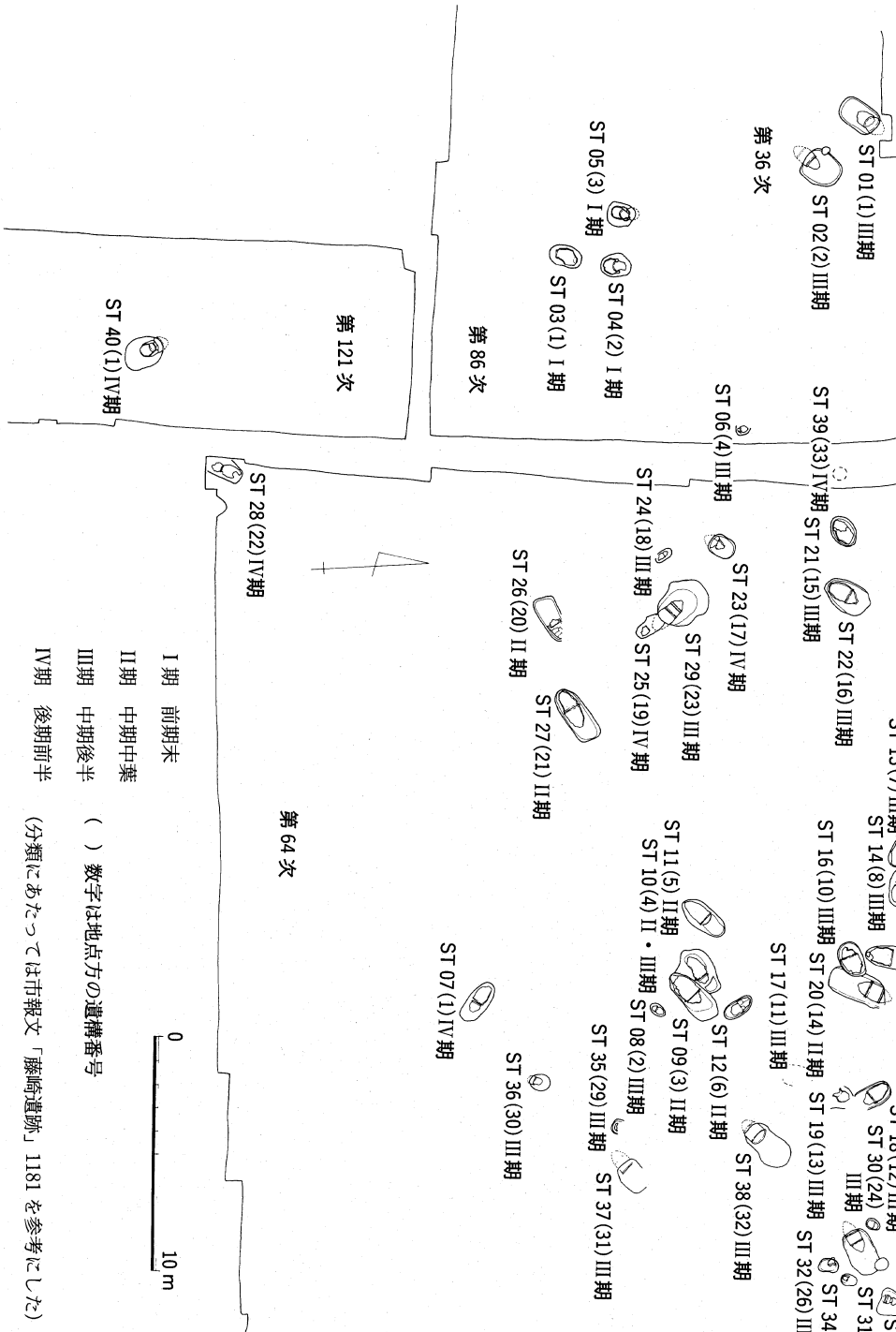


Fig.30　第 121 次調査区周辺甕棺墓配置図(1/300)

3．第126次調査（調査番号8724）

1）調査地区の地形と概要

調査地は早良区小田部1丁目34-9に所在し，調査面積111m²を測る。

当該地は八ツ手状に伸びる小田部地区台地の中央台地北端に位置する。南から緩やかに伸びてきた台地は調査地北側で崖を成し，その比高差約3 mを測る。

調査地内は標高約6.5mを測りほぼ平坦であるが，地内の北端部から急激に崖面に移行する。現在の室見川下流域は，当時入江状に成っていたと考えられ，調査地付近はこの入江をまじかに見，眺望のきく高台であったと考えられる。

当該地周辺の調査例は多く，西側・南側一帯で第25・27・37・63・79次調査が行なわれている。時期不明の掘立柱建物が多い。当調査区の南東に隣接する第27次調査区で，弥生時代中期後半の円形住居址1軒が検出されているが，弥生時代の墓は検出されていない。

発掘調査は専用住宅の立替えに伴って，昭和62年8月4日から26日まで行なった。遺構面は橙色ロームで，表土下約30cmで検出したが，調査区北側のST04付近から急激に落ちる。検出した遺構は弥生時代を主とし，甕棺墓4基，木棺墓1基，土坑4基などである。ピットも多数検出したが，建物を把握するまでには至らなかった。全体的に削平されているものの，遺構の残りは比較的良いものが多い。

2）遺構と遺物

甕棺墓

甕棺墓は4基検出した。その内大形棺の3基は主軸をほぼ北東－南西にとり，ほぼ一直線上に並ぶ。残りの1基は小形棺で，その主軸はこれらと直行する。また成人棺の1基は北側斜面上にあり，残りの3基は調査区中央の台地部にある。

ST01（Fig. 32，ＰＬ. 18）

調査区中央付近で検出した。堀り方は主軸をＮ－36°－Ｅにとり，平面プランは平行四辺形に近く，断面形は逆台形を呈し，丁寧な堀り方である。長さ261cm，幅185cm，深さ108cmを測る。南側側辺の床面南西隅を壁からさらに65cm南側に掘り，甕棺を差し込んでいる。甕棺は甕と甕の合わせ口で，南甕が北甕より大きい。埋置角度はほぼ水平で，主軸は掘り方よりやや東を向きＮ－45°－Ｅをとる。甕棺の全長159cmを測る。合わせ部分には下の一部を除いて約35cm，厚さ2～5cmの白色粘土を巻いている。熟年女性の人骨が依存していた。副葬品はない。

出土遺物（Fig. 34，PL. 22）　出土遺物は甕棺に使った弥生土器の甕2点だけである。

1は北甕で器高74.5cm，口径54cm，底径13.7cmを測る。胴部最大径は中央より上にあり，58

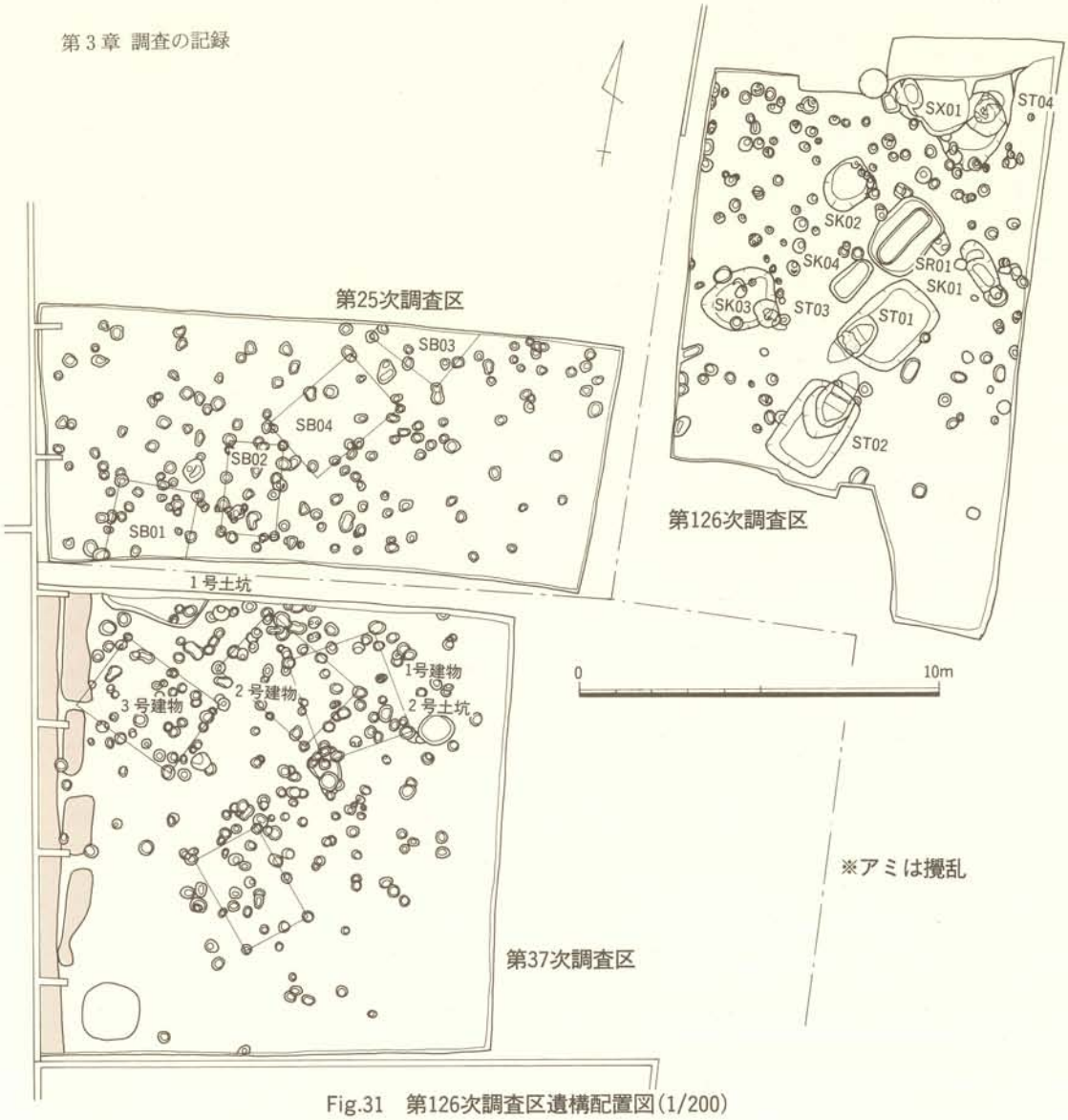
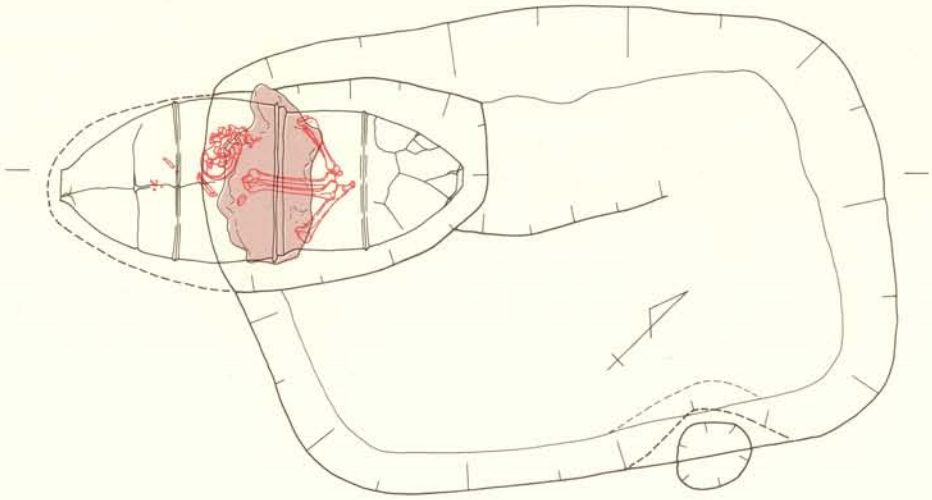


Fig.31　第126次調査区遺構配置図(1/200)

cmを測る。胴部中央には断面形がほぼ三角形を呈す凸帯を巡らす。口縁部の断面形は逆Ｌ字形を呈し，口縁外面には上下二列の刻み目を0.4～0.7cm間隔に施している。調整は外面がハケの後ナデ消し，内面は指押さえで整形した後ナデ仕上げを行なっている。色調は外面が黄橙色，内面が灰黄色を呈する。２は南甕で，器高86cm，口径60.8cm，底径11.1cmを測る。胴部最大径は頸部の直下にあり，63.1cmを測る。胴部中央には断面三角形の凸帯を巡らす。口縁部形は内面に強く張り出すＴ字に近い逆Ｌ字形で，口唇部は外傾する。内外面の突出部先端は稜をもたずに丸みを帯びる。調整は外面がナデもしくはヘラナデ，内面が指押さえの後ナデ，色調は全体に橙色を呈し，一部灰黒色を呈している。



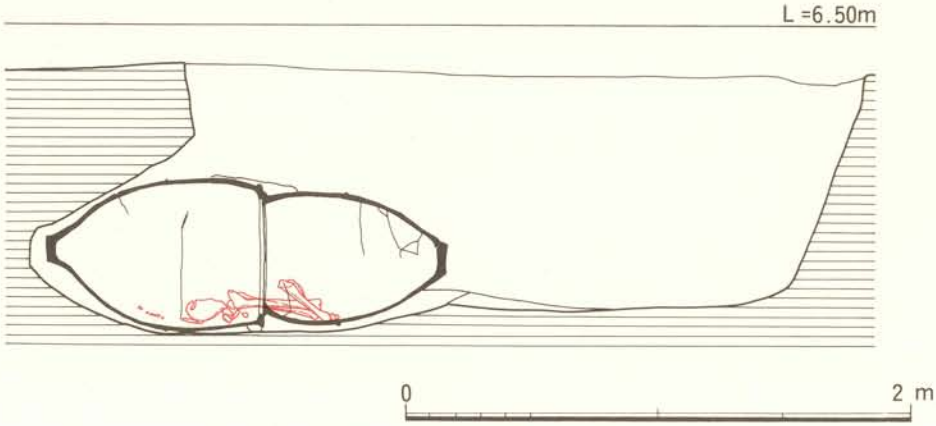


Fig.32　ST01(1/30)

Tab. 6　甕棺墓一覧表

	堀方長	堀方幅	堀方深	方　位	埋置角度	組合せ	合口形式	棺　長	時　期	備　考
ST01	261	185	108	N-36°-E	0°	甕＋甕	接口	159	中期前葉	熟年女性の人骨
ST02	265	180	80	N-36°30′-E	0°	甕＋甕	接口	161	中期前葉	熟年男性の人骨
ST03	88	69	62	S-36°-E	0°(7°)	壷＋壷	接口？	77	中期後葉	
ST04	径 120	—	114	N-18°-E	51°	甕＋甕	呑口	138	前 期 末	腰骨付近の人骨片

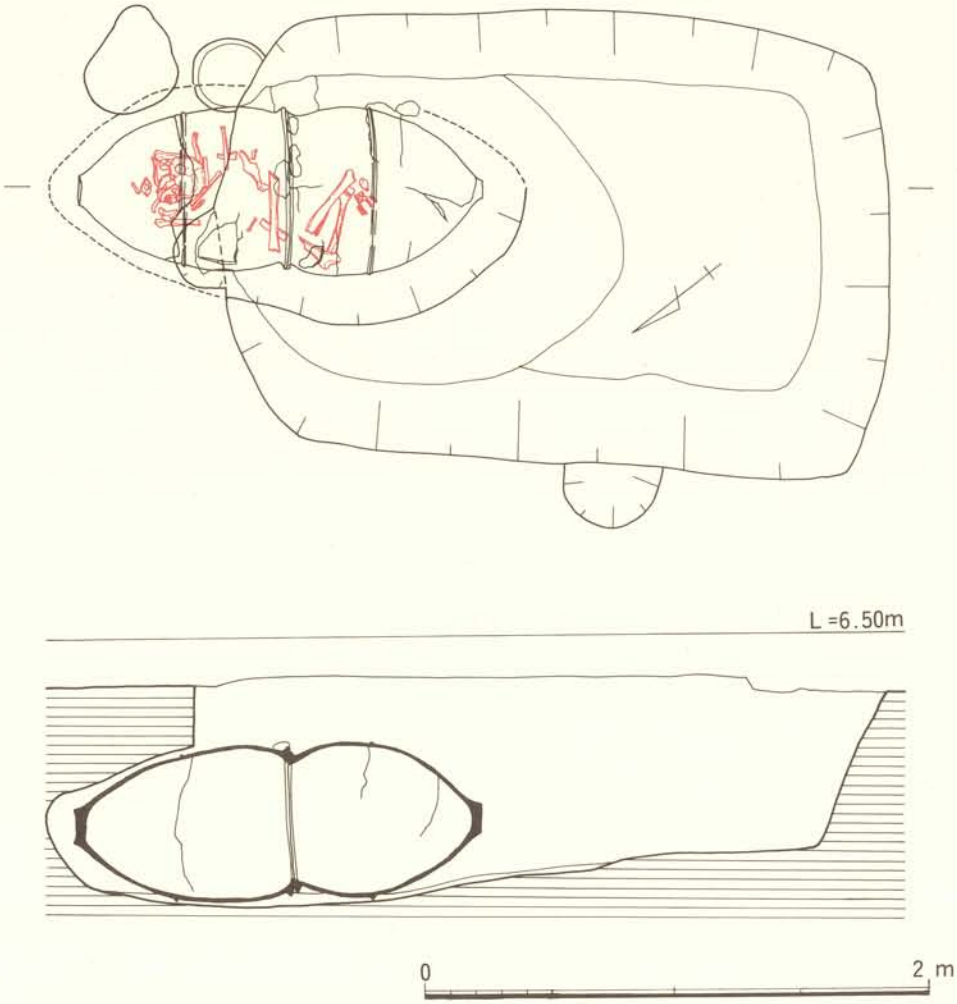


Fig.33 ST02(1/30)

ST02 (Fig. 33)

ST01南側で検出した。堀り方は主軸をN－36°30′－Eにとり，平面形は略長方形，断面形は台形を呈する。長さ265cm，幅180cmを測る。床面は堀った直後はほぼ水平であったと考えられるが，甕棺を埋置するための穴を掘ったときに堀り方中央付近から掘り下げたため，甕棺に向かってやや下降している。深さは中央付近で80cmを測る。北側側辺の東を壁から約58cm掘り込み，ST01と向かい合うように甕棺を差し込んでいる。甕棺は成人棺で，甕と甕の合わせ口式である。北甕が南甕より大きい。埋置角度はほぼ水平で，主軸は堀り方とほぼ同じである。合わせ部分

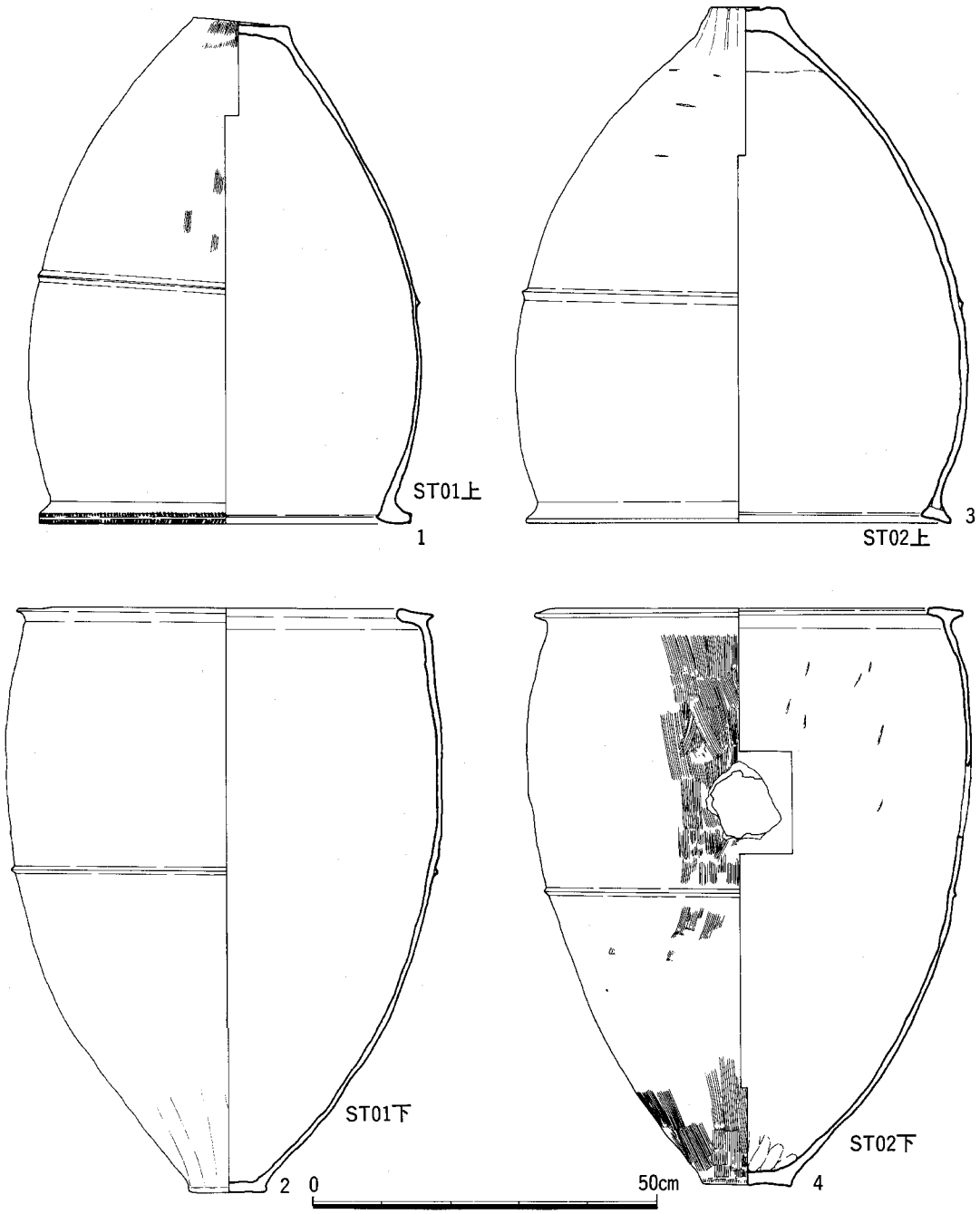


Fig.34　ST01・02出土遺物(1/10)

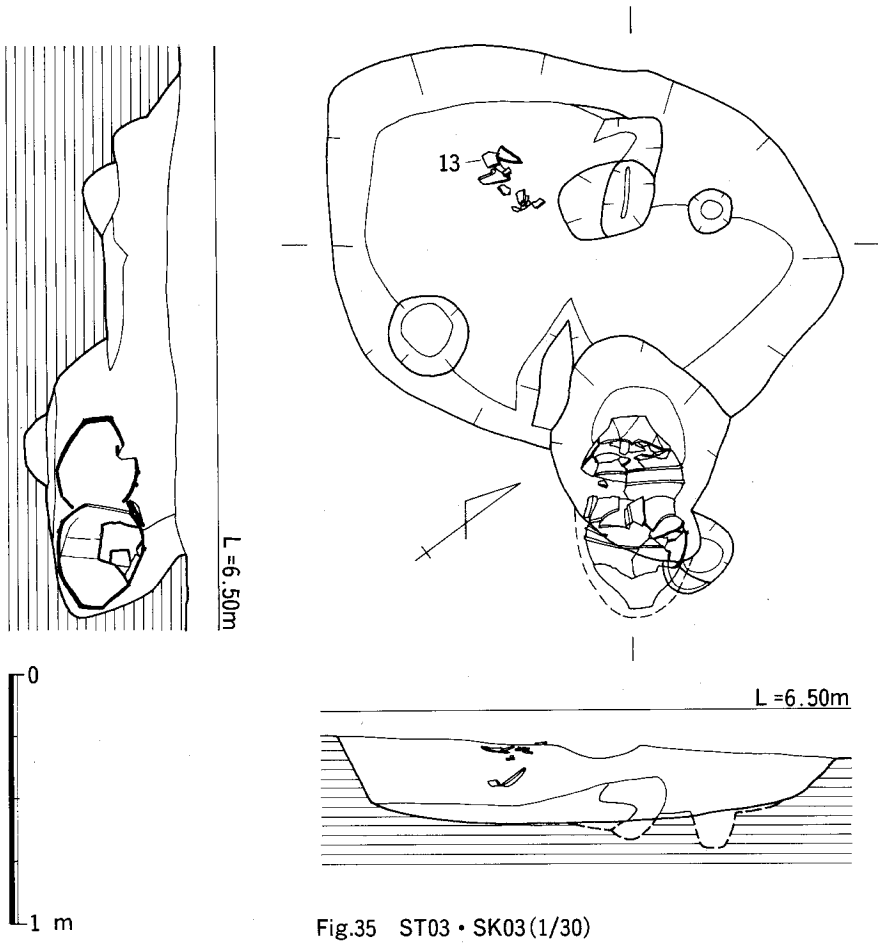


Fig.35 ST03・SK03(1/30)

の所々で白色粘土が少量検出された。甕棺内には熟年男性の人骨が1体遺存していた。副葬品はなかった。

出土遺物（Fig. 34, PL. 22） 出土遺物は甕棺に使った弥生土器の甕2点だけである。

3は南甕で器高75.8cm，口径61.6cm，底径10.4cmを測る。胴部最大径は胴部上位にあり65cmを測る。口縁部の断面形は如意状に近く，口唇部は内傾する。口縁端は両面とも丸みを帯びている。胴部中央に断面三角形の凸帯を一条巡らす。調整は器面が荒れているため分かりにくいが，外面にはハケ状の痕跡が見受けられる。内面は指押さえの後，ナデ仕上げを施している。色調は淡灰褐色を呈す。

4は北甕で器高84.1cm，口径56.7cm，底径12.7cmを測る。胴部最大径は頸部近くの胴部上位にある。口縁部の断面形はT字形で口唇部は外傾している。両口縁端は面取りされ，稜が明確に認められる。胴部中央に断面三角形の凸帯が一状巡る。凸帯の上，胴部最大径の下の部分に

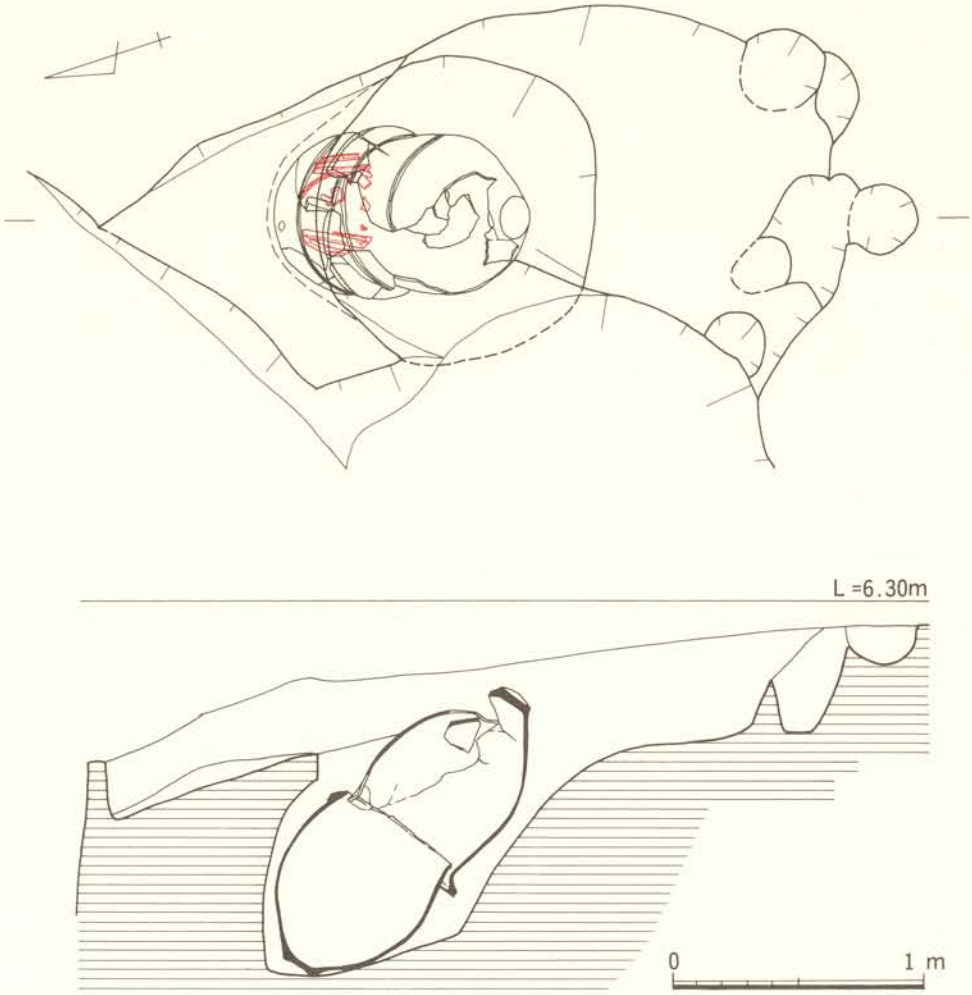


Fig.36　ST04・SX01(1/30)

径約5cmの不定形の孔が焼成後にあけられている。調整は外面が粗いナデの後，細かい目のハケで，内面は指押さえの後ナデ調整を施している。色調は橙色を呈し，黒斑がある。

ST03（Fig. 35，PL. 19）

ST01西側で検出した。SK03と重複するが，切り合いは明確でなかった。主軸はS－36°－Eで，他の3基とほぼ直交する。堀り方は不整な楕円形で，直径88cm，短径69cmを測る。壁の傾斜はゆるやかで，断面形は逆台形を呈し，深さ62cmを測る。東側の壁をさらに23cm掘り込み，甕棺を差し込んでいる。甕棺は一部が破損しているがほぼ完存しており，壺と壺を組み合わせ

ている。全体の埋置角度は全体的には水平であるが，東甕は7°の傾きを持ち，西甕は水平に近く，現状はきれいな合わせ口ではない。人骨，副葬品ともになかった。

出土遺物（Fig. 37，PL. 22） 出土した遺物は甕棺に使用した弥生土器だけである。

5は西甕で壺である。口縁端を欠失する。現状高42.9cm，頸部径19.3cm，底径10.6cmを測る。胴部中央付近に断面略方形の凸帯が1条とその上6cmにもう1条巡る。胴部最大径は下の凸帯のすぐ上にあり，38.1cmを測る。また頸部にも凸帯を1条巡らす。胴部下位に径約2cm前後の焼成後穿孔を施している。外面は器面の荒れがひどいが，底部周辺にハケが認められる。内面は指押さえの後ナデ調整である。色調は全体的に淡黄色を呈する。6は東甕で，壺である。器高54cm，口径24.3cm，底径5cmを測る。胴部最大径は胴部中位よりやや上にあり，19.8cmを測る。そのやや上位に断面台形の凸帯が2本巡る。口縁部はほぼ真っすぐに外傾するが，口縁端部の内面が突出している。また口唇部には刻み目を0.4〜1.3cmおきに施している。頸部には断面三角形の凸帯を1条巡らす。調整は全面ほぼナデで仕上げ，色調は黄橙色を呈する。

ST04（Fig. 36，PL. 20）

調査区最北部の崖面の直前で検出した。掘り方は二段掘りで，上段は長径204cm，短径150cm，深さ約40cmの楕円形で，下段は略円形を呈し，径約120cmを測る。堀り方は甕棺にあわせてななめに掘られ，深さ114cmを測る。甕棺は甕と甕との組み合わせで，上甕が下甕を覆っている。一部破損しているもののほぼ完存する。埋置角度は51°である。主軸はN－18°－Eである。腰骨を中心にした人骨片が若干出土したが，遺存状態が悪かったためその後破損してしまった。

出土遺物（Fig. 37，PL. 22） 遺物は甕棺として使用した弥生土器2点のみである。

7は上甕で，器高79cm，口径64.5cm，底径14.6cmを測る。口縁部は急角度に外反し，口縁端部内面に幅約2.5cm，厚さ約0.7cmの粘土をぐるりと貼り付け，その上面をきれいに面取りしている。貼り付ける前の口縁端部外面と貼り付けた部分の外面に，0.5〜1.0cm間隔で刻み目を施している。胴中位のやや上に沈線を3本巡らす。同部最大径はその下ほぼ胴中位にあり，60.3cmを測る。また底部より5cmほど上には焼成後の穿孔が施される。調整は外面が指押さえの後ヘラナデ，内面はほぼ全面指押さえの後ナデ調整で，底部付近にはヘラナデの痕跡が明瞭に残っている。8は下甕で，器高66.5cm，口径57.8cm，底部径18.6cmを測る。口縁部は打ち欠いている。口縁部の形状は全体的に直立ぎみだが，端部がわずかに外反し，肥厚する。肥厚した部分に2本の沈線を巡らす。また口縁端部の内面には幅約2cmの範囲に7，8本を単位とするハケメを横方向に施し，各ハケメは4cmほどの長さである。胴部最大径はほぼ中位にあり，32.4cmを測る。そのやや上に沈線を3本施している。また底部の上約5cmに径約3cmの焼成後の穿孔が施されている。調整は外面がほぼ指押さえの後ヘラナデ，内面が指押さえの後ナデである。色調は外面が淡黄灰色で黒斑があり，内面は淡黄褐色を呈している。

木棺墓

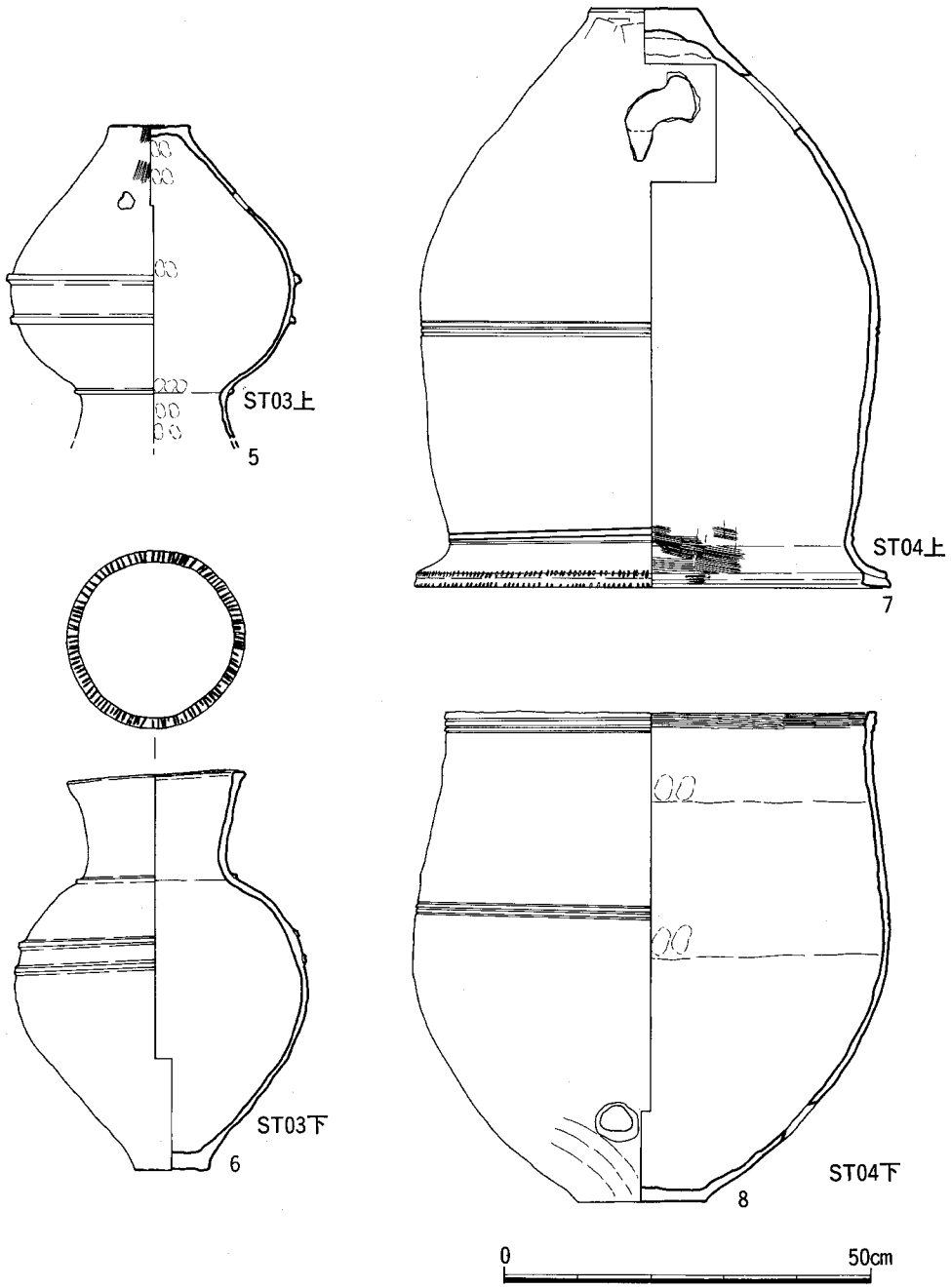


Fig.37　ST03・04出土遺物(1/10)

SR01（Fig. 38，PL. 20）

ST01北側で検出した。堀り方は二段掘りで，上段掘り方の平面形は不正な隅丸長方形で，長さ219cm，幅155cmを測る。二段目は深さ15～25cmの所からあり，平面形は隅丸長方形で長さ186cm，幅59cmをはかる。全体の深さ80cmを測る。壁は一段目はやや傾斜しているが，二段目は途中からほぼ垂直である。床面では木棺材の痕跡は確認できなかったものの，土層断面で南側小口と東側側辺で壁に沿って立ち上がる幅3～5cm，高さ約40cmほどの黒色土があったため，全体の状況より組み合わせ木棺の板材跡と判断した。この層以外は自然堆積の状態を示しているため，棺には木の蓋があったものと考えられる。方位はN－31°30′－Eを測る。

出土遺物（Fig. 38，PL. 21）　少量の弥生土器の破片や小石が出土しただけである。9は壺の胴部上位の破片である。破片の上端部で径24cmを測る。破片の中程に幅1mmの沈線が施されている。外面は荒れているため調整は不明であるが，ハケなどは確認できない。内面は指押さえの痕跡が残る。色調は灰黄色を呈する。

土坑

SK01（Fig. 39，PL. 20）

調査区東側，SR01東側で検出した。南側と西側でピットを切っている。平面形は長楕円形で長さ150cm，幅81cmを測る。北半分は三段に掘られ，最も深い部分で23cmを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物　出土遺物はない。

SK02（Fig. 39，PL. 21）

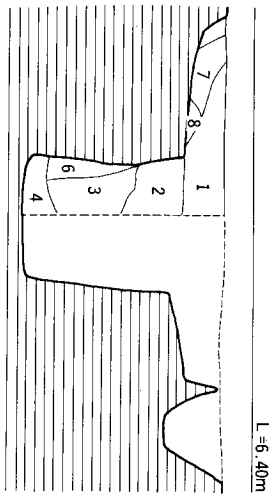
SR01西側で検出した。平面形は不正円形で，北西側を中心にピットに切られている。長径155cm，短径121cmを測る。壁は緩やかに落ち，深さ21cmを測る。床面には弥生土器が大きく2カ所に別れてあった。

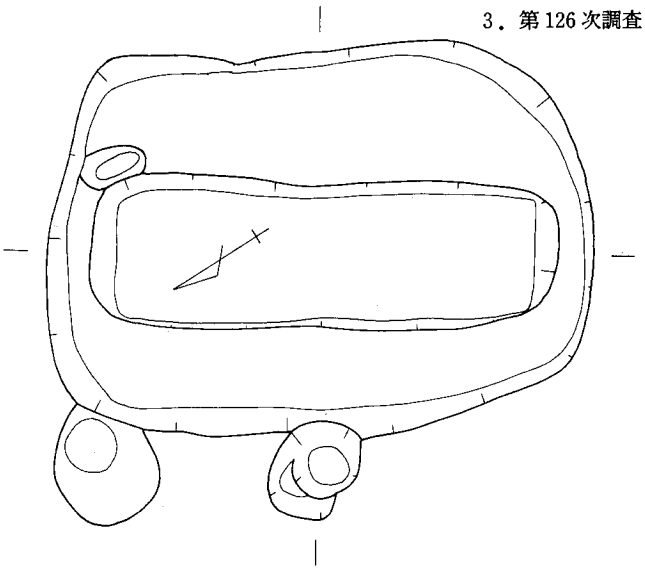
出土遺物（Fig. 40，PL. 21）　10は口径25cmを測る。断面形は逆L字状を呈し，口縁端部は丸みを帯びる。調整は不明。色調は淡い桃色である。11は胴部最大径36.1cm，底径7.4cmを測る。破片上部に断面略台形の凸帯を1条巡らす。表面の剝落や摩滅のため調整はわかりにくいが，外面はヘラによるナデ，内面は指押さえの後ナデと思われる。

SK03（Fig. 35，PL. 19）

ST03西側で検出しST03と重複するが，切り合いはわからなかった。同一遺構の可能性もある。全体の平面形は不整楕円形を呈すが，東側と北西側に壁の張りだし部分があり，2基の土坑の切り合いの可能性も考えられるが，現場では確認できなかった。長さ202cm，幅156cm，深さ30cmを測る。土坑内西側から土器片がややまとまって出土したが，いずれも床面から遊離している。

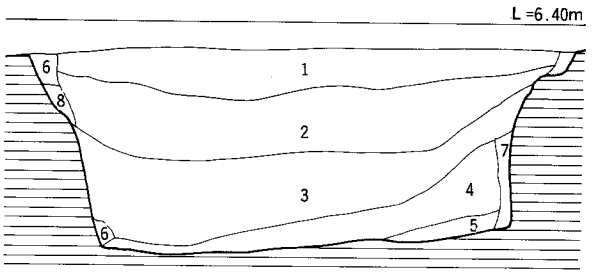
出土遺物（Fig. 40，PL. 21）　弥生土器が約50片出土したが，小片が多い。12は壺で，胴上

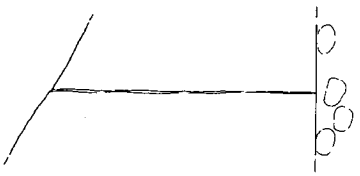




SR01土層名称

1．黒色粘質土(粒子が細く、軟質でパサパサする)
2．黒褐色土(黄褐色ロームブロックを少量含む、1より明るく、粘性がある)
3．黒色土(黄褐色ロームブロックを2より多く含む、軟質で、粘性は弱い)
4．暗褐色土で明黄褐色ロームブロックを少量含む(軟質でしまらない)
5．暗褐色土
6．明黄褐色ロームブロック
7．黄褐色ロームと暗褐色土の混合
8．黒色土





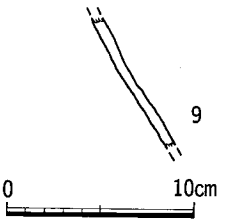


Fig.38　SR01と出土遺物(1/30・1/4)

Tab. 7　木棺墓・土坑一覧表

	平面形	断面形	長さ	幅	深さ	方　位	出土遺物	時　代	備　　考
SR01	隅丸長方形	梯　　形	219	155	80	N-31°30′-E	弥生前期土器片	弥生前期	二段掘り,棺材痕跡あり
SK01	長 楕 円 形	(三 段)	150	81	23	N-42°-W	な　し	不　明	
SK02	不 正 円 形	逆 台 形	155	121	21	−	弥生後期土器片	弥生時代	
SK03	不正楕円形	逆 台 形	202	156	30	−	弥生中期土器片	弥生時代	
SK04	隅丸長方形	略逆台形	136	76	23	N-31°-E	弥生土器片	弥生時代	土壙墓の可能性あり

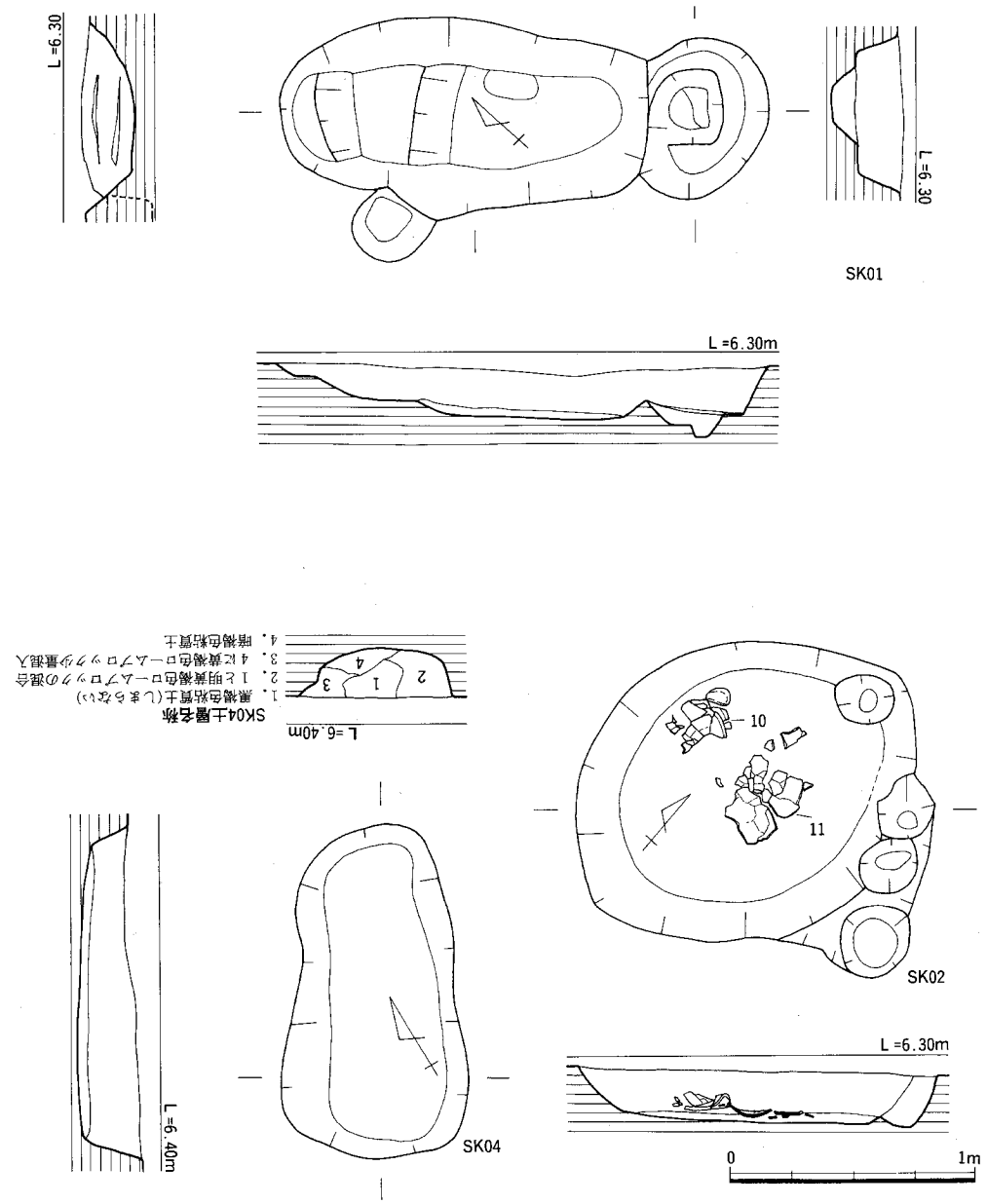


Fig.39　SK01・02・04(1/30)

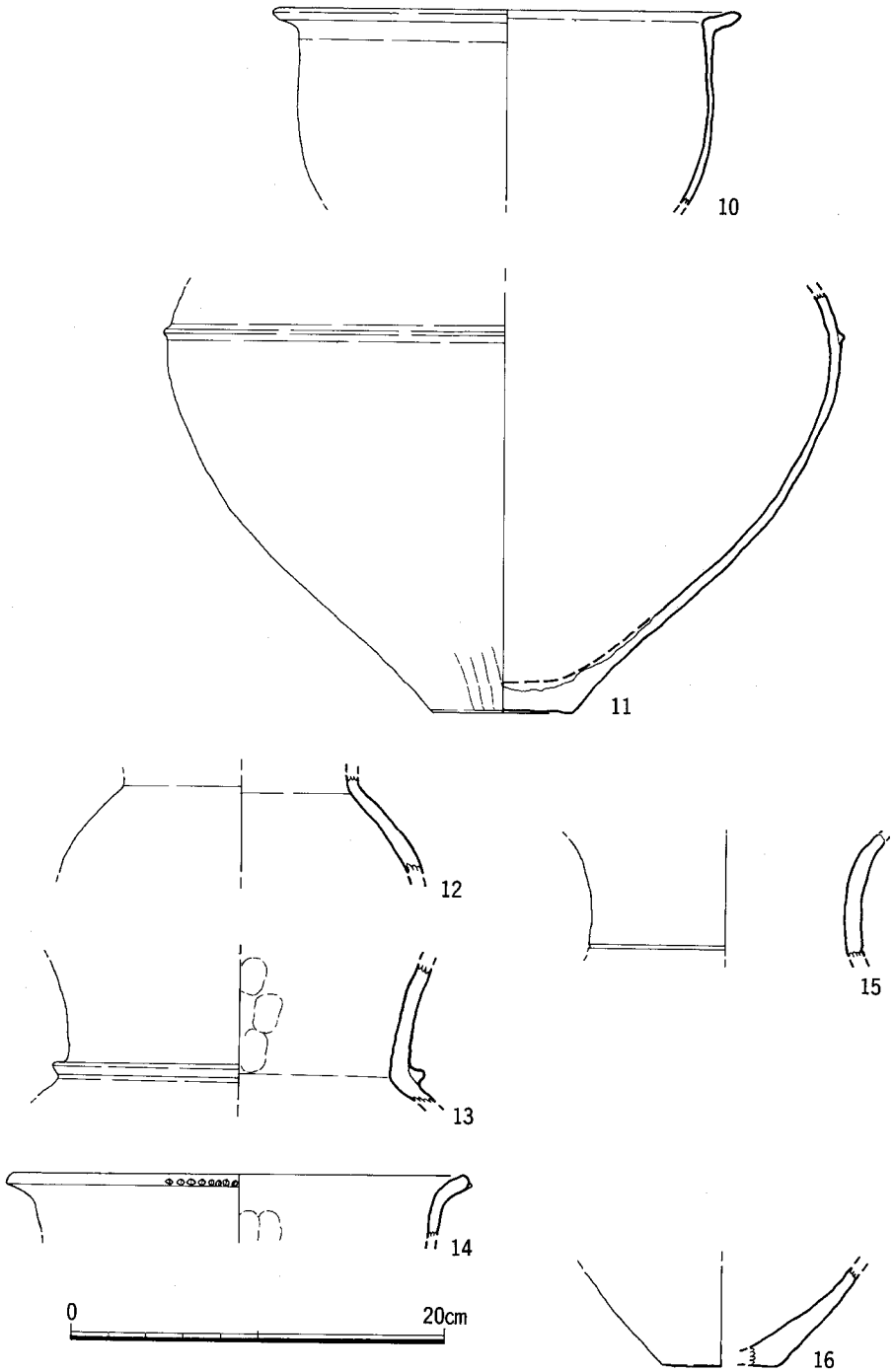


Fig.40　SK02・03・SX01出土遺物(1/4)

部の破片で頸部径12.7cmを測る。外面の調整は不明であるが，内面は指押さえの後ナデである。色調は桃色に近い。13は壺の頸部付近の破片で，頸部に断面略三角形の凸帯を1条巡らす。頸部径18.2cmを測る。外面ナデ，内面に指押さえ調整を施す。

SK04（Fig. 39，PL. 21）

SR01のすぐ南西側で検出し，SR01とほぼ同一の主軸をとる。平面形は中程がやや凹んだ隅丸長方形に近い。長さ136cm，幅76cmを測る。断面形は逆台形に近く，深さ23cmを測る。土層断面の状況では自然堆積は認められず，出土遺物が極端に少ないことからも，土壙墓の可能性が考えられる。

出土遺物　弥生土器の細片が2片だけである。

その他の遺構

SX01

調査区北端部近くで検出した。遺構の北側を崖の落ち込みで切られている。長さ，幅ともに明確な大きさは不明で，深さ115cmを測る。南側の壁面下部をさらに南側に35cm程掘り広げているようだが，土層の状態からこの部分は上から掘り返されていると考えられる。甕棺の抜き跡とも考えたが，明確ではない。

出土遺物（Fig. 40，PL. 21）　弥生土器約20片の他に古墳時代土師器の把手1片，中世の土師器皿4片が出土した。いずれも小片である。古墳時代や中世の遺物が前述の掘り返しに伴うものかは明確ではない。14は弥生土器の甕の口縁部片で，口径24.8cmを測る。口縁端部近くで肥厚，外反する。口唇部はほぼ平坦に作り，そこに4～6cmおきに刻み目を施している。調整はほぼ全面ナデであるが，内面に一部指押さえの跡が残る。色調は灰橙色を呈する。15・16は壺である。15は頸部近くの破片で，頸部径14.6cmを測る。破片の最下部に沈線を1本施している。16は底部の破片で底径6.2cmを測る。調整は不明で，色調は淡灰橙色を呈する。

3）小　結

検出した遺構の中心は弥生時代の墓地であるが、まず時期についての検討を加える。

ST01と02は近い形態を呈する。上甕は如意状に近い逆L字口縁で、01は2条の刻目を施している。胴中位やや上に三角凸帯を1条施す。下甕は内面に強く張り出すT字口縁で口縁上面は外傾する。胴中位付近に三角凸帯を1条巡らしている。以上の点から下甕は橋口編年[註(1)]のKII$_b$式に近い。しかし上甕は下甕を寸づまりした形ではあるがやや丸味をもつこと、口縁部の形態、特に01は金海式の特徴である2条の刻目をもつことからKII$_a$式に分類されると考えられるが、ともに中期前葉に位置づけられ、隣接する形式ではある。

ST03は壷形土器で上下ほぼ似た形態である。口縁部はほぼ直線的に外傾し、丸味を帯びた胴部の上位に断面台形の凸帯を2条と頸部に三角凸帯を1条施す。口縁部がT字形にならないも

のの有田第3次調査2号井戸出土土器に近く、中期後葉に比定できる。

ST04は下甕が口縁部打ち欠きだが、上下ともに金海式に属する。従来金海式は前期末に編年されていたが、吉武高木遺跡[註(2)]では金海式に城ノ越式土器が副葬され、同遺跡K117では下甕が口縁打ち欠きで呑口式という同形態を呈している。ここでは前期末～中期初頭としておく。

SR01では前期後半の土器片が出土している。年代を示す資料はこれだけだが、SR01と近い形態の金隈遺跡[註(3)]では概ね前期後半の範ちゅうに入ると考えられ、SR01も前期後半と考えて大過ないだろう。ST04との前後関係を示す資料はない。概して木棺墓が古いと言われるが、当遺跡でもあてはまるか。

ST01と02については、上甕を見ると刻目の存在や底部の形態は01が古い様相を示す。下甕は凸帯がやや上にある点や、口縁部が外にあまり突出しない様相は01が古いが、底部を大きく作って垂直に立ち上がらない形態は02が古く感じ、前後関係は明瞭でない。一方遺構の状況をみると掘り方の主軸と平行にしかも小口の中央近くに甕棺を埋置している02に対し、01は小口の端の01とは逆にしかも主軸を掘り方とずらして02の甕棺をさけるように埋置しているが、これが意図的ならば、極めて近い期間内(同日埋葬も含めて)にST02→01と埋葬した可能性が強い。この場合熟年男性と同女性の組み合わせは夫婦の可能性が考えられよう。いずれにせよ金海式土器を含めた中期前半の甕棺編年の再検討をする必要を感じる。

さて当遺跡の西側と、ST01・02の軸線上15m南西側、さらに当調査区の南東側はすでに調査が行なわれており、弥生時代の墓の検出はない。従ってこの墓地の構成基数は少ないと考えられる。ST01・02の掘り方が大きく丁寧で、ST04上段掘り方も大きく、海を望む台地端にあることを考えると、副葬品はなくても首長墓クラスの可能性が高い。有田遺跡では台地南端近くで細形銅戈を副葬した金海式土器が発見されているのみで、他に首長墓らしき墓の検出例はない。弥生初頭に大環溝集落を作ったムラは板付II式期になると有田地区で2つの環溝集落に分かれ、さらに小田部地区の第121次調査区で貯蔵穴が作られるなど、いくつかの小さなムラに分かれた。その後は第3次調査の中期後半の住居址群まで判然とせず、今回検出した墓地の時期の集落もわからない。残された副葬品がないことから台地北側の一分村での首長墓と考えられる。青銅器の鋳型の存在や当遺跡の立地から、当遺跡が弥生時代の拠点集落であることは否めないが、その有様はいくつかの小さなムラの集合で、前期末以降は当遺跡から見える吉武の地の支配下にあったものと思われる。(米倉)

註(1)　橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI　1979

註(2)　福岡市教育委員会『吉武高木遺跡』1986

註(3)　福岡市教育委員会『金隈遺跡』1985

４．第127次調査（調査番号8729）

１）調査地区の地形と概要

調査地は早良区小田部１丁目418-1に所在する。有田地区から伸びる台地は，小田部地区に入ると八ツ手状に広がるが，調査地はその内最も北まで伸びる台地上にあり，北側から湾入する谷部のつけね付近に位置するものと考えられる。調査地内は西側の道路面より一段高く，標高7.3～7.6m を測る。調査地東側約50m に将軍神社があり，敷地内に有田古墳群２号墳が築造されてるが，ほとんどその面影をとどめていない。

周辺の調査例はほとんどなく，当地点の100m 以上西側で第135次調査，同じく南側で第34次調査などが行われ，古墳時代後期の住居跡や古墳時代から中世の掘立柱建物などが検出されている。

発掘調査は専用住宅建替のため，昭和62年９月17日～10月９日まで行った。調査地が狭く，排土処理のため，調査は西側と東側に分けて行った。遺構面は調査区北半が橙色ロームで，南半が浅黄色ロームで，南西に向かって傾斜している。もっとも高いところで標高約7.4m，低い所で6.4m を測る。層序は大きく５層に分かれ，１層が客土で約40cm，２層が暗赤褐色粘質土で約30cm，３層が暗赤褐色粘質土で５cm，４層が３層よりやや黒い層で，30cm，５層がローム層

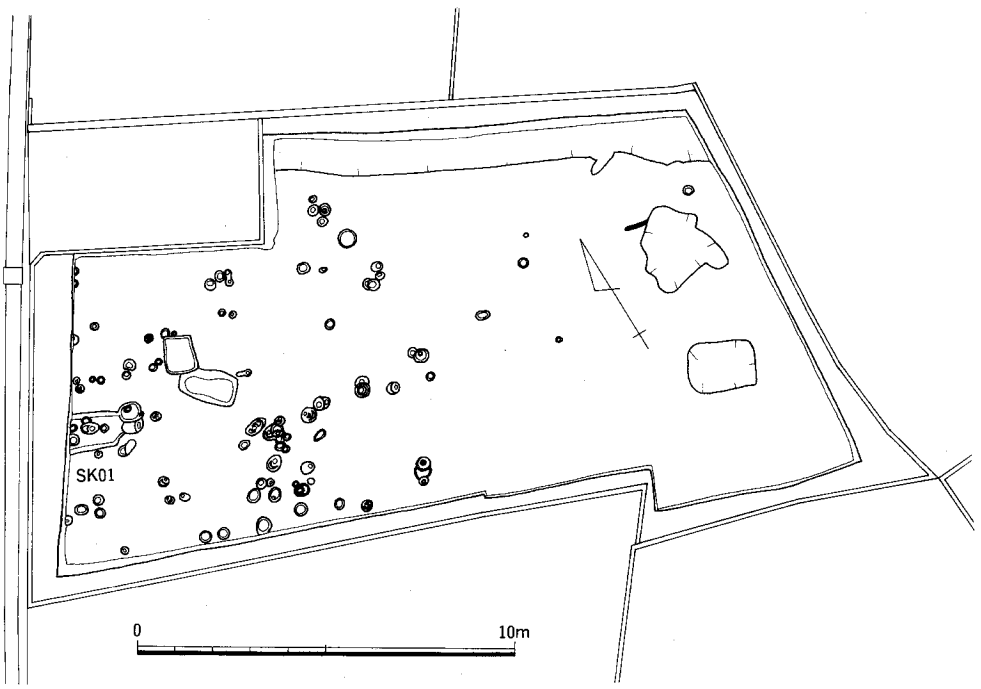


Fig.41　第127次調査区遺構配置図(1/200)

である。遺構面を除いてすべて近世以降のものである。遺構は，削平や攪乱のため，ピットしか遺存していなかった。調査面積は180m²である。

2）遺構と遺物

検出した遺構は攪乱を除けば，土坑1基とピットのみである。

土坑(SK)

SK01

調査区西壁際で検出した。略長方形のプランで，調査区外に続く。深さ5～8cmときわめて浅く，台地端に近いことから考えれば，谷に向かう溝である可能性がある。覆土は黒褐色粘質土で，弥生土器が数点出土した。

出土遺物（Fig. 42，PL. ）　1・2は弥生土器である。1は甕で，底部の小片である。復元底径6.4cmを測る。底部と胴部の境は直角に近い角度で立ち上がる。調整は摩滅のため不明である。色調は淡い桃色を呈する。2は甕の破片で，断面三角形の凸帯1条を施している。調整は不明で，色調は黄橙色を呈する。

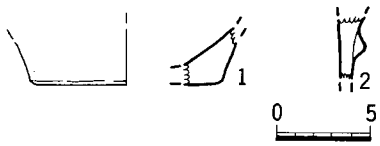


Fig.42　SK01出土遺物(1/4)

3）小　結

今回調査した地点は台地の中央であるにもかかわらず，遺構はピットも含めてあまり検出されなかった。これは当初から遺構が少ないと考えるよりは，調査地内が道路面より高く，攪乱も多いことから，後世の削平のため遺構が破壊されたと考えたほうがよさそうである。また推定位置では当地点は谷部のすぐ上に位置するが，今回の調査では谷部に向かう自然の傾斜は確認できたが，谷部までにはまだ若干の距離があると考えられ，谷部の確認は今後の調査に期待したい。(米倉)

５．第128次調査（調査番号8730）

１）調査地区の地形と概要

調査地は早良区南庄３丁目116に所在する。八ツ手状に伸びる小田部地区の台地の内もっとも北まで伸びる台地の中央部近くに位置する。標高約７ｍを測る。周辺の調査例は，当調査区の北側隣接地で第76次調査が行われており，古墳時代の住居跡が３棟，奈良・古墳時代の掘立柱建物などが検出されているが，削平のため遺存状況が悪かった。また南側の第94次調査では掘立柱建物を検出しているが，やはり削平が著しかった。

調査は共同住宅建設のため，昭和62年９月28日～10月26日まで行なった。基本層序は，１層が客土で約１ｍ，２層が旧耕作土で20cm，３層が暗褐色土で５～10cm，４層が橙色ロームで遺構面である。調査区中央では３層がなく，かわりに淡黒色粘質土が10～20cmの厚さである。また調査区西側では１，２層しかない。２層以下は東へ緩傾斜しており，遺構面の高さは調査区西端で約6.1m，東端で約5.6ｍを測る。検出した遺構は古墳時代後期竪穴住居１軒，柵列２条，土坑２基などである。調査面積は213m²である。

２）遺構と遺物

住居跡

SC01（Fig. 44，PL. 25）

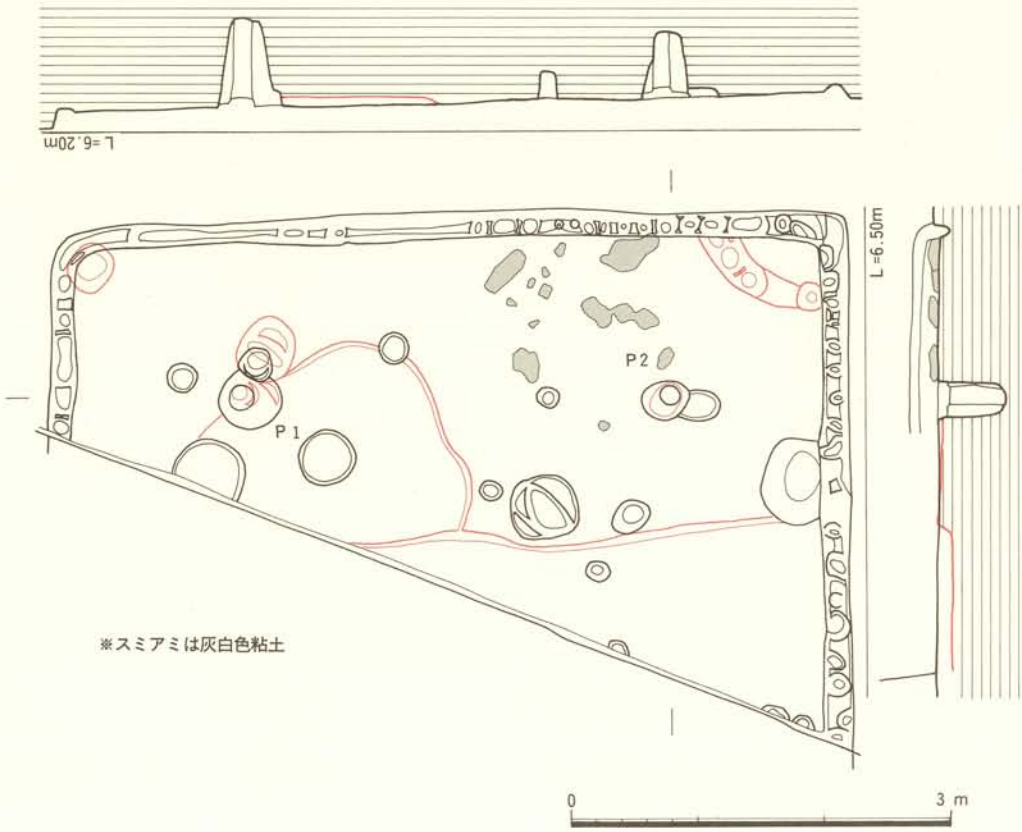
調査区南壁にかかって全体の約半分を検出した。遺存状態は良くなく，壁は高い所で10cmほどしか残っていない。プランは方形と考えられ，北壁の長さは6.33ｍと長い。壁沿いに幅約20cm，深さ３～７cmの溝を巡らす。壁溝内には浅い無数の小ピットが掘られている。主柱穴は４本と考えられ，その内２本が検出できた。直径38～49cm，深さ58～70cmのしっかりした柱穴である。住居跡中央近くより南側は竪穴掘り下げの際７cmほど深く掘り，その後埋め戻したもので，いわゆる張り床構造である。北壁近くの中央よりやや東よりのところで，白色粘土塊や焼土が若干検出された。かまどの残骸と思われる。

出土遺物（Fig. 46，PL. 26）　住居跡内からは弥生土器がもっとも多く出土したが，ほとんどが小片である。その外に古墳時代の須恵器・土師器片等が出土した。１は須恵器の坏で，口縁部先端を欠失する。受け部は丸みを帯び，受け部の直径12.5cmを測る。器高は浅い。体部下部外面は回転ヨコナデ，同上部はヨコナデ，内面はヨコナデ調整を施している。

柵列

調査区中央付近から南北方向に平行に伸びる柵列を２条検出した。この延長線は隣接する第76次調査区へ伸びるが，当調査区の検出部分も削平のためかなり浅い上に，76次調査区もかなり削平されているためか，続きは明確にはわからない。

Fig.43　第128次調査区遺構配置図(1/200)



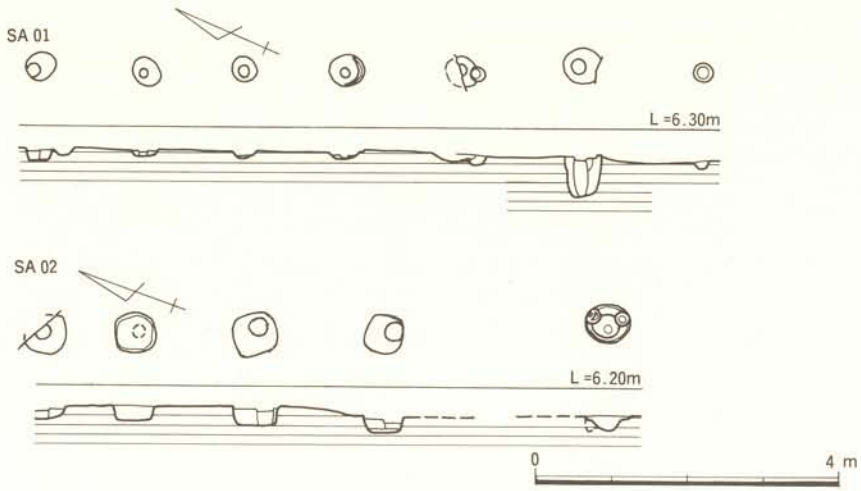


Fig.44 SC01・SA01・02(1/60・1/100)

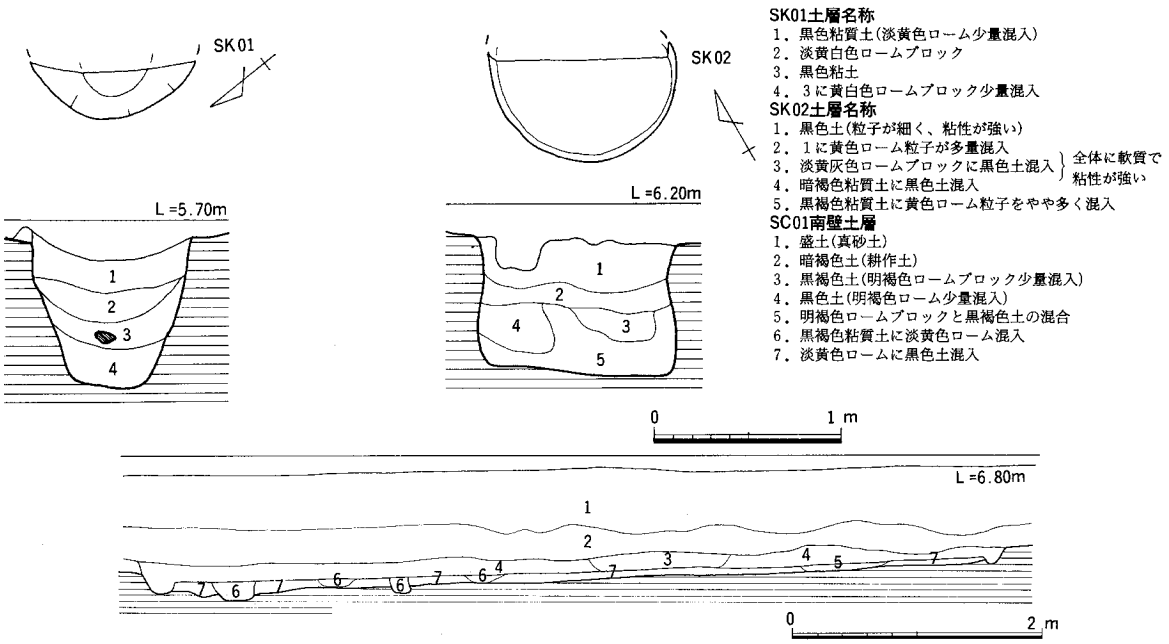


Fig.45　SK01・02・SC01南壁土層図(1/40・1/60)

SA01（Fig. 44，PL. 25）

2条の柵列の内，西側の柵列である。6間分検出した。柱穴間は132～162cmを測る。柱穴の直径24～52cm，深さ10～59cmで1基が深いほかはきわめて浅い。柱痕跡の直径は10～19cmを測る。方位はN－22°－Wである。

出土遺物　弥生土器・土師器の細片が少量出土したが，実測不能である。

SA02（Fig. 44）

東側の柵列で，調査区北壁からSC01付近まで検出したが，南側の延長は明確ではない。5間分検出したが，北から5つめの柱穴はSC01の北東コーナーと重なっていたため判然としない。柱穴間は120～165cmを測る。柱穴の直径50～60cm，深さ19～26cm，柱痕跡の直径は17～24cmを測る。方位はN－20°30′－Wである。

出土遺物　実測に適しない土器の細片が約30片出土したが，多くは弥生土器と思われる。

土坑

SK01（Fig. 45，PL. 25）

調査区東壁で検出した。確認できたのは全体の1/3程で，残りは調査区外に伸びる。平面形が円形とすれば，推定直径は90cm強を測る。断面形は台形に近く，深さ77cmを測る。埋土はレンズ状に堆積する自然堆積である。

出土遺物　出土遺物はなかった。

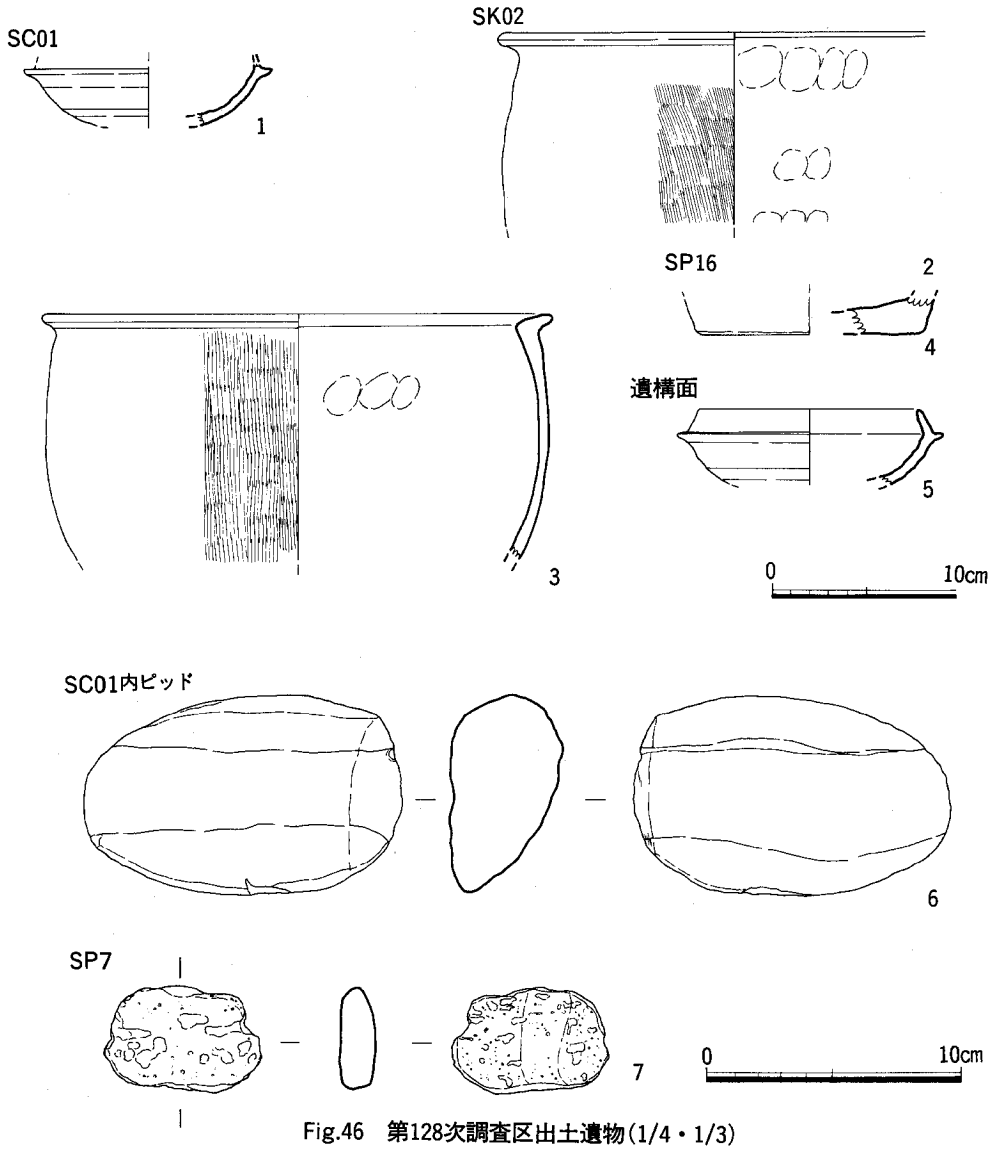


Fig.46 第128次調査区出土遺物(1/4・1/3)

SK02 (Fig. 45, PL. 25)

調査区北壁西側で検出した。確認し得たのは全体の約半分である。平面形は円形と思われ，直径98cmを測る。床面近くで袋状になり，最大径1.04mを測る。埋土は3，4層など大きなブロック状の土層があり，他の土層の状態からも自然堆積とは思われない。

出土遺物 (Fig. 46, PL. 26) 弥生土器が3点出土した。2は甕で，口径27cmを測る。口縁部の断面形はくの字状を呈し，口縁の折り返し部分が厚い割りには口唇部近くは薄い。胴部は

丸みを帯びており，やや背の低い甕になりそうである。外面は縦方向のハケメ，内面は指押さえの後ヨコナデ調整を施す。3も甕で，口径25cmを測る。口縁部の断面形は逆L字状を呈する。口縁部上面はほぼ水平で，器壁が厚い。胴部は直線的で背が高いと思われる。外面は斜方向のハケメ，内面はよくわからないが，指押さえ痕が残っている。

その他の遺構

調査区東側北壁近くで，不定形の遺構を2基検出し，SX01・02の番号をつけたが，ともに浅く人工的な遺構とは認めがたい。ともに弥生土器が2，3点出土した。

ピット出土遺物（Fig. 46，PL. 26）

6は石錘と思われ，長さ12.7cm，幅6.9cm，厚さ4.35cmを測る。重さは690gを測る。両端部と両面にひもずれらしき痕跡が見受けられる。左面はほぼフラットである。石材は堆積岩系の石材である。7は網用の石錘と考えられ，長さ6.2cm，幅4.2cm，厚さ1.5cm，重さ44gを測る。両側辺に抉りが施されている。火成岩系の石材を用いている。2は弥生土器の底部である。

遺構面出土遺物（Fig. 46，PL. 26）

5は須恵器の坏身で，口径14.0cmを測る。口縁部は直線的に内傾し，受け部の張り出しはほぼ水平である。調整は全面ロクロによるヨコナデである。

3）小　結

当調査区は有田・小田部台地の最北部の台地上に位置するが，この台地部では弥生時代以降の各期の遺構・遺物が検出されている。またこの地点のすぐ南側では古墳も築造されている。しかし後世の削平によってその多くが失われており，当調査区でももっとも多く出土した弥生土器の時期の遺構は土坑だけであった。時期的には弥生時代後期前半と考えられるが，遺構の用途は判然としない。

住居跡も残りが悪かった。構造的には方形のプランで，主柱穴が4本で，カマドを持つものと考えられる。出土した須恵器より6世紀中ごろの時期が与えられよう。

2条の柵列に関してはほとんど手掛かりが無い。出土遺物の多くは弥生土器で，若干の土師器を含むがほとんど細片である。隣接の76次では検出されてなく，柵列の目的，構造等なにもわからない。ただ76次調査で古墳時代～奈良時代の掘立柱建物が検出されており，時期的にはこの時期の可能性が高いものと考えられる。(米倉)

６．第129次調査（調査番号8735）

１）調査地区の地形と概要

調査区は早良区小田部２丁目38に所在し，北へ八手状に分岐して拡がる有田・小田部台地の一番東側台地の西側斜面上に立地し，標高は遺構面で６ｍ前後を測る。現況は駐車場である。昭和62年度に調査区に店舗建設の申請が出され，試掘調査を行ない遺構を確認した。申請者と協議を行ない，費用を一部申請者が負担する事で，調査を実施した。発掘調査は昭和62年10月27日―11月26日迄行ない，調査面積は386㎡である。

調査区のある台地は調査例が少なく，南側50ｍ程離れた第13次地点１ヶ所しかなく，遺跡の性格が最もわかっていない地域である。今回の調査は重機による厚さ15cmの舗装除去から始まり，その下５～20cmの盛土及び表土層下の黄白～灰白色粘質シルト面で遺構を確認した。調査区の北西側は浅い谷部で，水田面であったが，区画整理時に台地を削ったローム土で埋められていた。検出遺構は土坑３基とピット群。ピット群は特に南側に集中する部分があったが，建物としては捉えきれなかった。ピットの埋土は黒色・黒褐色・暗褐色の３種の大別出来る。出土遺物は少なく，コンテナ２箱である。ほとんどが谷部からの出土で，弥生時代から近代迄の各種の遺物を含む。

申請者の濱地安右衛門氏には調査にあたって物心両面に亘って多大な援助・協力を受けた。記して感謝の意を表します。

２）遺構と遺物

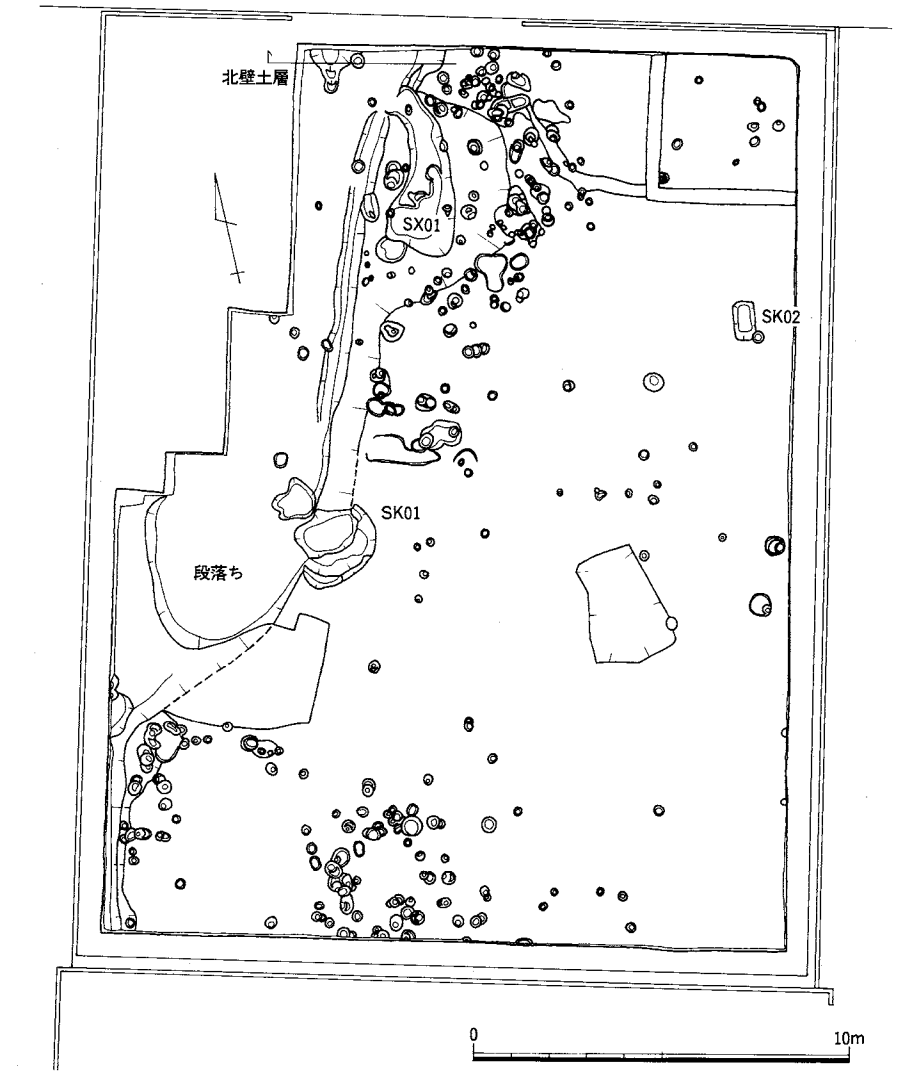
土坑

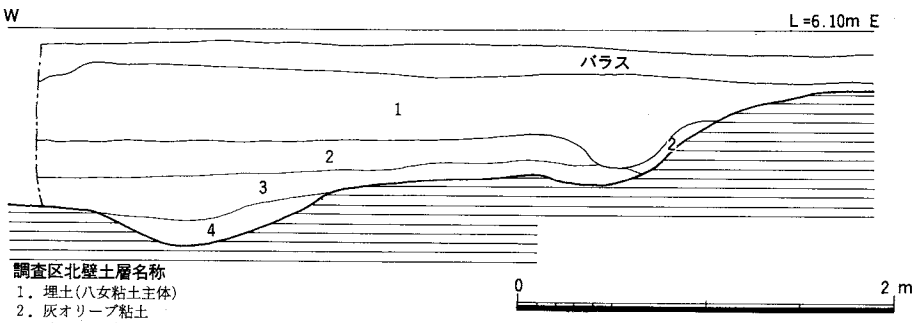
SK01（Fig. 48，PL. 28）

調査区中央西側台地縁辺で検出した平面形状が不定形を呈す土坑。規模は長さ2.5m，幅1.98m，最大深56cmを測る。底面は南側から２段のテラスを持って北側が一番深い底面となる。埋土は密の細かい黒褐色粘質土を主体とし，下層は黒色粘土となる。中央には上面から切込む黄灰白色粘質土の，ピット状の落込みがある。

出土遺物（Fig. 49，PL. 29）　弥生土器・土師器・須恵器の細片が24点出土した。

１は須恵器，器台の脚部片と思われる小片。各段には長方形透しが互違いに入り，その間には２重の櫛描波状文を施す。内外面は横ナデ。外面は自然釉がかかる。２は土師器の甕頸部1/6片。復元頸部径は18.0cmを測る。頸部のしまりは弱く，器表は磨滅し調整不明。胎土は石英・雲母の微粒子を多く含む。





調査区北壁土層名称

1．埋土(八女粘土主体)
2．灰オリーブ粘土
3．暗オリーブ粘土(鉄分が沈殿する)
4．黒褐色粘土(やや砂粒を含む)

Fig.47　第129次調査区遺構配置図と北壁土層(1/200・1/40)

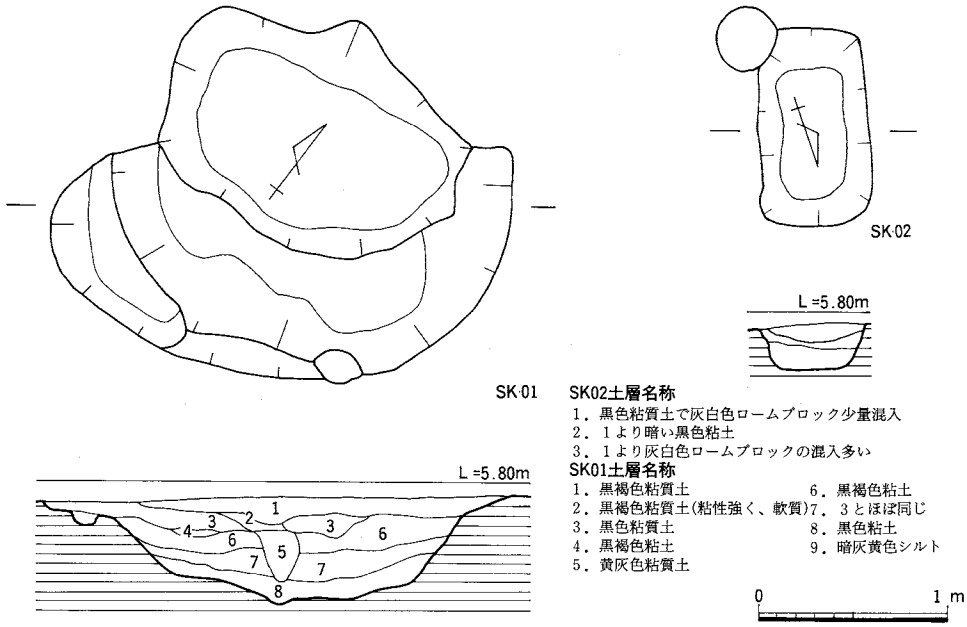


Fig.48 SK01・02(1/40)

SK02 (Fig. 48, PL. 28)

調査区東側で検出した主軸をN—18°—Eに取る平面形状が長方形の土坑。規模は長さ1.06m，幅0.58m，深さ25cmを測る。断面は逆台形で，埋土は上層が黒色粘質土，下層は灰白色ロームブロックを多く混入する。出土遺物はなかった。

不明遺構

SX01 (PL. 28)

調査区北側斜面上で検出した長さ4.7m，幅0.7～1.4m，深さ30cmを測る細長い溝状の土坑。断面は皿状で，壁の立上りは緩やか。埋土は上層が淡黒色粘質シルト，下層は褐灰色シルトで底面には鉄分が沈澱し，全体にかたくしまる。埋土はレンズ状に堆積しており，地山の窪みに自然に堆積したものと考える。

出土遺物 弥生土器の甕の破片9点，石核が1点出土。

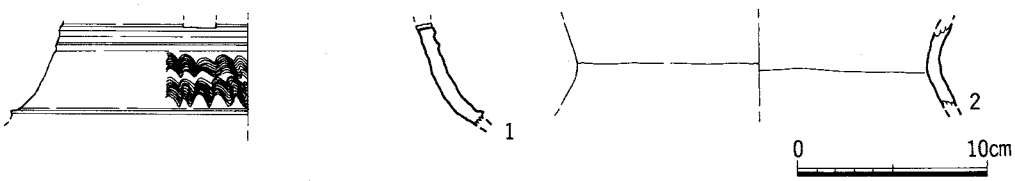


Fig.49 SK01出土遺物(1/4)

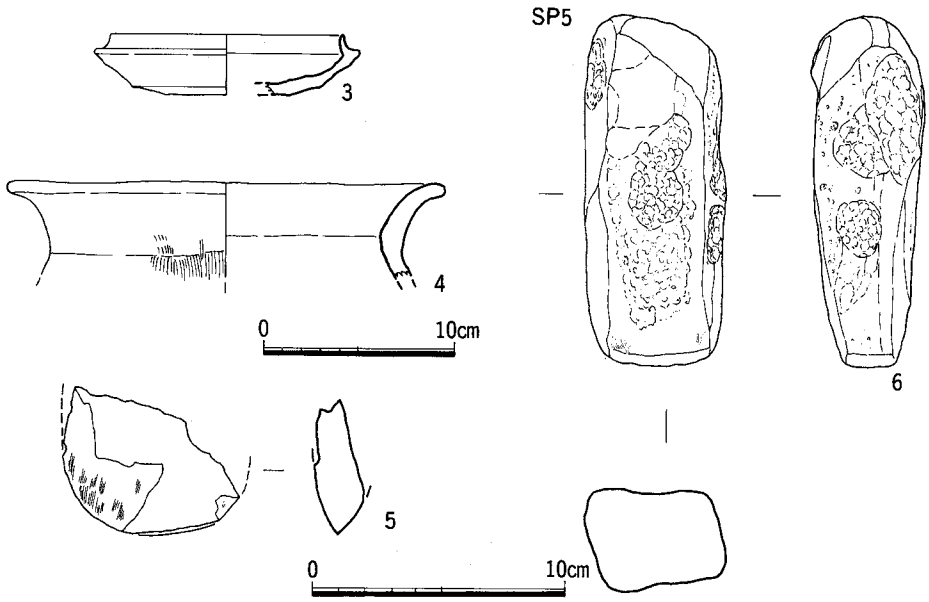


Fig.50　ピット・表土出土遺物(1/3・1/4)

ピット・表土出土遺物（Fig. 50，PL. 29）

3は須恵器の杯身1/8片。復元口径14.0cm，器高3.2cmを測る。底部は回転ヘラ削りで，その他はナデ。ロクロ回転は時計回り。色調は明灰色を呈す。4は土師器の甕口縁部1/8片。復元口径11.5cmを測る。頸部に粗いタテの刷毛目が残る。内面はヘラ削り。色調は桃黄色，胎土に石英・金雲母粒を多く含む。5は蛤刃の磨製石斧の刃部片。現存長5.7cm，刃部幅7.1cmを測る。全体に破損が著しい。火成岩質か。6は叩石で最大長13.7cm，最大幅5.7cm，厚さ4.3cm，重量540gを測る。全体に磨り調整である。上面中央には打撃による敲打痕が残る。玄武岩質か。

3）　小　結

遺構は台地の周縁にそって確認されたが，全体に残りは悪かった。出土遺物がないため遺構の時期は把握しがたいが，SK01は6世紀末～7世紀初頃のものであろうか。台地下の低地部などから弥生時代中期の甕棺の口縁部片を含む土器なども出土している事から，周辺には弥生時代の遺構が存在していた可能性がある。遺構の数は少なく，この地区での調査例が少ないのは，遺構の削平がひどい事もあろうが，元来遺構が少ない地域なのかもしれない。　（山崎）

７．第157次調査（調査番号8980）

１）調査地区の地形と概要

調査区は早良区小田部１丁目134―1，131―1に所在し，八手状に北へ分岐して広がる有田・小田部台地の一番西側台地の北端に立地する。現状は荒地であり，標高は６～７ｍを測る。調査区は昭和62年度に開発申請が提出され，これを受けて試掘調査を行なった。遺構が検出された為，協議を行ない，その結果本調査を実施するという事になった。発掘調査は平成２年３月14日～31日迄実施し，調査面積は128m²である。

調査区周辺の南側は，過去７ヶ所調査が実施され，弥生時代前期末から後期初頭の甕棺墓群や集落址，古墳時代全期に亘る集落址，律令期の大型建物群，中世末頃の居館址などが検出される。今回の調査は表土下20～30cmの褐色～明褐色ローム土上面で遺構を検出した。遺構面はかなり削平を受けており，検出した遺構は溝状遺構３条，土坑墓１基，土坑４基などで，ピットは少ない。出土遺物は少なく，弥生土器から近世の陶磁器がコンテナ３箱出土した。特記すべきものとして土壙墓SR02から鉄斧・鉄鎌が出土した。

２）遺構と遺物

土壙墓

SR02（Fig. 52，PL. 36）

南西隅で検出し，主軸をＮ―29°―Ｗに取るSK06を切る土坑。平面形状は隅丸長方形を呈し，規模は長さ1.80m，幅は北側で32cm，南側で47cm，深さ20cmを測る。溝の断面形は逆台形で，底面は南側の方が少し低くなる。埋土は黒色土。調査上のミスで鉄斧・鉄鎌の位置関係をはっきりしえなかったが，底面直上で出土した。

出土遺物（Fig. 54，PL. 38）　弥生時代後期頃の土器片が少量と頁岩製の片刀石斧１点，鉄斧・鉄鎌が各１点出土した。

３は磨製の片刃石斧で頁岩製。全長4.0cm，幅1.8cm，厚さ1.3cmを測る。全体にかなり磨り減っている。５・６は鉄器。５は斧で，全長6.8cm，刃部幅3.4cm，袋部長径2.9cm，袋部幅2.2cmを測る。鍛造で，全体に錆がひどく，袋部の折返しは不明である。袋部断面は楕円形を呈す。６は鎌で，２破片よりなり，折り返し部は不明。復元最大長9.1cm以上，刃部幅2.4～2.8cm，厚さ２mmを測る。全体に錆がひどい。

土坑

SK04（Fig. 52，PL. 36）

SK05を切る平面形状が円形の土坑。規模は長径0.79m，短径0.75m，深さ25cmを測る。断面形は逆台形を呈し，埋土は暗褐色土である。南東隅に長さ15cm位の玄武岩質の角礫があった。

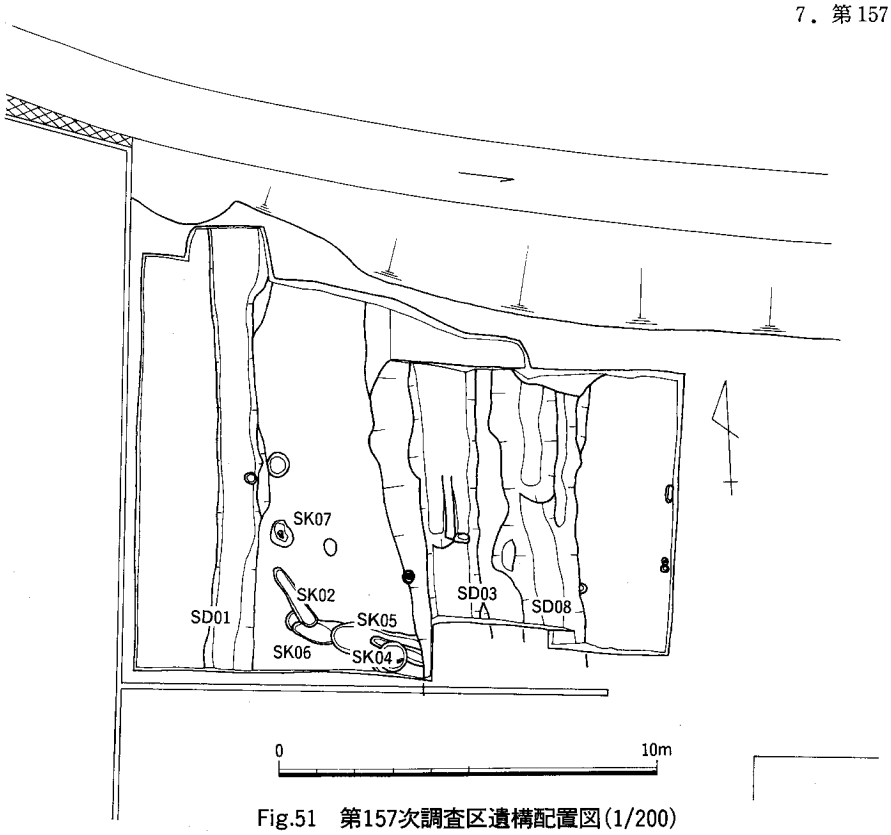


Fig.51　第157次調査区遺構配置図(1/200)

出土遺物　弥生時代の甕や古墳時代から中・近世にかけての青磁・染付小杯の細片が少量出土した。

SK05（PL. 36）

南側境界地で検出した平面形状が舌状の土坑。SD03に切られ，全様は不明。溝の可能性もある。確認長2.7m，最大幅1.1m，深さ11cmを測る。埋土は黒褐色土に暗褐色土を混入する。

出土遺物（Fig. 54）　弥生時代から古墳時代の土器片が出土した。量は少なく，いずれも細片。

1は須恵器杯蓋1/10片。復元口径16.0cmを測る。口縁部内面には嘴状のかえりが付く。内外面ナデ。色調は灰色で，胎土は小砂粒を少し含む。杯身の可能性もあり、その場合時期が古くなる。

SK06（Fig. 52，PL. 36）

SR02とSK05に切られる土坑。確認長1.6m以上，幅0.62m，深さ14cmを測る。全体に遺構の残りは良くない。埋土は黒褐色粘質土に橙色ロームを少量混入するが，北側の方はロームの混入が多い。

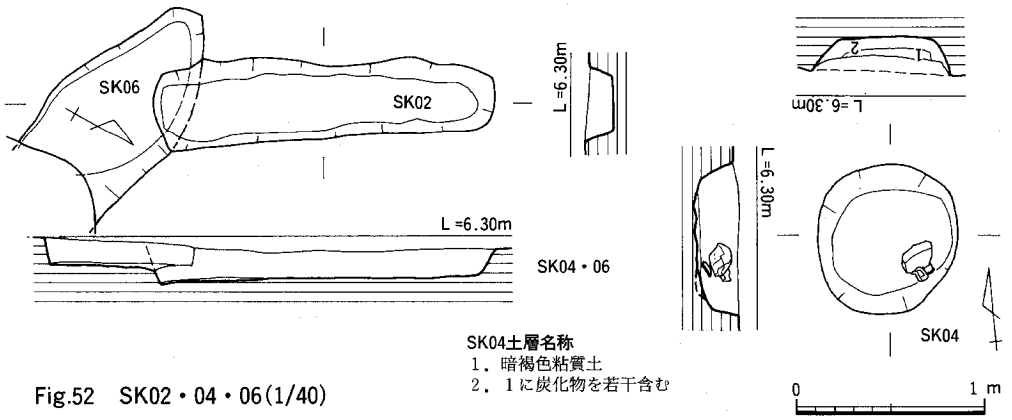


Fig.52　SK02・04・06(1/40)

出土遺物　弥生土器から中世の瓦質土器の細片が，　点出土した。SK06は弥生時代後期頃のSR02に切られており，瓦質土器の出土はその時期に似合わないものである。埋土状況から見ても，中世の瓦質土器片は混入品と考える。

SK07（Fig. 53，PL. 36）

西側中央で検出した平面形状が楕円形を呈する土坑。長さ0.71m，幅0.6m，深さ10cmと浅く皿状に窪む。その内に器台が1点出土した。埋土は明褐色ローム粘土ブロックである。器台は上半を削平されている。

出土遺物（Fig. 54，PL. 38）　2は器台の1/2片で，受部を欠失する。復元脚端径16.0cmを測る。頸部の締りは上位にある。外面はナナメの平行叩き，内面は指おさえ痕が残る。色調は橙色を呈し，胎土は粗砂粒を多く含む。

溝状遺構

南北方向に並行する溝を3条検出した。

SD01（Fig. 55，PL. 35・37）

調査区西側で検出した主軸を略北に取る溝で，わずかに東側に湾曲する。確認長11.8m，幅1.0～1.4m，深さ20cm前後を測る。かなり削平を受けており浅い。埋土は褐色土で，表土に近く，新しい印象を受ける。

出土遺物（Fig. 56，PL. 38）　弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器・中世以降の土師質土器・無釉陶器・青磁などでの細片が出土した。

7は陶器の片口口縁部1/6片。復元口径16.0cmを測る。口縁部は玉縁状を呈し，内外面に浅オリーブ黄色釉がかかる。8は土師器の皿1/8片。復元底径11.0cmを

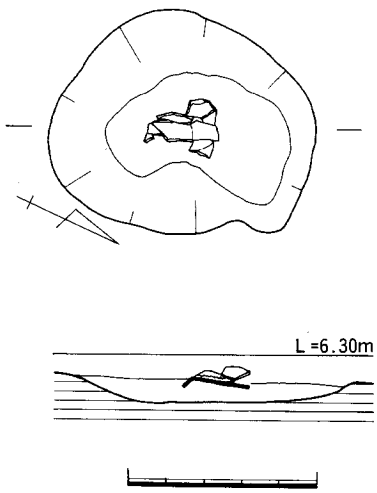


Fig.53　SK07(1/20)

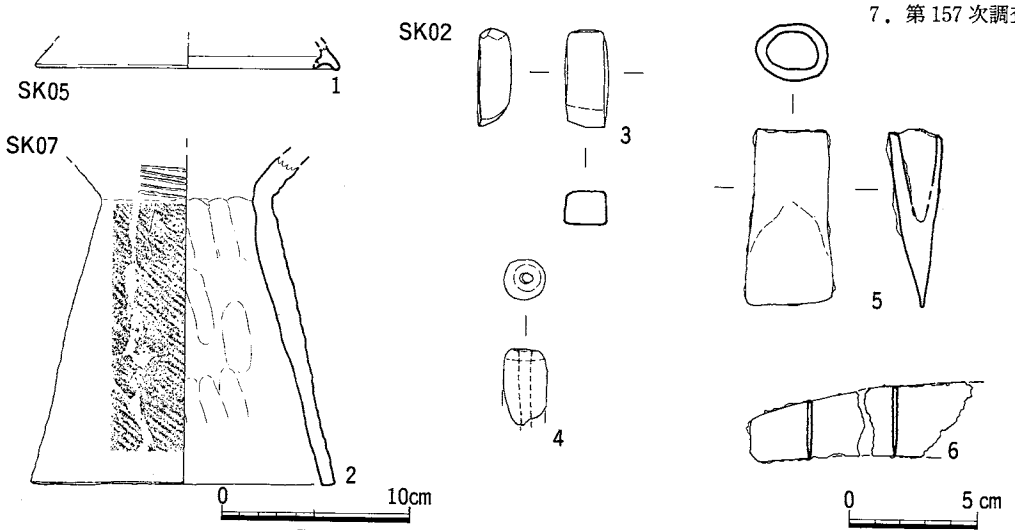


Fig.54　SK02・05・07・出土遺物(1/3・1/4)

測る。内外面ナデ調整。色調は浅黄橙色を呈し，胎土は1㎜内外の砂粒を含む。

SD03（Fig. 55，PL. 35・37）

調査区中央で検出した南北溝で，SD01から約3 m程離れる。確認長は8.2m，幅は1.6～2.0 m，深さ76～86cmを測る。断面形は逆台形を呈し，底面のレベルは北側が下っている。また底面には鉄分が沈着している。埋土は褐色土を主体とするが，南北両土層の断面観察によれば，底面より15cm上のレベルに達するV字溝が認められ，掘り直された状況を示す。掘り直されたV字溝の幅は0.84m，深さ36cmを測る。

出土遺物　弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器，古代から中世にかけての黒色土器・内黒土器・土師器の細片が少量出土した。

SD08（Fig. 55，PL. 35・37）

SD03から0.45～0.9m の間隔を持ち，確認長は6.8m，幅1.8～3.6m，深さ36～50cmを測る。壁面は攪乱によってかなり乱れ，また北端は攪乱土坑が切る。底面は溝中央部で1段下がり，北側へ深くなって行く。断面形は凸レンズ状から逆台形状へ変化する。埋土はSD03と同じように褐色土を主体とするが，下層は明褐色地山ロームブロックが多くなる。

出土遺物（Fig. 56，PL. 38）　弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器・中世の土師質土器・須恵器・白磁などが出土したが，細片が多く，量も少ない。

9は白磁碗口縁部1/8片。復元口径14.0cmを測る。口縁部はやや端反り，体外面に菱形状の隆起があるが，文様かどうかは不明。胎土に黒色の粒子が含まれる。10は土師器の皿？の口縁部1/6片。復元口径13.0cmを測る。体部の器壁は肉厚で，底部との境は少し内窪み，底部は薄くやや丸底。口唇部には浅い凹線が入る。色調は浅黄橙色，胎土は小砂粒をわずかに含むが，焼成は良い。11・12は瓦質土器。11は擂鉢の底部1/4片。復元口径32.5cm，復元器高10.0cmを測る。

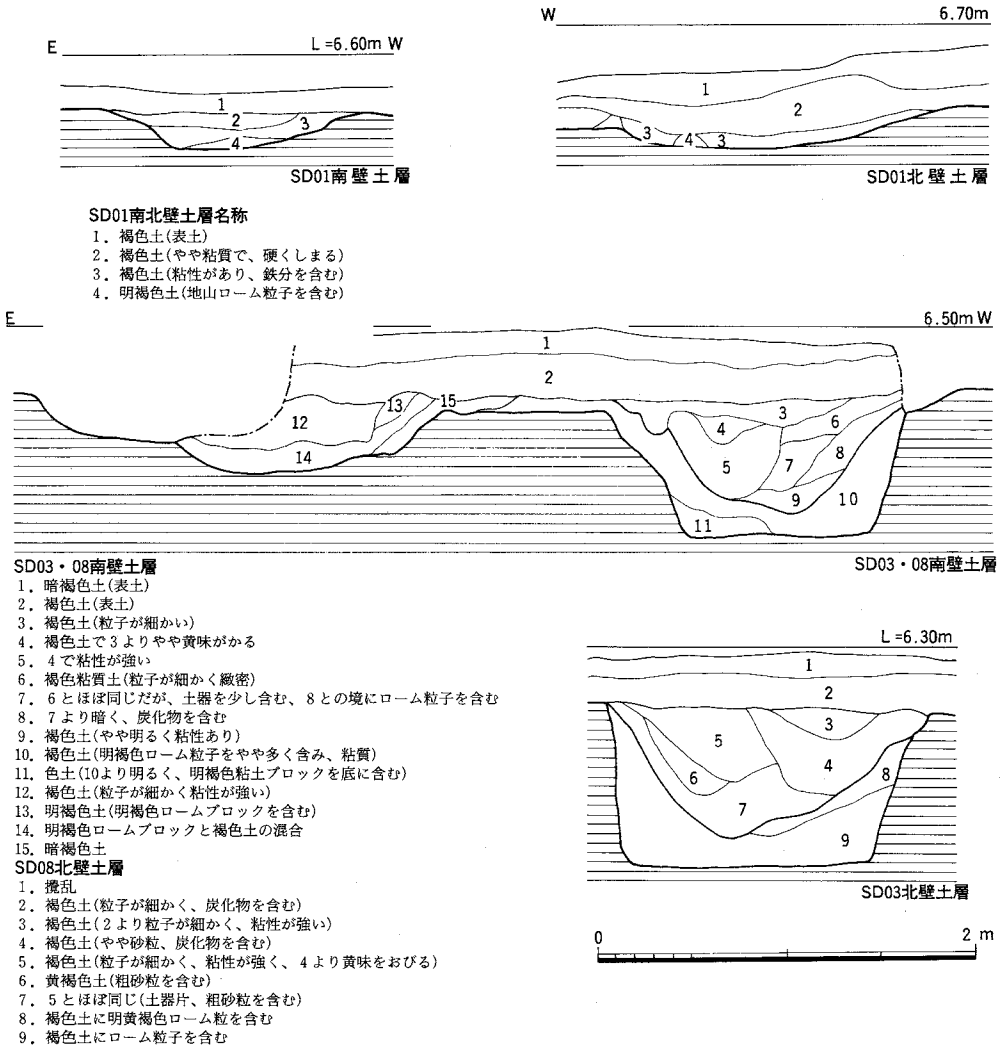


Fig.55　SD01・03・08土層(1/40)

全体に使用による磨滅がひどく，内面に７本単位のおろし目の条線がかすかに残る。色調は灰白色。胎土に１～５㎜の粗砂を多く含む。12は鍋の口縁部と底部片。復元口径45.0cmを測る大鍋。口縁直下三角の突帯が付く。外面は全体に指おさえ痕が明瞭に残り，内面はヨコ刷毛を施す。外面には煤が付着する。色調は浅黄橙色を呈し，胎土は１～４㎜の砂粒を多く含む。

遺構面出土遺物（Fig. 54，PL. 38）

４は管状土錘の破片で，現存長3.0cm，直径1.7cm，孔径0.5cmを測る。磨滅が著しい。色調は淡黄色を呈し，砂粒を多く含む。

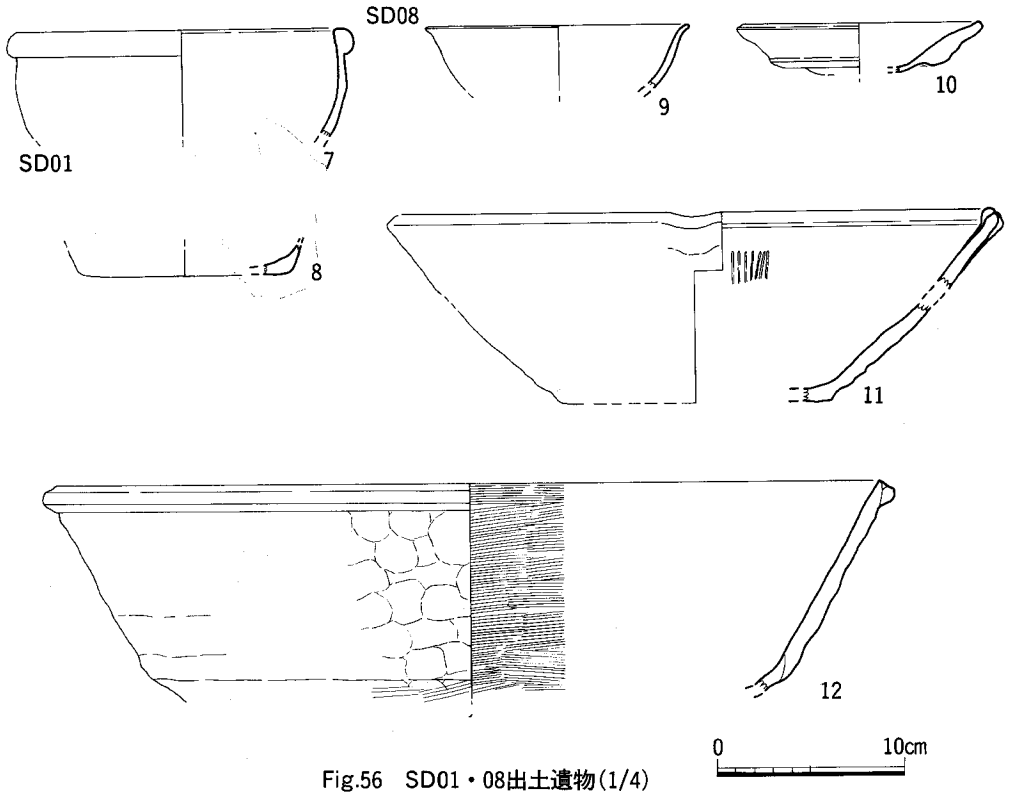


Fig.56　SD01・08出土遺物(1/4)

3）　小　結

以上調査の概要について述べたが，ここではそれらの若干のまとめを行なう。土壙墓SR02の時期についてであるが，ここから出土した鉄鎌は推定の長さが15cm以下の小型の鎌であり，普通この種の鎌は弥生時代終末期頃に出現する。(註1) また鉄斧については折り返しの両端が完全に密着し，完全な袋部を造り出している。この種の技法は大陸から伝来した技法であり，福岡県のスダレ遺跡や吉ヶ浦遺跡などで中期前半に逆上る例があるが，それらは舶載品ではないかとされている。(註2) この袋部を密着させる技術が定着するのが古墳時代前期末とされる。ここでは弥生時代後期頃の土器片が出土しているが，時期としては弥生時代後期終末から古墳時代前期の間としておく。またSD01・03・08はそれぞれ第86次の4号・5号溝，第64次の2号溝，第121次のSD01溝とつながるもので，特にSD03は方形の区画を形成しており，その規模は南北約58m，東西約50mを測る。現地形の有様からしてこの区割溝は台地の先端をL形に区切るもので北側にはなかったかもしれない。時期は16世紀前半から中頃である。

註1　松井和幸「鉄鎌」『弥生文化の研究5道具と技術Ⅰ』 1985

註2　橋口達也「ふたたび初期鉄製品をめぐる二，三の問題」日本製鉄史論集　1985

８．第162次調査（調査番号9034）

１）調査地区の地形と概要

調査区は早良区小田部１丁目108外に所在し，八手状に北へ分岐して広がる有田・小田部台地の東から２番目台地の，東側斜面上に立地する。現状は空地であり，標高は6.5m を測る。調査区は昭和59年より開発申請が出され，試掘調査を行ない，西側台地部分に遺構が確認されたので，要調査として対応していた。今回そこに共同住宅が建設される事になった。対応の手違いから工事直前に発見した為，緊急に建物部分を中心に調査を行なう事となった。発掘調査は平成２年９月10日～14日迄実施し，調査面積は132m²である。

調査区周辺は余り調査が行なわれておらず西側に3a 次・163次地点などがあり，また北東側に古墳の筑紫殿塚があったといわれている。遺構は表土の暗褐色土50cmの下で検出した。遺構面は灰白色粘土で，かなり削平を受けている。東側は谷部となり，その堆積は上下２層に分かれる。上層は地山ローム土による埋土で，区画整理時のもの。下層は下が黒褐色粘土，上が暗灰褐色粘土を中心としている。検出した遺構は土坑１基，溝３条，ピット群などである。ピットは散漫で，建物としてはまとめえなかった。出土遺物は少なく，コンテナ1/2箱である。

２）遺構と遺物

土坑

SK03（Fig. 58，PL. 39）

西壁沿いで検出した平面形状が舟底形を呈す土坑。長さ1.17m，幅0.63m，深さ47cmを測り，底面は西側に狭いテラスを持ち，また東側に幅55cm，深さ7cm程の楕円形状の落込みがあり，そこ迄の深さは54cmを測る。埋土は淡黒褐色粘質土に黄褐色ロームブロックを混入する。

出土遺物　土師器の細片が１点出土しているが，時期は比定出来ない。

溝状遺構

SD01（PL. 39）

南端で検出した北西方向に主軸を取る溝で，SD02と並行する。幅80cm，深さ30cmを測り，全体に浅い。溝の断面形は逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土に灰白色ロームブロックを少量混入するが，下方は混入が多い。

出土遺物（Fig. 59，PL. 39）　古墳時代から中世にかけての土師器類，須恵器，中国産青磁などが少量出土した。大半が細片で，図示出来るものを示す。

１は土師器の甕。口縁部がやや外反する器形の小片である。器壁は荒れ調整不明。色調は橙色を呈し，胎土は砂粒を多く含む。２はうち黒土器の椀口縁部細片。内面はヘラミガキ。外面はナデ。色調は外面が橙色，内面は黒色。胎土は精良。３は須恵器。口縁部片だが，器種は不

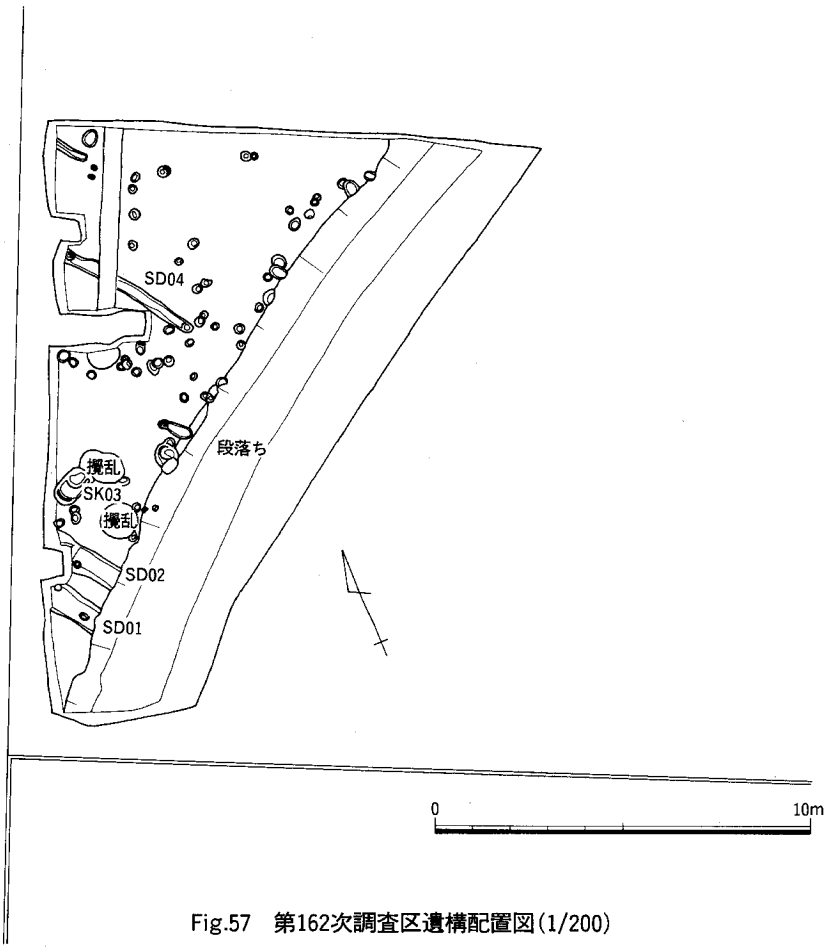


Fig.57　第162次調査区遺構配置図(1/200)

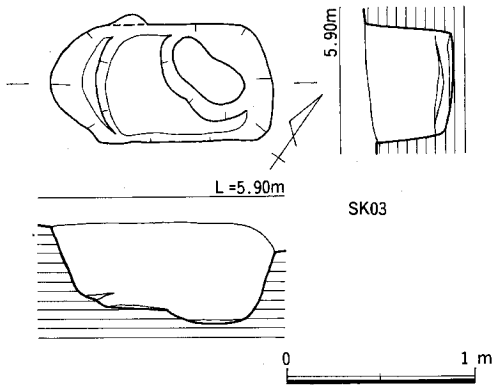
明。口縁直下に１条の突帯が巡る。脚台付の短頸壺であろうか。４は青磁椀1/16片で，復元口径16.2cmを測る。内面には櫛描状の白っぽい条線が入る。

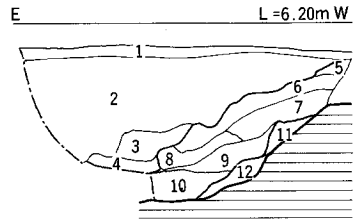
SD02（PL. 39）

SD01の北側に並行する溝で，幅75cm，深さ10cmを測る。SD01との間隔は40cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で，下層は灰白色ロームを混入する SD01とほぼ同形態の溝である。

出土遺物（Fig. 59，PL. 39）　弥生土器や古墳時代から中世にかけての土師器，褐釉磁器などの細片が23点出土した。

５・６は土師器皿。５は1/10片で，器高は推定で1.3cmを測る。磨滅が著しく，調整は不明。６は底部1/6片で，復元底径6.8cmを測る。内外面は磨滅し，調整は不明。色調は５がにぶい橙





南壁土層名称
1．暗褐色土(表土)
2．橙色ロームブロックに暗褐色・黒褐色粘質土混入(埋土)
3．橙色ロームブロックと暗灰褐色粘質土の混合
4．３よりロームブロックの混入が少い
5．やや暗い暗褐色土
6．暗灰褐色土
7．暗い灰褐色土
8．黒褐色粘質土
9．８より明るい黒褐色粘質土
10．黒褐色粘土(軟質)
11．灰褐色粘質土に黄白色ロームブロックをやや多く混入
12．暗灰色粘土に青灰色粘土をわずかに混入

Fig.58　SK03・調査区南壁土層(1/40)

色，６は橙色を呈し，胎土は６に金雲母を少量含む。

SD04（PL．39）

北側で検出した小溝で，主軸方向はSD01。02に近い。確認長は3.84m，幅30cm，深さ３～６cmを測る。埋土は黒褐色粘質土に地山ローム土を少量混入する。出土遺物はなかった。

3）　小　結

台地上で遺構を検出したが，全体に残りは不良であった。ピット群は遺構としてとらえられなかった。遺構の時期は出土遺物から中世の12～13世紀頃に位置ずけられよう。

東側低地部は区画整理時に埋立てられたものと思われるが，それ迄は堆積土から見て，水田と考えられる。崖面の削りはそれ程古くないが，区画整理以前のものである。この周辺は余り調査が行なわれていないが，今回の調査から台地落際縁辺には遺構の遺存する可能性がある。また古墳址も存在する可能性があるので，今後も注意を要する。

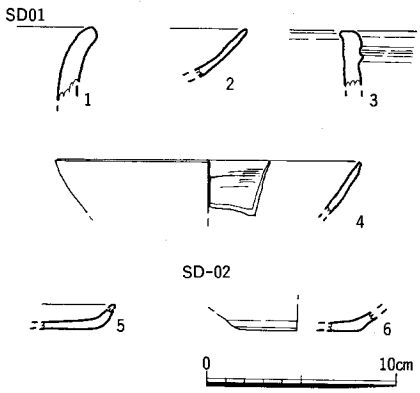


Fig.59　第162次調査区出土遺物(1/4)

―有田地区の調査―

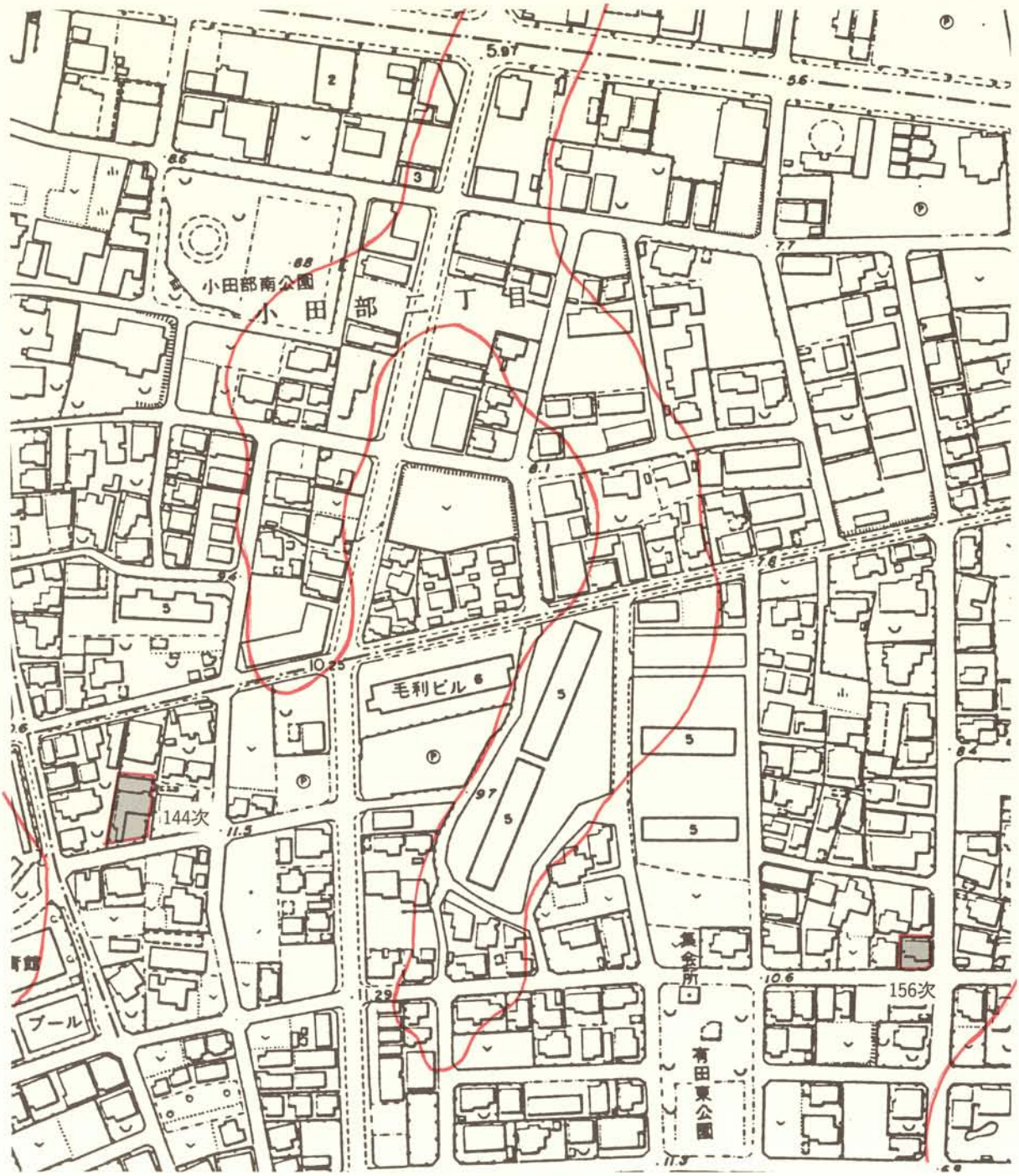


Fig.60　第144次・156次調査区位置図(1/2,500)

９．第144次調査（調査番号8844）

１）調査地区の地形と概要

申請地は早良区有田一丁目25－4に所在し，有田・小田部台地の北西及び北東から細長く開析する谷部に挟さまれた狭小なくびれ部の中央やや西側に位置する。標高11.3m である。

周辺では40次[註1]・108次[註2]・124次[註3]調査が実施されており，それぞれ中世の溝２・土壙墓２，古墳時代竪穴住居２・奈良時代溝１・掘立柱建物５・中世末濠２・近世以降溝５，弥生～古墳時代竪穴住居７・古墳～中世掘立柱建物・奈良時代溝１・平安時代溝１・井戸２を検出している。当該地も当初より遺跡の存在が予見され，昭和62年12月家屋の改築のため建築確認の申請がなされたの契機に63年３月に試掘調査が行なわれ，柱穴多数が検出された。

本調査は同年12月8日より12月26日まで実施され，申請面積429m²中405m²の調査面積となった。調査中の排土は区内で処理したため調査は南北で二分割して行なわれた。昭和42年の区画整備事業で大きく削平を受けた様で，表土下10～15cmで鳥栖ロームの基盤層に達し，遺構の残りは悪い。

検出された遺構は古墳時代竪穴住居址の痕跡１・土壙１・古

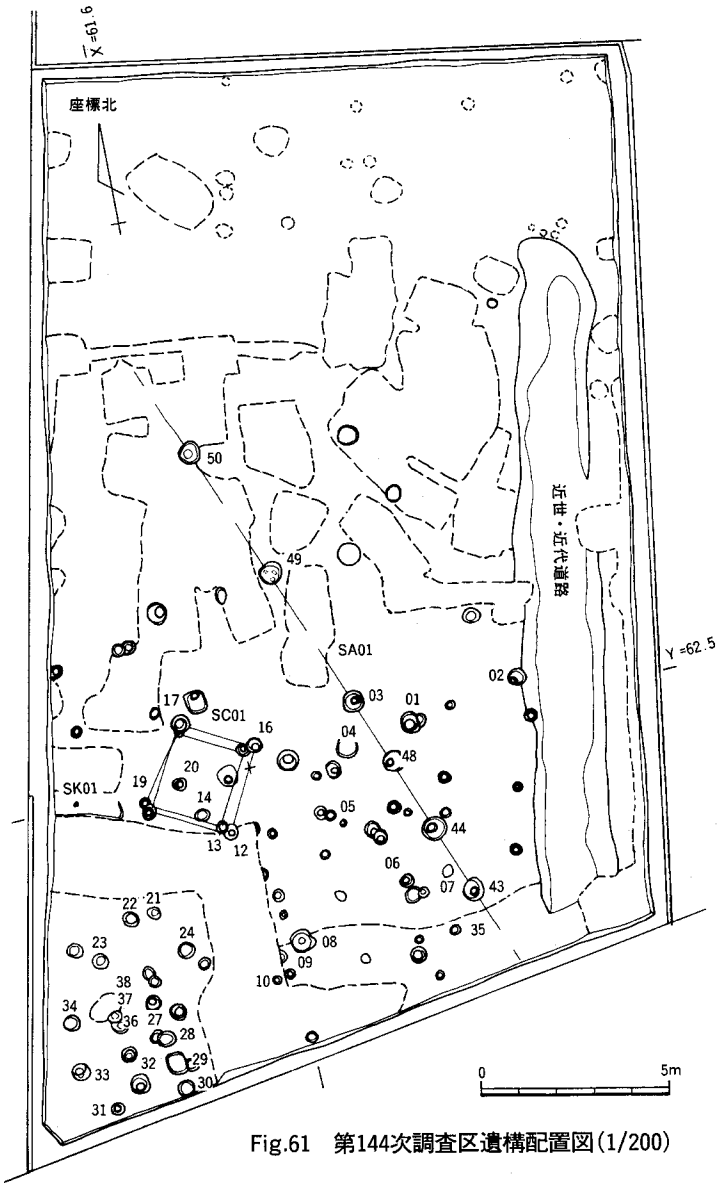


Fig.61　第144次調査区遺構配置図(1/200)

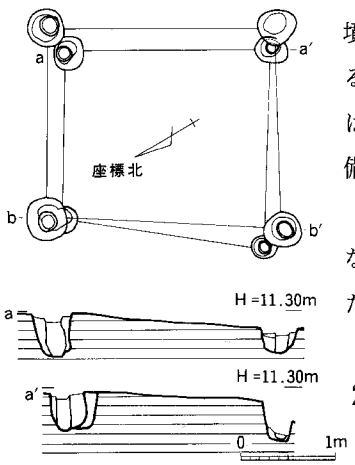


Fig.62　SC01(1/80)

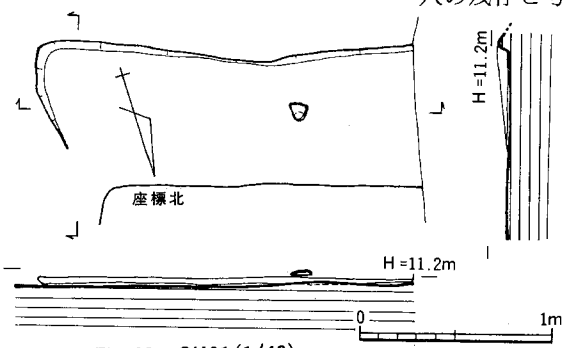


Fig.63　SK01(1/40)

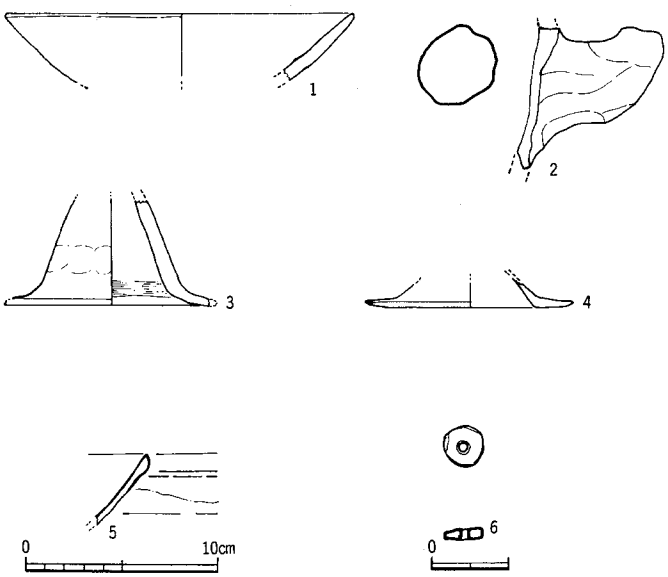


Fig.64　SC01出土遺物実測図(1/2・1/4)

墳時代後期～奈良時代の柵列1条と古墳時代～中世を中心とする柱穴多数である。大部分が調査区南西部に集中し，北半部ではほとんど検出されない。旧地形は北側が高かった様で区画整備で削平され切っていると思われる。

遺物もほとんどが柱穴内から検出されたもので量は極めて少なく，土師器・須恵器・白磁・滑石製臼玉等でコンテナ1箱に満たない。

2）遺構と遺物

住居址 SC01（Fig. 62，PL. 31）

調査区南東で検出された4本組みの柱穴で，竪穴住居址の主柱穴の残存と考えられる。南北方向の柱間がやや長く，長方形をなしており長軸を N-28°-E にとる。方位は座標北が基準である。

それぞれが柱穴2個単位の切り合いになっており建て替えが一度行なわれ拡張された様である。前代で柱間1.8～2.1m×2.15～2.2m，後代で2.1～2.2m×2.4～2.5m を測る。

柱痕跡は径15cm程で深さ35cmが残存する。

出土遺物(Fig. 64，PL. 31)

1は土師器高坏の坏部で口径18.6cmを測る。器表が荒れており調整不明。2は甑取手，3は高坏の脚部で，ゆるく張り気味に開く体部から「ハ」の字状に端部が直線的に屈曲して開くもので，復元径11.8cmを測る。外面は指頭圧痕が残るが細かな調整は不明。内面にはヨコ方向のヘラケズリ痕が残る。4も同じく土師器高坏の脚部で3と同じ柱穴内より検出した。ラッパ状に開

く体部から外反する端部が鋭く開いて上方に跳ね上がり地に接しない。暗赤褐色で胎土は精良。器壁が荒れており，細かな調整は不明である。

土壙SK01（Fig. 63，PL. 31）

SC01の西側に位置する。南北両端を攪乱部に切られ，西側は調査区外のため全容が明らかでないが，残存部で2.0×0.75m，深さ6cmを測る。長方形をなしており，方位はSC01に近く長軸でN-74°-Wをとる。床面は平坦であり竪穴住居址の残存の可能性を考えらる。床面から若干浮いた状態で土師器甕の胴部を検出しているが図化に耐えない。

柵列SA01（Fig. 65，PL. 30・31）

今調査の主となる遺構で，南北方向に直線上に並ぶ柱穴6個，7間分を検出している。方位はN-20°-Wにとる。北端・南端部は区画整備で，SP50の南北とSP49南の部分は攪乱で失なわれているが，調査区外の南北方向にさらに伸びるものと思われる。

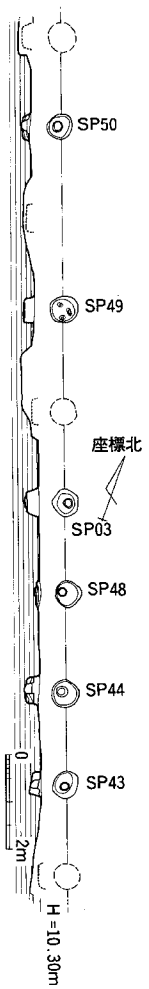
他の柱穴に比べて掘方が大きく径60cm前後を測る。断面は逆台形で床面は平坦である。柱痕跡は18～20cm程で覆土は黒褐色土である。柱間は残存部で南からそれぞれ2.0，2.15，1.90mを測る。

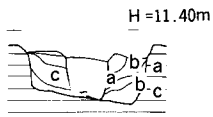
他の柱穴群はこの柵列の西側に集中しており，柵列が方形に区画を囲むものとすれば，関連する建物群は本調査区の西側に分布する可能性が高い。

柱穴からの出土遺物は土師器甕の小片のみで時期の決め手を欠くが，周辺の成果から勘案すると古墳時代後期～奈良時代の可能性が高い。

その他の遺物（Fig. 64，PL. 31）

5は中国北宋後半代の白磁碗の口縁部で，端部は玉縁をなし，灰白色の透明釉が外面体部中位まで掛けられている。SP11出土。11世紀後半～12世紀中頃。6は滑石製の臼玉で径5mm，厚さ1.5mm。SP01出土。古墳時代であろう。





SP43土層断面
a層　黒褐色土(ロームブロックを1/3含む)
b層　黒褐色土(ロームブロックを2/3含む)
c層　黒褐色土(ロームブロックを2/3以上含む)

Fig.65　SA01(1/100・1/20)

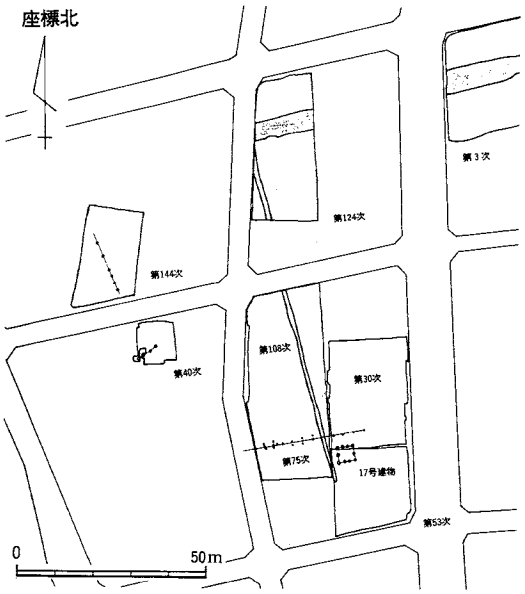


Fig.66　周辺調査区遺構図(1/2,000)

3）小　結

検出した遺構は竪穴住居址1戸，住居址の可能性も考えられる土壙1基，柵列1条である。

竪穴住居址は主柱穴のみの検出である。柱穴内の遺物は3が布留式的で古い要素が残るが，他は須恵器供判の時期であり，6世紀代のものと思われる。周辺の108・124次でも検出されており，これらの住居址群の広がりの一部をなすものである。

土壙は明確な時期を確定する遺物に乏しいが，形状は竪穴住居址に近く，土師器甕から推して古墳時代後期と考えられる。

柵列も同じく時期決定の確実な遺物を欠くが，これに近い方向（N-11°-E）を取る溝が108•124次調査で検出されている（Fig. 66)。時期は8世紀中頃に比定され，早良平野の条里の方向とも一致している。他に南側の40次調査区検出の遺構がこれより8°程西偏するが柱痕跡の覆土・掘方の規模形態・柱間等，類似点が多く関連性が強いと思われる。25°程東偏するが同様の一本柱の柵列は当調査区南側150m程の第107・133・146[註4]・148[註5]次調査区でも検出されており6世紀中頃以降7世紀前半以前に比定されている。よって当該区の柵列は古墳時代後期～奈良時代に比定して大過ないものと思われる。(加藤)

註1　福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集　1983年

註2　　同　「有田・小田部第8集」　同　155集　1987年

註3　1987年調査

註4　福岡市教育委員会「有田・小田部第11集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集　1990年

註5　1990年調査

10. 第156次調査（調査番号8979）

１）調査地区の地形と概要

申請地は早良区有田1丁目12－2に所在し，八手状に開析した有田・小田部台地東端の北に細長く延びる小支丘の基部近く，東側緩斜面に位置する。標高は9.0m である。

周辺では50m 程北側で第８次[註1]・21次[註2]・69次[註3]調査が実施されており，それぞれ掘立柱建物１・古墳時代竪穴住居址３，古墳時代初頭竪穴住居址１・掘立柱建物１，古墳～律令時代掘立柱建物１・土壙２・中世溝２が検出されている。

昭和63年12月12日，家屋の改築のため建築確認の申請がなされた事により同年12月23日試掘調査を実施，竪穴住居址と柱穴を検出，本調査を実施する事となった。

本調査は平成２年３月８日より同年３月31日まで実施され，申請面積165㎡中131㎡の調査面積となった。調査中の排土処理を調査区内で行なったため調査は南北二分割で行われた。

従前の削平が著しく，表土下20～30cm程で黄白～淡桃色の八女粘土の基盤層に達する。遺構の残りは極めて悪い。

検出された遺構は古墳時代前期の竪穴住居址２戸，古墳時代～古代の掘立柱建物１棟，中世の掘立柱建物１棟，近世の流路１条，古墳時代～中世の柱穴多数である。

遺物は縄文後期末から近世にまで及ぶが量は少なく総量でコンテナ１箱に満たない。

２）遺構と遺物

住居址 SC01・06（Fig. 68，PL. 33）

調査区中央部西側で検出され，不明瞭ながら住居２戸の切り合いと思われる。

SC01は3.3×3.3m のややゆがんだ正方形で方位を N-15°-E にとる。残りは極めて悪く，床面までの深さ１～２cm，幅12cm深さ４～５cmの周壁溝がめぐるため住居址と確認できる程度である。壁溝は北の中央部と南の西半が途切れる。主柱穴は SP09と中央の炉横の柱穴の南北方向の２本柱と思われる。柱間は1.7m。

SC06は調査終了後，資料の検討によって確認したもので，01に切られており，SC01外側の地山に浸み込んだ覆土の汚れで判断すると一辺2.7m の方形をなす。南半が2cm程方形に下がっており，その中央部に炉と土壙をもうけている。主柱穴は SP08・11・14・29の４本柱と思われ，柱痕跡は15～16cm程，柱間は1.8～2.4m を測る。方位は N-54°-E をとる。他に調査区南西部に一辺2.5m の方形の浸み込みが有り（PL33-5）住居の可能性が考えられる。

出土遺物（Fig. 73，PL. 34）

03は土師器甕の口縁部で口径14.6cm。外面はナナメハケ調整後，ヨコナデ，内面はヨコハケ

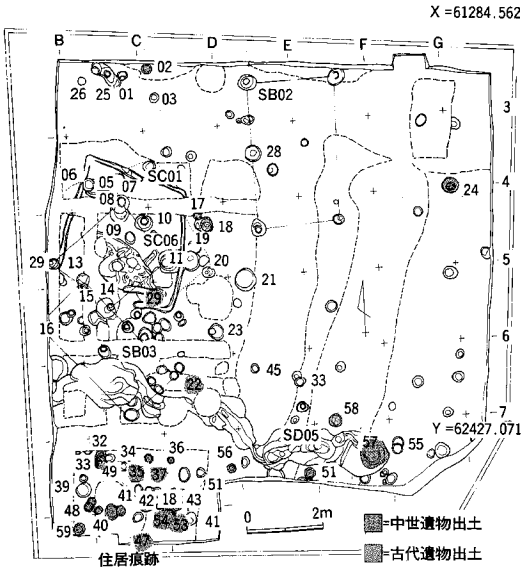


Fig.67　第156次調査区遺構配置図(1/200)

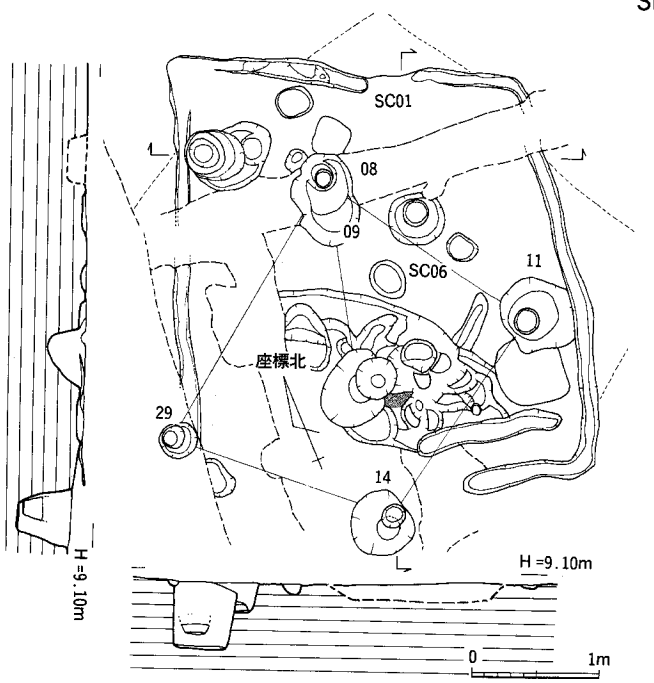


Fig.68　SC01(1/60)

後ヨコナデ，口唇上面と外面端部下をハケ調整具でナデくぼませ突帯状に仕上げている。04～06は小形丸底坩で04は径9.7cm。口縁は長く直線的に外反し，端部は丸く仕上げる。調整不明。05は口径10.6cm。口縁は短かく調整はナナメハケ後ヨコナデ，頸部のくびれは小さく胴部外面はケズリ様の板ナデ内面はナナメ方向の指頭圧痕が残る。06は胴部で径10cm。器壁が厚目で外面はヨコハケ。07は高坏脚部で径14.2cm。直線的に開き端部は凹線気味に仕上げる。外面は調整不明，内面はナナメハケ調整が残る。

掘立柱建物

SB02（Fig. 69，PL. 33）

調査区北側中央部に位置する2間(4.0m)×1間(2.4m)の建物で，主軸をN-0～2°-Eにとる。柱痕跡は径約18cm。掘方径は40～50cmである。時期を比定する遺物の検出はない。

SB03（Fig. 70，PL. 33）

SC01南側に位置する2間（3.5m)×1間(1.6m)の建物でSB02より一回り小振りである。主軸をN-42°-Wにとる。柱痕跡は15cm，掘方径は25～30cmを測る。柱穴内より糸切り土師器皿を検出している。

流路 SD05（Fig. 71•72，PL. 33）

調査区の南部を東西方向にカギ状に流れている不整形のもので幅0.3～1.3mを，深さ0.8～1.4mを測る。

土層を観察すると鋭い逆V字状の砂質土層が数度切り合って堆積しており（Fig71）水流が鋭く削り込みながら幾度か堆積している様子が伺がえる。また，この水成堆積土下に暗褐～黒灰色の覆土が有り(Fig72)，柱穴も見受けられる(PL33-8)。よって低い位置に連なる様に並んだ

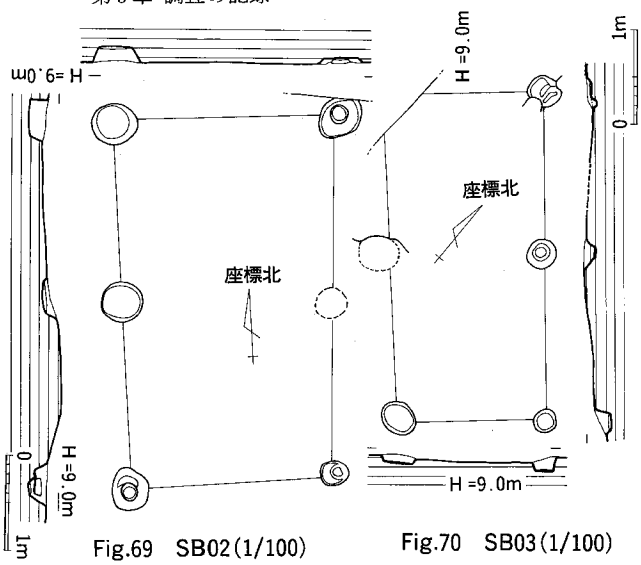


Fig.69 SB02(1/100)　　Fig.70 SB03(1/100)

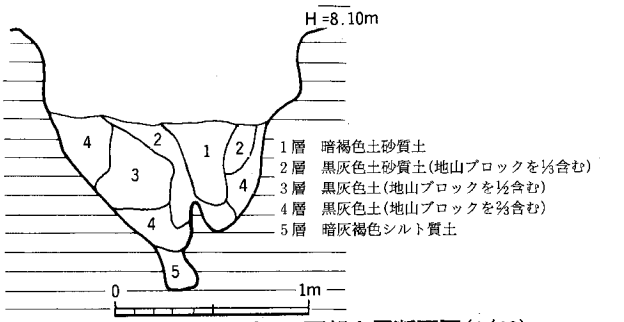


Fig.71 SD05西部土層断面図(1/40)

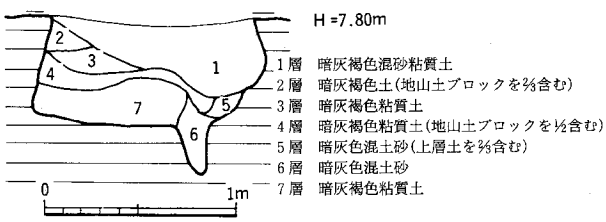


Fig.72 SD-05東部土層断面図(1/40)

軟弱な遺構覆土部分や亀裂を自然の流れがつなぐ様に流れた結果形成されたものの様である。

出土遺物（Fig. 73, PL. 34）

25は褐釉の陶器瓶で内外全面に施釉され肩部に乳青色の草木釉が垂れる。頸部が有段をなし，肩部は稜をもって強く屈曲する。胴部は一部タテ方向にナデくぼませている。肩部径11.4cm。胎土は灰色。26は陶器擂鉢で口縁が玉縁をなす。内面から口縁外面まで暗赤褐色の不透明釉が施釉されている。27は土師質の土鈴である。他に唐津二彩の縁皿等を検出しており，九州産の18～19世紀代の遺物が主流を占める。

その他の遺物（Fig. 73, PL. 34）

他に柱穴内とSC01・SD05内に混入した形で多時期にわたる遺物を検出している。

01は後期末～晩期初頭の浅鉢口縁部でSP21出土。暗灰色の胎土に白色の微砂粒を多く含む調整は粗いナデ様のヨコケンマ。2は弥生中期初頭の甕口縁部でSC01出土。08は土師器甕で表土出土。口径17.8cm。09～19はSD05出土。09は須恵器で坏IV期。受部径11.8cm。10は須恵器甕胴部を二次加工した円盤で，周縁を細かく打ち欠いている。全面に擦痕・摩滅痕が見受けられる。11・12は8世紀前半～中頃の須恵器高台坏の底部で，11で底部径8.2cm，12で7.8cmを測る。13は銅製銙帯の鉈尾で，長さ4.4cm幅3.6cm高0.9cmを測る。 銹化が著しくもろくなっているが外面には黒褐色の漆の被膜が残っている。内面には帯に固定するための円柱状の突起が4ケ所残っている。奈良時代のまとまった遺構はSB02の可能性も有るが，同時代の遺物を検出する柱穴は

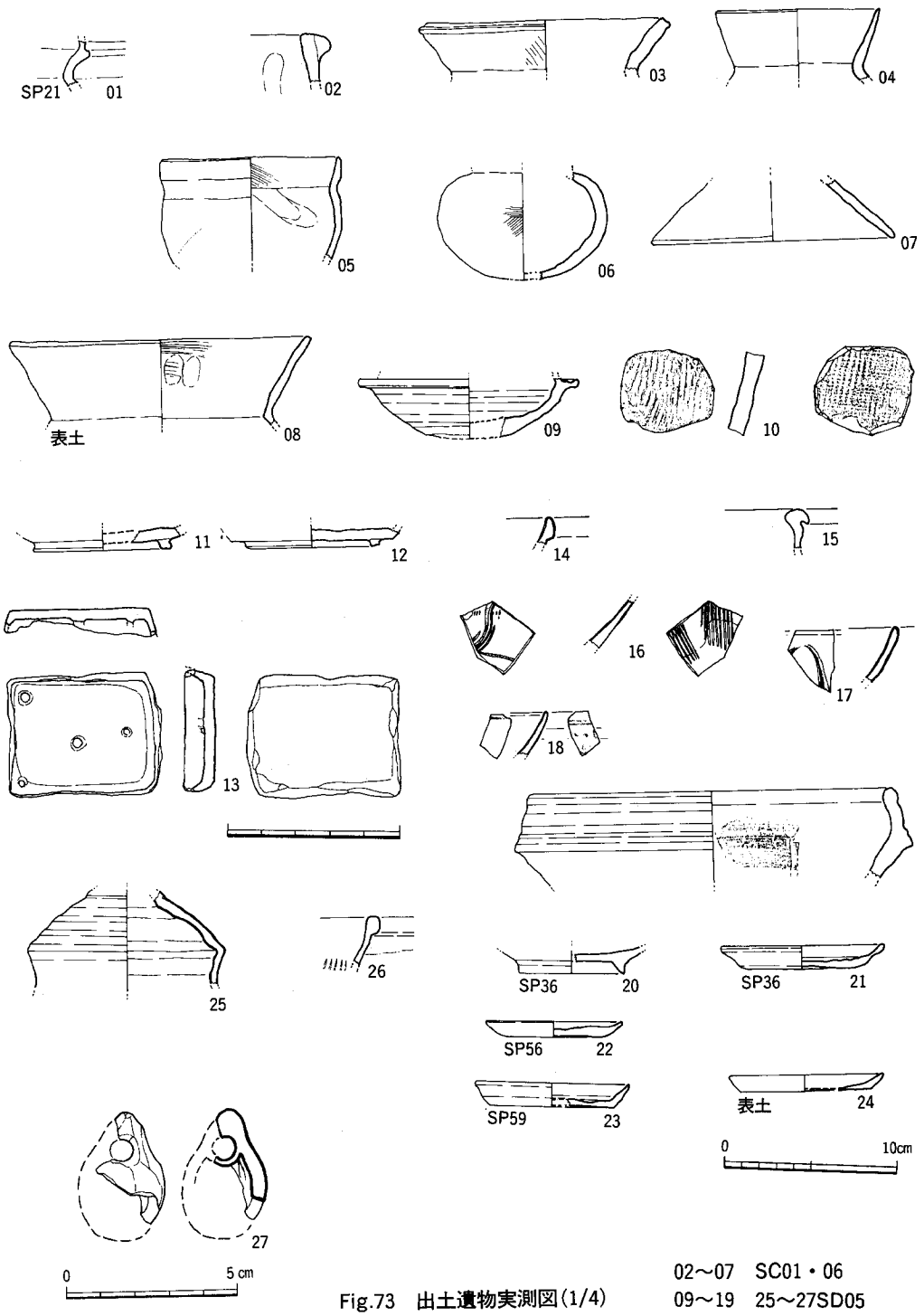


Fig.73　出土遺物実測図(1/4)

02～07　SC01・06
09～19　25～27SD05

４ケ所散漫に分布している（Fig67）。14は11～12世紀北宋代の白磁碗，15も同期の中国製陶器鉢。16は同安窯系青磁碗の小片，17は龍泉窯系鎬蓮弁文碗の小片。18は明青花碗の口縁部で，内面に１条，外面に2条の圏線と蓮子文を施す。19は備前Ｖ期の擂鉢で口径21.8cm。20は土師器碗の底部で底径6.2cm，SP36出土。21も同じくSP36出土の土師器皿で口径10cm器高1.4cmを測る。底部ヘラ切り，11世紀代。22はSP56出土の土師器皿で口径8.2cm器高0.9cm，23はSP59出土で口径9.2cm器高1.3cm，24は表土出土で，口径9.2cm器高0.8cmでいずれも糸切り・板圧痕が残る。13世紀代。中世の遺構(柱穴)は主に南半部に多く，殊に南西部に集中する（Fig67）。

３）小　結

１．遺構に伴わないが縄文時代後期末～晩期初頭の浅鉢の小片を検出しており，有田遺跡群内では稀少な資料である。

２．弥生時代中期初頭の資料を検出したが縄文と同様一片のみで遺構に伴っておらず集落が広がっているとは考え難く，現在まで当該地の支丘上で弥生中期の遺構の検出は無い。

３．古墳時代は竪穴住居址を２戸検出した。遺物から古墳時代前期と思われ，148次調査区付近を中心とした径500m程の集落の一部をなすものである。

４．奈良時代の遺物と柱穴を数個検出した。殊に銅製の鈴帯飾は第3次調査の蛇紋岩製巡方[註4]に次いで２例目である。第101次調査区を中心に８世紀前半～中頃の南北96m東西85mの方形の溝に囲まれた掘立柱建物群が検出されつつあり[註5]，官衙の様相が強く，これに関連する遺物であろう。SB02の方向もこれに近い。

５．古代末～中世，16世紀代までの土師器・貿易陶磁を検出したが，明確な遺構はSB03のみである。遺物の量は13世紀代が多くを占める。

６．18～19世紀代の自然流路を検出，銅製鉈尾等，多時期にわたる遺物を多く検出した。

（加藤）

註１	福岡市教育委員会	「有田・小田部第２集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集	1982年
註２	同	「有田・小田部第１集」	同　58集	1980年
註３	同	「有田・小田部第５集」	同　110集	1984年
註４	同	「有田・小田部第８集」	同　155集	1987年
註５	同	「有田・小田部第11集」	同　234集	1990年

福岡市有田遺跡第126次調査出土の弥生時代人骨

中　橋　孝　博
九州大学医学部解剖第２講座

はじめに

福岡市の西南に広がる早良平野，その北部に位置する有田・小田部地区では，1966－1968年度の九州大学考古学教室による発掘調査を皮切りに，現在にいたるまで150次余りにわたる調査がなされてきた。この間，古くは旧石器時代から近世に至るまでの多彩な遺構，遺物が検出され，とりわけ弥生時代初頭の，板付を上回る環濠集落の存在があきらかにされるなど，考古学的に注目されるべき地域であることが明らかになりつつある。ただ，これまでのところ，そうした考古資料をこの地に残したヒトの痕跡，つまり人骨資料については，残念ながらこれといった出土を見なかった。しかし，1987年夏に実施された第126次調査によって，ようやく弥生時代所属の人骨２体が検出された。

北部九州一帯は弥生文化の先進，中枢域であり，現在，そうした弥生社会の生成に携わった弥生人達が，その後の日本人の形成に極めて重要な役割を果たしたとの認識が急速に広がりつつある。そうした中で，当地の弥生人についてのより精緻で豊富な知見を蓄積していくことは，今後の研究進展を図る上でますます重要視されていこう。今回出土したのは僅かに２体であり，この地の弥生人を代表させるにはまだ不十分ではあるが，従来からの資料空白地帯がこれによって僅かでも埋められた訳であり，その出土の意義は小さくない。幾つか興味深い知見も得られたので以下にその知り得たところを報告する。

資料・方法

有田遺跡第126次調査は，1987年夏(8月4日－26日)，福岡市早良区小田部１丁目34-9番地における住宅建設に伴って実施され，弥生時代前期末－中期前半にいたる50基の甕棺が検出された。人骨はその内，中期初め所属の甕棺２基(ST－１，２号)から出土したものである。ST－１号は欠損部が多いが，ST－２号は保存状況が比較的良好で，ほぼ全身にわたる観察が可能であった。

計測は主に Martin-Saller(1957)に従い，その他，Howells(1973)，鈴木(1963)の方法によった。また，顔面平坦度の計測は山口(1973)に従い，性判定には筆者らの方法(Nakahashi & Nagai, 1986；中橋，1988)を援用した。

計測・観察結果

1．ST－1号（女性・熟年）

頭蓋では下顎，体部では上半身の殆どを欠くが，他の部分は比較的良好な状態で遺存している。乳様突起を始めとする頭蓋各筋付着部の発達の弱さとその計測結果，及び下肢骨骨幹の細さから女性と判定され，また，主縫合内板の癒着がかなり進行し，歯の咬耗が2－3度に達していることから，熟年に達した人骨と考えられる。なお，右頬骨弓部に微かながら赤色顔料の付着が確認された。

1-1，頭蓋骨

計測結果を表1，2に示した。また，北部九州弥生人を基準線とした偏差折線を図1に示した。

頭蓋骨ではまず最大長の小ささが目につき，このためその長幅示数は83.1とかなりの短頭型となっている。また，頭高もやや低く，脳頭蓋全体がかなり小さい。ちなみにそのモズルス値は142.3で，これは例えば近隣の金隈弥生人(148.8)はもとより，さらに小頭の現代人女性の平均146.6をも下回っている(中橋，他，1985)。

顔面部は左部を欠くが，推定値で見る限り，かなりの高顔傾向が窺える。その上顔示数は52.2で，従来より北部九州・山口地方から出土している弥生人の平均に近く，西北九州弥生人(内藤，1971)，及び縄文人(清野・宮本，1925；金高，1928)とは確差が見られる。同傾向は顔窩や鼻部の各計測値，示数値でも確認できる。鼻根部の平坦性も強い(鼻根彎曲示数－88.3)。

歯式を以下に示すが，風習的抜歯の痕跡は認められない。

× × M^1 × × C I^2 I^1	○ I^2 C P^1 P^2 M^1 ／ ／
／ ／ M_1 P_2 P_1 ／ △ △	△ △ C P_1 P_2 M_1 M_2 ／

（○：歯槽開放，×：歯槽閉鎖，／：欠損，△：歯根のみ）

1-2，四肢骨

上半身は消失しているので，下肢での結果のみ得られた。その計測，比較結果を表3に示した。

全体的にかなり華奢な傾向が見られる。長，幅径ともに，この地域の弥生人としては短く，かつ細い。骨幹断面には，柱状性，偏平性はみられず，筋付着部の発達も比較的弱い。

推定身長は，大腿骨最大長にPeason法を適用すると145.2cmとなり，低身長で知られる西北九州弥生人や，縄文人に較べてもなお低い(表4)。

2，ST－2号(男性・熟年)

ほぼ全身骨が良好な状態で遺存している。主に恥骨形態から男性と判定され，縫合の愈合が

表 1　有田遺跡第126次調査出土弥生時代人骨、頭蓋計測値

		男　性 ST-02	女　性 ST-01
1	頭蓋最大長	180	166
8	頭蓋最大幅	137	135
17	Ba-Br高	133	126
8／1	頭長幅示数	76.1	83.1
17／1	頭長高示数	73.9	75.9
17／8	頭幅高示数	97.1	93.3
5	頭蓋基底長	102	85
9	最小前頭幅	95	92
23	頭蓋水平周	517	485
24	横　弧　長	302	(294)
25	正中矢状弧長	361	357
43	上　顔　幅	111	(103)
44	両眼窩幅	104	—
45	頬骨弓幅	136	(134)
46	中　顔　幅	110	(104)
47	顔　　高	118	—
48	上　顔　高	76	70
47／45	顔示数（K）	86.8	—
47／46	顔示数（V）	107.3	—
48／45	上顔示数（K）	55.9	52.2
48／46	上顔示数（V）	69.1	67.3
51	眼窩幅（左）	46	43(r)
52	眼窩高（左）	36	35(r)
52／51	眼窩示数（左）	76.6	81.4(r)
54	鼻　　幅	27	24
55	鼻　　高	53	49
54／55	鼻　示　数	50.9	49.0
50	前眼窩間幅	18	15.9
F	鼻根横弧長	19	18
50／F	鼻根彎曲示数	94.7	88.3
57	鼻骨最小幅	7	6.9
72	全側面角	80	—
74	歯槽側面角	72	—
65	下顎頭間幅	135	—
66	下顎角幅	(112)	—
68	下　顎　長	107	—
69	オトガイ高	33	—
69(3)	下顎体厚（左）	14	—
70	下顎枝高（左）	58	—
71	下顎枝幅（左）	41	—
71／70	下顎枝示数（左）	70.6	—
79	下顎枝角	121	—

表 2　主要頭蓋計測値の比較（女性）

		有田126 (弥生) ST-1	北部九州・山口[1] (弥生) N	M	(古墳) N	M	西北九州[2] (弥生) N	M	広　田[1] (弥生) N	M	津雲・吉胡[3] (縄文) N	M	西南日本[1] (現代) N	M
1	頭蓋最大長	166	132	176.7	37	175.6	15	178.1	22	159.7	46	176.1	57	172.8
8	頭蓋最大幅	135	135	137.9	33	137.3	15	139.3	23	144.4	49	141.5	57	134.0
17	Ba-Br高	126	104	130.0	30	129.6	7	127.3	8	127.1	21	129.7	57	131.3
8／1	頭長幅示数	83.1	117	78.0	28	78.5	15	78.2	18	90.2	41	80.3	57	77.6
17／1	頭長高示数	75.9	99	73.8	27	74.2	7	71.2	7	79.9	20	73.6	57	76.0
17／8	頭幅高示数	93.3	94	94.7	21	93.9	7	92.5	8	90.4	20	91.9	57	98.0
45	頬骨弓幅	(134)	94	131.4	27	131.2	6	130.2	4	126.0	10	132.6	57	123.9
46	中　顔　幅	(104)	100	100.0	31	100.4	11	95.9	6	91.8	23	99.7	57	93.4
48	上　顔　高	70	96	69.5	33	67.7	12	60.9	4	62.0	17	62.0	55	68.2
48／45	上顔示数（K）	52.2	77	53.0	23	51.7	6	47.6	3	47.9	7	48.0	55	55.0
48／46	上顔示数（V）	67.3	86	69.5	27	67.7	11	63.5	4	65.3	14	62.3	55	72.9
51	眼窩幅（左）	43	98	41.6	31	41.3	10	41.1	4	39.3	22	41.7	57	40.5
52	眼窩高（左）	35	97	33.9	34	33.9	10	31.2	4	30.3	14	32.6	57	34.0
52／51	眼窩示数（左）	81.4	94	81.5	31	82.2	10	75.9	4	77.7	13	78.0	57	83.9
54	鼻　　幅	24	105	26.4	32	25.9	12	26.6	5	24.8	27	25.4	57	25.0
55	鼻　　高	49	104	49.6	32	48.5	12	46.3	4	44.0	21	44.9	57	48.6
54／55	鼻　示　数	49.0	100	53.3	30	53.8	12	57.4	4	58.0	20	56.1	57	51.4

1)中橋・永井(1989)，2)内藤(1971)，3)清野・宮本(1925)；金高(1928)

表3　下肢骨計測値（女性、左）

		有田126 ST-01		北部九州 (弥生)		山　口 (弥生)		大友[1] (弥生)		津雲[2] (縄文)		九州[3] (現代)	
		r	l	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1	最大長	372	372	34	405.5	30	403.9	5	386.8	16	385.4	13	380.1
2	自然位長	368	368	11	403.0	26	399.5	4	378.3	16	379.9	13	375.9
6	中央矢状径	25	25	112	25.7	50	25.5	30	25.5	24	25.3	13	23.6
7	中央横径	24	24	112	26.3	50	26.2	30	25.2	24	24.1	13	23.2
8	中央周	77	77	111	81.5	50	80.9	29	80.4	24	77.8	13	74.2
9	骨体上横径	28	27	83	30.5	50	31.0	30	29.7	25	28.5	13	27.5
10	骨体上矢状径	23	23	86	23.2	50	23.0	30	22.7	25	22.0	13	21.3
8／2	長厚示数	20.9	20.9	11	20.8	26	20.2	4	20.3	15	20.6	13	19.8
6／7	中央断面示数	104.2	104.2	112	98.3	50	97.5	31	102.1	24	105.6	13	102.0
10／9	上骨体断面示数	82.1	85.2	86	76.4	50	74.5	30	76.5	25	77.4	13	77.1
脛　骨													
1	全　長	—	(288)	20	324.3	20	326.8	3	313.0	10	317.5	14	301.0
1a	最大長	(298)	(295)	30	329.3	23	331.0	4	324.8	10	321.9	14	306.6
8	中央最大径	22	22	46	27.0	31	26.9	24	27.6	23	27.1	14	24.7
8a	栄養孔位最大径	27	25	97	30.8	42	30.5	19	30.4	21	30.5	14	28.1
9	中央横径	19	19	46	20.4	31	19.1	26	19.7	23	17.7	14	18.8
9a	栄養孔位横径	22	21	98	22.3	42	21.6	20	21.1	20	19.2	14	21.1
10	骨体周	66	66	46	74.5	30	72.6	23	75.3	23	72.7	14	70.1
10a	栄養孔位周	75	72	96	83.2	42	82.2	18	81.6	20	81.6	14	78.2
10b	最小周	64	63	82	68.6	44	67.5	24	68.3	17	67.1	14	63.6
9／8	中央断面示数	86.4	86.4	46	75.7	31	71.1	23	72.1	22	64.7	14	76.3
9a／8a	栄養孔位断面示数	81.5	84.0	97	72.4	42	71.2	18	70.4	21	63.0	14	74.9
10b／1	長厚示数	—	21.9	20	21.3	20	20.3	3	21.4	10	21.3	14	21.2
腓　骨													
1	最大長	—	—	2	328.0	17	324.0	—	—	5	315.4	14	300.6
2	中央最大径	14	—	34	14.7	29	14.8	—	—	20	14.8	14	12.9
3	中央最小径	9	—	34	9.8	29	9.6	—	—	20	9.7	14	8.6
4	中央周	38	—	34	40.7	28	41.0	—	—	20	43.0	14	36.8
4a	最小周	37	—	8	35.6	21	37.3	—	—	17	36.0	14	32.3
3／2	中央断面示数	64.3	—	34	67.3	29	65.2	—	—	20	65.5	14	67.6
4a／1	長厚示数	—	—	2	10.8	17	11.6	—	—	5	11.6	14	10.8

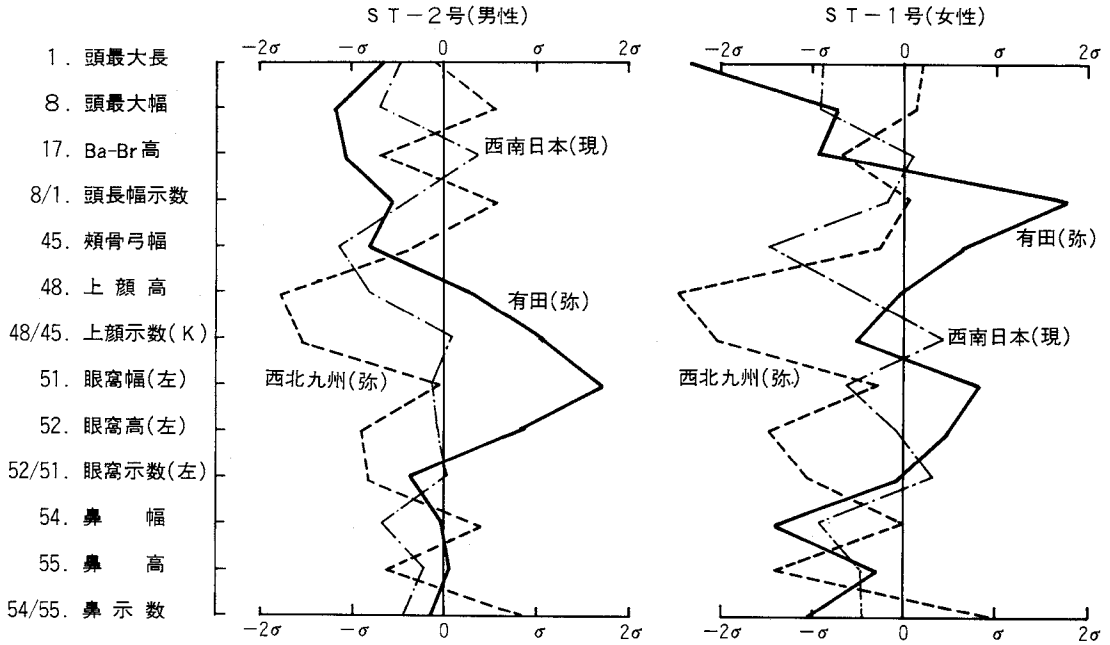
1)松下(1981)，2)清野・平井(1928)，3)阿部(1955)；鑄鍋(1955)

表4　推定身長の比較

		男性 N	男性 M	女性 N	女性 M
有田126	(弥)	1	162.5＊＊	1	145.2
北部九州・山口	(弥)	129	162.6	87	151.3
北部九州	(弥)	80	162.1	52	151.2
(福　岡)		20	163.0	20	151.1
(春　日)		15	162.3	7	150.8
(太宰府・筑紫野)		17	162.4	16	151.8
(小郡・甘木)		8	160.7	3	150.7
(飯　塚)		2	161.6	2	150.9
(佐　賀)		15	162.1	4	150.2
山　口	(弥)	49	163.3	35	151.4
(土井ケ浜)		36	163.7	24	151.1
西北九州	(弥)	16	158.8	8	147.9
大　友	(弥)	15	159.1	2	149.0
広　田	(弥)	14	154.0	10	142.8
北部九州	(縄) 1)	8	159.2	6	150.5
津　雲	(縄) ＊	13	159.9	16	147.3
吉　胡	(縄) ＊2)	22	158.9	18	147.7
北部九州・山口	(古) 1)	40	162.8	15	150.2
吉母浜	(中) 3)	18	159.7	22	146.5

＊　右大腿骨最大長の平均値より算出　＊＊　橈骨最大長より算出
1)中橋・永井(1989)，2)石沢(1931)，3)中橋・永井(1985)

図１．北部九州弥生人を基準とした偏差折線



内，外板ともかなり進行し，歯の咬耗の程度も強い(２－３度)ことから，当男性人骨も既に熟年に達しているとみなされる。なお，当人骨も頭蓋各所に赤色顔料の付着が認められた。

２-１，頭蓋骨

計測結果を表１，５に示す。

表５　主要頭蓋計測値の比較（男性）

		有田126	北部九州		山　口		西北九州		広　田＊		津雲・吉胡		西南日本[1]	
		(弥生)	(弥生)		(弥生)		(弥生)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
		ST-2	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	180	118	183.7	61	182.9	21	182.8	26	166.0	60	184.2	108	181.4
8	頭蓋最大幅	137	117	142.4	66	142.0	20	144.9	25	147.2	62	144.9	108	139.3
17	Ba-Br高	133	101	137.7	45	135.2	15	134.6	17	130.7	26	135.5	108	139.3
8／1	頭長幅示数	76.1	104	77.7	59	77.8	20	79.2	25	89.0	55	78.7	108	76.6
45	頬骨弓幅	136	103	140.0	44	139.2	12	138.4	7	137.7	16	141.0	106	134.5
46	中　顔　幅	110	114	104.7	46	104.2	17	105.0	10	99.6	31	103.8	107	99.9
47	顔　　高	118	80	123.8	27	121.4	14	117.1	11	109.9	25	115.7	66	122.2
48	上　顔　高	76	114	74.8	38	72.7	17	68.1	12	62.9	28	66.3	92	71.8
47／45	顔示数（K）	86.8	71	88.4	24	86.8	12	84.6	7	79.9	10	80.4	64	91.4
47／46	顔示数（V）	107.3	74	118.4	27	115.4	14	111.8	9	111.2	18	110.4	65	122.2
48／45	上顔示数（K）	55.9	95	53.3	34	52.1	12	49.3	7	45.6	10	47.0	90	53.5
48／46	上顔示数（V）	69.1	105	71.5	37	69.4	17	64.8	10	63.7	22	63.1	91	71.8
51	眼窩幅（左）	46	89	43.2	39	43.6	15	43.1	9	43.4	40	43.2	108	43.0
52	眼窩高（左）	36	93	34.5	41	34.6	15	32.8	9	31.8	38	33.2	108	34.4
52／51	眼窩示数（左）	78.3	86	79.9	38	79.4	15	76.2	8	74.2	32	77.5	108	80.2
54	鼻　　幅	27	117	27.1	43	26.9	16	27.8	12	25.9	36	26.5	108	25.9
55	鼻　　高	53	116	51.4	41	51.1	16	51.0	12	45.5	30	48.1	108	52.2
54／55	鼻　示　数	50.9	113	51.4	41	51.1	16	54.4	11	56.4	27	54.7	108	49.8
72	全側面角	80	85	84.5	31	85.5	15	82.0	7	84.1	19	81.5	92	83.8
74	歯槽側面角	72	83	69.8	28	72.8	−	−	6	66.0	20	70.1	107	70.7

＊：広田＋鳥ノ峯，1) 原田（1954）

付　論

脳頭蓋諸径は，図１にも見るように，１号同様，やや小さい傾向が認められ，そのモズルス値は150.0で，弥生人としては(例えば金隈：153.7，西北九州：154.1)やはり小さい。しかし，１号のような短頭性は見られず，その長幅示数は76.1と，逆に長頭型に近い。

顔面部では強い高顔傾向が見られる。後述するように歯の咬耗が著しいこともあって顔高値はさほどではなく，各顔示数もかなり低値をとるが，上顔高は76mmで比較群のいずれをも上回っており，その Kollmann の上顔示数も55.9と高い。その他，眼窩幅がやや広い他はほぼ近隣の弥生人平均と大差なく，鼻根部には強い偏平性も認められる。また，前頭骨，鼻骨，頬上顎骨の各平坦示数はそれぞれ，13.4，27.7，23.3で，その顔面上半は平坦な顔面を持つことで知られる北部九州弥生人の各平均(14.8，29.2，20.5；中橋・永井，1989)に較べてもさらに平坦性が強い。

以下に歯式を示す。上顎左右犬歯部の歯槽が閉鎖している。対向する下顎犬歯の咬耗が弱く，下顎咬合面が左右ともこの部分で上方へ突出している。隣接歯槽部にも閉鎖像が見られ，その形式については疑問が残るが，風習的抜歯である可能性が強い。さらにまた，前歯列の正面観において，上下歯列間に紡錘状の間隙も認められた(図版参照)。

× M^2M^1× ○ × I^2I^1	I^1I^2× × × × M^2×
$M_3M_2M_1P_2P_1C$ I_2I_1	I_1I_2C $P_1P_2M_1$× ×

２－２，四肢骨

計測，比較結果を表６，７に示す。

上肢骨：比較的頑丈な骨体を持ち，長径についても左橈骨のみ計測値が得られたが，近隣の弥生人と大差なく，かなり長い。上腕骨では特に右腕が太く，三角筋粗面の発達も良好で，左右差が大きい。また，橈骨，尺骨共に骨間縁の発達が良好で，その為，橈骨では断面示数がかなり小さくなって津雲縄文人の平均に近くなっている。

下肢骨：上肢骨同様かなり頑丈な骨体を持ち，各計測値は近隣の北部九州弥生人の平均に近いか，もしくはそれをやや上回る値を見せている。また，大腿骨に柱状性は見られないが，橈骨ではかなりの偏平性が認められる。

推定身長は，橈骨最大長に Pearson 法を適用して求めると，162.5cmで，この地域の弥生人の平均にも近く(表４)，かなりの高身長である。

総括・考察

福岡市早良区に所在する，有田遺跡第126次発掘調査によって，弥生中期初めの甕棺から熟年男女各１体の弥生人骨が出土した。その特徴を概括すると，

・男女とも脳頭蓋はやや小頭傾向を示し，男性(ST－２号)は幅，高径がかなり小さく，女性

表6　上肢骨計測値（男性、左）

		有田126 ST-02		北部九州 (弥生)		山　口 (弥生)		大　友 (弥生)		津　雲 (縄文)		九　州[1] (現代)	
		r	l	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1	最大長	—	—	22	302.6	29	305.3	11	291.4	15	283.3	106	295.3
2	全　長	—	—	17	296.8	23	300.0	8	285.8	15	279.0	106	290.6
5	中央最大径	25	23	76	23.3	61	23.1	34	23.4	20	23.7	106	21.9
6	中央最小径	19	19	76	17.4	61	17.6	33	17.6	20	17.7	106	16.9
7	骨体最小周	70	65	81	63.9	66	63.7	33	63.5	21	64.7	106	61.8
7a	中央周	73	68	75	67.8	57	67.5	33	68.2	—	68.8	106	63.7
6／5	骨体断面示数	76	82.6	76	74.9	61	76.5	33	75.0	20	74.6	106	79.1
7／1	長厚示数	—	—	22	21.3	28	20.8	11	22.4	15	23.0	106	20.9
橈　骨													
1	最大長	—	234	37	236.5	27	236.9	6	231.5	11	233.3	64	219.9
2	機能長	—	—	28	220.0	24	222.4	9	215.8	11	217.5	64	208.2
3	最小周	43	44	78	43.1	51	42.5	15	44.7	17	43.6	63	40.1
4	骨体横径	18	18	79	17.2	51	17.4	25	17.1	17	16.9	63	16.0
4a	骨体中央横径	18	17	50	16.0	33	16.0	25	16.4	—	—	63	15.2
5	骨体矢状径	12	12	79	12.5	51	12.0	25	12.4	17	11.6	63	11.7
5a	骨体中央矢状径	12	12	50	12.6	34	12.4	26	12.4	—	—	63	11.9
3／2	長厚示数	—	—	28	19.8	24	19.4	5	20.5	11	20.0	61	20.4
5／4	骨体断面示数	66.7	66.7	79	72.6	51	69.6	25	72.3	17	68.8	60	71.4
5a／4a	中央断面示数	66.7	70.6	50	78.6	33	77.8	25	75.2	—	—	—	—
尺　骨													
1	最大長	—	—	12	253.2	26	258.5	9	249.6	7	247.9	62	236.2
2	機能長	—	—	15	224.7	21	226.2	13	222.9	12	219.5	64	209.2
3	最小周	39	38	63	37.4	35	38.2	22	37.2	15	38.9	65	35.8
11	矢状径	15	14	100	13.2	49	13.2	26	15.0	19	14.2	63	12.8
12	横　径	19	18	100	17.6	49	17.2	26	17.2	19	16.2	64	16.5
3／2	長厚示数	—	—	15	16.8	21	17.2	13	16.8	12	17.8	63	17.0
11／12	骨体断面示数	78.9	77.8	100	75.4	49	77.2	26	88.0	19	87.8	63	74.9

1) 専頭（1957）；溝口（1957）

表7　下肢骨計測値の比較（男性、左）

		有田126 (ST-02)		北部九州 (弥生)		山　口 (弥生)		大　友 (弥生)		津　雲 (縄文)		九　州 (現代)	
		r	l	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1	最大長	—	—	60	430.9	37	434.4	15	420.1	11	415.2	59	406.5
2	自然位長	—	—	18	427.7	26	432.8	17	413.9	11	411.3	59	403.2
6	中央矢状径	—	29	162	29.7	72	29.1	41	28.6	20	28.9	59	26.5
7	中央横径	—	30	166	28.0	72	27.2	42	26.4	20	25.5	59	25.6
8	中央周	—	91	161	90.8	72	88.9	41	87.0	20	86.6	59	82.4
9	骨体上横径	—	32	115	32.6	74	32.7	38	31.6	19	30.4	59	29.4
10	骨体上矢状径	—	26	115	26.2	74	26.0	38	25.2	19	24.8	59	24.3
8／2	長厚示数	—	—	18	21.4	26	20.5	16	21.4	11	21.1	59	20.4
6／7	中央断面示数	—	96.7	162	106.4	72	107.6	41	108.6	20	113.2	58	103.8
10／9	上骨体断面示数	—	81.3	115	80.5	74	80.0	39	80.1	19	81.7	58	82.8
脛　骨													
1	全　長	—	—	27	345.6	19	350.5	10	345.3	10	337.0	61	320.3
1a	最大長	—	—	52	350.5	21	356.9	11	354.8	10	343.0	60	326.9
8	中央最大径	33	—	74	32.0	36	30.6	43	31.0	21	31.7	61	27.8
8a	栄養孔位最大径	38	38	153	36.5	60	35.7	35	34.5	19	34.7	60	30.6
9	中央横径	22	—	75	22.9	36	22.3	43	21.4	21	19.7	61	21.1
9a	栄養孔位横径	24	24	153	25.3	59	25.1	36	23.3	19	21.5	61	23.7
10	骨体周	85	—	74	86.5	36	83.6	41	83.4	20	82.5	62	78.4
10a	栄養孔位周	97	97	151	96.9	58	95.5	34	92.6	19	90.7	61	88.9
10b	最小周	76	76	122	78.4	63	75.4	38	75.6	17	75.6	60	71.3
9／8	中央断面示数	66.7	—	74	72.2	36	73.0	43	69.1	21	62.4	61	76.1
9a／8a	栄養孔位断面示数	63.2	63.2	152	69.5	59	70.5	35	67.7	19	62.0	60	77.5
10b／1	長厚示数	—	—	26	22.7	19	21.5	10	21.9	10	22.9	60	22.4

(ST－１号)は特に長径が小さい。男性はやや長頭に傾くのに対して，女性は逆にかなりの短頭型となっている。

・顔面部は男女とも高顔傾向が明らかである。その Kollmann の上顔示数は ST－１，２号それぞれ，52.2，55.9で，共に中上顔型 mesēn に属す。同傾向は眼窩，鼻部にも認められる。鼻根部をはじめとして，顔面の偏平性が強い。

・２号熟年男性人骨に風習的抜歯を強く疑わせる痕跡が認められた。さらに前歯の上下歯列間に紡錘状の間隙が見られた。

・四肢骨では，男性は近隣の弥生人に類似してかなり太く，長い特徴を見せるが，女性人骨は細小な傾向が強い。その断面示数については，ST－２号の脛骨で偏平性が見られたように，ややばらつきが見られた。

・推定身長は，男性は162.5cmとかなり高身長だが，女性は145.2cmで，この地域の弥生人としては例外的な低身長例である。

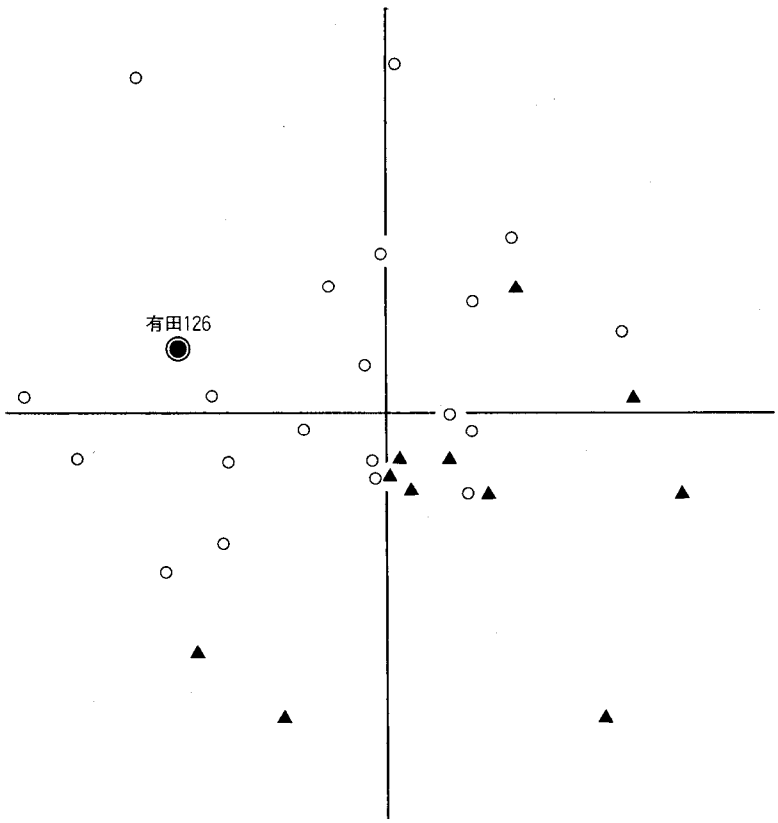


図２．主成分分析（男性、頭蓋９項目）
（○：金隈，▲：津雲・吉胡）

以上，今回出土した2体の弥生人骨については，女性人骨四肢がかなり華奢で，低身長であった他は，顔面の高顔性や偏平性，あるいは男性の太く，長い四肢と高身長など，当地域のいわゆる「渡来系」とされる弥生人としての形態的特徴をほぼ備えた例ということができる。ちなみに図2は，ST－2号男性人骨の頭蓋9項目を用いて，近隣の金隈弥生人，及び津雲，吉胡縄文人の各個体と共に主成分分析を行った結果である。金隈弥生人と縄文人集団がかなり明確に分離される中で，ST－2号は金隈弥生人の分布域の中に位置しており，当人骨もまたこれに類似した集団の一員であることを示す結果となっている。女性がかなり低身長であったが，他の形質では近隣の弥生人と大差を見せず，従来から高顔と低身長の組合せは稀ではないことが明らかになっているので(中橋・永井，1989)，本例もそうした個体変異の1例と考えて大過なかろう。この結果によって当地の弥生人全体を代表するのはまだ早計に過ぎるが，これまで周辺の諸遺跡から出土していた弥生人の特徴から考えて，当地にもまた類似の，いわゆる「渡来系」とされる弥生人が居住していたと考えるのが自然であり，今回の結果もそうした見解を裏付けているものと考える。ただ，当地域の弥生人の中にも種々の地域差が存在することも明らかになっているので，その点は今後資料の充実を図って検討していくべき課題であることは言うまでもない。

当人骨で気付いた特記所見として，2号男性人骨において，抜歯の痕跡とともに，前歯の上下歯列間に紡錘状の間隙が認められた点をあげておきたい。抜歯風習については，土井ケ浜等(中橋，1990)とは異なって北部九州の甕棺弥生人ではかなり類例が少ないことが知られているが，しかし近在の金隈遺跡でもほぼ同時代の甕棺墓から，小数ながら同型式の抜歯人骨が出土している(中橋，他，1985)。詳しくはさらに資料を増やして検討する必要があるが，ともあれ本例は当地の弥生社会にもまだこの風習が残存していたことを示唆する貴重な追加例となるものである。

当人骨でさらに興味をひかれるのは，特異咬耗による，前歯上下歯列間の紡錘状の間隙の存在である。各切歯は他歯とは異なっていずれも歯根部近くまで強く咬耗しており，しかもその歯冠咬合面は舌側から唇側へと間隙を広げるかたちで傾斜し，左右犬歯の間で，上下最大幅7－8㎜程度の紡錘状の間隙をつくっている。こうした状況は，これまでも特に縄文人で類例が報告されており(鈴木，1950：島，1959)，何等かの特殊な機会的摩擦，例えば皮なめしのような生活作業と結び付けた考察がなされている。北部九州・山口地方弥生人でも稀ながら同じ様な例が存在しており(未発表)，その原因についてはまだ多くの検討の余地を残すものの，人骨上に古代人社会における生活風習の一端が遺された数少ない例として，今後の類例の探索とその詳しい成因研究が望まれる。

(当人骨を調べる機会を与えられ，種々御教示賜った福岡市教育委員会の諸先生，諸氏に深謝いたします。)

文　献

阿部英世　(1955)：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」　人類学研究　2。

原田忠昭　(1954)：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」　人類学研究　1。

Howells, W. W. (1973)："Cranial variation in Man"Pap. Peabody Mus. Archaeol. Ethnol., vol. 67, Harvard Univ.

鑄鍋勝登　(1955)：「九州人下腿骨の研究」　人類学研究　2。

石沢命達　(1931)：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究　第3部　下肢骨の研究」　人類学雑誌　46。

金高勘次　(1928)：「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」　人類学雑誌　43。

清野謙次・平井隆(1928)：「津雲貝塚人骨の人類学的研究　第3部　上肢骨の研究」　人類学雑誌　43。

清野謙次・平井隆(1928)：「津雲貝塚人骨の人類学的研究　第4部　下肢骨の研究」　人類学雑誌　43。

清野謙次・宮本博人(1925)：「津雲貝塚人の人類学的研究　第2部　頭蓋骨の研究」　人類学雑誌　41。

Martin-Saller (1957)："Lehrbuch der Anthropologie" Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

松下孝幸　(1981)：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」　大友遺跡，佐賀県呼子町文化財調査報告書　1。

溝口静男　(1957)：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」　人類学研究　4。

内藤芳篤　(1971)：「西北九州出土の弥生時代人骨」　人類学雑誌　79。

中橋孝博　(1988)：「古人骨の性判定法」　日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）　六興出版。

中橋孝博　(1990)：「土井ケ浜弥生人の風習的抜歯」　人類誌　98(4)。

中橋孝博・永井昌文 (1985)：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」　吉母浜遺跡，下関市教育委員会。

Nakahashi, T. & M. Nagai (1986)：Sex assessment of fragmentary skeletal remains, J. Anthrop. Soc. Nippon, 94(3).

中橋孝博・永井昌文 (1989)：「弥生人の形質」　弥生文化の研究1，雄山閣。

中橋孝博・土肥直美・永井昌文 (1985)：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」　史跡　金隈遺跡，福岡市埋蔵文化財調査報告書　123。

島　五郎　(1959)：「古墳時代及び石山石器時代人に見た歯牙摩耗について」　人類誌　67。

専頭時義　(1957)：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」　人類学研究　4。

鈴木　尚　(1950)：「相模平坂貝塚（早期縄文式遺跡）の人骨について」　人類誌　61。

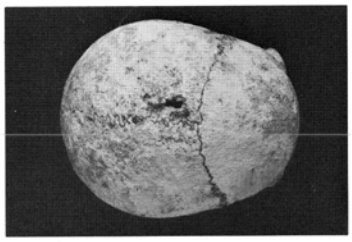
鈴木　尚　(1963)：「日本人の骨」　岩波新書477，岩波書店。

住谷　靖　(1959)：「日本人における歯の異常の統計的観察」　人類学雑誌　67。

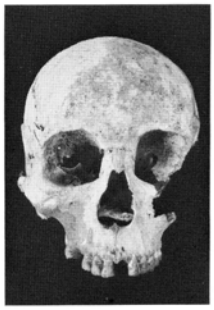
Yamaguchi, B. (1973)：Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania, Bull. Nath. Sci. Mus., Tokyo, 18(1).

図版

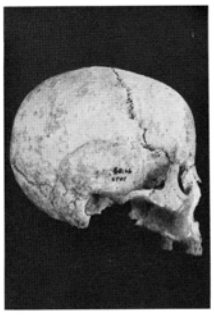
①



②

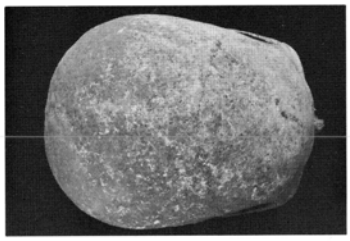


③

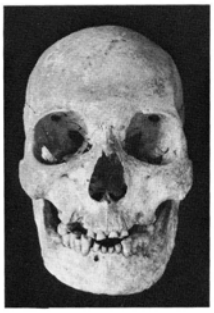


有田126、ST－１号
（女性・熟年）

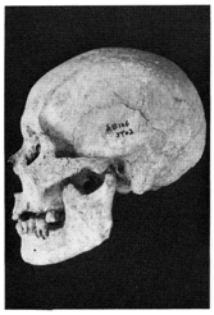
④



⑤

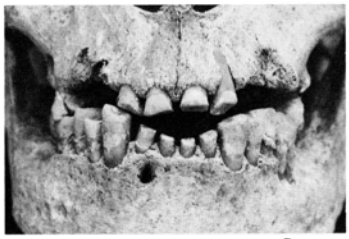


⑥



有田126、ST－２号
（男性・熟年）

⑦



ST－２号、抜歯痕（$\frac{c}{}$）
と前歯の特異咬耗

図　　版

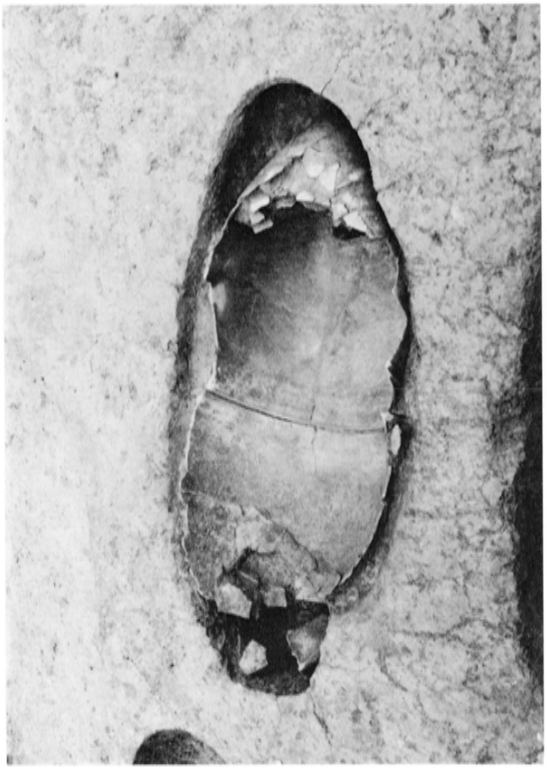
PL. 1

有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）

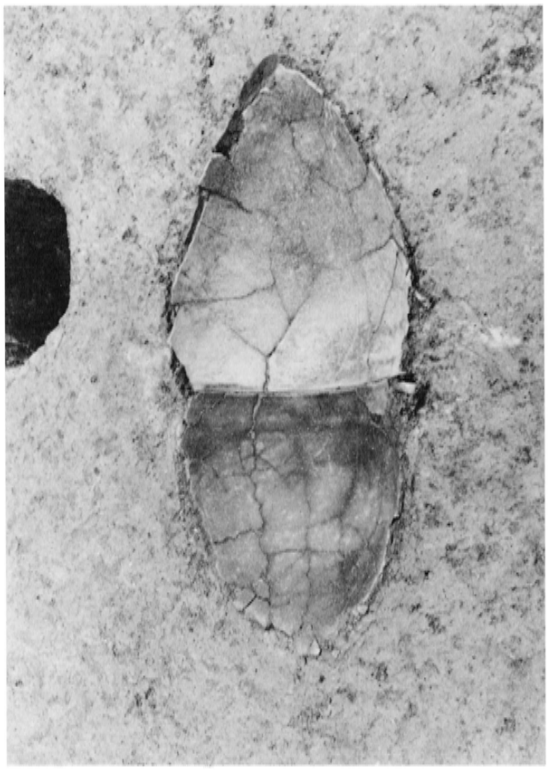
(1) 第119次調査区南側全景（北から）

(2) 同調査区北側全景（南から）

第119次調査区

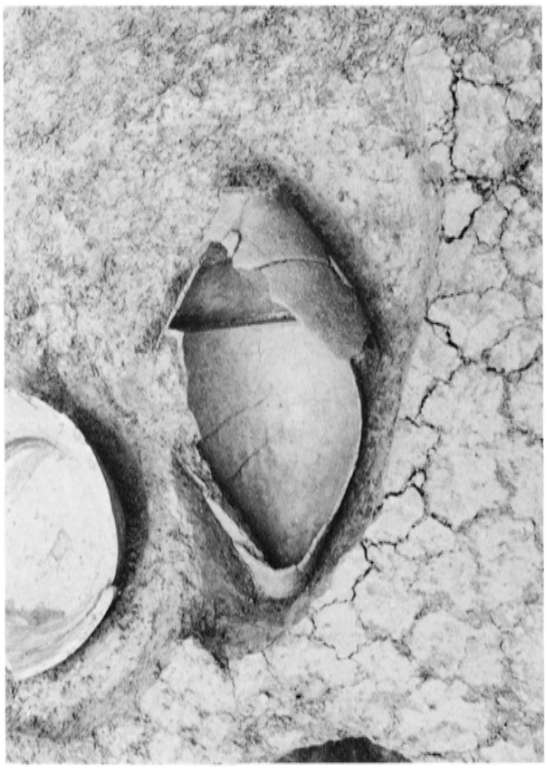


(1) ST01（北西から）



(2) ST02（北西から）

(3) ST03（北東から）



(4) ST06（北東から）

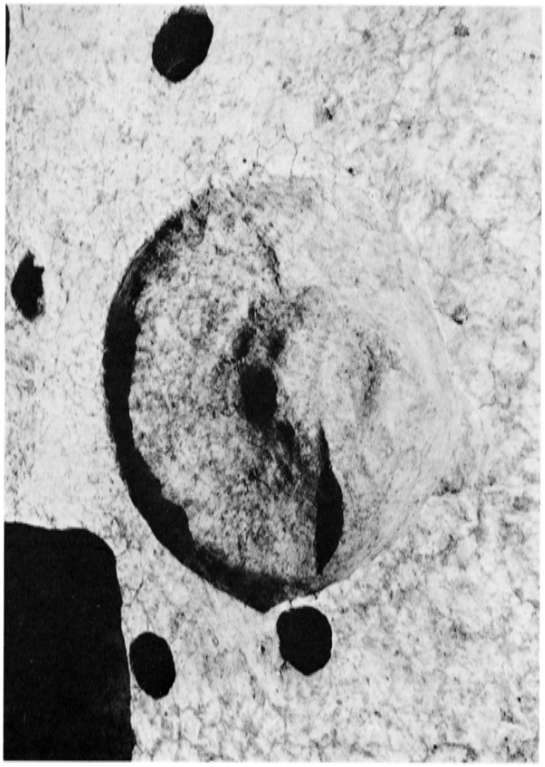
(1) ST04（南から）

(2) ST05（西から）

第119次調査区

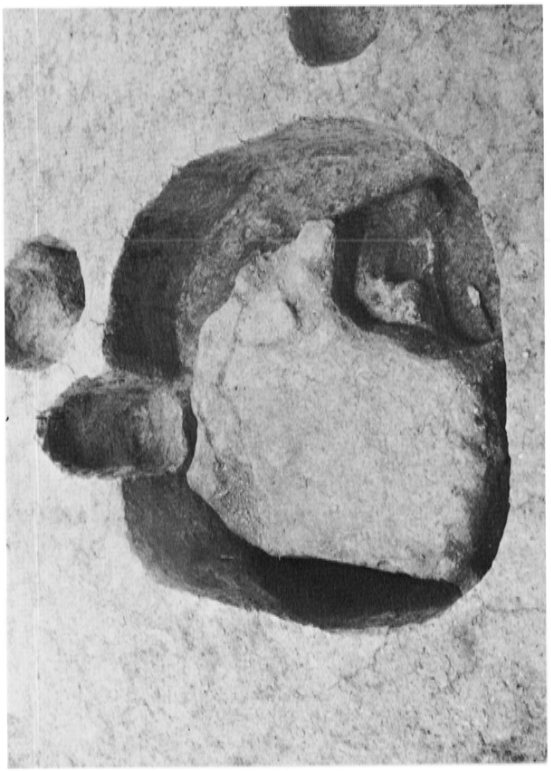
(1) SK01（東から）

(2) SK02（南から）



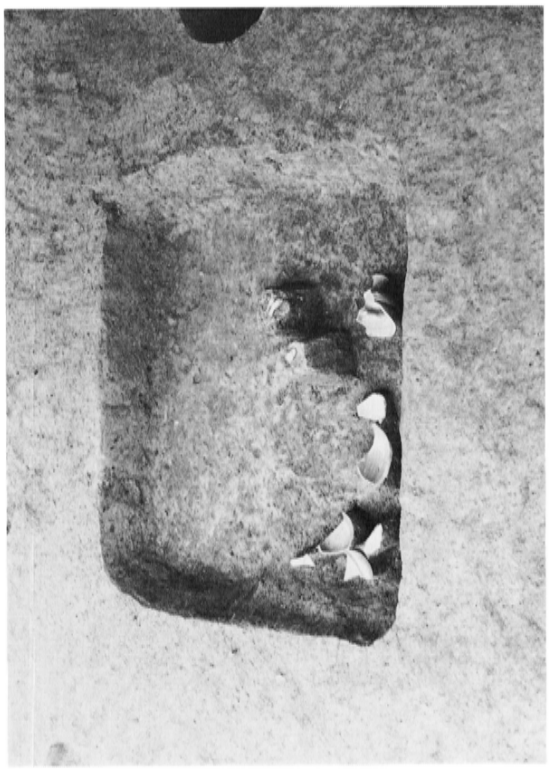
(3) SK03（東から）

(4) SK04（東から）



(1) SK06（南から）

(2) SK08（南から）



(3) SK10（西から）

(4) SK11（西から）

第119次調査区

(1) SK 12（南から）

(2) SK 23（西から）

(3) SK 24（東から）

(4) SK 26（北東から）

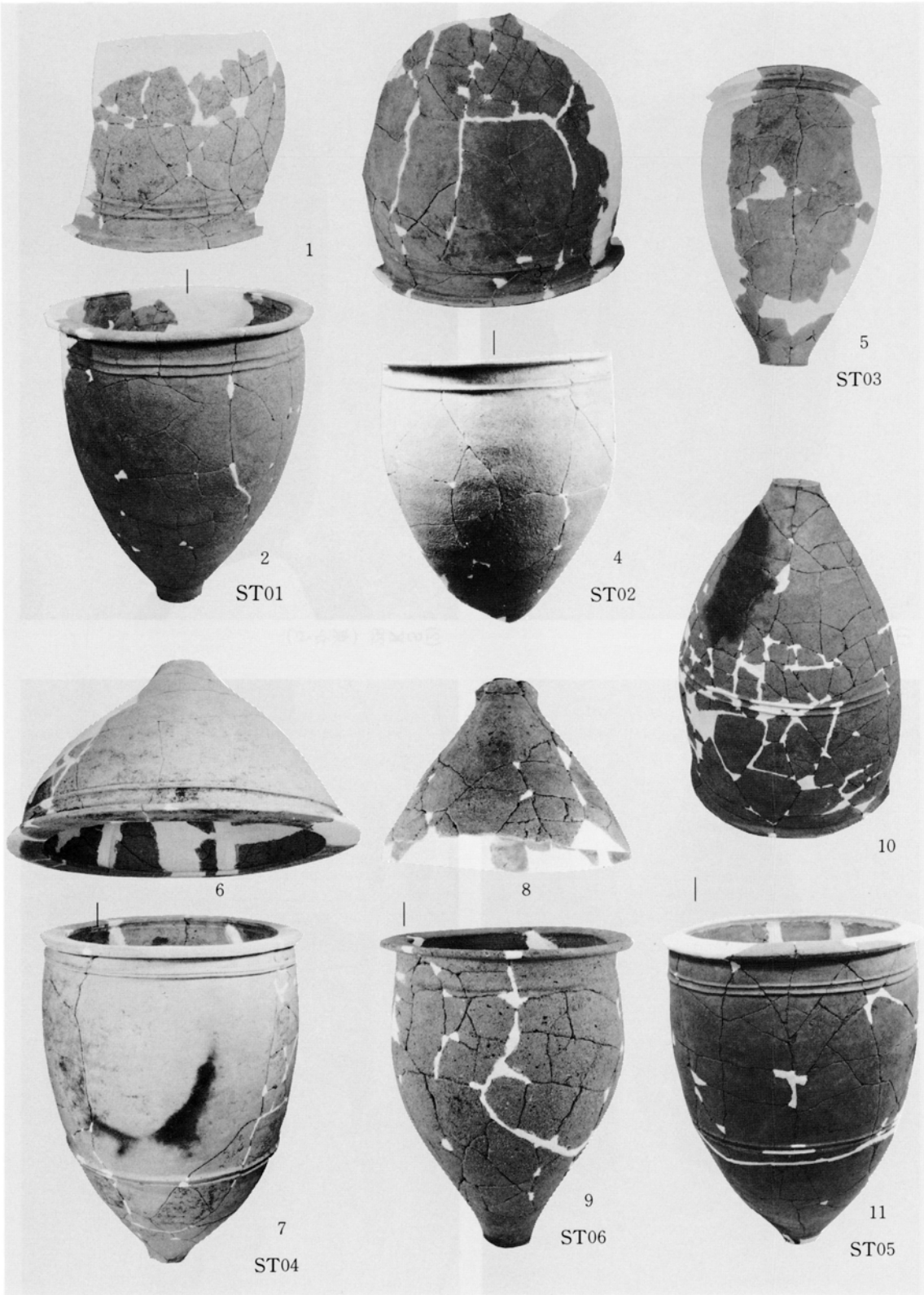
(1) SK27（北から）

(2) SK28（東から）

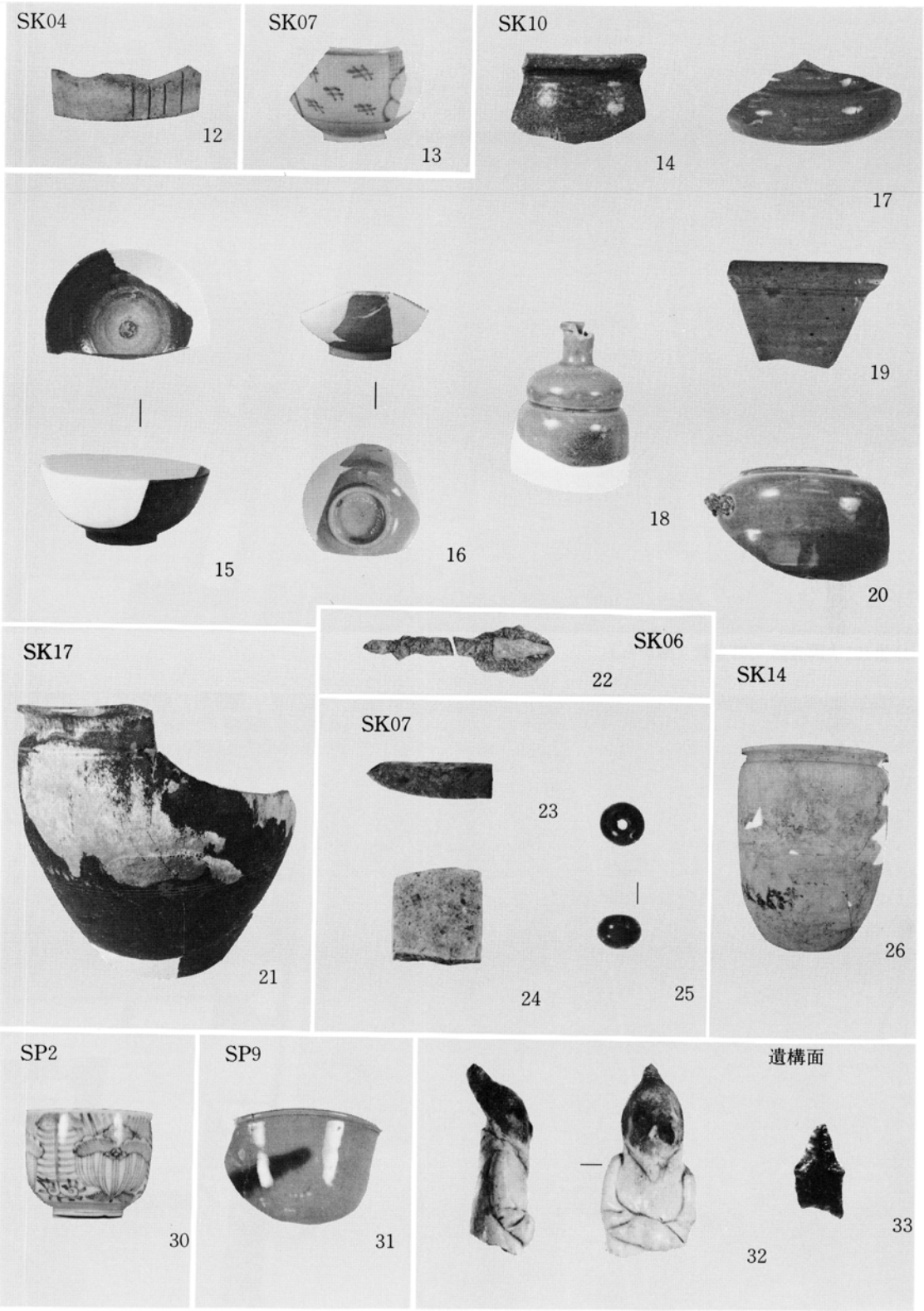
(3) SK29（北から）

(4) 防空壕（南から）

第119次調査区



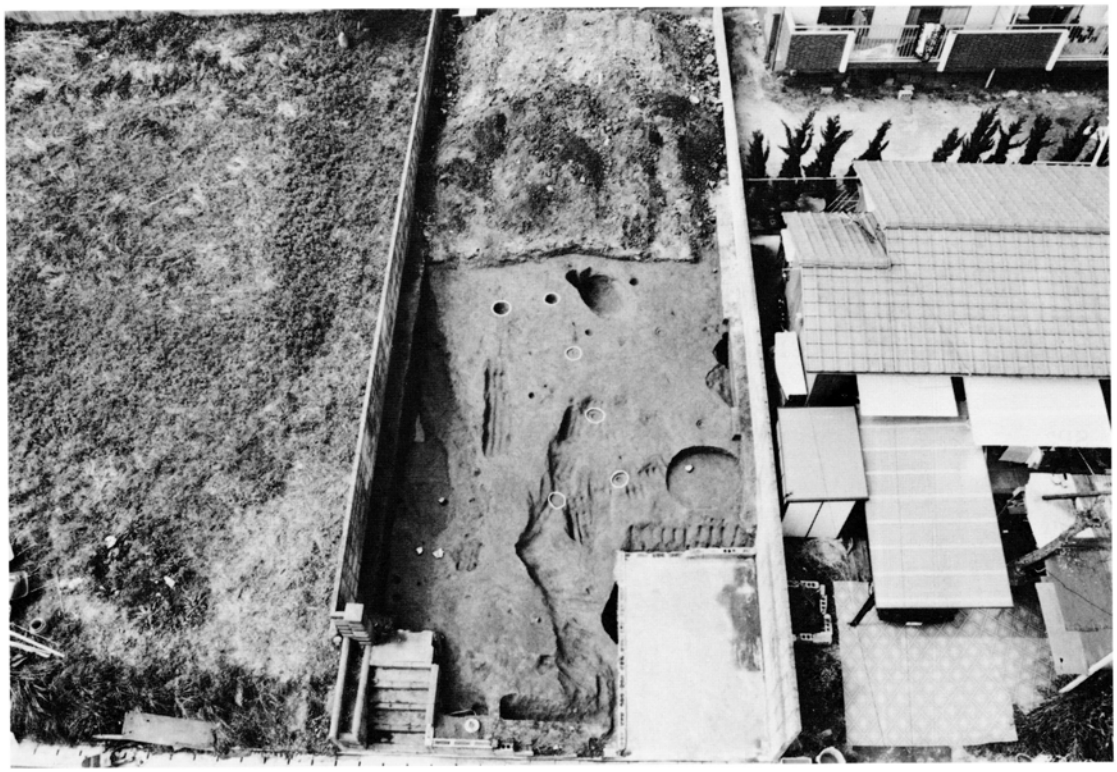
ST01～06



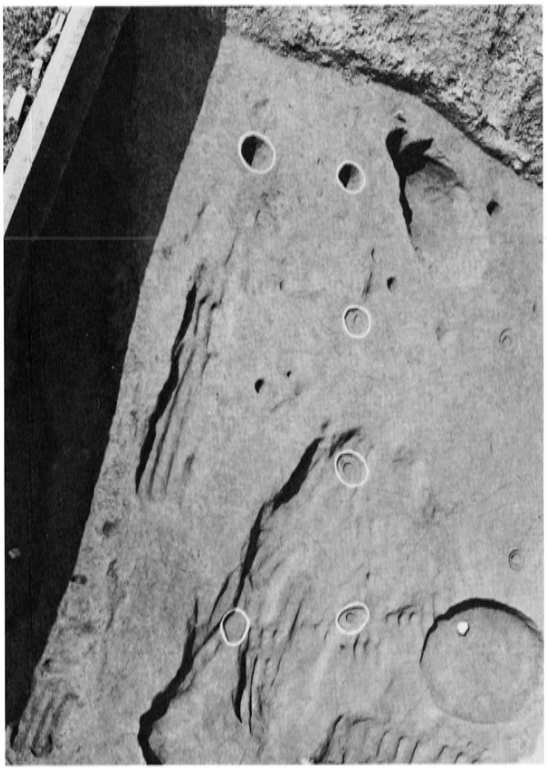
土坑・ピット・遺構面出土遺物

第121次調査区

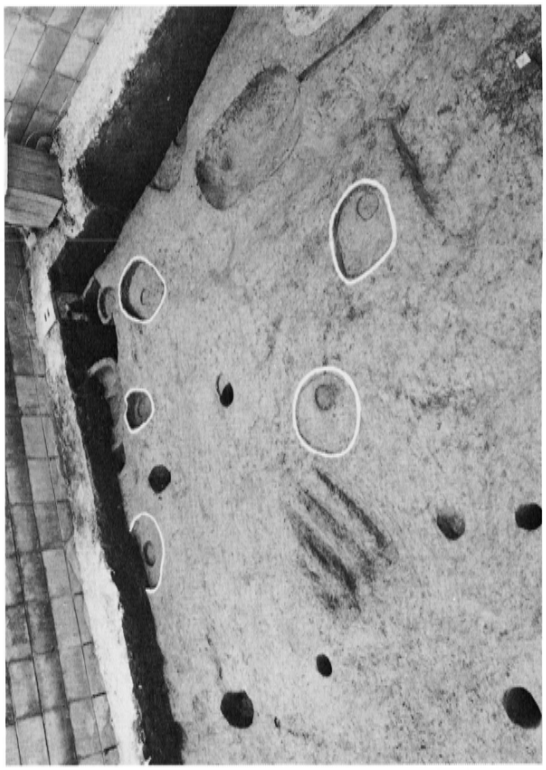
(1) 第121次調査区北側全景（南から）



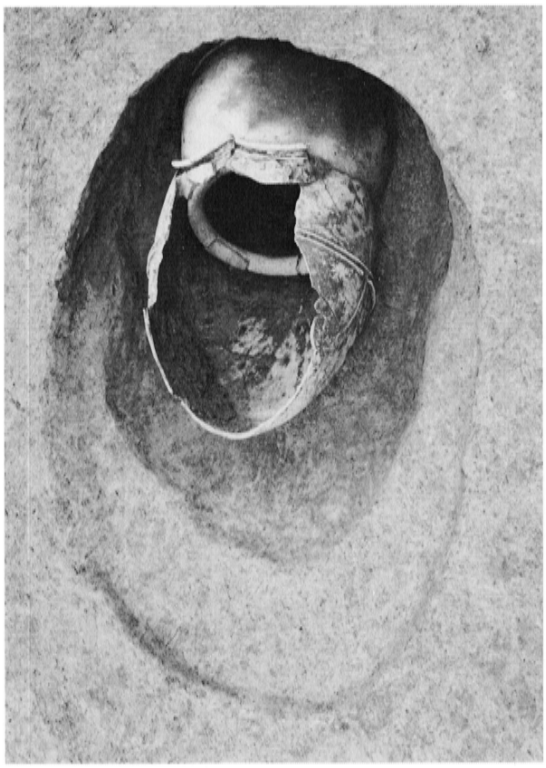
(2) 同調査区南側全景（南から）



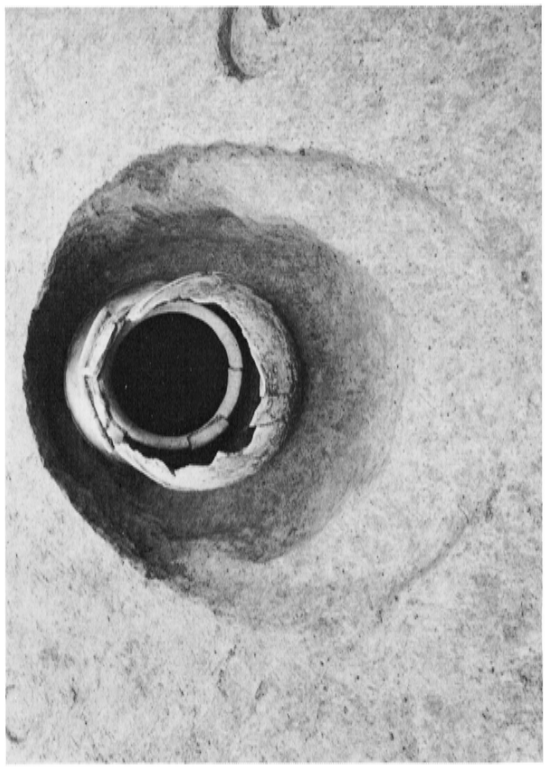
(1) SB01（東から）



(2) SA01（東から）

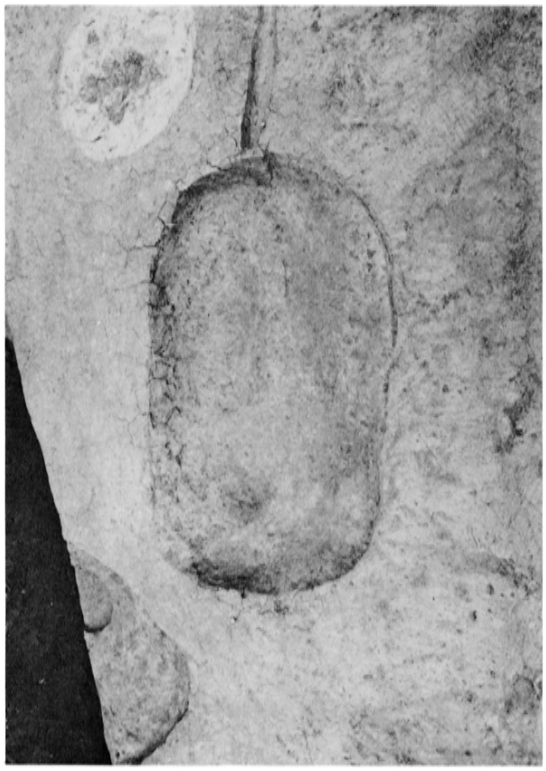


(3) ST01（東から）

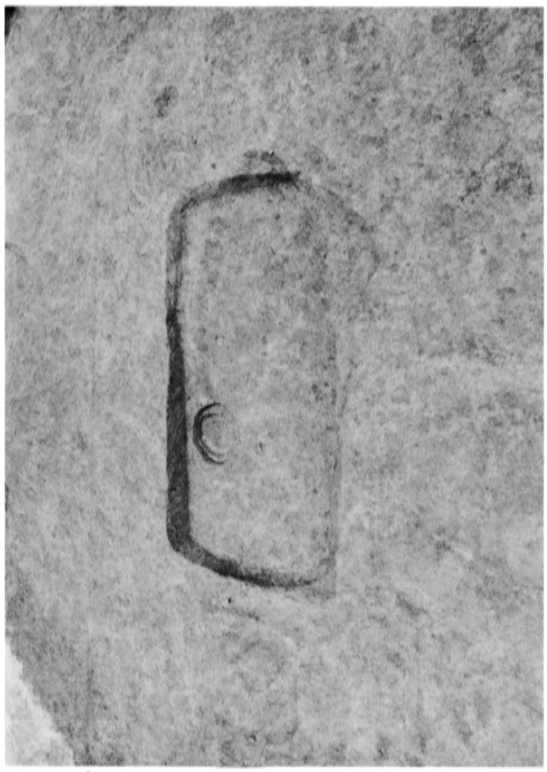


(4) 同（南東から）

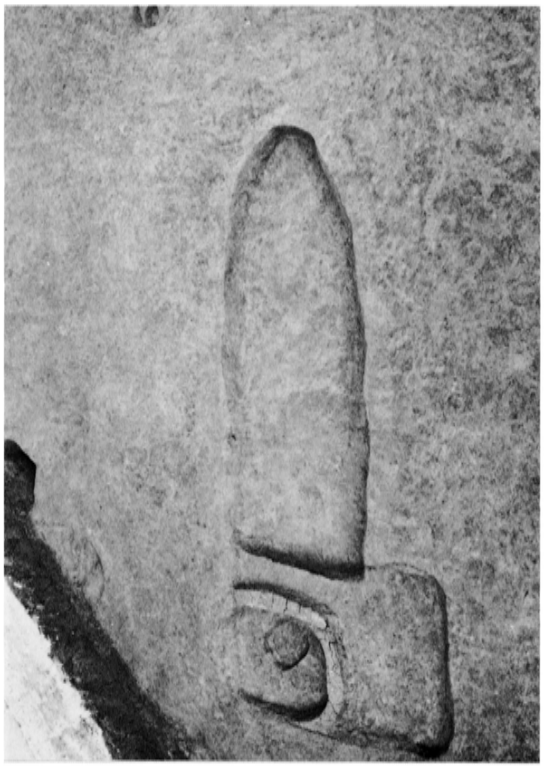
第121次調査区



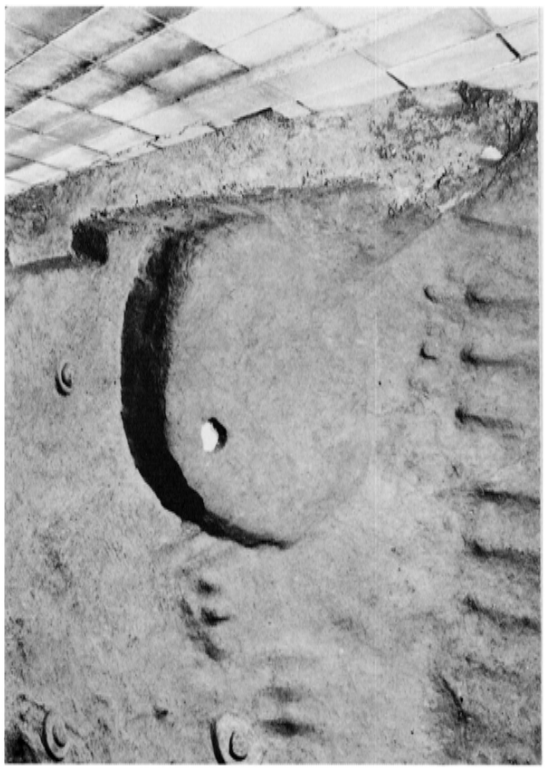
(1) SK01（南から）



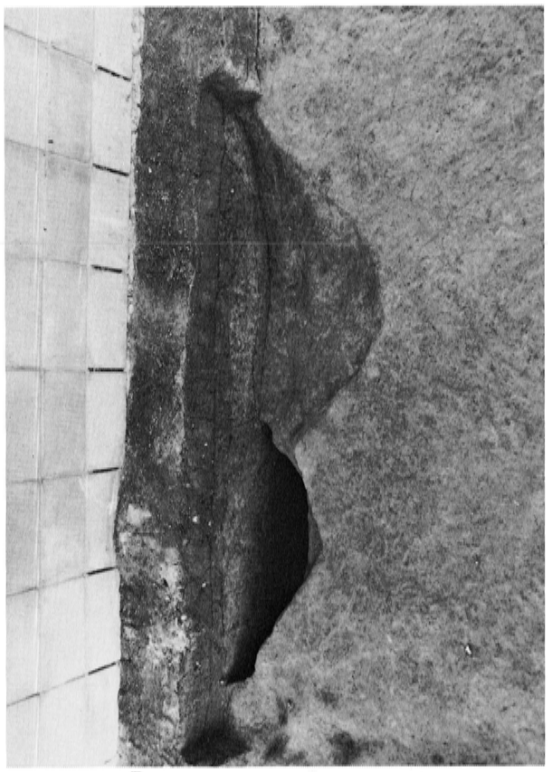
(2) SK02（（北西から）



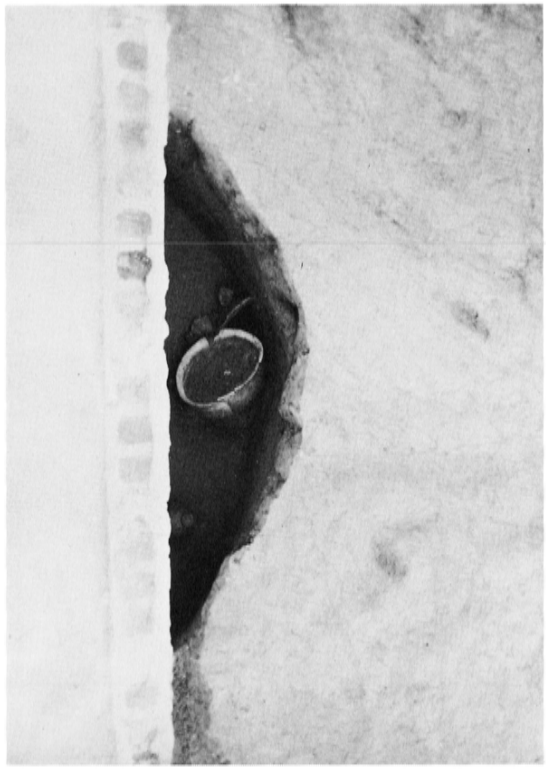
(3) SK03（北西から）



(4) SK07（南から）

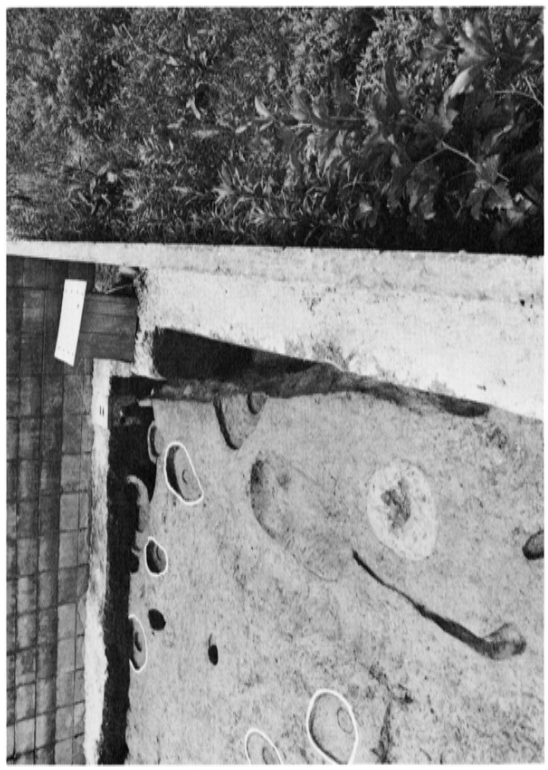


(1) SK06・09（西から）



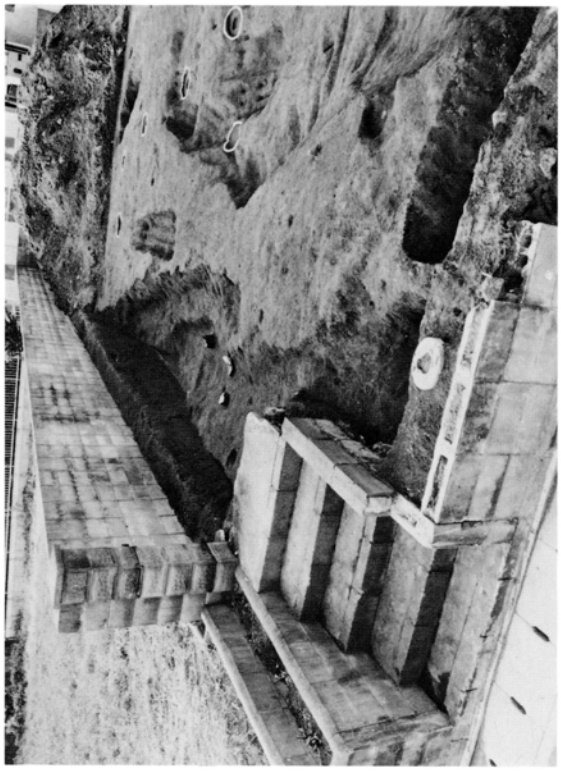
(2) SK08（東から）

(3) 同遺物出土状況（南東から）



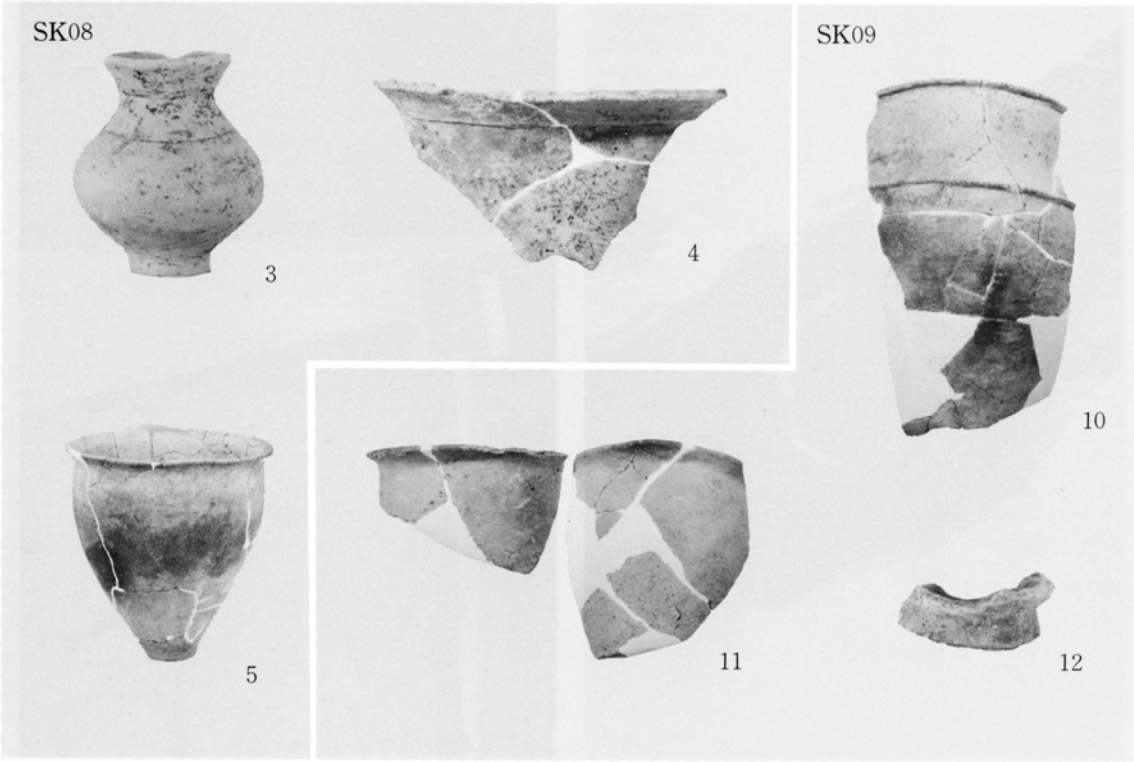
(4) SD01（東から）

第121次調査区



(1) SD02（南から）

(2) 同遺物出土状況



(3) SK08・09出土遺物

SD02

14

15

16

18

ST01

1

2

19

20

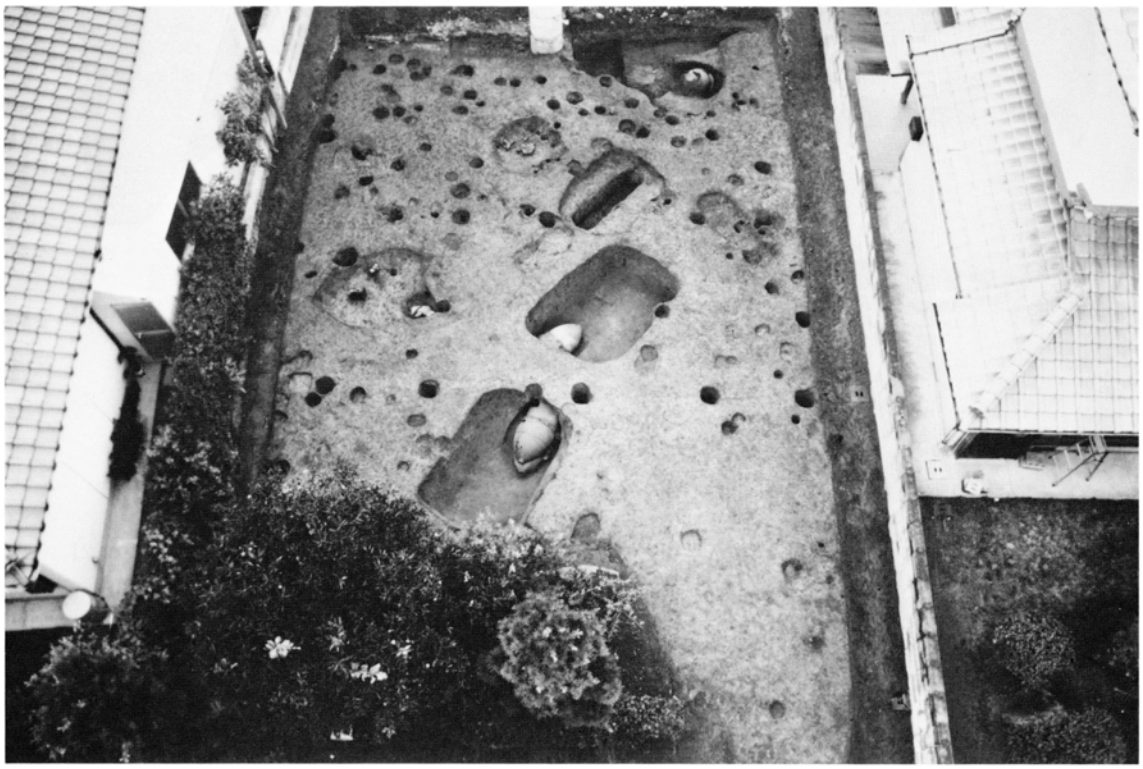
SB01

21

ST01・SD02・SB01出土遺物

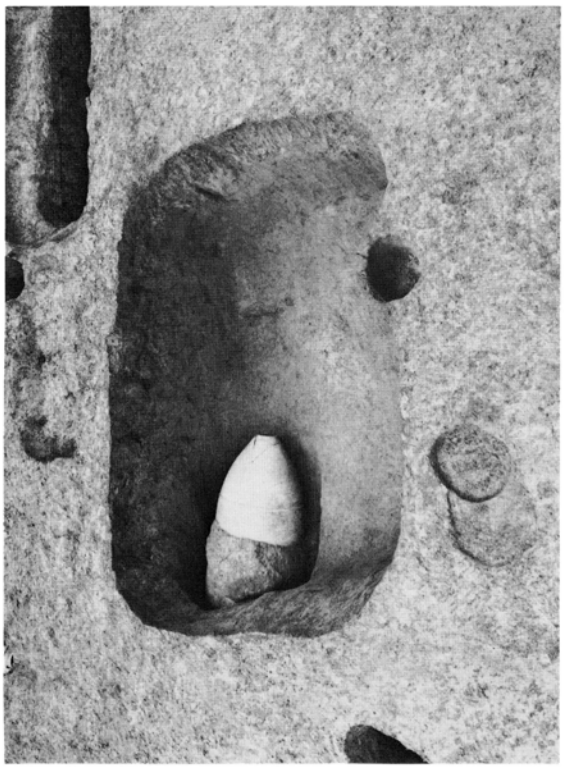
第126次調査区

(1) 第126次調査区全景（北東から）

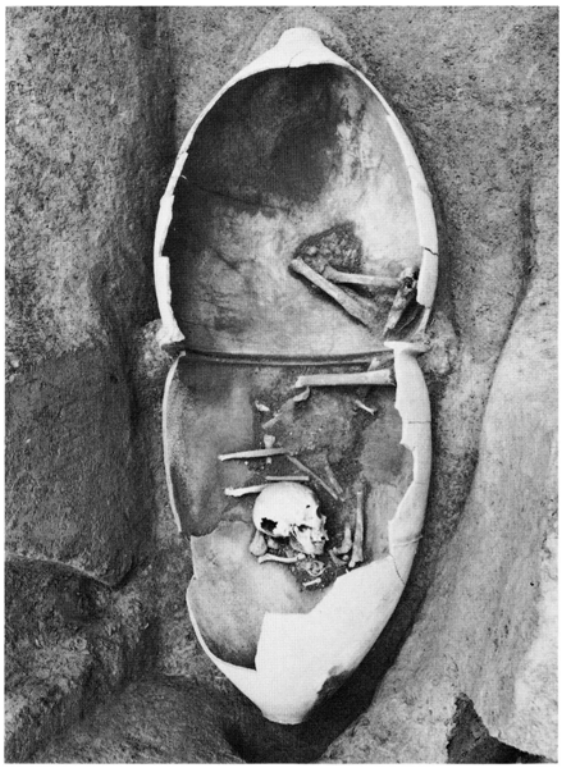


(2) 同全景（南から）

(1) ST01・02（北東から）

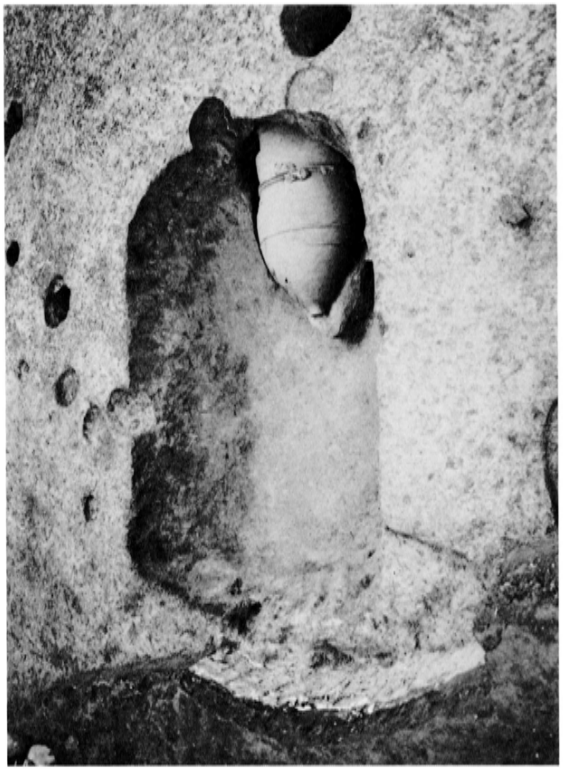


(2) ST01（南東から）

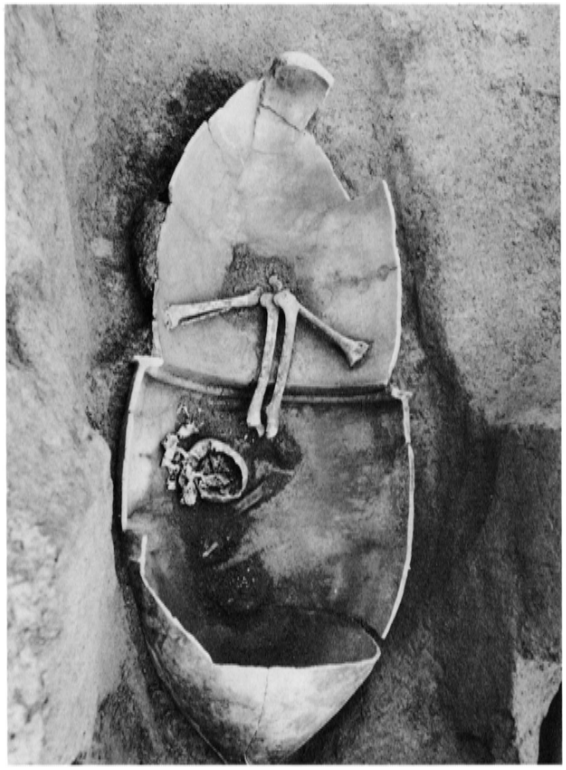


(3) 同人骨出土状況（南東から）

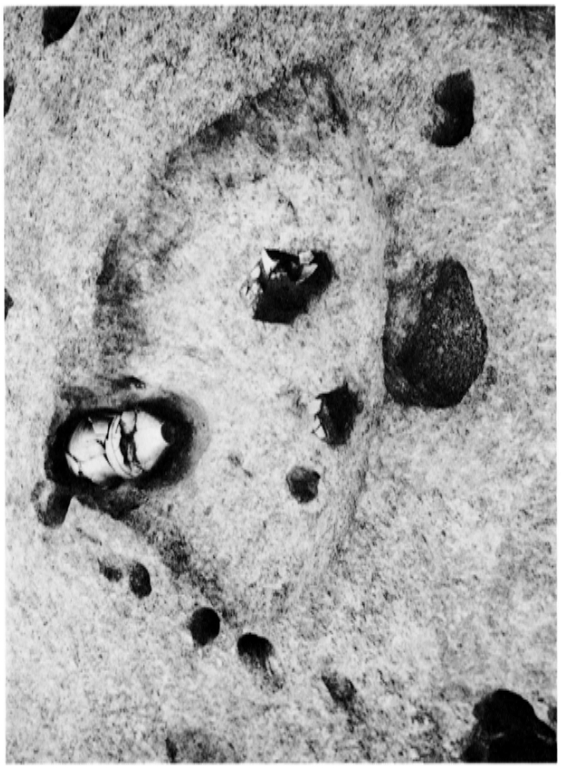
第126次調査区



(1) ST02（南東から）

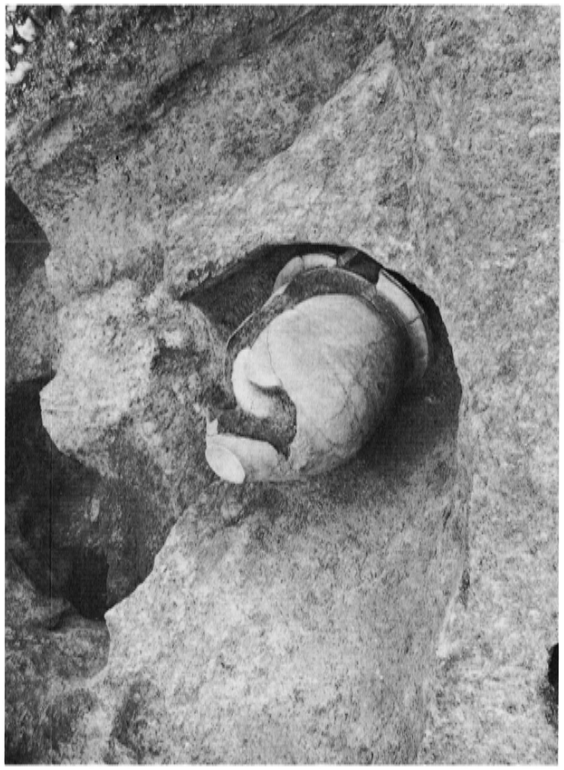


(2) 同人骨出土状況（北西から）



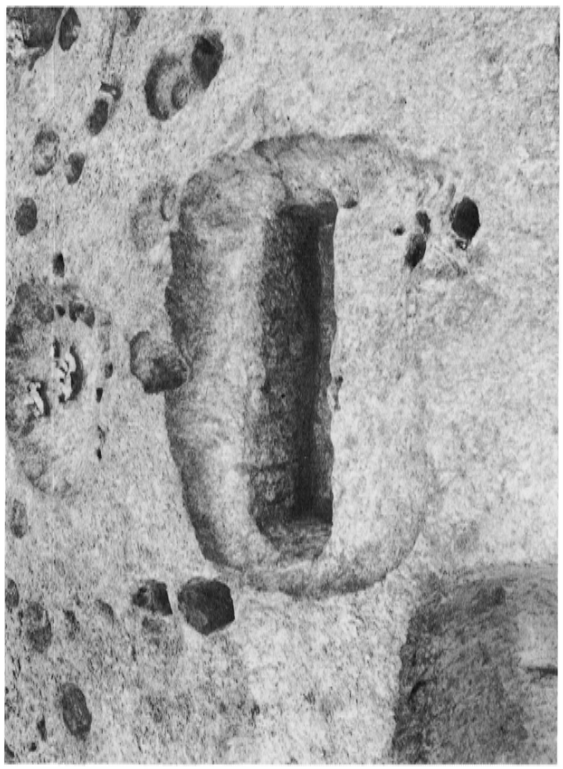
(3) ST03・SK03（北西から）

(4) ST03（北東から）



(1) ST04（南東から）

(2) 同人骨出土状況（南東から）

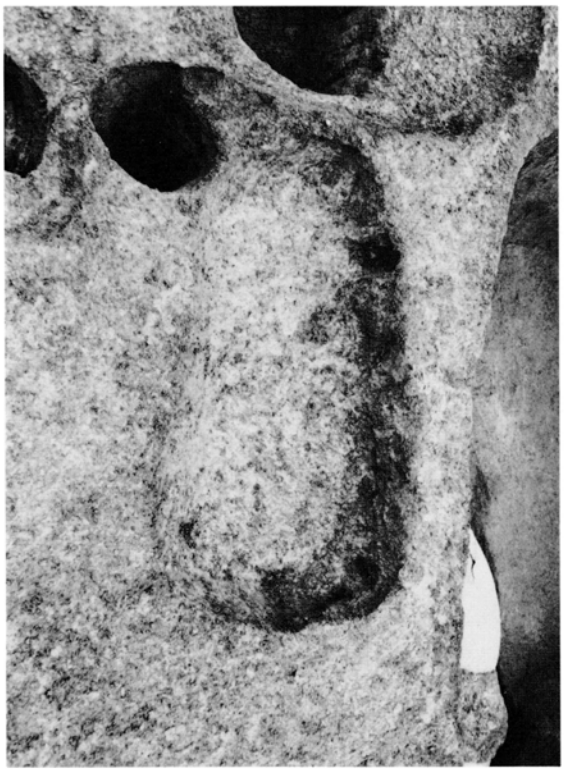


(3) SR01（南東から）

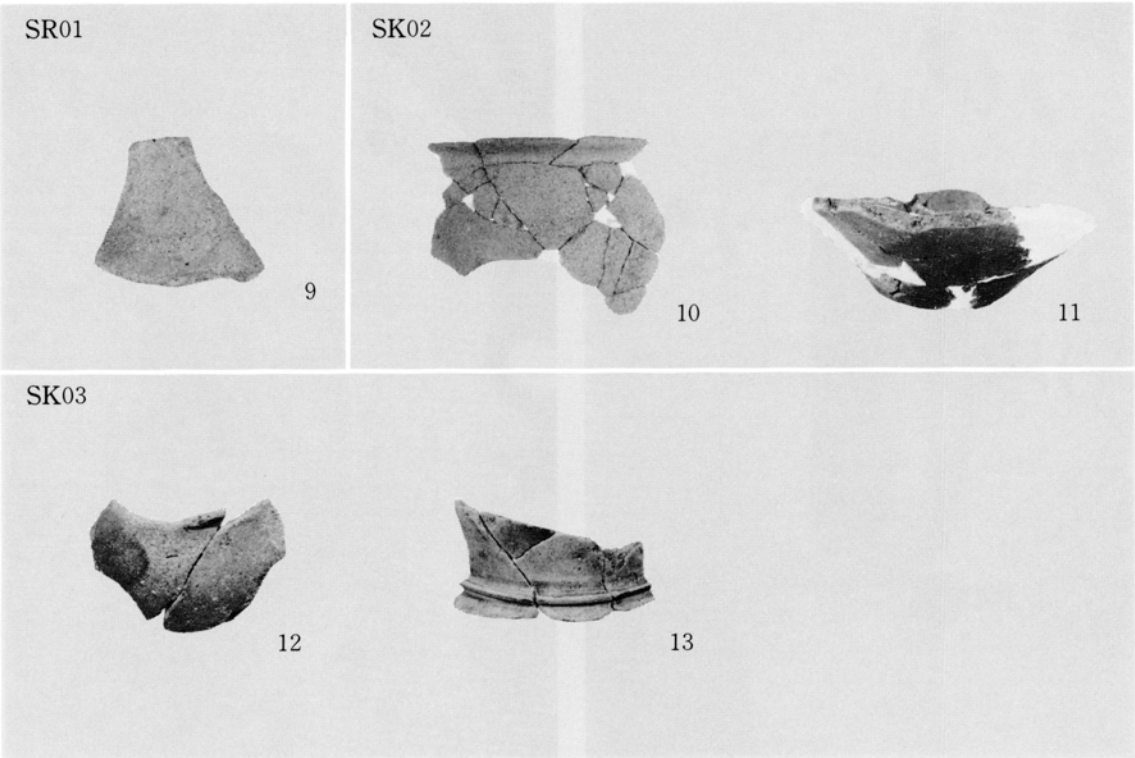
(4) SK01（北東から）

第126次調査区

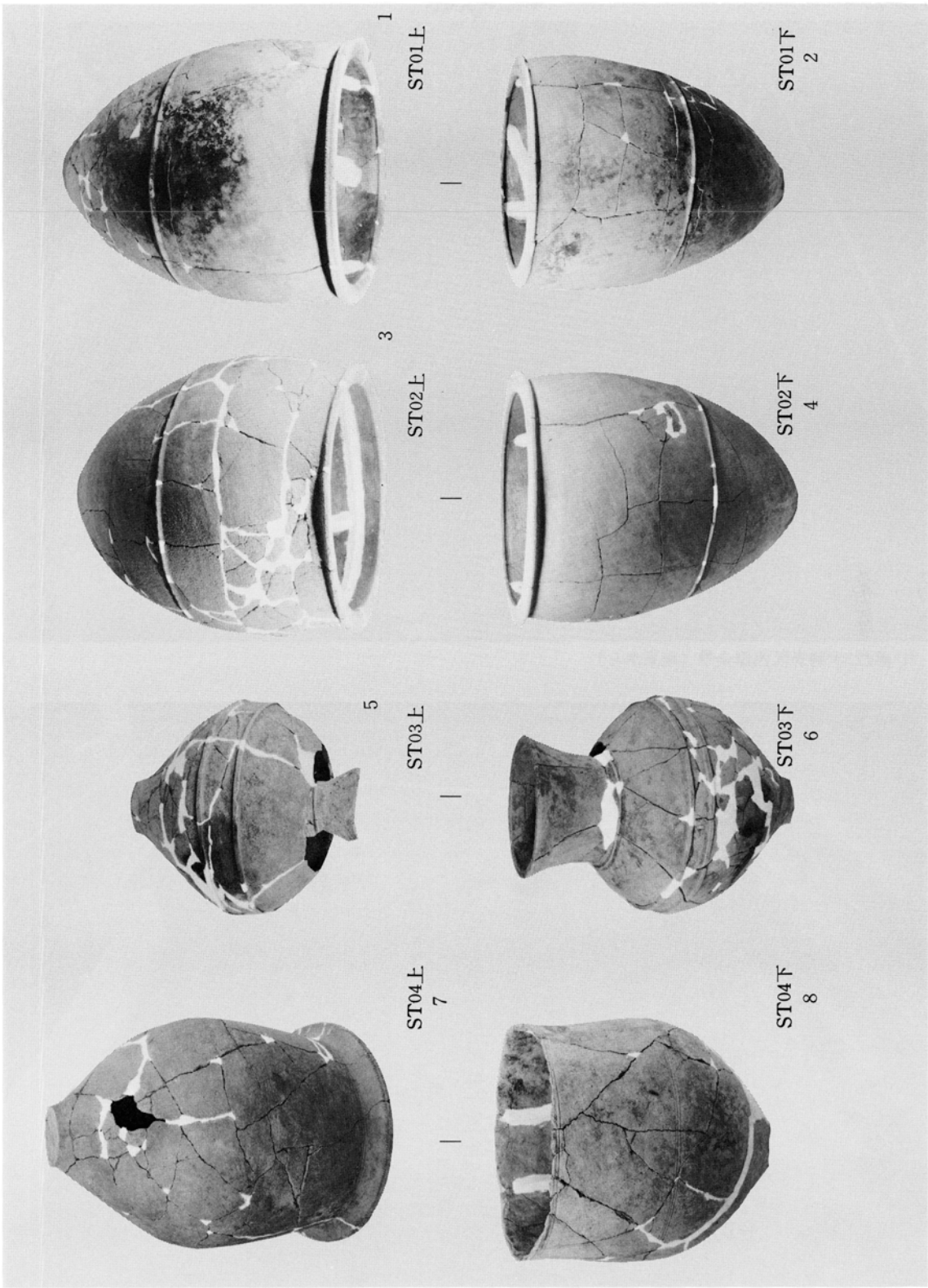
(1) SK02（南から）



(2) SK04（北西から）



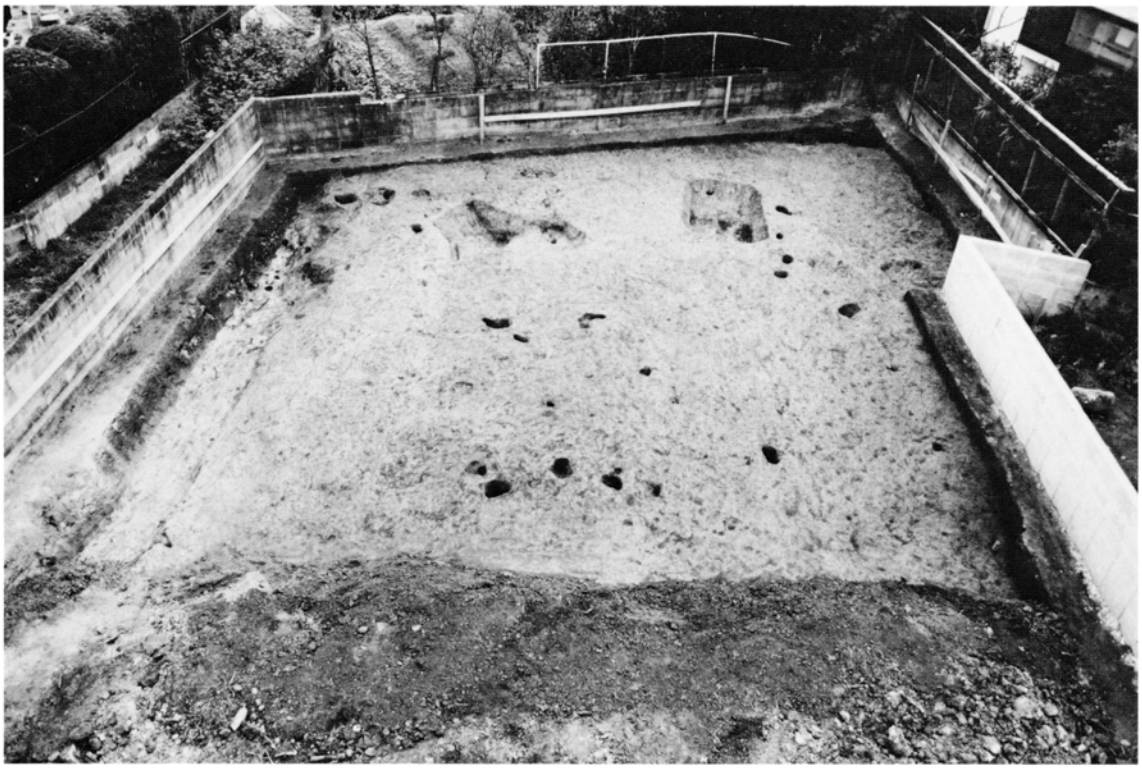
(3) SR01・SK02・03出土遺物



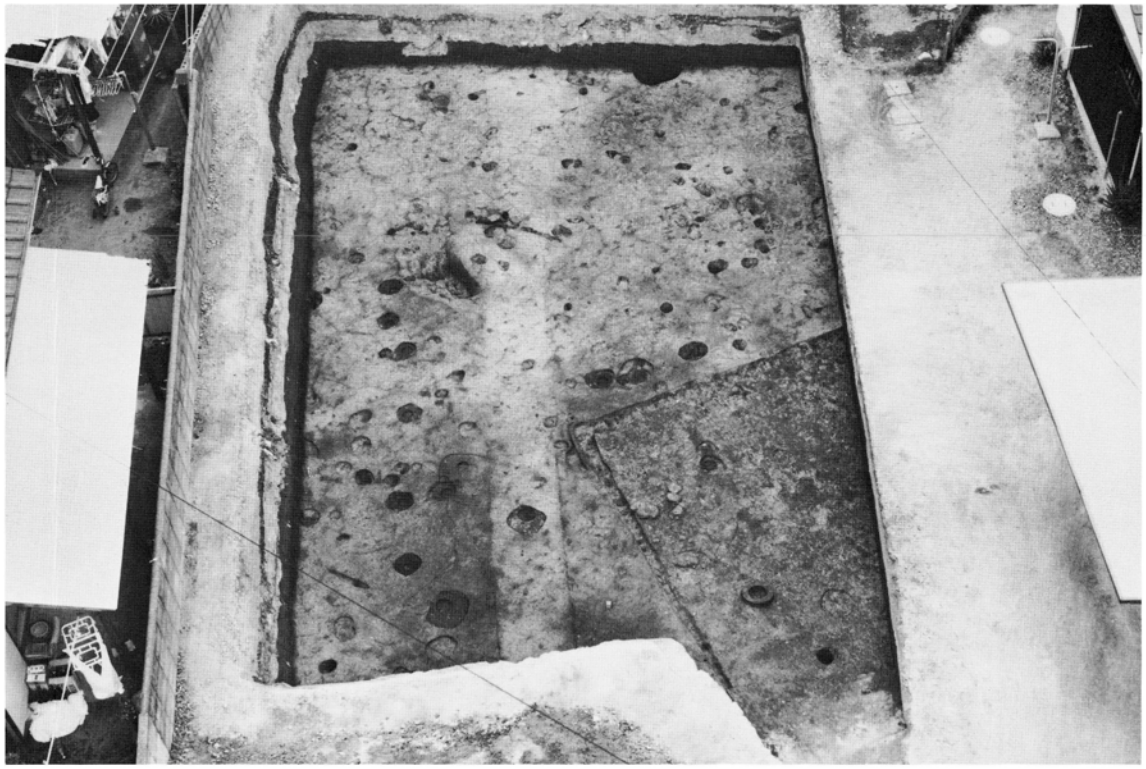
ST01～04

第127次調査区

(1) 第127次調査区西側全景（南東から）

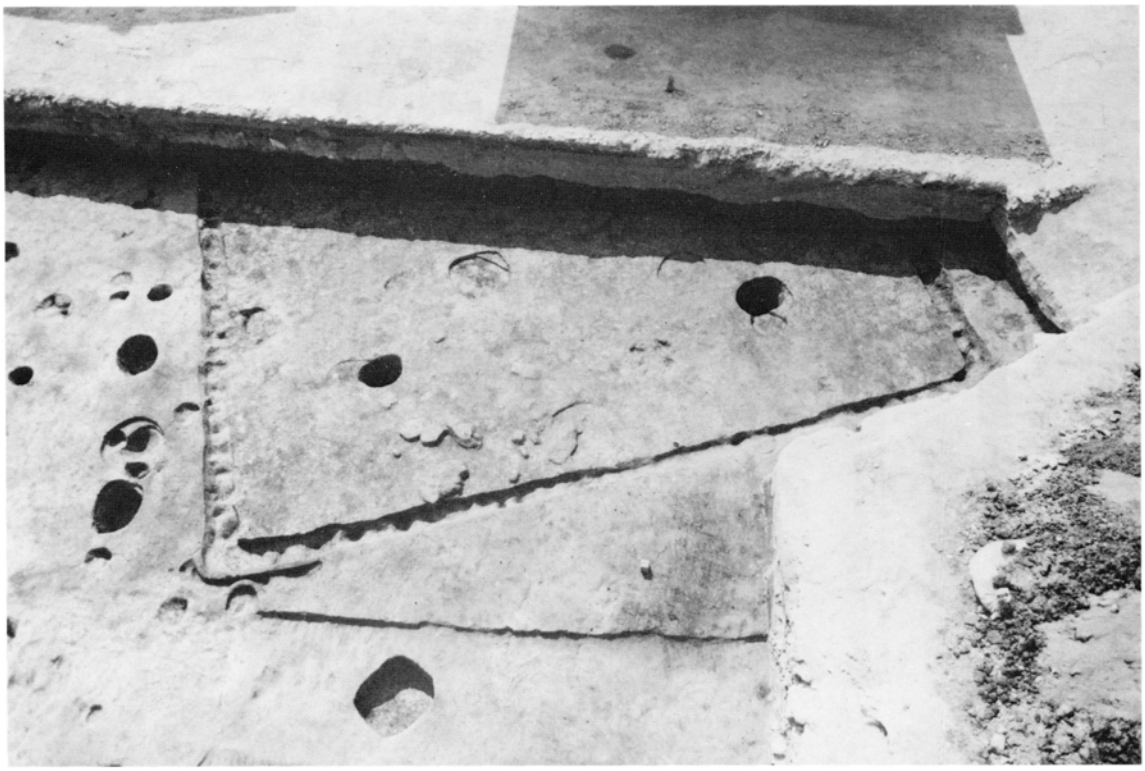


(3) 同東側全景（北西から）

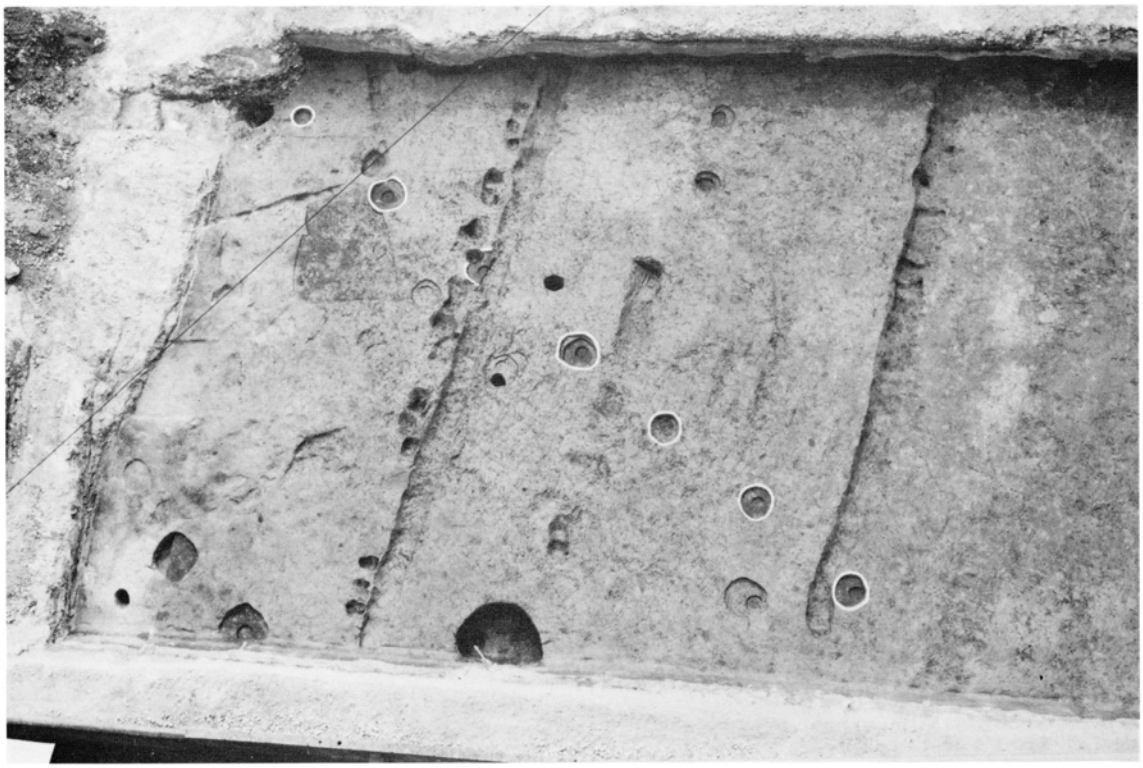


(1) 第128次調査区東側全景（北西から）

(2) 同西側全景（北西から）



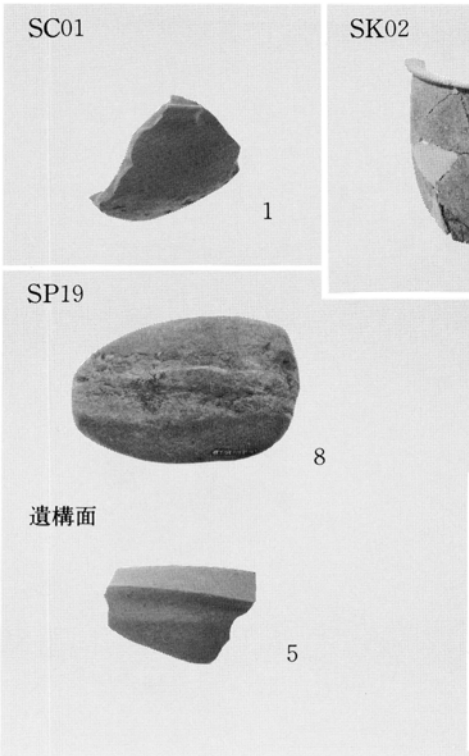
(1)SC01（北から）



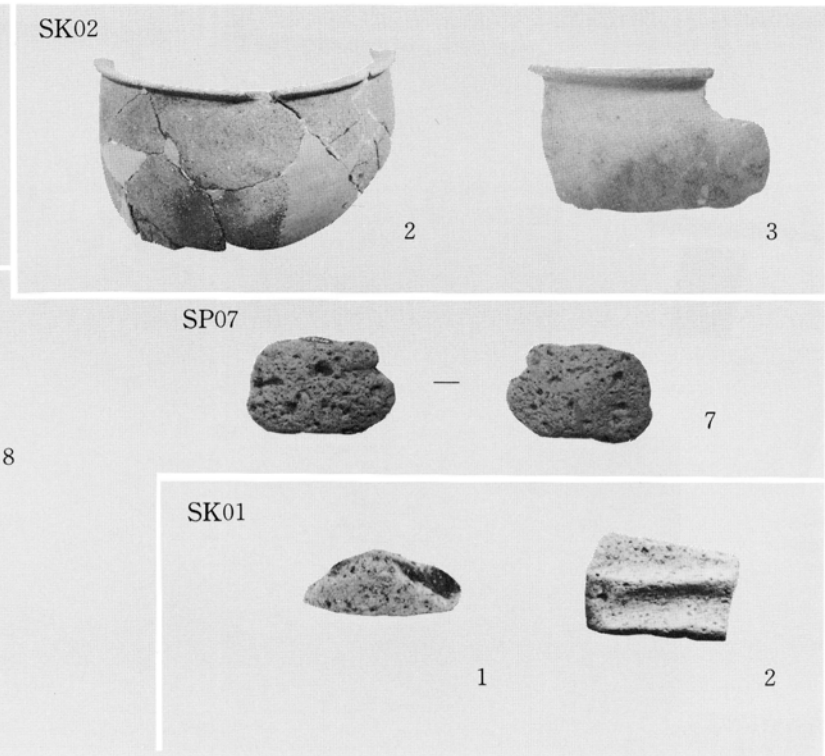
(2) SA01（北から）

(1) SK01（北西から）

(2) SK02（南西から）

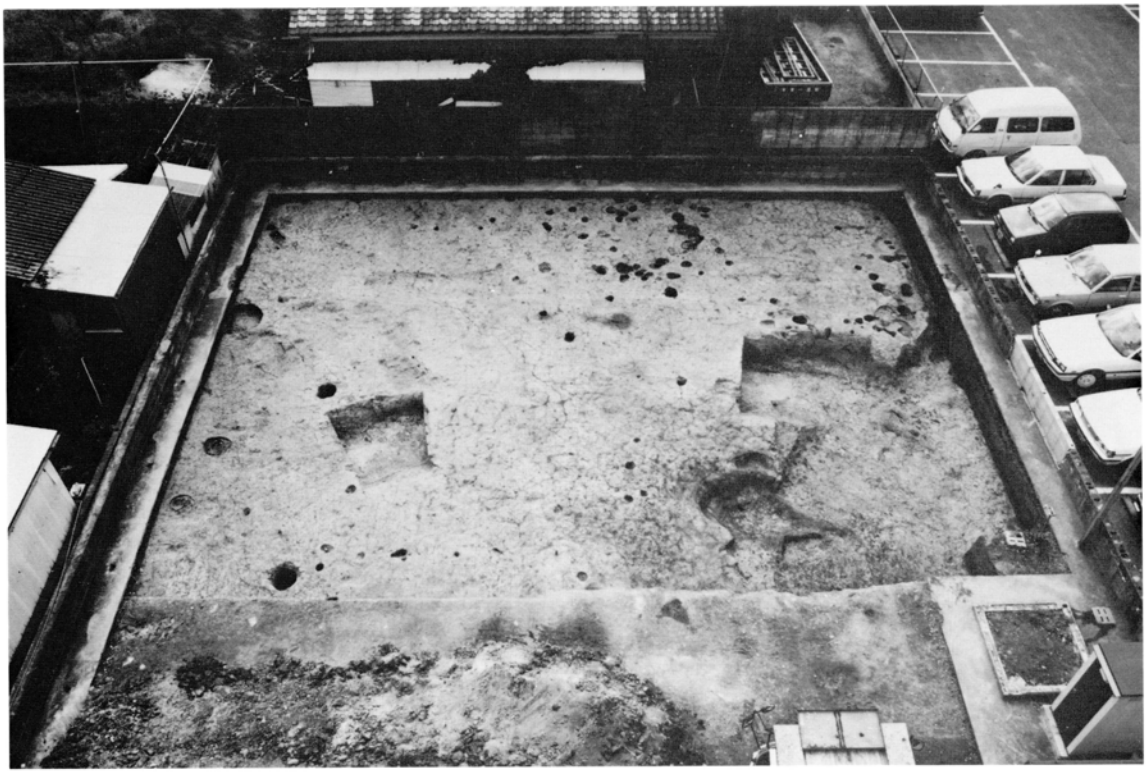


(3) 各遺構出土遺物



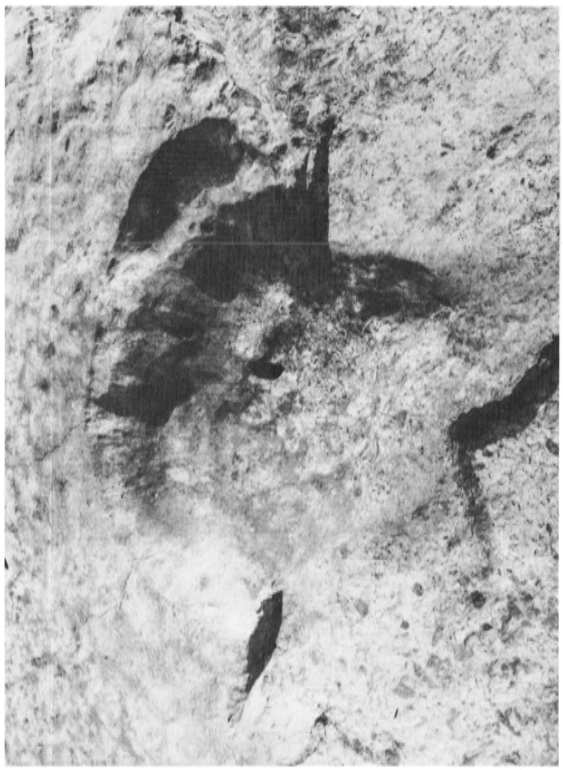
(4) 第127次調査区出土遺物

第129次調査区



(1) 第129次調査区南側全景（北から）

(3) 同北側全景（北から）



(1) SK01（西から）

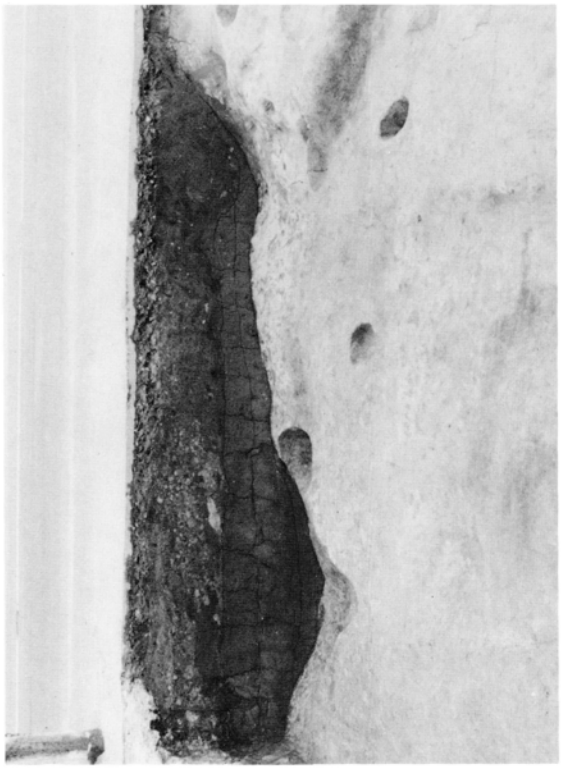
(2) SK02（西から）

(3) SX01（北から）

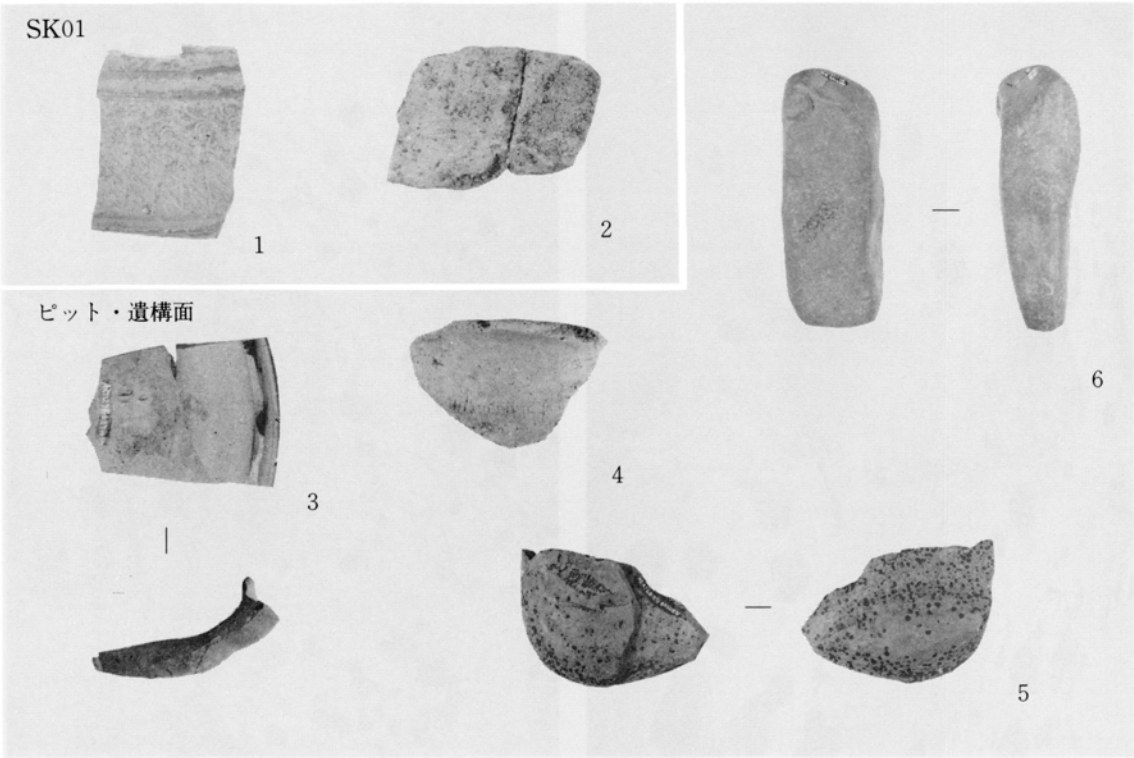
(4) SX01及びピット群（西から）

第144次調査区

(1)調査区南側ピット群（北から）

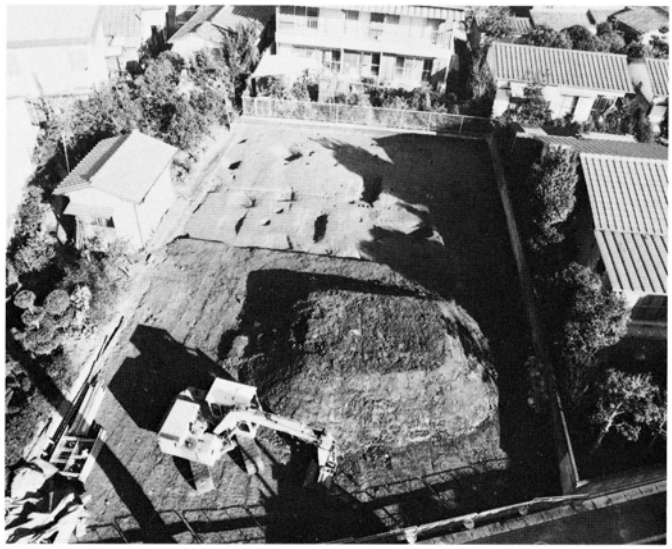


(2)北側段落部土層（南から）



(3) 各遺構出土遺物

(1)



(2)

(3)

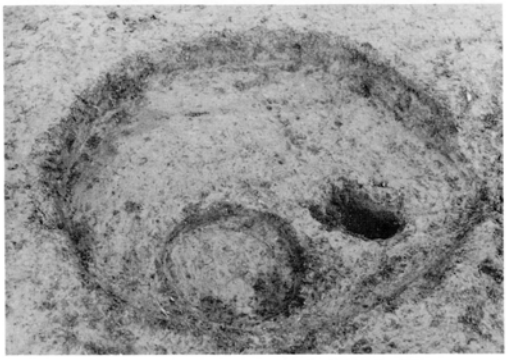
(1) 調査区南半部全景（南南京から）(2) 調査区北半部全景（南から）(3) 調査区遠景（南西から）

第144次調査区

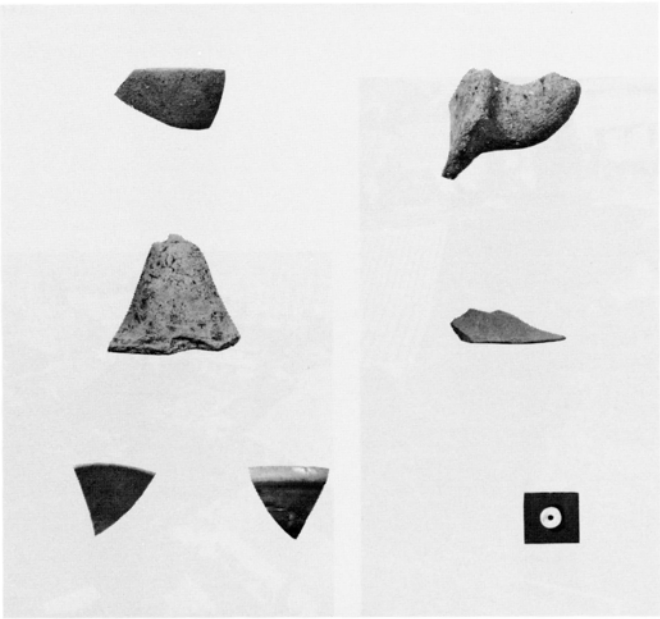
(1)

(2)

(3)

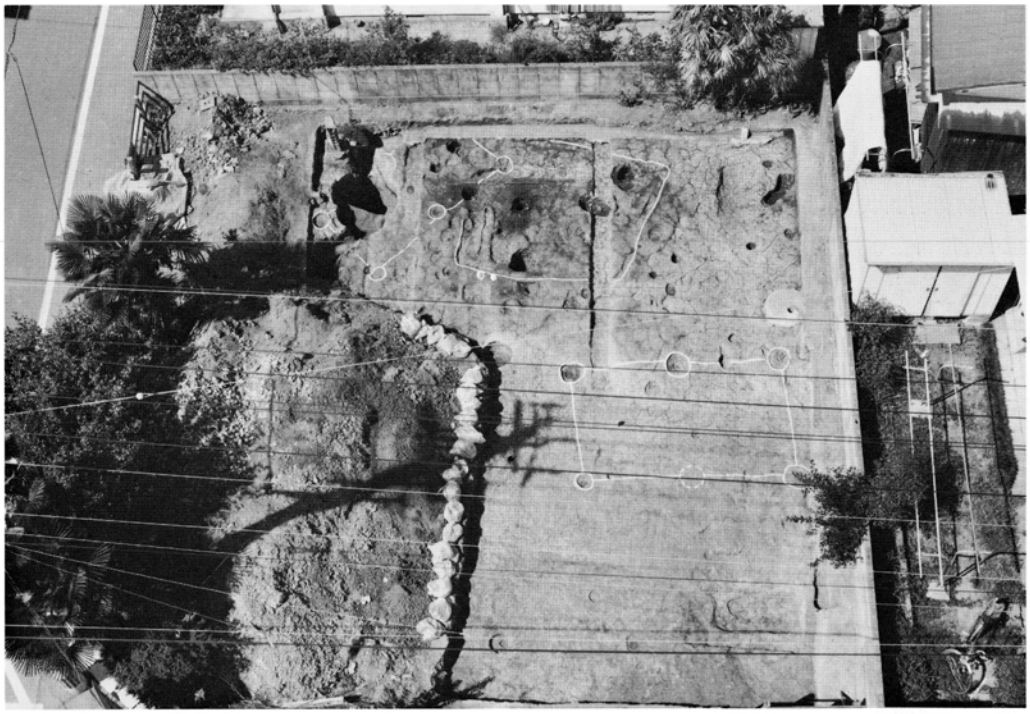


(4)



(5)

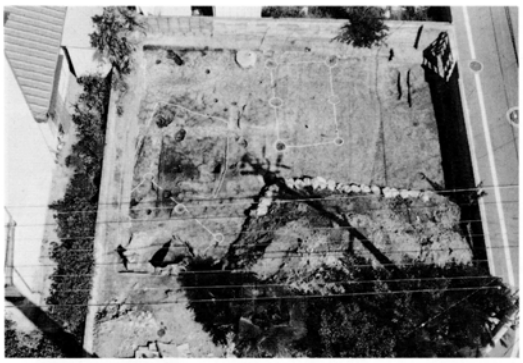
(1) SC01（南から）(2) SK01（東から）(3) SA01－SP43土層断面（西から）
(4) SA01－SP48完掘状況（西から）(5) 出土遺物



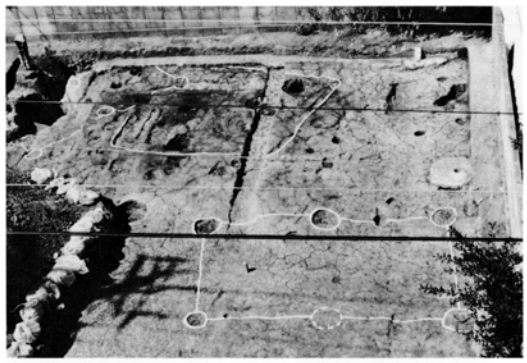
(1)

(2)

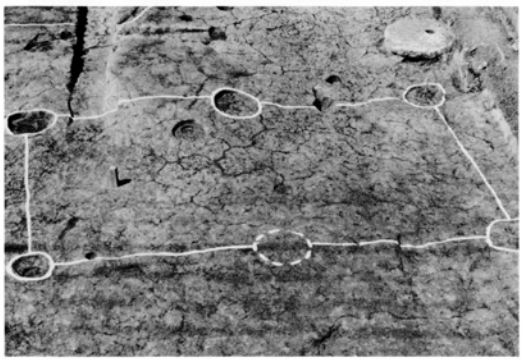
(1) 調査区北半部全景（西から）　(2) 調査区南半部全景（西から）



(1) SC・SB（南から）

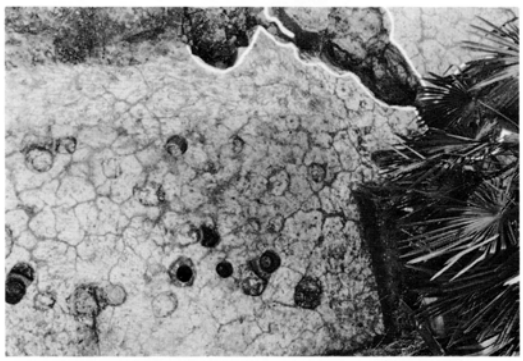


(2) SC・SB（東から）

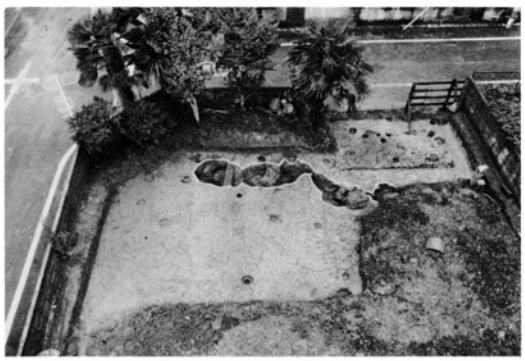


(3) SB02（東から）

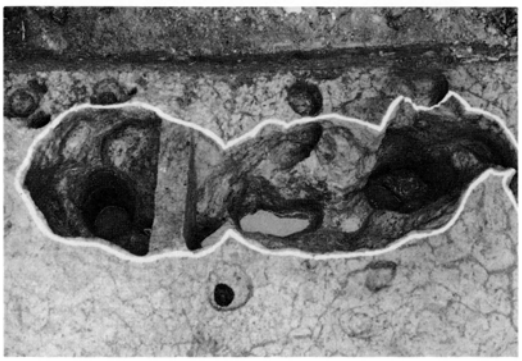
(4) SC01（東から）



(5) SC痕跡（南から）

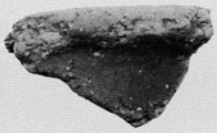


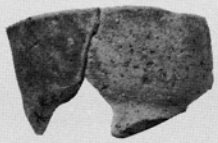
(6) 調査区南半部全景（東北から）

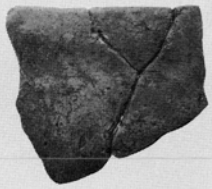


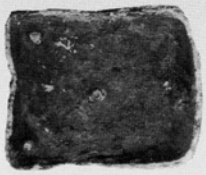
(7) SD05（北から）

(8) SD05土層断面（東から）


02

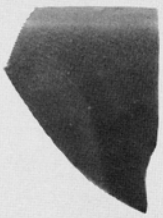

04


05


03

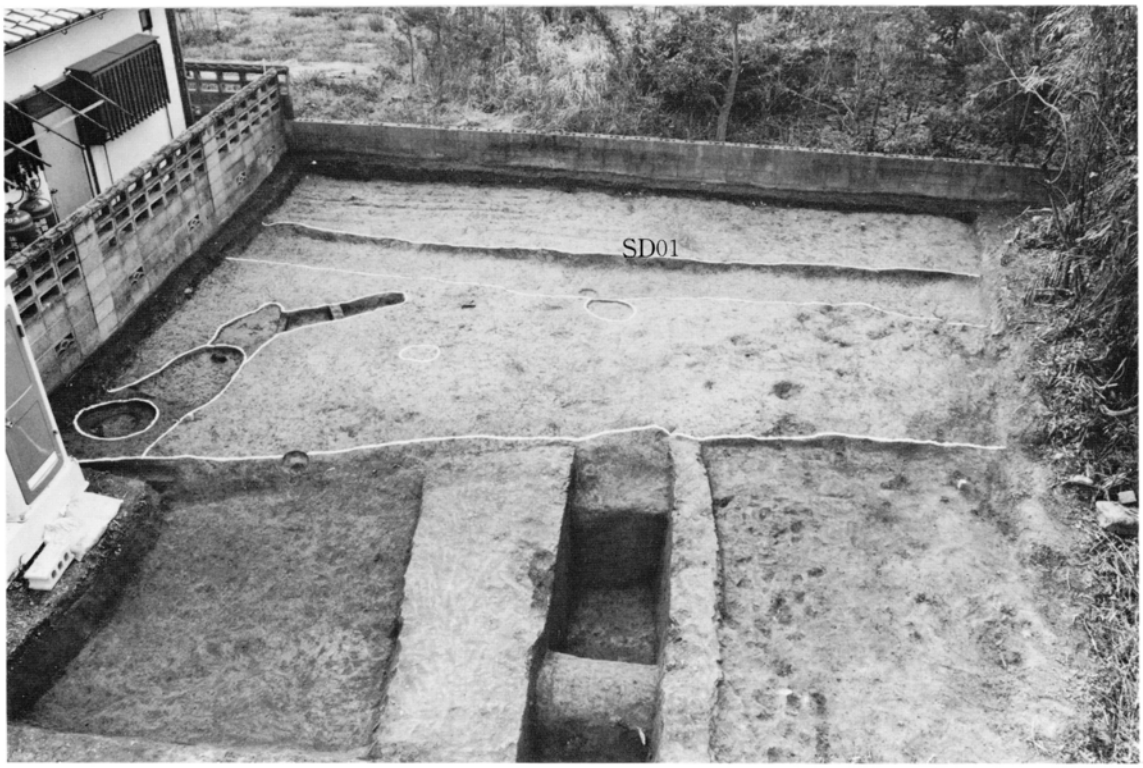
27

18

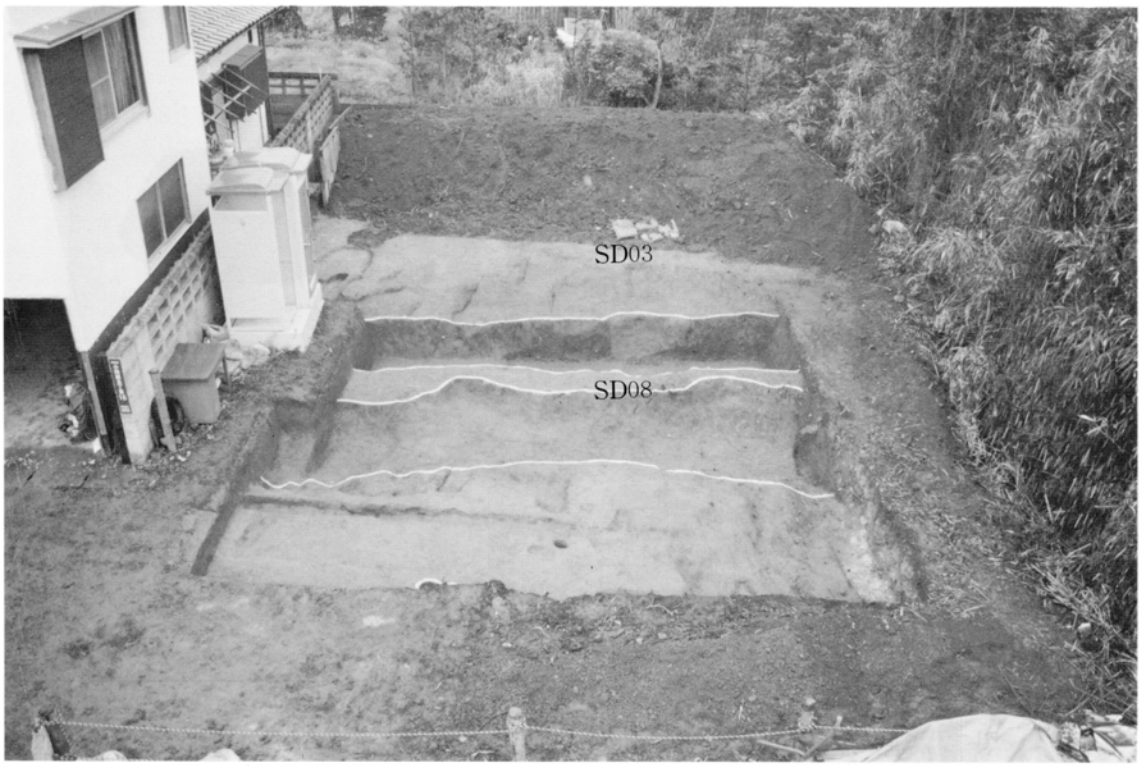

17

25

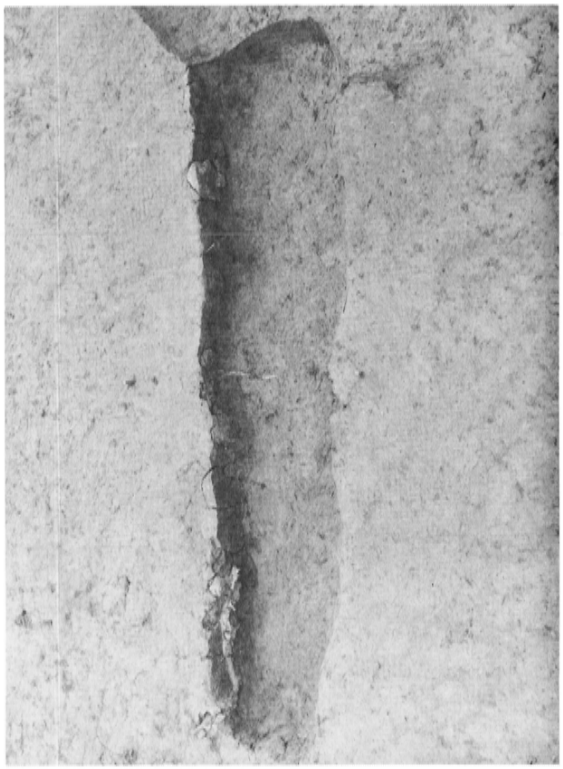
第157次調査区



(1) 第157次調査区西側全景（東から）



(2) 同東側全景（東から）



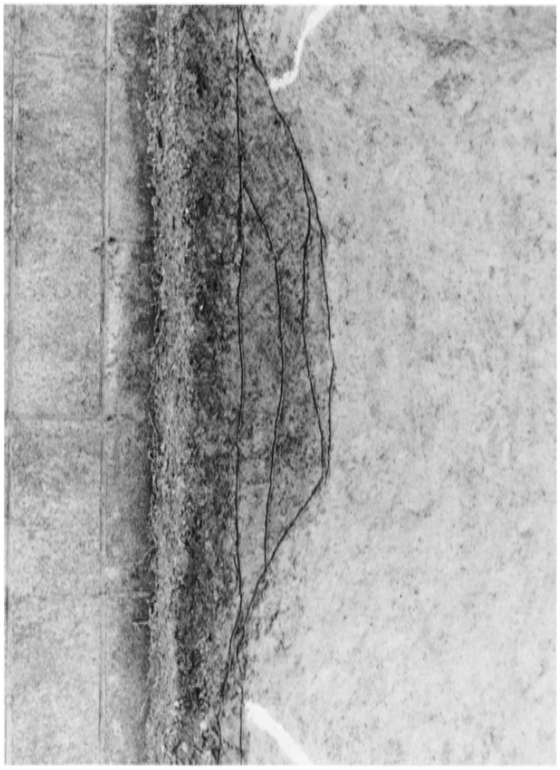
(1) SR 02（南西から）

(2) SK 04（北から）

(3) SK 05・06（北西から）

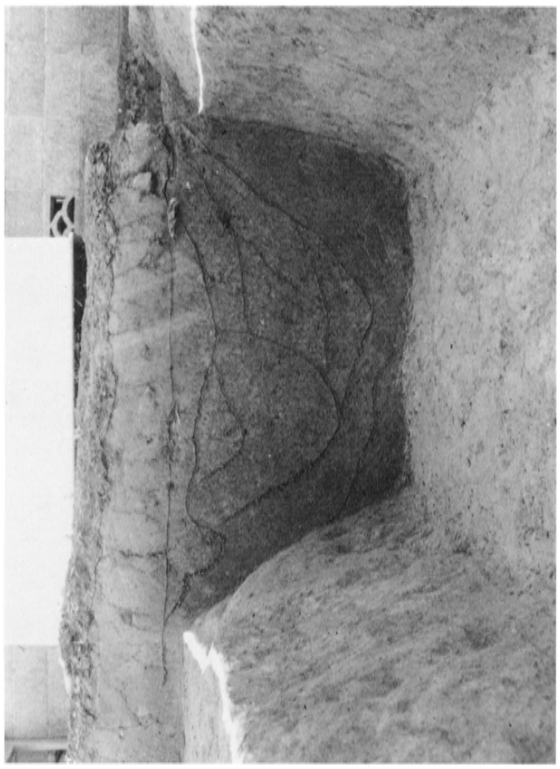
(4) SK 07（東から）

第157次調査区

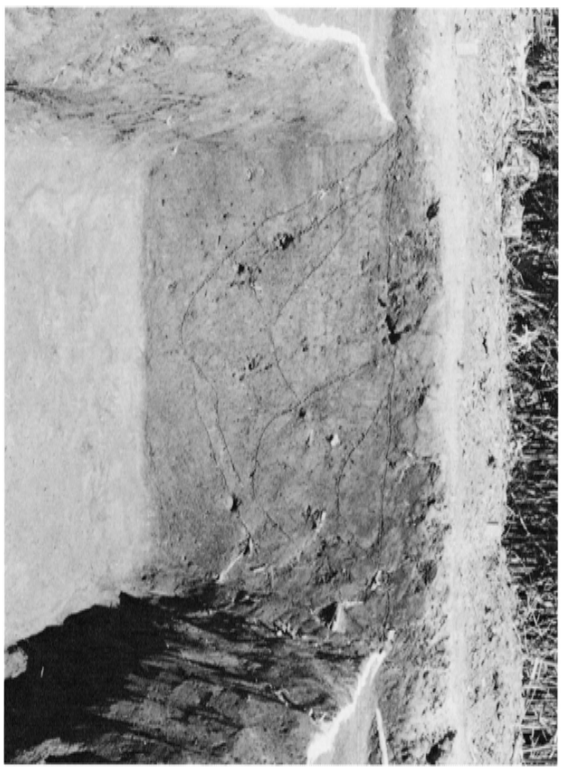


(1) SD01土層（北から）

(2) SD08土層（北から）



(3) SD03土層（北から）

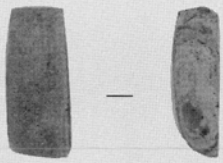


(4) 同土層（南から）

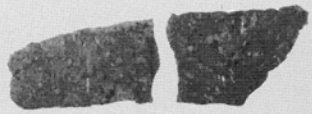
SK04

1

SK02



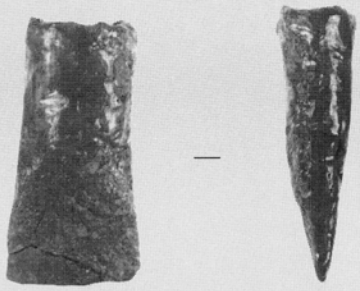
3



6

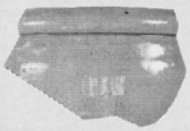
SK07

2

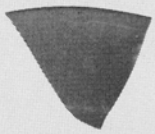


5

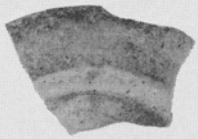
SD08



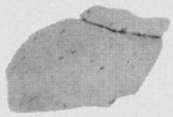
7



9



10



8

11

12

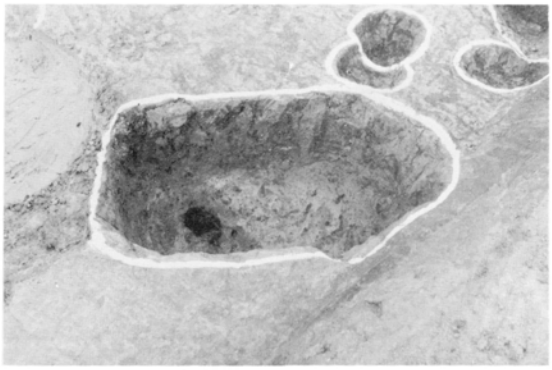
遺構面

4

各遺構出土遺物

第162次調査区

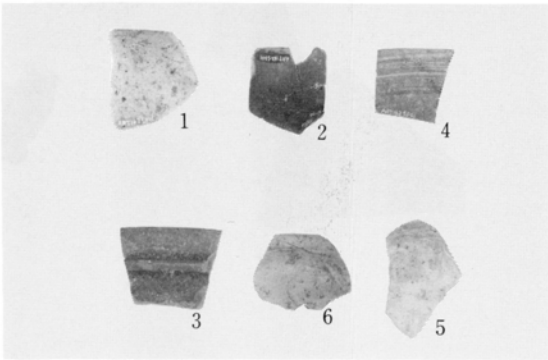
(1) 第162次調査区全景（南から）



(2) SK03（北西から）

(3) SD01・02（南東から）

(4) SD04（南東から）



(5) SD01・02出土遺物

有田・小田部 第12集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第264集
1991年（平成3年） 3月15日
発　行　福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神
1丁目8の1
印　刷　正光印刷株式会社